新潮文庫

コンタクト

上巻

カール・セーガン
池央耿／高見浩訳

新潮社版

4264

CamScannerでスキャン

目次

CamScannerでスキャン

第一部　メッセージ

第一章　超越数……一一
第二章　干渉光……三一
第三章　白色雑音……六九
第四章　素数……九九
第五章　数列の解読……一三三
第六章　重ね書きの羊皮紙……一四七
第七章　星間雲W—3中のエチルアルコール……一七九
第八章　ランダム・アクセス……二〇五

第九章　ヌーミナス……二三七

第二部　マシーン

第一章　春分点の歳差……二五九
第二章　ワールド・メッセージ・コンソーシアム……二六九
第三章　ワン・デルタ異性体……三三五

第一部　メッセージ

CamScannerでスキャン

第一章　超越数

CamScannerでスキャン

小さな蠅よ
おまえの夏の戯れを
私の心ない手が
ふり払った

私もまた
おまえと同じ蠅であり
おまえもまた
私と同じ人間ではないのか？

なんとなれば
ある盲目の手が
私の翼をふり払うまで
私も踊り、飲み、歌うのだから

――ウィリアム・ブレーク
『経験の歌』より「蠅」、第一節から三節（一七九五）

人間の基準に照らすと、それは人工的な物体ではあり得なかった。大きさは世界にも等しかった。が、不可思議きわまる精妙な形状をしており、なんらかの複雑な目的にそっていることは明白なので、あるイデアの表白以外のものではあり得なかった。巨大な青白い星の極軌道をまわっているそれは、とてつもなく大きく不完全な多面体に似ていた。表面には、鉢型のフジツボのようなものが数百万個も付着しており、それぞれの鉢が天空のある特定の領域をむいていた。どれか一つの鉢に捕捉されていない星座は一つとしてなかった。永劫にも等しい時間にわたって、その多面体は神秘的な役割を果してきた。それは実に忍耐強く、永遠に待ちつづけることも可能だった。

母親の胎内からこの世に生れでたとき、彼女は産声ひとつあげなかった。小さな額には皺がよっていた。そのうち、目を大きくひらいて、周囲を見まわした——明るい電光、白と緑色の服を着た人影、そして、彼女の下の台に横たわる女性。どこかしら聞きおぼえのある音

が、周囲から降りそそいでくる。彼女の顔には、新生児らしからぬ奇妙な表情が浮かんでいた――それはたぶん、当惑の表情であっただろう。

★

二歳になったとき、彼女はよく両手を頭上にあげて、可愛らしい声で言ったものだった――「パパ、だっこ」

父親の友人たちは、一様に目をむいた。なんて行儀のいい赤ちゃんだろう。「いや、そうじゃないんだ」父親は説明した。「しばらく前までこの子は、抱いてほしくなると泣いてたのさ。で、わたしは言ったんだ――泣くことはないんだよ、エリー。抱いてほしかったら、〝パパ、だっこ〟と言ってごらん、とね。赤ん坊ってやつは呑みこみが早いのさ。そうだね、プレッシュ？」

そしていま、彼女は目のくらむような高さまで抱きかかえられ、父親の肩にのせられて、薄れかけた彼の髪にしがみついていた。そこのほうが、ずっと楽しかった。大人たちの足の森のあいだを這いまわるより、はるかに安全だった。下にいると、だれかにいつ踏んづけられるかわからないし、迷い子にもなりかねないのだから。彼女はぎゅっとしがみついた。

猿の檻の前をはなれると、二人は角をまわって、ほっそりした長い脚の動物の前にやってきた。ひょろ長い首をしたその動物は、体中に斑点があって、頭には小さな角が生えていた。それは、二人の前にそびえるように立っていた。「ほら、あんなに首が長いだろう、だから

言葉がでてこないんだよ」と、父親は言った。沈黙をしいられているその哀れな動物に、彼女は同情を覚えた。が、同時に、こういう動物がこの世にいることが嬉しかった。こんな風変りな生き物がいるなんて、なんて素晴らしいのだろう。

★

「さあ、エリー」母親がやさしくうながした。聞きなれた声には、歌うような高ぶりがあった。「読んでごらんなさい」

母親の妹は、わずか三歳のエリーに字が読めるなどとは信じていなかった。きっと、お伽噺かなにかを丸暗記したのにきまっている。さわやかな三月のある日、ステート・ストリートをそぞろ歩いていた三人は、ある店の前で立ちどまったところだった。ショウ・ウインドウの中では、暗紅色の宝石が陽光をあびて輝いていた。「ほう、せき、てん」三つの音節にくぎって、エリーはゆっくりと読みあげた。

★

CamScannerでスキャン

はずして裏蓋をあけた。案のじょう、中には、小さなオーケストラも小人のアナウンサーもいなかった。やっぱり、あの連中が、スイッチの入る瞬間を待ちながら、ここでミクロの生活を静かに営んでいたわけではなかったのだ。代りにそこには、電球に似た、きれいなガラス管がつまっていた。いつか本のさし絵で見た、モスクワの教会に似ているものもあった。その下部についている脚は、ソケットにぴったりはまるように完璧にデザインされている。スイッチを〝オン〟に入れると、エリーはコードのプラグをちかくの壁のソケットにさしこんだ。本体にさわらなければ、ちかくによりすぎなければ、怪我などしないはずだった。

しばらくすると、ガラス管が輝きはじめた。が、音はでてこない。このラジオは〝壊れて〟いて、数年前、もっと新しいタイプととりかえられたのだ。いっこうに発光しないガラス管が一つある。コードを引き抜いて、その非協力的なガラス管をソケットからはずした。中には四角い金属片があって、細い針金につながれている。この針金の中に電気が通ってくるんだ、とエリーは漠然と思った。でも、その前に、電気はこのガラス管の中に入ってこなくちゃならない。脚の一つが曲がっていることに気づいた彼女は、指をそえてまっすぐに直した。そのガラス管をまたはめてから、コードを壁のソケットにつなぐ。と、嬉しいことにガラス管が輝きはじめ、ザーッという大きな音が湧き起った。瞬間、ハッとして戸口に目を走らせてから、ヴォリュームを絞った。〝周波数〟と書いてあるダイヤルをまわすと、興奮したアナウンサーの声が流れだした——地球の周囲を果てしなくまわるマシーンがソ連の手で大空に打ち上げられた、と言っている。果てしなくか、とエリーは思った。またダイヤル

CamScannerでスキャン

をまわして、別の局をさがした。そのうち、両親に見つけられるんじゃないかと心配になって、裏蓋をはめてからコードを引き抜き、どうにかラジオをもちあげて、棚にもどした。
少し息をはずませながら物置き部屋をでると、ちょうどやってきた母親と鉢合わせした。
「どうかしたの、エリー？」
「ううん、なんでもない」
さりげない風を装ったものの、心臓は早鐘をうち、掌は汗ばんでいた。小さな裏庭のお気に入りの場所に腰をおろし、顎の下に膝をひきよせてラジオの内部のことを考えた。あんなにたくさんのガラス管が、本当にみんな必要なのだろうか？　あれを一つずつはずしたらどうなるのだろう？　パパはいつか、あのガラス管のことを〝真空管〟と呼んでいた。真空管の中ではなにが起きているんだろう？　あの中には本当に空気が入ってないのだろうか？　オーケストラの音楽やアナウンサーの声は、どうやってラジオの中に入ってくるのだろう？　大人たちはよく、〝オン・ジ・エア（放送中）〟という言い方をする。ラジオは空気に運ばれるのだろうか？　局を切りかえると、ラジオの中ではなにが起きるのだろう？　〝周波数〟って、いったいなんなのだろう？　どうして、コードをソケットにつながないと、ラジオは鳴りださないのかな？　電気がラジオの中を通る系路を図に描くことはできるのだろうか？　怪我をしないであれを分解することはできるのだろうか？　それからまた組み立てることも、できるのかな？

「いままでなにをしてたの、エリー？」物干し綱に吊す洗濯物をかかえて、母親がわきを通りすぎる。
「べつになにも、ママ。ただ、考えてただけよ」

★

十歳になった年の夏休みに、エリーは両親につれられて、ミシガン州ノーザン半島の湖畔のコテッジに住む、二人の大嫌いないとこを訪ねた。だいたい、ウィスコンシンの湖畔に住む自分たちが、なぜ五時間も車に揺られてミシガンの湖畔に住む連中に会いにいかなければならないのか、それがエリーにはわからなかった。しかも相手は、とても意地悪で幼稚な二人の男の子なのだ。二人とも、まだほんの十歳と十一歳なのだから。いやな連中。どうしてパパは、他の点ではとてもあたしに気を配ってくれるのに、あんないやな男の子たちと毎日遊ぶように仕向けるのだろう？　エリーはその夏、二人のいとことなるべく顔を合わせないようにしてすごした。

月のない、ある蒸し暑い晩、夕食をとり終えたエリーは、一人で木造の舟着き場まで歩いていった。モーターボートが一隻、たったいま通りすぎたところだった。舟着き場につながれた叔父のボートが、星明かりにきらめく水面でかすかに揺れている。遠くで鳴いているせみの声と、湖上に谺するかすかなざわめきを別にすれば、周囲は森閑と静まり返っていた。眩いばかりに星屑のちりばめられた夜空を見あげると、胸がドキドキしてきた。

顔を空にむけたまま、両手を前にのばして道路をさぐり歩くうちに、やわらかな草むらが見つかった。その上によこたわると、夜空は星の饗宴。幾千万もの星がきらめいていた。ほとんどはチカチカと瞬いていたが、瞬きもせずに強い光を放っている星もいくつかあった。よく見ると、色がすこしずつちがう。あそこで輝いているあの星、あれはなんとなく青みがかってないだろうか？

エリーはまた、下の地面をまさぐった。固い手応えがあって……それとない安心感を与えてくれる。そっと起きあがると、左右を見まわし、長い湖岸の端から端まで目を走らせた。湖のこちら側も、向う岸も、よく見える。世界は平らにしか見えないじゃないの、とエリーは胸につぶやいた。でも、本当は丸いんだわ。この地面は大きな丸いボールで……空をまわっているのよ……一日に一回。数十億人もの人々を表面に貼りつけたまま、このボールは大空をまわっている。不思議だわ、異なる言語をしゃべり、てんでに珍しい衣服をまとった数十億人もの人々が、みな同じ一つのボールにしがみついて大空を回転しているなんて。

エリーはまた草の上に仰向けに横たわり、地面の回転を感じとろうとした。もしかすると、すこし動くのが本当に感じられるかもしれない。湖の上空で瞬いている明るい星が、木々の梢のあいだに見える。目を細くすぼめると、星の光を踊らせることができる。もうすこし細くすぼめると、光線はこちらの思いどおりに長さと形を変える。これはあたしの勝手な想像なのかしら、それとも……やっぱりそうだわ、あの星はいつのまにか木の真上にきている。二、三分前までは、枝のあいだに見え隠れしていたのに。いまはもっと高い位置にのぼって

いる。まちがいない。星がのぼる、って、きっとこのことをさすんだわ、とエリーは思った。つまり、地球が反対の方角に回転しているのだ。星は、空の一方の端からのぼってくる。そちらが〝東〟だ。そして、空のもう一方の端、自分の背後、コテッジの彼方に星は沈んでゆく。そちらの方角が〝西〟。毎日一回、地球は完全に一回転し、同じ星が同じ場所からのぼってくる。

でも、もし地球みたいに大きなものが一日に一回転しているんだったら、とてつもないスピードで動いていなければおかしい。自分の知っている人間はみんな、信じられないスピードでまわっていることになる。そう考えているうちに、なんだか本当に、地面がまわっているのが感じられるような気がしてきた——単なる頭の中の想像ではなく、本当に、おなかの奥で感じられるような気がするのだ。それは、高速エレベーターで降下しているような気分だった。周囲の何物にも視野が妨げられないように、首をおもいきりのけぞらしてゆくと、明るい星と漆黒の空しか見えなくなった。深い満足感にひたっているうちに、急に目がまわってきた。両側の草に早くしがみついたほうがいい。さもないと、足下の巨大なボールに比べれば、ピンの先ほどもないあたしの体が、空にこぼれ落ちてしまう——。

夢中で両手を口に押しあてたときには、すでに悲鳴が放たれていた。それがいとこたちの耳に届いて、見つけられてしまった。丘を駆けおりてきた彼らは、エリーの顔に、驚きと当惑の入りまじった表情を見出した。なにかしらふしだらなことを見つけて彼女の両親に言いつけてやろうと逸りたっていた彼らは、すぐに勝手な解釈を下した。

映画と比べれば、やはり原作の本のほうが面白かった。一つには、本のほうが内容が濃かったせいもある。それに、さし絵も映画とは大ちがいだった。が、本の中でも映画でも、ピノキオ——不思議にも生命をふきこまれる等身大の木の人形——は、女性用のスポーツ着、ホルターのようなものを着ていて、関節には木釘がさしこまれているようだった。ピノキオの完成を目前にして、彼に背中をむけた大工のゼペットは、みごとなキックをくらって宙にとぶ。その瞬間、ゼペットの友人がやってくる。床に腹這いになったりしていったいなにをしてるんだ、と訊かれたゼペットは、いかめしい口調で答える。「わたしはね、蟻にアルファベットを教えているところさ」

その答がとても洒落ている気がして、エリーはことあるごとに友だちに吹聴した。が、そのくだりを物語るたびに、あるひそかな疑問が意識の片隅にまとわりつくのだった。本当のところ、蟻にアルファベットを教えることは可能なのだろうか？ もし可能だとしたら、自分はそうする気になるだろうか？ 何百という蟻が体のうえをもぞもぞと這いまわったり、ひどいときには、こっちを刺したりしても？ いずれにしろ、蟻はどんなことを覚えられるのだろう？

★

ときどきエリーが夜中に起きて浴室にゆくと、パジャマ・ズボンをはいた父親がひげをそっている場面にぶつかることがあった。鏡をのぞきこんでいる父親は、鼻の下にぬったシェイヴィング・クリームのせいだろう、かえって、ある種の貴族的な威厳をたたえていた。

「やあ、プレッシュ」と、父親は言う。〝プレッシュ〟とは〝プレシャス（大切な）〟という言葉をちぢめた愛称で、エリーは父親からそう呼ばれるのが好きだった。でも、どうしてお父さんは、ひげがのびてるかどうかだれもわかるはずのないこんな夜中に、ひげをそるのだろう？

「なぜならばね――」微笑みながら、父は答えたものだった。「――ママにはわかるからさ」

それから何年もたって、あのときの父の愉快そうな言葉の意味を、自分は半分も理解していなかったのだということに、エリーは気づいたのだった。当時、父と母は心から愛し合っていたのである。

★

学校から帰ると、エリーは自転車にのって湖畔の小さな公園にでかけた。サドル・バッグからとりだしたのは、『無線入門ハンドブック』と『コネティカットのヤンキー、アーサー王宮廷に行く』だった。すこし考えてから、きょうは後者を読むことにしよう、と決めた。マーク・トウェインのヒーローは、頭を一撃されて気を失い、アーサー王の統治するイギリスで意識をとりもどす。それはすべて、夢、もしくは幻覚かもしれない。が、本当に起きた

ことかもしれない。時間を逆にさかのぼってゆくことは可能なのだろうか？　顎を膝にのせて、エリーは自分のお気に入りの箇所をさがした。そこは、ヒーローが初めて、甲冑を着た男に拾われる場面だった。甲冑を着た男は、ヒーローを、地元の精神病院からの脱走者だと思いこむのである。丘の頂きにのぼった二人の眼下に、町の全容が広がっている。

〃「ここはブリッジポート？」と私……

「キャメロットさ」と彼〃

青い湖水をながめながら、エリーは、十九世紀のブリッジポートにも六世紀のキャメロットにも見える町とはどんなところだろう、と想像をめぐらせる。そのとき、母親が血相変えて駆けよってきた。

「あっちこっち、いろんなところをさがしたのよ。どうして、見つけやすいところにいてくれないの？　ああ、エリー」ささやくように、母親は言った。「恐ろしいことが起きたのよ」

★

七年生になったとき、学校で〃パイ〃のことをおそわった。それはギリシャ語の文字で、イギリスにあるストーンヘンジの石造物に形が似ている。つまり、垂直の二本の柱の上に、横棒がのっている――文字に書くと、π。円周をその円の直径で割って得られる数値、それがパイだ。家に帰ったエリーは、さっそくマヨネーズの壜のふたを外し、そのまわりに糸を巻きつけてから真っすぐのばして、長さを定規で計った。同じようにして直径を計り、最初

の数字をそれで割ってみた。答は三・二一。

翌日、数学のヴァイスブロード先生はこう説明した――πはおおよそ$22/7$で、約三・一四一六になる。もっと正確に答をだそうとすると、小数点以下は同じ数字のパターンをくり返さずに、どこまでも果てしなくつづくのだ、と。

果てしなくか、とエリーは思った。彼女は手をあげた。新しい学年がはじまったばかりで、手をあげるのはそれが初めてだった。

「あのう、小数点以下がどこまでも果てしなくつづく、っていうことは、どうしてわかるんですか？」

「そういうことになってるからさ」ぶっきらぼうな口調で先生は答えた。

「でも、どうして？　どうしてわかるんですか？　どうして、小数点以下を果てしなく計算することができるんですか？」

「アロウェイ君」――彼は出欠簿を見ていた――「それは愚劣な質問だね。きみは大切な授業の時間を無駄にしているよ」

だれかに〝愚劣〟と言われたのは初めてだったので、気がつくとエリーは泣きだしていた。隣の席のビリー・ホーストマンが、そっと肩に手をおいてくれた。つい最近、彼の父親は、自分のところで売っている中古車の走行距離計に不正な工作をした廉で起訴されたばかりだった。それで彼は、公の席で屈辱を受けることに敏感だったのである。エリーはすすり泣きながら、教室をとびだした。

CamScannerでスキャン

その日の放課後、彼女は自転車でちかくの大学の図書館にゆき、数学に関する本を読みあさった。それで理解できたかぎりでは、あの質問はそれほど愚劣なものではなかった。バイブルによれば、古代のユダヤ人はπがほぼ三に等しいと考えていた形跡がある。数学には精通していたギリシャ人やローマ人にしても、πの小数点以下の数字が、くり返されることなく永遠につづくということは知らなかったらしい。それは、たかだか二百五十年前に発見された、まだ新しい知識なのだ。自分がああいう質問をするのが愚劣だなんて、どうして言えるのだろう？　が、小数点以下の最初の数桁の数字については、ヴァイスブロード先生の言ったとおりだった。πは三・二一ではなかった。たぶん、マヨネーズの壜のふたがすこしへこんでいたかどうかして、真円を成していなかったのだろう。さもなければ、糸の長さの計り方がまちがっていたのかもしれない。でも、たとえどんなに慎重に計ったにせよ、小数点以下の数字を無限に計算することなど、彼女にはできない相談だっただろう。

ただし、もう一つの可能性があることはあった。πをできるだけ正確に計算する方法は存在するのだ。もし〝微積分学〟というものを学べば、時間の許す限りπの小数点以下の数字を割りだす公式を証明することができるのである。エリーの読んだ本には、πを四で割る公式がいくつかのっていた。そのほとんどはよく理解できなかったが、びっくりするような公式もあった。たとえば、$\frac{\pi}{4}$は、$1-\frac{1}{3}+\frac{1}{5}-\frac{1}{7}+\cdots\cdots$という風に、分数の足し算と引き算を永遠につづけていった答に等しいというのである。エリーはさっそくその式にとりくんで、分数の足し算と引き算を交互にやってみた。結果は、$\frac{\pi}{4}$より大きい数字にはねあがったり、

小さい数字にちぢんだりしながらも、やがては一連の数字が正しい答をめざして並んでゆくことがわかった。最後の最後までたどりつくことは不可能にせよ、忍耐力さえあれば相当な近似値に接近することができるのだ。世界中の円がすべてこの一連の分数と結びついているなんて、奇跡としか思えない。いったい、円はどうして分数のことを知ってるのだろう？ようし、絶対に〝微積分学〟を勉強しよう、とエリーは心に決めた。

その本にはべつのことも書かれていた。πは〝超越数〟と呼ばれるのだという。二つの整数の商で表わせる数、つまり有理数から成る方程式で、πを導けるものは存在しないのだ。エリーはすでに、代数をすこしかじっていたから、その意味は理解できた。しかも、超越数はπだけではないという。超越数は無限に存在するらしい。というより、代数的数よりも超越数のほうが無限に多いらしいのである。その中で、いまのところエリーが知っているのはπだけだったが。どうやら、いろいろな意味で、πは〈永遠〉とむすびついているようだった。

そのときエリーは、なにかしら壮大なものをかいまみたのである。ふつうの代数的数のあいだに、超越数が無限にひそんでいて、数学に熟達しないかぎり、その存在を類推することすら不可能なのだ。そしてときどき、そのうちの一つが、まさしくπのように、思ってもみないときに日常生活の中にとびだしてくる。が、そのほとんどは――無限にちかい数だけあるのに――ふだんは出しゃばることなくひっそりと隠れていて、あの短気なヴァイスブロード先生に見つかることなど、まず絶対にないのである。

★

エリーは、ジョン・ストートンに初めて会った瞬間から、その人柄を見抜いた。父の死後たった二年しかたっていないという事実はともかく、母がなぜああいう人物と再婚する気になったのか、どう考えてもわからなかった。たしかに彼は見栄えがするし、ときに温情家らしくふろまいもする。が、その正体は狷介な皮肉屋だった。週末には、新しく引っ越した家に自分の教え子たちを招んで、草むしりや園芸の手伝いをさせる。そして、連中が帰ったあとで、彼らをなんだかんだとくさすのだ。エリーにもこう言った——おまえはまだハイスクールに入ったばかりなのだから、かりにもわたしの聡明な教え子たちに心を奪われてはいけないぞ。自分は偉いのだという、一人よがりの自尊心が言葉の端々にうかがわれた。大学教授の彼は、一介の商店主にすぎなかったあたしの父を、心中ひそかに軽蔑しているにちがいない、とエリーは思った。しかも彼は、無線通信やエレクトロニクスに関心を持つのは女の子らしくない、と折にふれて広言する。それは理想の夫さがしには役立たないし、だいたい、物理学をまなぼうなどというのは愚かしく常軌を逸した考え方だ、というのである。〝思いあがっている〟と、彼は言った。おまえにはそんな能力はないのだ。これは客観的事実だから、おまえも早くそのことに気づいたほうがいい。これはおまえのために言ってるんだからな。いずれはわたしのこの忠告に感謝するときがくるだろうさ。とにかく、わたしは物理学の教授なのだから、どういう素質が必要とされるか、よく承知している。

エリーは――ストートンの勝手な思い込みとは逆に――将来科学で身を立てようなどとは思ってもいなかったのだが、その種のお説教を聞かされるたびに、激しい憤りを覚えるのがつねだった。

ストートンは亡き父のような紳士ではなかったし、ユーモアのセンスも持ち合わせていなかった。人から、ストートンの実の娘だと思われたりすると、エリーは、怒りでわれを忘れそうになった。母と継父は、さすがに彼女の姓までストートンに改めるよう強制しようとはしなかった。エリーの反応を見こしていたからだろう。

とはいえ、ときおりストートンが優しい心配りを見せることもないではなかった――扁桃腺の手術でエリーが入院したさい、素晴らしい万華鏡をたずさえて見舞ってくれたときのように。

「手術はいつはじまるの？」そのとき彼女は、すこし眠たげにたずねた。

と、ストートンは答えたのだった。「手術ならもうすんだよ。すぐによくなるから安心しなさい」

知らないうちに自分のひと区切りの時間が盗まれてしまったのかと思うと、エリーはすごく不満で、それをストートンのせいにした。子供っぽい怒りだということは、自分でもわかっていたのだが。

いずれにせよ、ストートンのような男性を母が心から愛せるとは、どうしても思えなかった。母は淋しさのあまり、孤独に耐えかねて再婚したのだ、とエリーは思った。母は、だれ

か自分の面倒をみてくれる男性がほしかったのだろう。あたしは絶対に、だれかを頼らなければならない立場には身を置くまい。父は死に、母は遠い存在になった。なんとなく、自分は暴君の支配する家に捕われの身になっているような気が、エリーはしてくるのだった。自分を〝プレッシュ〟と呼んでくれる人間は、もはやいない。

エリーは逃げだしたかった。

〝「ここはプリッジポート?」と私……

「キャメロットさ」と彼〟

第二章　干渉光

CamScannerでスキャン

初めて理性の行使を覚えてからというもの、学問に対するわたしの欲求は火のように燃えさかり、他の人々からいくら叱責されようとも……また、わたし自身いくら反省を重ねようとも……神より授かったこの自然な欲求を捨てさることはできませんでした。その理由は神のみがご存知です。神はまた、わたしがこう懇願したこともご存知です——わたしから余分な理性の光を奪ってほしい、あなたの法を守るのに必要な知性だけを残してほしい、と。なぜなら、それ以外のすべては女性には無用、とおっしゃる方々がいるからです。それは有害ですらある、と言われる方々もいらっしゃいます。

——ファナ・イネス・ド・ラ・クルス　彼女の学業を女性にはふさわしくないと攻撃した、プエブラ司祭に対する返答

わたしはある見解を発表して、読者のご批判を乞いたいのだが、それはきわめて逆説的で破壊的なものと見なされるかもしれない。わたしの見解とはこうである——その真実性を裏づける根拠のまるでない命題を信じるのは、好ましくない。もしこのような意見が支配的になったら、われわれの社会生活や政治制度は根本的に変るだろう、という意見には、もちろん、わたしも同意する。が、いまのところ、われわれの社会生活にも政治制度にも欠点が見られない以上、この見解もまた重きを置かれないに違いない。

——バートランド・ラッセル『懐疑的随想』第一巻（一九二八）

CamScannerでスキャン

各種の破片――岩石、氷、鉱物、有機体――から成る巨大なリングが、青白い星の赤道面をとりまいていた。その外縁部は赤みがかっており、内側は青白かった。世界の大きさにも等しい多面体は、リングの隙間から突入して、反対側に突き抜けた。リングの中を通過中、回転しながらとぶ巨大な岩石や氷塊が多面体の表面に影を投げたが、その星の反対側の極上の一点をめざす軌道にのって移動しているいま、多面体に付着している数百万もの鉢型の付加物は、陽光をキラキラと反射していた。仔細に見れば、そのうちの一つがかすかに向きを修正したさまが目についたかもしれない。が、そこから宇宙の深部にむけて放射された強力な電波は見えなかっただろう。

地上に人類が現われて以来、夜空はつねに友であり、インスピレーションの源だった。星はやすらぎを与えてくれた。天は人類の便宜のために創られたのだと、星は暗示しているかのように思われた。この悲劇的なうぬぼれは、全世界に共通の伝統的な知恵となった。いか

なる文化も、それから自由ではあり得なかった。ある者は、宗教的覚醒に至る扉を天空に見出した。多くの者は、宇宙の光輝と偉大さに打たれて、畏怖の念を抱いた。かとおもうと、宇宙に刺激されて、大胆不敵な空想を展開した者もいた。

人類が宇宙の偉大さを発見し、自分たちの描くもっとも奔放な空想ですら、銀河系の大いさの前にはゴミ粒にも等しいことに気づいたまさにその瞬間、彼らは、子孫たちがもはや星の研究ができなくなるような数々の措置をとったのである。それまで百万年ものあいだ、人類は日々新たな天空の知識をたくわえながら成長してきたというのに。この数千年、人類は都市をつくってそこに移住してきた。そして、過去数十年間に、人類の大多数は、田園の生活を放棄してしまった。テクノロジーの発展と、都市の公害汚染の進行につれて、夜空から星が消えはじめた。新世代の若者たちは、彼らの祖先を魅了し近代の科学やテクノロジーを刺激した星空の存在をまったく知らぬまま大人になる。かつて天文学が黄金期に入ったまさにそのとき、ほとんどの人間が空と縁を切ったように、彼らは、宇宙探険の夜明けが宇宙孤立主義を終焉させたことにも気づかないのである。

★

エリーは金星を見あげて、あそこもこの地球に似てるんじゃないかしら、と想像する——あそこにもきっと植物や動物がいて、文明が栄えているのだろう。でも、個々の形態は地球のそれとはちがうのかもしれない。日が落ちると同時に、エリーは町の郊外に立って夜空に

目をこらし、ひときわ明るい光点に見入る。夕日の残照をあびている頭上の雲とくらべると、金星はすこし黄色っぽく見える。あの星では、どういう生活がくり広げられているのだろう。エリーは爪先立って、宵の明星を見あげる。ときどき、本当にあの星の表面が見えたと思いこみたくなるときもあった。表面を蔽っていた黄色い霧が突然晴れ、宝石のように輝く広大な都市がつかのま姿を見せるのだ。そこではエア・カーが、水晶の尖塔のあいだをとびまわっている。ときおり、その乗物の中まで透視できて、彼らの一人がちらっと見えたような気がすることもあった。かと思うと、あの星でも一人の若者が、彼らの空の青い光点を爪先立って見あげて、地球の住民に思いを馳せているのではないかと想像することもある。あのむし暑い熱帯の星、地球のすぐ隣の星に知的な生物が大勢いる——それは抗いがたい空想だった。

学校。機械的な暗記。エリーもそれはこなしたが、暗記とは、よくいって教育の抜け殻のようなものにすぎない、と見抜いてもいた。だから、学校の勉強はみんなから遅れない程度に励み、残りの時間を自分の好きな活動に費やした。自由時間や放課後の数時間を、〝作業室〟ですごしたのである。そこは、学校がいまよりもっと〝職業教育〟に熱心だったときにつくられた、薄暗くてせせこましい部屋だった。〝職業教育〟とは、なによりも、自分の手で行う作業を意味する。その部屋には木摺、穿孔盤、その他の工作用具があったが、エリーは最初、それらの使用を禁じられていた。どんなに有能であろうとも、彼女が〝女の子〟であることに変りはなかったからだ。が、学校当局はやがて、エリーが〝作業室〟のエレクト

ロニクスのセクションで独自の活動に従事するのをしぶしぶと認めるようになった。彼女はほとんどゼロからラジオの組立てにとりくみ、それをマスターすると、もっと興味深いものの製作にとりくんだ。

エリーは、暗号作製機をこしらえたのである。むろん、ごく初歩的な機械ではあったが、ちゃんと機能した。英語で書かれた文章をそれにかけると、ごく単純な符号の置き換えによって、どんなものでもちんぷんかんぷんなたわごとに変えてしまう。反対の機能、つまり暗号文をふつうの文章に直せる機能をもつ機械をつくるのは、そう簡単にはいかなかった。たとえば、考えられる置き換えのすべてを機械にさせてみる（AをBの代りに置くとか、Cの代りに置くとか、Dの代りに置くとか……）、もしくは、英語の文章一般において使用頻度のとくべつ高い文字をリスト・アップする。その点、町の印刷所にある個々の活字用の箱の大きさを見れば、各文字の使用頻度のおおよその目安がつけられる。印刷所の工員たちは、″ETAOIN SHRDLU″と言う。それが、アルファベットで使用頻度の高い十二の活字の順位なのだそうだ。長い文章を解読する場合、いちばん多出するのもたぶんEである。ある種の子音は特定の組合わせで使われることが多いということも、エリーは学んだ。それとは対照的に、母音は散り散りにばらまかれていることが多い。英語でもっともよく使われる三字の組合わせは、"the"である。ある単語で、TとEのあいだにはさまっている文字があるとすると、それは十中八、九、Hである。そうでない場合は、R、ないし母音とみて、まずまちがいない。エリーは別の公式も自分なりに割り出し、長時間かけて、各種の教科書

に登場する文字の頻度を計算した。が、その種の頻度表はすでにだれかの手で編纂され、公刊されていることにそのうち気づいた。いずれにせよ、エリーの暗号解読機は、純粋に個人的な楽しみのためのものであって、それをつかって秘密の暗号文を友人に送るようなことはしなかった。エレクトロニクスや暗号解読によせる自分の関心を、安心して打ち明けられる人間が見当らなかったのだ。ほとんどの男子生徒は、それを知ると眉をひそめたり、騒ぎたてたりしたし、女子生徒は奇妙な目つきでこちらを見るのがふつうだったのである。

★

その頃、アメリカ合衆国の兵士たちは、ベトナムという遠隔の地で戦っていた。月が変るたびに、街頭や農場から狩りたてられてベトナムに送られる若者の数が増えてゆく。その戦争の起源について知れば知るほど、そして政界の指導者たちの声明を聞けば聞くほど、エリーの腹立ちはつのった。大統領と議会は嘘をついて人を殺してるんだわ、と彼女はひそかに思った。しかも、一般国民は彼らに暗黙の了解を与えている。条約上の義務とか、ドミノ理論とか、共産主義勢力のあからさまな侵略とかに関する政府見解を、自分の継父が鵜呑みにしているという事実も、彼女の信念を強めさせた。ちかくの大学で催される反戦集会やデモに、エリーは積極的に参加しはじめた。そこで出会う連中は、ハイスクールのもさっとした覇気のないクラスメートたちよりずっと聡明で、明朗で、生き生きとしているように思われた。ジョン・ストートンは最初、彼女に警告し、ついで大学生たちとの交際を禁じた。連中

はおまえの人間性を尊重したりしないぞ、というのだ。連中はおまえの無知につけこんで、体を奪おうとするだろう。おまえは進歩的な思想の主を装っているが、そんなものは身につくはずもない。それに、ちかごろのおまえの服装の乱れようはどうだ。GIの戦闘服のお古など女の子にはふさわしくないし、だいいち、東南アジアに対するアメリカの軍事介入を批判する人間がそんなものを着るのは、偽善もはなはだしい。茶番もいいところじゃないか。

エリーの母親は、娘と夫に〝喧嘩〟はやめてと懇願はしても、二人の論争自体には加わろうとしなかった。夫がいないところで、母親はエリーに、どうかお父さんの言うことをきいておくれ、〝いい子〟になっておくれ、とかきくどく。そういう母を見るにつけ、エリーは、ストートンが母と結婚したのは亡き父の保険金目当てだったのではないか、と思ってしまう――だって、それ以外に考えられないじゃないの？　ストートンが本心から母を愛しているような徴候などほとんどないし、そもそも彼は〝優しさ〟を発揮できるような性格に生れついてはいないのだから。ある日、思いあまった母親は、家族みんなのためになることを、せめて一つだけしてくれないか、と言いだした。教会の日曜学校に出席してくれ、というのである。既成の宗教には懐疑的だった父親が生きていた頃には、日曜学校のことなど話題にもならなかったのに。どうして母はストートンなんかと結婚する気になれたのだろう？　何回と自問した疑いが、あらためてエリーの胸に湧き起った。母はつづけて言った――日曜学校に出席すれば、あなたも伝統的な道徳にめざめるかもしれないし、それよりもなによりも、あなただって目上の人間の言うことを聞く意志があるということを、お父さんに知らせるこ

とができるわ。
　母に対する愛情と憐憫から、エリーは同意した。
　それからほぼ一年間、彼女は、ちかくの教会の聖書講読会に参加した。そこは、騒々しい伝道活動とは無縁な、プロテスタント系の立派な教会だった。数人のハイスクールの生徒と、大部分が中年の主婦から成る大勢の大人たちが講読会の顔触れで、講師は牧師の細君がつとめた。それ以前、エリーは聖書をまじめに読んだことがなく、亡き父がよく洩らしていた、〝聖書に書いてあることは、半分はお伽噺、半分は野蛮人たちの歴史さ〟という辛辣な見解を鵜呑みにしていたと言っていい。で、初めて参加する前の週の週末、なるべく偏見を持たずに、旧約聖書の重要な部分を読み通してみた。すぐに気づいたのは、創世記の最初の二章には、天地創造に関して二つの相矛盾した、異なる物語がある、ということだった。だいたい、太陽がつくられる前にどうして光と昼が存在し得るのかわからなかったし、カインが結婚した相手がだれなのかもわかりにくかった。ロトとその娘たちの物語、アブラハムとサラの物語、ディナの婚約の物語、そしてヤコブとエサウの物語には、ただただ驚くほかなかった。現実の世界にあっても怯懦な行動をとる者がいることは、承知している。息子が年老いた父をだますようなこともありうるだろうし、自分の妻を王が誘惑するのを黙認するような男もいるだろう。自分の娘たちを犯すのを奨励するような男だって、現実にいるかもしれない。が、この聖なる書物の中には、その種の蛮行に抗議する言葉がただの一語もでてこない。というより、それらの犯罪はむしろ奨励され、賞讃されているようにすら思えるのだ。

講読会がはじまると、エリーは活発な討論が行われることを願った。気になる矛盾点を解明してほしかったし、神の目的についても納得のいく説明がほしかった。それがむりなら、せめて、一連の犯罪が聖書の書き手、もしくは神自身に断罪されてない理由を説明してほしかった。が、希望はむなしかった。牧師の細君は、のらりくらりと論点をぼかして答えてくれなかったのである。その後のディスカッションでも、それらの物語がとりあげられることはなかった。ファラオの王女の侍女たちが、イグサにつつまれた赤子を一目みてヘブライ人だとわかったのはなぜなのか、とエリーがたずねると、牧師の細君はみるみる顔を赤く染めて、そんな品の悪い質問はしないでくれ、とたのむのだった。（その瞬間、エリーの頭には割礼にまつわる正しい答がひらめいたのだが）。

講読が新約聖書にうつると、エリーの苛立ちはますますつのった。マタイとルカは、いずれもイエスの祖先の系譜をダビデ王までたどる。が、マタイによれば、ダビデからイエスまで二十八世代であるのに対し、ルカによれば四十八世代であることになっている。それでどうして、マタイとルカがともに神の代弁者でありうるのだろう？　この矛盾した系譜は、イザヤの予言をその後の事実に合致させようとする辻褄合わせとしか、エリーには思えないのである――化学の実験室で、〝データを変造する〟という、あれだ。その他、山上の垂訓には深く感動したが、カイザルのものはカイザルに返せという訓戒には失望し、〝われ地に平和を投ぜんために来れりと思うな、平和にあらず、反って剣を投ぜんために来れり〟という言葉の真意はなにかという質問を、二度も講師にはぐらかされたときには、抗議の叫びをあ

げながら泣きだしてしまった。わたしはわたしなりに最善を尽したわ、とエリーは落胆する母親に言った――でも、荒馬に引かれたって、もう二度と聖書講読会には出席しませんからね、と。

☆

エリーはベッドに横たわっていた。むし暑い夏の夜だった。エルヴィスが、〝きみと一晩すごしたい、それだけがぼくの望み〟と歌っている。ハイスクールの男子生徒たちは見ちゃいられないくらい幼稚だし、デモ行進や講演会で知り合った大学生たちと親しくなるのは――継父の夜間禁足令や拘束のおかげで――むずかしかった。それに、ジョン・ストートンの言い分はすくなくとも一点において当っていたことを、エリーはしぶしぶながら認めざるを得なかった――若い男性たちは、ほとんど例外なく、彼女の体を狙おうとするのである。と同時に、彼らはこちらで考えていたよりもずっと、精神的に不安定であることもわかった。たぶん、その二つの事実は相互に関連があるのだろう。

ハイスクールを卒業したら家をでようという決意はしていたものの、大学入学に関して、エリーの気持はさほど固まってはいなかった。家をでるなら費用はださない、とストートンは言うし、母のとりなしも効果がなかった。が、共通大学入学試験を受けてみると、素晴らしい成績をあげることができた。驚いたことに、有名大学から奨学金をもらえるだろう、と担任教師から言われたくらいだったのである。実のところ、入学試験中の正解選択テストの

ほとんどはヤマカンで答えたので、好成績はまったくのまぐれ当りだとエリーは思っていた。いくつかの選択肢のうち、当っていそうな答を二つくらい残せそうな程度の知識しかなくて、十の問題をぜんぶヤマカンで答えなければならないとすると、十問正解する確率は千分の一ぐらいだろう。それが二十問だとすると、全問正解の確率は百万分の一くらいになるはずだ。が、全国で百万人くらいの生徒がこの試験を受けただろうから、その確率からいって、全問正解者が一人はでてもおかしくなかったということになるではないか。

マサチューセッツ州のケンブリッジは、ジョン・ストートンの影響下から逃れるには十分遠く、休暇に母と会いにくるのに手間どらない程度には近いと言えた――母は大学入学に伴うエリーの自立を、一つの困難な妥協と考えていた。夫を絶えず苛立たせるのも気がひけるし、娘を完全に失うのもいやだとなったら、エリーの決断を認めるほかなかったのである。自分でも驚いたことに、エリーはマサチューセッツ工科大学をふって、ハーヴァード大学を選んだ。

オリエンテーションに出席したときの彼女は、笑うときにどちらか一方に唇を歪ませる、中背の、美しい黒髪を持った女性になっていた。あらゆるものを学びたいという熱意が、身内にみなぎっていた。自分の教養の幅を広げたいと思ったから、数学、物理学、エンジニアリングといった得意科目以外に、できるだけたくさんの授業を受けることにした。が、得意科目の学習にも、問題がないわけではなかった。たとえば物理学にしても、圧倒的多数を占める男の学生と、論争することはおろか、まともに話し合うことすらむずかしかったのであ

る。男の学生たちは最初、彼女の発言にかぎって無視する態度にでた。エリーがなにかを言うと、そのときだけ沈黙し、それから何事もなかったかのように自分たちだけで話しつづけるのだ。ときには彼女の発言に注意を払い、賞めることもあったが、それからまた無関心な態度にもどる。冷静に考えて、自分はそんなに馬鹿馬鹿しいことを言ってはいない、という自信がエリーにはあった。だから、無視されるのはいやだったし、ましてや、無視と、お情けで聞いてやるという態度を交互にとられるのはたまらなかった。自分がそういう態度で遇される原因の一つ――ほんの一因――は、声の低さにある、と彼女は思っていたので、エリーは、物理学用の声、いわば職業的な話し方を自分なりにあみだした――ふつうに話すときの数デシベルも高い声で、明瞭に、てきぱきと話すのである。そういう声で話すからには見当外れなことは言えなかったし、発言のタイミングをうまくつかむのも大切だった。それに、そんな声で長く話しつづけるのもむずかしかった。ときどき、自分でおかしくなって、大声で吹きだしそうになってしまうからだ。そういうこともあって、彼女はいつのまにか、周囲が論じ合っているときに、素早く、要点を鋭くつくような言葉をさしはさんで、男たちの注意を引くことが多くなった。いったんそうして周囲の注意を引くことに成功すると、ふつうにちかい声で話しつづけることができるのである。新しいグループに入るたびに、彼女はまた最初からそうやって、発言権を確保しなければならなかった。男子の学生たちは、必ずといっていいくらい、問題点が存在することにも気づかないのがふつうだった。

ときどき、実験やゼミナールに参加しているときなど、講師が、〝それでは紳士諸君、さ

CamScannerでスキャン

きに進もう——〟と言いかけてエリーのしかめっ面(つら)に気づき、〝いや、これは失礼、ミス・アロウェイ、きみも男子学生の一人と思ってるもんでね、つい——〟とつけ加えることがよくあった。エリーを女性とは思っていないと匂(にお)わせるのが、彼らの口にする最高の讃辞なのだった。

それはそれとして、あまり戦闘的な性格にはならないようにしよう、人間嫌(ぎら)いにはならないようにしよう、とエリーは心がけた。そういえば——と、彼女はあるとき思った——〝人間嫌い(ミスアンスロープ)〟とは、男性に限らず、すべての人間を嫌う人物のことである。ところが、女だけを嫌う人物をさす言葉もある——〝女嫌い(ミソジニスト)〟がそれだ。が、世の辞典編集者は、どういうわけか、男だけを嫌う人物をさす言葉をつくるのを怠ったようだ。彼ら辞典編集者はたぶん、十中八、九、男性なのだろう。だから、そういう言葉の需要など、考えつきもしなかったのにちがいない。

たぶん、エリーくらい親の干渉に悩まされてきた女性も少なかったのではあるまいか。それだけに、大学生になって得た——知的、社会的、性的な——自由の味は素晴らしかった。当時は、男だか女だかわからないようなドレスを着るのが女性たちの流行だったが、エリーはむしろ、乏しい予算の範囲内で、シンプルななかにも優雅さを漂わせる服装や化粧を心がけた。男女平等を訴えるには、もっと効果的な方法が別にあると思ったからである。何人かの親友ができたけれども、敵も大勢できた。そういう連中は、彼女のドレスや政治的・宗教的信条を嫌い、自己の信念をゆずらない頑(かたくな)さを憎んだ。エリーが科学を好み、科学に強いと

CamScannerでスキャン

いう事実は、それ以外の点で彼女に劣らず有能な若い女性たちにとって、ある種の侮辱と映るようだった。が、エリーのことを、数学者たちのいう実在的な定理——女性でも科学に卓越することができるのだという実例——ないし、一つの理想的人間像、とまで見なす人間たちも少数ながらいたことも事実だった。

ときあたかもセックス革命の高揚期だったから、エリーもいやます熱意をもって、いろいろな実験を試みてみた。が、この人ならばと思う男性はみな、自分をけむたく思うらしいことに気づくのだった。だれと付き合っても、せいぜい数カ月くらいしかつづかなかった。そういうパターンを変えるには、自分の関心対象をつとめて隠し、はっきりした意見を言わないようにするしかなさそうだったが、それこそはハイスクール時代に、自分がもっとも嫌ったことだった。あきらめきって家庭に幽閉されている母のイメージが、どうしても頭から離れなかったのである。いっそ科学やアカデミックな世界とは無縁な男性と知り合えないものだろうか——そういう願望が、エリーのなかに芽生えていった。

この世には、およそ悪意というものを持たず、一切の警戒心を抱かずに男性の胸にとびこんでゆく女性がいる。かと思うと、〝好ましい〟男性をつかまえるという一事のために、あらゆる事態にそなえた対策や巻き返しの準備もおさおさ怠りなく、軍事作戦のような完璧さで、男性獲得作戦にのりだす女性たちもいる。彼女たちの場合、〝好ましい〟という言葉がくせものなんだわ、とエリーは思った。可哀そうに、そうしてつかまえられた男性は、本当に〝好かれた〟わけではなく、ただ〝好ましい〟と見なされたにすぎない——つまり、この

情けない風習の拠って立つ社会的価値観というやつに照らし合わせて〝好ましい〟と思われる人物にすぎないのである。大部分の女性は、その両者のタイプの中間で、自分たちの情熱と人生における長期的な利益の妥協を図ろうとする。たぶん、愛と利己心のあいだには、ときどき理性の見逃しがちな交流が行われるのだろう。が、計算ずくの男性獲得作戦というやつにだけはエリーはなじめず、考えただけでおぞけがふるうくらいだった。この点については、自分はあくまでも自然体でいこう、とエリーはあらためて思った。そうした折に、ジェシーと知り合ったのである。

★

ケンモア・ストリートの地下蔵バーには、最初、あるデートの相手につれられて訪れたのだった。ジェシーはそこでリズム・アンド・ブルースを歌い、リード・ギターをひいていた。彼の歌を聞き、そのダイナミックな身ぶりを見ているうちに、エリーは自分の望んでいたものをはっきりと覚った。翌日の夜、彼女は一人でそのバーを訪れた。舞台にいちばんちかい席にすわり、ジェシーの演奏中ずっと視線をからみ合わせていた。二カ月後、二人は同棲していた。

それからというもの、研究に集中できるのは、ジェシーがハートフォードやバンゴーに公演にでかけたときに限られた。日中、エリーはほかの学生たちとすごした。計算尺を戦利品のようにベルトに吊していた最後の世代の若者たち。プラスチックのペンシル・ホルダーを

胸ポケットにさした若者たち。神経質な笑い声をひびかせる、几帳面で気どった若者たち。睡眠以外の時間をすべて科学者になるために費やす、真剣な若者たち。自然の深部をさぐる訓練に没頭している彼らは、あたり前の日常生活では無能力者も同然だった。頭でっかちの彼らは、気の毒なくらいに不器用なのだ。科学の研究の世界はあまりに競争が激しく、知的エネルギーを消耗するので、円満な社会人になるためのゆとりがもてないのだろう。あるいは、もともと社会的適応力に欠けているからこそ、彼らは、そういう欠陥が目立たない分野に進んできたのかもしれない。エリーの見るところ、科学の研究以外の場では、彼らは付き合って面白い友人ではなかった。

夜になると、彼女の前にはジェシーがいて、活発に歌ったりとび跳ねたりする。それは彼女の生活を支配する、ある種の自然の力のようなものだった。一緒にくらした一年間を通じて、ジェシーのほうからもう寝ようと言いだした晩を、エリーはただの一夜も思いだすことができない。物理学や数学に関してまったく無知ではあったけれども、ジェシーは宇宙の中で生き生きと目ざめていた。しばらくのあいだは、エリーもそうだった。

自分の二つの世界を一つに調和させることができたらどんなにいいだろう、と彼女は思った。ミュージシャンと物理学者が、社会生活というコンサートで一つに融け合う場面をエリーは夢みたのだ。が、彼女がお膳立てした〝コンサート〟の夕は、どこかしらぎごちなく、長つづきしなかった。

ある日のこと、ジェシーは、赤ん坊がほしいと言いだしたのである。おれは本気なんだよ、

いぜ。
エリー。おれはちゃんとした定職について、堅実な家庭をつくるよ。正式に結婚したってい

「赤ちゃんですって?」エリーは訊き返した。「でも、赤ちゃんを産んだら、あたし、大学を中退しなくちゃならないわ。卒業までにまだ何年もあるのよ。赤ちゃんを持ったら、もう二度と大学にはもどれないわよ、きっと」

「そうかもしれない」彼は答えた。「でも、おれたちには子供ができるんだ。きみは学者にはなれないかもしれないけど、そのかわり、なにか別の貴重なものが得られるはずだよ」

「でも、ジェシー、わたしにはどうしても大学が必要なの」

ジェシーは肩をすくめた。その瞬間、エリーは、二人の共同生活がお互いの肩からすべり落ちてゆくのを感じた。同棲はなおも数カ月つづいたが、それはやはり、あの決定的なやりとりが交わされたときに終っていたのである。二人は結局別れのキスを交わし、ジェシーはカリフォルニアに去った。彼の名を耳にすることは、その後二度となかった。

＊

一九六〇年代の後期、ソ連は金星に一連の宇宙探査機を着陸させることに成功した。人類が、有効に機能できる状態で他の惑星に着陸させることができた最初の宇宙船だった。それより十年以上も前に、まだ地上にしばりつけられていたアメリカの電波天文学者たちは、金星が強力な電波源であることを発見していた。たぶん、金星の緊密な大気が、いわゆる〝温

室効果〟によって熱気を封じこめるのだろう、というのが、もっとも一般的な解釈だった。この見解にしたがうと、金星の表面はすさまじい暑熱に支配されていて、水晶の都市や、われわれと同じように宇宙の神秘に思いを馳せる金星人など到底存在し得ないことになる。もっと別の解釈が成り立たないだろうか、とエリーは思い、暑い金星のはるか高空から電波が射出される可能性をいろいろ考えてみた。これはという解答は思いつけなかった。金星は酷暑の地であるという想定に立たない限り、電波のデータを説明することは不可能だ、とハーヴァード大学やMIT（マサチューセッツ工科大学）の天文学者たちは主張した。それでもエリーには、それほど大規模な〝温室効果〟などありそうに思えなかったし、考えただけで、なんとなく不快だった。だいいち、それではいずれ金星自体が燃えつきてしまうではないか。だが、その後ヴェネラ探査機が金星に着陸し、温度計を地表にさしこんだところ、錫や鉛をも溶解させ得る温度が記録されたのである。水晶の都市が溶解し――実のところ、金星表面はそれほど暑いわけではないのだが――表面がケイ酸塩の涙に洗われる情景が、エリーの頭に浮かんだ。彼女はロマンティシストだったのだ。それは自分でも、ずいぶん前から知っていた。

が、それと同時に、エリーは、電波天文学の精密なことに驚かざるをえなかった。電波天文学者たちは家にいて、電波望遠鏡を金星にむける。そして、ヴェネラ探査機がさぐる十三年前に、それに劣らぬ正確さで、金星表面の温度を計測していたのである。電気やエレクトロニクスにならし、物心ついたときから魅了されている。が、電波天文学の素晴らしさをエリ

ーが思い知ったのは、そのときが初めてだった。自分の惑星に居ながらにして、エレクトロニクスの粋をあつめたレーダーのような電波望遠鏡を空にむけると、異星に関する情報が、電気回路を通じて送られてくる――なんて素晴らしいのだろう。

エリーは、ちかくにある大学付属の、さほど大きくない電波天文台に通いはじめ、そのうち観測とデータ分析担当の助手として招かれるようになった。夏には有給の助手として、ウエストヴァージニア州グリーンバンクにある国立電波天文台につとめることができた。そこに初めて到着したときには、グロート・レイバーの作った電波望遠鏡にうっとりと見入ったが、この伝説的な望遠鏡は、一九三八年、イリノイ州ホイートンのレイバーの自宅裏庭で作られ、現在では、献身的なアマチュアが達成できる事業の一つの見本としての役割を果している。レイバーは、自宅付近で車のエンジンをかけている者がおらず、高周波電波による透熱療法器を使用している者がいないときに限って、銀河の中心から射出される電波を探知することができたのである。

天文台における忍耐強い調査のかもしだす雰囲気と、ときおりもたらされる控え目な発見の喜びに、エリーは魅了された。彼らは、探査の触手が宇宙深部にのびるにつれて、はるか遠方の銀河外の電波源がどのくらい増加するかを、計測しようとしていた。やがてエリーは、微弱な電波源を探知するための、より効果的な方法を模索するようになった。そうこうするうちに、ハーヴァードを卒業する日が訪れた。第三位の優等生として大学を了えた彼女は、国のちょうど反対側にあるカリフォルニア工科大学の天文台で、大学院生として研究をつづ

ける道をえらんだ。

★

それから一年間、エリーはデイヴィッド・ドラムリンの下で修業に励んだ。ドラムリンは、その聡明さと、馬鹿者を相手にしない性癖で世界的に有名な学者だった。が、根本的には、いかなる職業のトップ・クラスにもよく見かける人間、すなわち、いつか、どこかに、自分を凌駕する者が現われるのではないかという不安を絶えず抱いている人間、だった。エリーは彼の下で、電波天文学の核心、とりわけその理論的基礎を叩きこまれた。どういうわけか、彼は女に優しい、という風評があるのだが、エリーが間近に見たドラムリンは、戦闘的な言辞をしばしば弄し、一貫して自己中心的態度をとりつづける男性だった。きみはあまりにもロマンティックすぎるんだ、というのが彼の口癖だった。いいかね、宇宙はそれ自体の法則にしたがって、厳密に動いているんだ。研究の要諦は、宇宙をあるがままにとらえて、そこにロマンティックな思考法（と、少女趣味的な憧れ、と彼は一度言ったことがある）を介在させないようにすることにある。自然の法則によって規制されてないものはすべて恣意的なのだ、と、彼は隣の研究室の同僚を引き合いにだして説明した。そして、こうつづけるのだった——ところが、ほとんどすべてのものは自然の法則によって規制されてるのさ、と。講義中のドラムリンを見つめながら、エリーは、いくつかの特徴が奇妙にないまざっている彼の性格をなんとか理解しようとつとめた。ドラムリンは、きわめて健康な男性だった。その

外見的特徴をあげるとしたら、こういうことになるだろう──たえず浮かべる冷笑的な笑み、若白髪、鼻の先にちょこんとかけた半円形の読書用眼鏡、蝶ネクタイ、四角い顎、そして、わずかに残っているモンタナ風の訛り。

彼にとっての楽しい余暇のすごし方とは、大学院生や大学生を夕食に招くことだった。(その点は、エリーの継父とは対照的だったと言えるだろう。ストートンは、学生たちにチヤホヤされるのを好みながら、彼らを夕食に招くのは金の浪費だと考えていたのだから)。学生たちを前に、ドラムリンはきわめて知的な縄張り意識を披露する。会話の方向を巧みに、自分がその面での権威と認められている話題に誘導してから、反対意見を一刀両断に斬ってすてるのだ。食事がすむと、コスーメルやトバゴやグレート・バリア・リーフでスキューバ・ダイヴィングを楽しんだときのスライドを映写してみせる。彼はたいてい──水中にもぐっているときですら──カメラに笑いかけ、手をふっている。ときには、彼の学問上の同僚、ヘルガ・ボルク博士の操る潜水艇が映しだされることもある。(ドラムリン夫人はきまって──[illegible]前回お見せしたのだから、というもっともな理由で、上映を控えさせようとする。しかし、それを言えば、学生たちはすでに、ほとんどすべてのスライドを見せられていたのである。夫人の横やりに対してドラムリンは、ヘルガ・ボルクの運動神経のみごとさを賞讃することで切り返し、夫人の屈辱感はかえっていやますのだった)。学生たちの多くは陽気にショウを楽しみ、脳サンゴやウニの生態をながめながら、前回見のがしたシーンをさがそうとする。が、当惑のあまり体をゆすったり、だされたアボカド・ディップの賞

味にひたすら熱中する者が少数ながらいるのも事実だった。

大学院生たちにとっての刺激的な午後とは、パシフィック・パリセード渓谷にちかい、ドラムリンお気に入りの断崖の端まで、彼を車で送っていくことだったと言っていいだろう。こともなげにハング・グライダーにつかまると、ドラムリンは数百フィート下の静かな海面めがけて跳躍するのである。それを見届けてから車で下の海岸までとばし、彼を収容するのが、学生たちの任務だった。ドラムリンは欣然と笑いながら彼らの頭上に舞い降りてくる。きみも飛んでみないかと誘われる者もいたが、承諾する学生はほとんどいなかった。競争するにしても、最初から優位に立っているのはドラムリンのほうなのだ。彼はその事実を楽しんでもいた。一般に、大学院生を見ると、未来のための貴重な資源、次代をきりひらく知的な尖兵と見なす者が多い。が、ドラムリンは例外のようにエリーには思えるのだった。彼にとって、大学院生とは知的なガンマンなのである。〝西部一の早射ちガンマン〟のタイトルを奪うために、彼らはいつドラムリンに挑戦してこないとも限らない。だから、学生たちには、あくまでも彼らの分を心得させておく必要があるのだった。ドラムリンがエリーを誘惑しようとしたことは一度もなかったが、いずれそういう行動にでるにちがいない、と彼女は思っていた。

海外で一年間の安息休暇をすごしていたピーター・ヴァレリアンがキャンパスにもどってきたのは、エリーがカリフォルニア工科大学に移って二年目のことだった。彼は温厚だが風采のあがらない男性だった。周囲のだれしもが——なかんずく本人自身が——彼をとくべつ

な英才と見なしてはいなかったにもかかわらず、ヴァレリアンは一貫して、電波天文学における重要な業績をあげつづけていた。人からその理由を訊かれると、彼はこう説明した――ぼくは〝食いついたら離さない〟もんでね、と。が、科学者としての彼の経歴には、いささか評判のよくない側面もあった。ヴァレリアンは、地球外知的生物が存在するという考えにとりつかれていたのである。そういえば、学部の教授たちには、それぞれ一つだけ弱みがあるようだった。ヴァレリアンのそれが地球外知的生物なら、ドラムリンの場合はハング・グライダーだった。ほかにも、トップレス・バーに目がない者もいれば、食虫植物にとりつかれている者もおり、超越瞑想とかいうものに凝っている者もいた。ヴァレリアンは、他のだれよりも熱心かつ慎重に、そしてだれよりも長きにわたって、地球外知的生物、略称ETIについて、考察を重ねてきていた。彼にとってETIとは、無味乾燥な日常生活と鮮やかなコントラストを成す一つのロマン、憧憬の対象なのではないか――ヴァレリアンという人物を深く知るにつれて、エリーにはそう思われてきた。地球外知的生物に関する考察は、彼にとっては仕事ではなく、一つの娯楽なのだ。そのときに限って、彼は存分に想像の翼をはばたかせるのである。

　エリーは、彼の話に喜んで耳を傾けた。まるで〝不思議の国〟や〝エメラルドの都〟に入っていくような気分に浸れたからだ。いや、それよりもっと素晴らしかったかもしれない。というのも、彼の話を聞き終ると必ず、これは本当かもしれない、本当にそういうことが起るかもしれない、という思いが湧いてきたからである。いつの日か――と、エリーは思った

——空想の中の出来事ではなく、現実に、大型電波望遠鏡の一つが遠い天体からのメッセージを受信することがあるかもしれない。が、ヴァレリアンの話を聞いていて、気落ちすることもなかったわけではない。というのも、他のテーマを論じるときのドラムリンのように、科学的予測というやつは必ずありのままの現実とつき合わせてみなければならないということを、彼はくり返し強調したからだ。それは、この世に多々ある無責任な空想と、真に価値のある稀少な予測とを分かつ、一種のふるいのようなものだった。地球外知的生物と彼らのテクノロジーに関する予測は、自然の法則に厳密に依拠していなくてはならない。それは、多くの魅惑的な空想の息の根を止める規制でもある。が、もしそのふるいにかけられてもあとに残り、もっとも懐疑的な物理的・天文学的な分析にもパスするような予測があるとしたら、それは事実ありうることかもしれない。もちろん、そう断言することはできないだろう。が、現代人が見のがし、後世、現代人よりも賢明な人々が見抜くような各種の可能性が、この世に存在したとしても、おかしくはないのだ。

ヴァレリアンは強調する——われわれはいかに、現在という時代や、現在の文化や、現在の生物学に足を引っぱられているか。根本的に異なる生物や文明を想像するにあたって、われわれはいかに制約されているか。われわれとは根本的に異なる世界で、まったく別の進化をとげた生物は、われわれとは似ても似つかない存在であるにちがいないのだ。こちらよりはるかに進んだ生物なら、こちらの想像もつかないテクノロジーを育んでいるだろうし——それはほとんど確実と言ってよい——まったく新しい物理法則すら持っているかもしれない。

ヴァレリアンは、デ・キリコの絵に描かれたような、一連の漆喰のアーチのかたわらを歩きながら、言うのだった——重要な物理法則のすべては、われわれの世代がその問題を考えはじめたときに発見されつくしたと思うのは、視野狭窄の見本というもんだね、と。当然、二十一世紀の物理学があってもおかしくないし、二十二世紀の物理学や四十世紀の物理学があってもおかしくはないのだ。われわれとまったく異なる技術文明の担い手たちが、われわれに連絡してくる方法が事前にわかると思ったら、それこそお笑い草というものだろう。

だが——と、彼はいつも自分をなぐさめるように言う——地球外知的生物は、われわれ地球人がどんなに遅れた存在かをさとるに相違ない。われわれがもっと進んだ存在なら、もうとっくに彼らに知られているはずなのだから。われわれはこの地球上で、いまようやく二本足で立ちはじめたところなのだ。先週の水曜日に火を発見し、ついきのう、ニュートン力学や、マクスウェルの方程式や、電波望遠鏡や、物理法則の〝超統一〟の可能性について知ったところなのである。

地球外知的生物は、こちらにわかりにくい交信方法はとるまい、とヴァレリアンは確信していた。彼らはきっとわかりやすい方法をとるにちがいない。なぜなら、知恵遅れの人間と交信しようとしたら、彼らは当然、そのことをあらかじめ勘定に入れるに相違ないからだ。だからこそ、かりにメッセージが送られてきたら、それを解読するチャンスがこちらにある——そう、ヴァレリアンは思っていた。われわれ地球人の後進性は、そのままこちらの強みになるのである。われわれ遅れた地球人の知能程度がどのくらいのものであるかは、彼も十

分心得ていた。

エリーは博士論文のテーマに、学部教授会の同意を得て、電波望遠鏡に採用されている高感度受信機の改良という問題をえらんだ。このテーマなら、エレクトロニクスに関する自分の才能を存分に生かせるし、理論偏重のドラムリンの影響を脱することもでき、ヴァレリアンとの話し合いを続けられるからである——だが、地球外知的生物の問題で彼と協力するのは職業的に危険な要素を孕むので、慎重に避けることにした。それは、博士論文で扱うには思弁的すぎるのだ。継父のストートンは、エリーの多彩な関心を、頭でっかちの野心だとか、陳腐すぎるとか言って、非難するようになっていた。彼女の博士論文のテーマを人づてに聞いた継父は——このところエリーは、彼と直接話すことがなくなっていた——愚にもつかないテーマだ、と言ってのけたという。

エリーはいま、ルビーのメーザー（電気衝撃増幅器）の研究をしていた。ルビーは主としてアルミナからできていて、ほとんど完璧な透明度を持っている。赤く見えるのは、小さなクロミウムの不純物が、アルミナの結晶中に混在しているからだ。このルビーに強力な磁場が印加されると、クロミウム原子の活動が活発化する。物理学者の好む言い方を借りれば、〝励起された〟状態になる。小さなクロミウム原子が、各増幅器のなかで、夢中になって動きまわっているさまを想像すると、エリーはなんとなく楽しかった。しかも、それらの原子は有益な目的のためにとびはねているのだ——それによって、弱い電波信号を増幅するのだから。磁場が強ければ強いほど、クロミウム原子の励起状態も高まる。こうしてメーザーは、

ある特定の周波数の電波を選別的にとらえるように改良することが可能なのだ。エリーは、クロミウム原子に加えて、ランタニド元素の不純物をも有するルビーの加工法を発見した。そのルビーをつかったメーザーは、もっとせまい周波数帯に反応できるので、従来のメーザーではとらえ得なかった、ごく微弱な電波をも探知できるのである。エリーの開発した探知器は、まず液化ヘリウムの中にひたしておく必要があった。それから彼女は、オウエンズ・ヴァリーにあるカル・テック（カリフォルニア工科大学）の電波望遠鏡にその新兵器を装着し、従来とはまったく異なる周波数帯で、天文学者たちが〝3度K黒体輻射〟と呼ぶもの――この宇宙を創始した巨大な爆発、いわゆる〝ビッグ・バン〟における電波スペクトルの名残り――を探知することに成功した。

「すこし整理してみよう」と、エリーはひとりごちる。「わたしは空中の不活性ガスをとらえ、それを液体に変え、ルビーの中にある種の不純物を入れて磁石をとりつけた――そして、宇宙を創造した火をとらえたんだわ」

自分ながら驚きのあまり、首をふった。物理学の基礎を知らない人間に聞かせたら、なんという傲慢不遜な魔術だ、と思うことだろう。たとえば、千年前の科学者たちには、このことをどう説明すればいいだろう？　そう、空気やルビーや磁鉄鉱のことは知っていても、液化ヘリウムや、原子の〝励起〟や、超電導液体ポンプのことなど、なに一つ知らなかった彼らには？　じっさい――と、彼女は思った――千年前の科学者たちは、電波スペクトルの概念だって、皆目知らなかったんだわ。いや、そもそもスペクトルという概念すら、彼らは知

ことができるだろうか？

いまのわれわれより千年も進んだ文明があるとしたら、われわれはそれをどうして理解する

けれど。だいたい、光が波動であることを、彼らは知らなかったのである。とすれば、逆に、

らなかっただろう。虹を見ることによって、漠然とその存在に気づいてはいたかもしれない

しかできないからである。宝石として通用するレヴェルに達するものすらほとんどなかった

ルビーは大量に加工する必要があったが、それは、理想的な特性をもったものがごく微量

し、大半が小さすぎた。が、エリーは、比較的大き目なもので不用になったものを、アクセ

サリーとして身につけるようになった。それは、浅黒い肌によくマッチした。ルビーは、た

とえ丹念にカットされていても、指輪やブローチに加工されると、ちょっとした欠陥がすぐ

にわかるものである。たとえば、ある特定の角度で、とつぜん内部反射で光るとか、真紅の

色の中に桃色のしみがあるとか。科学者ではない友人たちには、自分はルビーが好きだけれ

ども、お金で買うゆとりはないのよ、と言って煙にまくのがエリーは好きだった。それは、

緑色植物の光合成の生化学的解明に初めて成功した学者が、以来どこへいくにも松葉やパセ

リを襟にさすようなものだったかもしれない。エリーに対する敬意を深めつつあった同僚た

ちは、そんなことはべつにとるに足りない奇癖だと考えているようだった。

★

ところで、世界の大型電波望遠鏡が、たいてい遠隔の地に設けられているのは、ポール・

ゴーガンがクヒチにでかけたのと同じ理由によると言っていいだろう。つまり、いい成果をあげるためには文明から遠く隔たっていなければならないのだ。民間と軍隊による電波通信が増加するにつれて、電波望遠鏡は身を隠すことを余儀なくされた——プエルトリコの人里離れた渓谷に隠遁したり、ニューメキシコやカザフスタンの広大な砂漠に流されたりしなければならなかったのである。電波干渉が増大する一方の現状では、いっそ地球外のどこかに電波望遠鏡を設置したほうがいいという見解が説得力をましてくる。そうした僻地の天文台に勤務する科学者たちは、頑固で意志強固な人々が多い。配偶者に去られ、大人になるのを待ちかねたように子供たちが家をでていっても、天文学者たちは断固として勤務をつづける。彼らのなかに、夢想家を自任している者はほとんどいない。遠隔の天文台に永続的につとめる職員たちは、どちらかといえば、実際的人間、実験主義者、アンテナ・デザインやデータ分析には精通していても、準恒星状天体や、規則的な電波パルス射出源であるパルサーについてはうといい人間、が多い。概して、彼らのなかに、子供のころ、はるかな星に憧れたという人間はすくない。むしろ、マイカーのキャブレーターを修理するのに忙しかった、という人間が多いようだ。

博士号を取得したのち、エリーは、アレシボ天文台での研究助手の職につくことにした。アレシボ天文台は、プエルトリコ北西の山麓にあるカルスト渓谷の底にあり、直径三百五メートルの巨大なお椀型電波望遠鏡を備えている。この、地上最大の電波望遠鏡が利用可能になったからには、自分のメーザー探知器をつかって、できるだけ異なる天体——ちかくの惑

星や恒星をはじめ、銀河系の中心やパルサーやクェーサー——を観測したいという熱意に、エリーは燃えていた。天文台の常勤スタッフとして、彼女はかなりの長時間、観測が許されるはずだった。大きな電波望遠鏡となると、それを利用する研究計画が目白押しなので、使用希望者はかなりの競争を覚悟しなければならない。あらかじめ使用時間を予約できるのは、常勤スタッフならではの貴重な特典といっていい。それあればこそ、そうした、神にも見捨てられたような僻地に住むこともいとわない、という天文学者たちが大勢いるのだ。

エリーのもう一つの願いは、知的生物の発した信号をもとめて、比較的近いいくつかの星をしらべることにあった。彼女の開発した探知システムをもってすれば、たとえ数光年離れていたとしても、地球のような惑星から放たれる電波をとらえるのは可能なはずだった。それに、われわれよりもっと進んだ星の生物がわれわれと交信しようとすれば、われわれよりもっと強力な電波を発信できるにちがいない。かりに、宇宙のある特定の区域にむけて、アレシボが一メガワットの電波を発信できるとすれば、われわれよりわずかに進んだ文明の星は、百メガワットかそれ以上の電波を発信できるだろう。もし彼らが、アレシボと同じサイズの百メガワットの出力をもつ望遠鏡で意図的に地球との交信を図ったなら、それが銀河系のどこからくるものだろうと、アレシボ天文台は捕捉できるにちがいない。この問題についてじっくりと考えてみると、地球外知的生物の探索に関しては、過去に払われた努力よりも、これからなすべきことのほうがとてつもなく多いことに、エリーは驚くのだった。従来、この問題に投じられた人的・物的努力は、微々たるものにすぎない。が、これより重要な科学

的課題は、そう数多くはあるまい。

アレシボ天文台は、地元民のあいだで〝エル・レーダー〟と呼ばれている。彼らにとって天文台の真の目的は漠然としているが、喉から手がでるほど欲しい勤め口を百人分以上提供してくれるのはたしかだった。男性のスタッフが、地元の若い女性を見かける機会はめったにない。いきおい、若いスタッフのなかにはエネルギーをもて余すものもいるのだろう、彼らの何人かは昼夜を分かたず精力的に仕事をこなし、それでもエネルギーがあまってお椀形アンテナの周囲の半円形の道をジョギングしたりしていた。到着すると同時に、エリーが彼らの注目の的となったのは、むりもあるまい。それはそれで嬉しくないこともなかったが、そのうち彼らの目がわずらわしくなって研究意欲をそがれるようになったのも事実だった。

それはともかく、天文台周辺の自然の景観はすばらしかった。夕ぐれになると、エリーはコントロール・ウインドウから外に目をやって、大きな鉄塔のかなたの谷の上に浮かぶ雨雲に見入る。三つあるそれらの鉄塔からは、フィード・ホーンと、彼女が新たにとりつけたメーザー・システムがつりさがっている。各鉄塔のてっぺんについている赤いライトは、こんな僻地までさまよいこんでくる飛行機に警告するのが役目だ。午前四時ごろになると、エリーは新鮮な空気を吸いによく外にでて、〝コキス〟と呼ばれる数千匹ものカエルの不服そうな大合唱に耳をかたむけて、彼らはどんな気持を訴えたいのだろう、と頭をひねるのだった。

職員のなかには天文台のちかくに住む者もいたが、町から遠く離れていることに加えて、スペイン語が話せないのと、地元の風習になじめないことが重荷になり、配偶者ともども孤

独と無力感をかこつことが多いようだった。なかには、その近辺で唯一の英米人向けの学校があるラミー空軍基地に移り住んだ者もいる。が、そこから天文台までの九十分のドライヴが、かえって孤立感を深めるらしい。プエルトリコの分離主義者たちは、天文台がなんらかの軍事的機能を果していると誤解して脅迫をくり返したが、それも、職員たちの内にこもったヒステリーと、環境になじめない無力感を増幅させるようだった。

　ヴァレリアンが訪ねてきたのは、それから何カ月もたってからだった。講演が名目だったけれども、本当は、わたしの調査の進展ぶりをしらべて、ある種の精神的支援を行うのも目的の一つなのだろう、とエリーは思った。彼女の探査活動はかなり順調に進んでいた。すでに、新たな星間分子雲複合体と覚しいものを発見していたし、かに星雲の中心部にあるパルサーに関するかなり高度の時間解像データも得ていた。ちかくの数十の星からの信号に関して、これまでになく周到な探索も行ってみたが、いまのところ見るべき成果はなかった。一定のパターンを持つ電波が、一、二あることはあった。で、またくり返しそれらの星を調べるのだが、結局異常は見つからない。長いあいだ星をながめていると、ときどき地上電波の干渉や各種の雑音の偶然の結合によって、一瞬ドキッとするような一定のパターンが生れることがある。そういうときは気持を鎮めて、再度チェックする。そのパターンがもう一度くり返されなければ、単なる物理現象と見なせばいい。この原則は、地球外知的生物からの信号を捕捉する努力をつづけるに際し、精神的安定を保つうえでもきわめて重要だった。自分の原動力である、自然の驚異に対する感受性を失わない範囲内で、できる限り強靭な精神力

を養おう、とエリーは決意していたのだ。

その日エリーは、共同の冷蔵庫の乏しい中身を生かして、形ばかりのピクニック・ランチをこしらえた。それをあいだにはさんで、彼女とヴァレリアンは、アンテナの埋めこまれている、お椀型にえぐれた地面のふちで久方ぶりに談笑した。アンテナのパネルを修理したり交換したりしている作業員たちの姿が、遠くに見えた。彼らはアルミ板を突き破って下の地面に落下しないよう、特殊なスノーシューズをはいている。エリーの探索の進展ぶりを聞いて、ヴァレリアンは満足げだった。とりとめもない噂話や、現代科学に関する種々の情報について話し合ううちに、話題はSETIに移った。最近になって、〝地球外知的生物の探索〟は、略してSETIと呼ばれるようになったのである。

「この仕事にフルタイムで専念することを考えたことがあるかい、エリー？」ヴァレリアンは訊いた。

「いいえ、だって、そんなことは現実に不可能でしょう？　わたしの知るかぎり、SETIを専門的に行っている天文台など、世界中に一つもないじゃありませんか」

「ああ。しかし、いずれはそういう施設ができるかもしれないよ。VLA、つまり、直径二十五メートルの二十七個の反射体をつかった口径合成望遠鏡に、さらに数十の反射体をドッキングさせて、SETI専門の天文台が作られる可能性が、ないこともないんだ。むろん、それは通常の電波天文学の仕事にも従事するんだけどね。実現すれば、そいつは電波の微小な角度をはかるすばらしい干渉計になる。実現するには巨額の資金が要るし、政治的なリー

ダーシップも必要になるから、いまのところはまだ、一つの可能性にすぎないけどね。実現するのは、早くても数年先だろうから。でも、考えておく価値はあるんじゃないかな」

「ねえピーター、わたし、比較的ちかくにある太陽スペクトル型の星を、もう四十いくつも調べたのよ。二十一センチ水素線で調べたわ。水素は宇宙にいちばん多量にある元素だから、それがいちばん可能性のある電波周波数だって、だれもが言うから。しかも、可能なかぎり綿密に調べたの。なのに、信号らしきものは一つも捕捉できなかった。そもそも、地球外知的生物からの信号なんて存在しないんじゃない。こんなことつづけても、時間の無駄なんじゃないかしら」

「金星の生物みたいにかい？　そいつは悲観論というものだよ。金星の表面はたしかに地獄のような世界だが、あれは一つの惑星にすぎない。ところが、銀河には何千億もの星があるんだからね。きみはそのなかの、ほんの一握りの星をさぐってみたにすぎないんだ。あきらめるのは早計だと思わないか？　きみはまだ、十億分の一の調査を行ったにすぎないんだ。いや、他の周波数を考えれば、それより少ないかもしれんな」

「ええ、ええ、それはわかってます。でも、そもそも彼らが本当にどこかに存在するのなら、すぐそこにいたっておかしくないという感じがしません？　もし、本当に高度な文明を持つ連中が一千光年彼方に住んでいるんだとしたら、連中はわたしたちの裏庭にも前哨地を置くのがふつうなんじゃないかしら？　このＳＥＴＩという事業は、永遠につづけたとしてもこれで終りということにならないんじゃないかという気がして仕方がないの」

「なんだか、デイヴ・ドラムリンみたいな話し方をするね。彼は、自分の生きているうちに地球外知的生物が見つからなくちゃ興味がない、というんだからね。しかし、われわれはまだSETIの端緒についたばかりなんだ。どんなに多くの可能性がわれわれの前にひらけているか、きみだって知ってるはずじゃないか。いま重要なのは、あらゆる可能性をさぐる余地を残しておくことなんだ。そして、もっと楽観的にならなくては。われわれよりもっとむかしに生きていた人間たちは、われわれの現在の暮らしぶりに驚きはしても、こういう生活が可能な理由まではわからなかったはずじゃないか。われわれはいま、未曾有の時代に生きてるんだ。地球外知的生物を捜すなどということが可能になったのは、いまが初めてなんだからね。きみは、他の数百万の惑星の文明をさがす探知器をこしらえた。探査が成功するか否かは、たしかに、だれも保証はできない。しかし、いま、SETIよりも重要な問題を、なにか一つでも考えつくかね？　はるかな星に住む連中が、けんめいにわれわれにメッセージを送っているのに、この地上のだれ一人として耳を傾けていない、という図を想像してみたまえ。そいつはとんでもない醜態、茶番だと思わないか？　耳を傾ける能力はあるのに、それを実行する勇気を持ち合わせないとしたら、きみはそういう文明の一員であることを恥ずかしいと思わないか？」

★

左側の世界の二百五十六の映像が、左側を通りすぎる。右側の世界の二百五十六の映像は、

右側を移動してゆく。彼女は五百十二の映像を統合して、自分の周囲の光景を頭に刻む。ゆったりとそよぐ大きな葉茎の森の奥深くに、彼女はいた。葉茎は緑色のものもあれば青白いものもあり、ほとんどが彼女より大きかったが、それをのぼりおりするのは造作もなかった。ときには曲がった葉の上できわどくバランスをとったり、下に横たわっている葉の柔らかなクッションに落下したりしながらも、彼女は迷うことなく進みつづけた。自分が匂いをとらえていることはわかっていた。それは、うっとりするほど新鮮な匂いだった。この道がそこに導いてくれるなら、自分の百倍、千倍も高い障害物をのりこえてゆくことも、いとわなかった。案内塔やロープも必要としなかった。そんなものは、彼女自身の体にそなわっていたからだ。目の前の地面が放っている目印の匂いは、つい最近、同じ種族の他の斥候がつけたものに相違ない。それをたどってゆけば、食べ物にゆきつく。必ずそうなのだ。食べ物のほうから姿を現わしてくれる。斥候がそれを見つけて、道に目印をつける。そのあとで、彼女や仲間たちが食べ物をとりにゆくのだ。食べ物は、彼女自身のような生き物であることもある。かと思うと、無定形の塊や、水晶体の塊であることもある。あまりにも巨大で、一族の多数の手が必要になり、みんなで力を合わせてもちあげたり、折り敷いた葉の上を転がしてのりこえさせたりして家まで持ち帰ることもときたまある。彼女は待ちきれないように、下顎を打ち鳴らした。

★

「わたしが気がかりなのは——」と、エリーはつづけた。「その逆の可能性、つまり、彼らが交信を試みていない、という可能性なんです。交信の能力は持っていても、そんなことは無意味だと思って、メッセージを送ろうとしていない可能性だってあるでしょう。たとえば……」草の上に広げたテーブルクロスの端を見おろして、「蟻みたいにね。蟻も、わたしたちと同じ世界を共有しているわけでしょう。連中には仕事がたくさんあって、いつも忙しそうにしているわ。その意味では、連中も自分たちの環境のことをよく心得ていると言えるわね。ところが、わたしたちは、蟻と交信しようとはしない。だから蟻の側では、わたしたちが存在するなんてこと、まるで知らないんじゃないかしら」

そのとき、とりわけ勤勉そうな蟻が一匹、テーブルクロスにのってきて、赤と黒のます目の対角線にそって敏捷に進みはじめた。エリーは軽い嫌悪感を押し殺して、それを草のうえに、それが本来属する世界に、慎重にはじきとばした。

第三章　白色雑音

耳にひびくメロディーは美しい。が、耳に聞えぬメロディーはもっと美しい。

――ジョン・キーツ『ギリシャの壺の歌』

もっとも残酷な嘘は、しばしば沈黙のうちに語られる。

――ロバート・ルイス・スティーヴンスン『青年男女のために』

CamScannerでスキャン

すでに何年ものあいだ、その電波パルスは星間の広大な暗黒の中を旅していた。ときどき不規則的なガスや塵(ちり)の雲とぶつかると、エネルギーが若干吸収されるか、散乱させられた。が、残りは最初の方角にとびつづけた。行く手には、かすかな黄色い輝点があり、それは、輝度の一定な他の輝点のなかにあって、しだいに明るさをましつつあった。人間の目には、依然として一つの点にすぎなかっただろうが、それはいまや、暗黒の空にあって、もっとも明るい物体であった。パルスは、巨大な雪の球の大群に遭遇しつつあった。

〈アーガス計画〉本部ビルに、ほっそりした、三十代後半の女性が入ってゆく。やや間隔のあいた大きな目。それが、どちらかといえば角張った顔の骨格をやわらげていた。長い黒髪は、うなじのところでゆったりとまとめられ、べっこうのピンで留められている。ニットのTシャツにカーキ色のスカートという、くだけた装いをした彼女は、一階の廊下をのんびり

と進んで、〝E・アロウェイ所長〟と書かれたドアの前に立った。指紋識別式のロックから、彼女が親指をはなすところを見た者は、いかにも素人っぽく細工された、奇妙な乳赤色の指輪が右手に光っているのに気づいたことだろう。デスク・ランプのスイッチをひねり、しばらく引出しの中をかきまわしてから、彼女は一対のイヤフォンをとりだした。デスクのわきの壁に貼られた、フランツ・カフカの『寓話』からの引用が、一瞬、ライトの光に浮かびあがった。

歌よりもおそろしいセイレンたちのもう一つの武器
それは沈黙……
彼女らの歌を逃れる者あろうとも
その沈黙から逃れうる者は
一人としていない

片手をふってライトを消すと、彼女は仄暗闇をつっきって戸口にむかった。
制御室に入ると、万事異常ないことをすぐに確認して安心する。窓ごしに、ニューメキシコの砂漠上数十キロにわたって並んでいる百三十一個の電波望遠鏡の一部が見えた。いずれも、空にむかって語りかけている、奇妙な機械の花のように見える。まだ、正午をすぎてまもなかった。ゆうべは、夜ふかしをしてしまったのだ。電波天文学の調査は、昼の光の中で

も行うことができる。太陽から放射される電波は、ふつうの可視光線とちがって、空気によって攪乱(かくらん)されることがないからだ。太陽にごくちかい区域を向いている電波望遠鏡にとって、空はつねに漆黒の闇なのである――もちろん、電波源は別にして。

　地球の大気の彼方(かなた)、空の向う側には、電波が充満している宇宙がある。それらの電波の究明によって、さまざまなことを学ぶことができる――たとえば惑星と恒星と銀河について、星間をただよう巨大な有機分子雲の構成について、そして、宇宙の起源と進化と終焉(しゅうえん)について。だが、それらの電波はすべて自然なものである――つまり、物理的なプロセスや、銀河の磁場を旋回している電子や、星間分子の衝突によって生じたものなのだ。それと、宇宙を創始した〝ビッグ・バン〟の遠い谺(こだま)とでもいうべきものもまじっている。それは宇宙の誕生時に、ガンマ線から、現在の宇宙を満たしている冷たく温和(おとな)しい電波に赤方偏移されたのだ。

　人類が電波天文学を追究しはじめてから、まだ数十年しかたっていないが、その間に、どこかしら人工的な、なんらかの作為のある、異星人の放ったと思われるような本物の信号が、宇宙の深部から送られてきたことは一度もなかった。まぎらわしい電波がとらえられたことは何度もある。クェーサーと、とりわけパルサーが、一定の間隔をおいて放射する電波は、最初のうち、慎重ななかにも胸おどる期待をもって、だれか別の天体の住民からの挨拶(あいさつ)ではないか、もしくは星間を航行する異星人の宇宙船のための誘導電波ではないか、と考えられた時期もある。が、それらは結局、別のものであることがわかった。クェーサーはとてつもないエネルギー源のようだが、それはおそらく、銀河の中心にある大きなブラックホールと

CamScannerでスキャン

関連があるからだろう。それらのブラックホールの多くは、宇宙の誕生時まで半分以上さかのぼった時期に、すでに生れていたのだ。パルサーとは、急速に旋回している、一つの都市大の中性子星である。

ある意味で知的な創造物であるが、地球外からきたものではないと判明した、強力にして謎めいた電波は、ほかにもいろいろとあった。われわれの頭上の空にはいまや、秘密の軍事レーダー・システムや電波通信衛星がうようよいて、民間の電波天文学者を嘆かせている。ときとして、それらの軍事衛星は国際的電波通信協定をも踏みにじる動きにでて、掛け値なしの無法者となる。が、それを規制する手段も罰則規定も存在しないのが実情だ。関係各国のすべてが責任を回避しようとする場合もないではない。が、これこそはまちがいなく異星人の信号だ、と断定できるような電波はただの一度もとらえられなかった。

とはいえ、生命の発生のしくみはすこぶる簡単だし——生物的進化に必要な条件をそなえた惑星系はこれだけ多く、しかも、進化に必要な時間はすでに何十億年と経過しているのだから——この銀河系には生命や知的生物がわんさと存在すると考えたほうがむしろ自然だといえよう。〈アーガス計画〉は、地球外知的生物の電波探索のために設けられた、世界最大の機関である。その名は、百の目を持っていたギリシャ神話の巨人アルゴスにちなんでいる。電波は光速で、すなわち、それ以上のスピードでは何物も移動できないスピードで移動する。それは放射するのも容易なら、探知するのも容易だ。地球と同程度の、かなり遅れた技術文明を持つ星の住人でも、電波の存在には、自然界を探索しはじめてまもない時期に気づくだ

ろう。ごく初歩的な電波技術をもってしても——電波望遠鏡が発明されてからまだ数十年しかたっていないのだ——銀河の中心部にある、ほぼ同レヴェルの文明と交信することは可能のはずである。が、探索すべき場所は宇宙にあまりに多く、異星人が使用すると思われる周波数もあまりにも多いから、組織的にして忍耐強い観測プログラムが必要となる。〈アーガス〉が活動を開始してからすでに四年以上、いかがわしい電波、偽の電波、わざとそれらしく模倣した電波がとらえられたことは何度もあったが、本物のメッセージが捕捉されたことは、依然として、ただの一度もなかった。

★

「こんにちは、アロウェイ博士」ただ一人、制御室にいた技師が、明るい微笑をおくってくる。エリーも笑顔でうなずき返した。〈アーガス計画〉の百三十一の望遠鏡は、すべてコンピュータで制御されている。システムは自発的にゆっくりと大空を探査し、機械や電子関係の故障の有無をチェックしたり、配列された各望遠鏡から送られてくる種々のデータを比較したりする。十億チャンネル分の解析機、壁全体を蔽っている電子機器、そして分光計のディスプレイへと、エリーは順に視線を走らせてゆく。

ずらっと配列された電波望遠鏡が、数年がかりでゆっくりと大空を探索しているあいだ、天文学者や技師たちにできることは、ほとんどない。もしなにかしら興味あるものが探知されると、システムは自動的に警報を発し、必要なら、担当技師たちが寝こんでいる真夜中で

も、彼らを起しにかかる。その段階でエリー・アロウェイは最高度に神経を研ぎすませ、その電波が装置の欠陥によるものか、もしくはアメリカないしソ連の宇宙通信システムの流した偽の信号かを決定するのである。彼女は技術陣と協力して、探知システムの感度を向上させるさまざまな方法を考案した。捕捉された電波には一定のパターンがあるかどうか、規則性があるかどうか——それがすべての鍵だった。統轄責任者のエリーは、席のあたたまる暇もなかった。他の天文台が最近珍しい天体を発見したと聞けば、〈アーガス〉の望遠鏡のいくつかをその探査にふりむける。SETIとは無関係な観測を希望する訪問者やスタッフの手伝いもしてやらなければならない。ときにはワシントンにとんで、後援団体である〈全米科学財団〉のお偉方たちの関心が衰えないように、近況報告を行う。ソコロのロータリー・クラブやアルバカーキのニューメキシコ大学で、〈アーガス計画〉の意義に関する講演を行うこともあれば、なんの前触れもなくニューメキシコの僻地までやってくる熱心なジャーナリストたちの応対にあたることもめずらしくない。

　エリーはなによりも、倦怠感に侵されないように心がけた。同僚たちはみな好人物だったが、目下の人間と親密な個人的関係をむすぶことの不穏当さはさておいても、彼らと本当の意味で親しい間柄になりたいとは思わなかった。〈アーガス計画〉とは無関係な地元の男性たちと、情熱的だが気軽な関係を持ったことは何度かある。が、私生活のそういう面においても、ある種のアンニュイというか、倦怠感にむしばまれはじめていたことは事実だろう。

　コンソールの前に腰をおろしたエリーは、イヤフォンを両耳にあてがった。十億もの周波

数をモニターしている巨大なコンピュータにも発見できない信号を、せいぜい一つか二つの周波数しか聞けない自分が探知できるなどと考えるのは、それこそ自惚れというものだし、現実離れしている。それはわかっているのだが、ともかくもそうしてイヤフォンを耳にあてていると、自分もなんらかの役に立っているという幻想に浸れるのだ。エリーは半ば目をとじて、ゆっくりと椅子の背にもたれかかった。その顔には夢みるような表情が浮かんでいる。この人はじっさい、かなりの美人なのだ、と、かたわらにいた技師は思った。

例によってエリーの耳には、一種の空電のような音、たえずくり返される谺のような雑音が聞えた。あるとき、カシオペア座のＡＣ＋７９３８８という星のある天空の位置に望遠鏡を向けていたとき、歌うような音、こちらをじらすように強まったり薄れたりする音を聞いたように思った。それは、単純な自然現象によるものではない、と断定しうるほどには特徴的ではなかった。その星はたまたま、現在海王星の軌道のちかくにいるヴォイジャー一号宇宙探査機が最終的にむかう区域にあった。ヴォイジャー一号には、異星人への地球からの挨拶や、絵や、歌の刻まれた黄金のレコードが搭載されている。はたして彼らのほうでも、われわれに対し、光速で音楽を送ってきている、ということは考えられないだろうか——ヴォイジャー一号はその百分の一のスピードで、レコードを運んでいるのだが。またあるときには、ちょうどいまのように一定のパターンのない空電の音が聞えたさい、エリーは、情報理論に関するシャノンの有名なテーゼを思いだしたことがあった。——それは、もっとも効果的に暗号化されたメッセージは、解読の鍵を事前に知らされない限り、雑音と見分けがつ

かない、というものだ。エリーはすばやく目前のコンソールのキーをいくつか押して、狭いバンドの二つの周波数の電波を、それぞれ、左と右のイヤフォンに通してみた。これといった異常はない。こんどは、電波の二つの偏波に耳を傾け、ついで、平面偏波と円偏波のコントラストに耳を傾ける。なにせ、選ぶべき周波数は十億ちかくもあるのだ。一定のパターンを、絶望的に制約された人間の耳と頭脳で聞き分けようとする限り、一生かかってもコンピュータを負かすことはできないだろう。

人間は実在する微妙なパターンを聞き分けるのも上手だが、実在しないものをあると想像しがちなのも事実だ、とエリーは思っている。ある種のパルスや空電音の配列は、ほんの一瞬ながら、シンコペートされたリズムや短いメロディーのように聞えることがあるのだ。エリーは、既知の銀河の電波源の音をとらえている二つの電波望遠鏡に切りかえた。グリッサンドのような音が聞えてくる。この〝口笛のような音〟は、電波源と地球のあいだの稀薄な星間ガス中に存在する電子によって、電波が攪乱される結果生じる。この音が明瞭であればあるほど、途中に存在する電子の数も多く、電波源との距離も離れていることになる。この種の音は何度も聞いているので、エリーは、最初にちょっと聞いただけで、電波源までの正確な距離を推定できるまでになっている。この電波源は、たぶん、地球から千光年は離れているだろう——地球の近所にある星よりはるかに遠方にあるが、それでも広大な銀河系の圏内にあることはたしかだった。

エリーは〈アーガス計画〉の通常の天空観測モードにもどった。やはり、一定のパターン

を持つ電波はない。それはちょうど、音楽家が遠い雷鳴に耳を傾けているようなものだった。ときどき、ちょっとしたパターンの断片がいつまでも頭にまとわりつき、記憶の中にまでしのびこんでくることがある。それがあまりにも執拗につづくと、ひょっとしてコンピュータが見のがした何物かを自分の意識がとらえたのではないかと思い、特定の観測テープにあらためて聴き入ることもあった。

物心ついて以来、夢はつねにエリーの友だちだった。彼女の見る夢は異様なまでに詳細で、よくまとまっており、彩り豊かだった。たとえば、夢の中に、亡き父の顔や、古いラジオの内部が実に鮮明に現われたりする。しかも、あとになって、それをはっきりと思いだすことができるのだ――むろん、博士号取得のための口頭試問の前や、ジェシーとの仲が破局に瀕していたときのように、極度の精神的重圧を受けていたときは別だったが。ところがここにきて、エリーは、夢のなかの映像を思いだせなくなってきた。代りに、気がかりなことには、性来盲目の人々のように、音が夢の主人公になってきたのである。まだ明けやらぬ早暁、これまで一度も聞いたことのないようなメロディーや歌を、潜在意識が口ずさみだす。ハッと目ざめて、ナイト・テーブルの音声点灯式ライトに声をかけ、あらかじめ置いておいたペンをとって、そのメロディーを音譜に書く。長い一日が終ったころ、そのメロディーを楽器のリコーダーで奏でてみて、これはへびつかい座かやぎ座のあたりで聞いたんだったかしら、と思ったりする。可哀そうに――と、エリーは思う――わたしは、受信機や増幅器に巣くう移動正孔や電子、あるいははるか彼方でまたたく星間の冷たい稀薄なガスの磁場や荷電粒子

CamScannerでスキャン

等にとりつかれているんだわ。

それは、何度もくり返される単一の音、はじめと終りがかん高い、耳ざわりな音だった。ややあって、エリーはその音の正体に気づいた。ほぼ三十五年ぶりに聞く音にまちがいない。それは、洗ったばかりのスモックを母親が乾かそうとして物干し綱を引っぱるたびに、金属の滑車がきしる音だった。子供のころ、エリーは、ずらっと並んだ干し物をながめるのが好きだった。周囲にだれもいないときなど、乾いたばかりのシーツによく顔をつっこんだりした。甘酸っぱいその匂いをかぐと、必ずうっとりとしたものである。あの匂いが、いまも一瞬甦ってきたのだろうか？　あのころ、笑いながらシーツから離れた自分を、母親が優雅な仕草で抱きかかえてくれたときのことを、エリーはいまでもよく覚えている。天にさしだすように彼女を抱きあげた母は、寝室のたんすにきちんとしまう洗濯物の束さながら、彼女を小脇にかかえて運んでいったものだった。

★

「アロウェイ博士？　アロウェイ博士？」まぶたをかすかにヒクつかせながら浅く呼吸しているエリーを、技師は見おろした。彼女は二度瞬きし、ヘッドフォンを取りはずしてから、申しわけなさそうに微笑する。エリーが聴き入っている、増幅された宇宙の電波音に負けまいとすると、同僚たちはかなりの大声を張りあげなければならない。彼女のほうでも——たとえ短いやりとりのあいだでもヘッドフォンをはずしたくはなかったから——大声で叫び返

す。エリーが聴取に熱中しているときには、さりげない陽気な言葉のやりとりですら、不慣れな人間の耳には、静まり返った広大な施設内に突如として湧き起ったどなり合いのように聞えることだろう。が、いまはエリーも、こう言うにとどめた。「ごめんなさい。ついウトウトしちゃったみたい」

「ドラムリン博士から電話です。いま、ジャックのオフィスのようですね。あなたと面会することになってるんだ、と言っておられますが」

「まあ、大変。すっかり忘れてたわ」

歳月がたっても、ドラムリンの聡明さはいささかも衰えなかったが、エリーがカリフォルニア工科大学で短期間彼に弟子入りしたときには気づかなかった癖が、なにかとでてきたのも事実だった。たとえば、最近の彼は、周囲に人がいないのをたしかめて、ズボンのチャックがちゃんとしまっているかどうか確認するのである。それに、近年彼は、地球外知的生物は存在しない、存在したとしても探知し得ないほど少数で、遠く離れたところにいるのだという確信を強めているかに見える。彼は恒例の、週に一度の科学講演のために〈アーガス〉を訪れたのだが、別の目的もあることをエリーは知った。ドラムリンは、NSF（全米科学財団）に対し、地球外知的生物の探索を〈アーガス〉にやめさせ、その施設を電波天文学のもっと一般的な研究目的のために利用させるよう進言する手紙を書いたのだという。上着の内ポケットからそれをとりだすと、エリーに読んでみるように彼は促した。

「でも、本格的にこの活動に着手してから、まだ四年半しかたってないんですからね」エリ

ーは反論した。「まだ、北方の空の三分の一足らずの範囲しか調べてないんです。これは、最適周波数帯域で最小の電波雑音を隈なく調べあげる最初の機会なんですよ。なのにどうして、こんな早い時期に切りあげろとおっしゃるんでしょう？」

「それはね、エリー、こういうことをつづけていてもきりがないからさ。これから十年たったって、これはという信号など見つからんよ。するときみは、南方の空を観測するために、数千億ドルの費用をかけて、オーストラリアかアルゼンチンに新たな〈アーガス〉の観測施設をつくるべきだ、と言いだすだろう。それでもはかばかしい成果があがらないと、こんどは、ミリメートル波をとらえるために、自由可動給電線を備えたパラボラ・アンテナを地球の軌道に打ち上げるべきだ、などと言いだしかねん。きみは果てしなく、新たな観測方法を考案しようとするにきまっている。地球外知的生物は未探査の空域に信号を発信しているにちがいないという根拠を、これからも際限なく考えつくにきまっとるよ」

「この議論はもう何百回とくり返したじゃありませんか、教授。かりに失敗したとしても、わたしたちは稀少な知的生命に関してなにかを学ぶことができるんです――すくなくとも、わたしたち地球人と同じように考え、わたしたちのような遅れた文明と交信したがっている知的生物に関して、なにかを学ぶことができるわ。そして、運良く成功したら――これはもう宇宙的な規模の大当りをとったようなものじゃありませんか。それ以上に重要な発見なんて、ありえないんじゃないかしら」

「しかしね、ここの電波望遠鏡を存分に利用できないために難航している重要な研究計画は、

CamScannerでスキャン

枚挙に遑がないほどなんだ。クェーサーの進化の研究、連星パルサーの研究、ちかくの星の彩層に関する研究、それに例の、どうかと思う星間蛋白質の研究だってある。どれもみんな、世界最高の望遠鏡配列を誇るこの施設が、もっぱらSETIのために使用されているおかげで、順番を待たされてるのが実情だからね」

「SETIのために使われてるのは七十五パーセントですよ、教授。あとの二十五パーセントは一般的な研究用に開放されてるわ」

「〝一般的〟などという形容詞は不適当だな。われわれはいま、銀河系が誕生した時期、もしくはそれよりもっと早い時期をふり返るチャンスを握っとるんだからね。われわれは巨大な分子雲の核や、銀河系の中心にあるブラックホールを調べることもできるんだ。いままさに天文学の革命が起ろうとしているのに、きみがそれを邪魔しようとしてるんだぞ」

「個人の問題にすりかえるのはやめてください、教授。SETIが国民的な理解を得られたからこそ、この〈アーガス〉も建設されたんですから。〈アーガス〉はわたし一人の発案でできたものじゃありません。わたしが所長に任命されたのだって、望遠鏡の建設がだいぶ進んだときだったんですもの。NSFも完全にわたしたちを支援してくれて——」

「いや、完全に、とは言えんな。もし、わたしが意見を求められれば、風向きも変ってくるはずだ。とにかく、これはスタンド・プレイとしか思えんね。UFO愛好家やSFマンガやおツムの弱い大人たちにへつらった活動じゃないか！」

どなりかからんばかりの口調である。こちらも負けずにどなり返してやりたいという誘惑

CamScannerでスキャン

にエリーは駆られた。現在の仕事の性質、それに、自分がある程度著名な存在であることから、出席者中に――コーヒーを配ったり記録をとったりする係は別にして――女性が自分一人しかいないような会合に、エリーは絶えず参加を余儀なくされた。自分は、物心ついて以来自己改革につとめてきたのに、男性たちの中にはいまもなお、男同士でしかしゃべろうとしなかったり、強引にこちらの発言をさえぎったり、無視しようとしたりする輩が大勢いる。ときにはドラムリンのように、反感を露わにする者もいる。が、すくなくとも彼は、男性に接するのと変らない態度でこちらに接してくれる。怒るときも相手をえらばないし、訪ねる相手も男性と限ってはいない。ともかく、現在の男性の同僚たちのなかにすら、彼女がその場にいるといないとで態度が変らない者は、ほんの一握りしかいないのだ。わたしはもっと、彼らと共有する時間をふやしたほうがいいのかもしれない、とエリーは思った。たとえば、ピーター・ヴァレリアンとか、最近大統領の科学顧問に任命された、ソーク研究所の分子生物学者、ケネス・ダヘーアなどと、もっと親密に交際してみることにしよう。

　ところで、〈アーガス〉に対するドラムリンの苛立ちは、この施設につとめる多くの天文学者たちも共有していることを、エリーは知っていた。活動開始後二年ほどたったときには、施設全体が一種沈滞した空気につつまれたほどである。食事の席や長い退屈な任務の最中に、想像上の地球外知的生物の意図に関して、何度も熱っぽい論議が交わされた。連中がわれわれとどの程度ちがうのか、推測のしようがないじゃないか、とある者が言う。ワシントンの選良たちの魂胆すらつかめないというのに、数百光年、数千光年彼方の、われわれとはまっ

たく物理的条件の異なる星に住む、まったく異種の生物の意図がなぜつかめるというんだい？　彼らの信号は電波スペクトルで発信されるとは限らない、と信じている者もいた。赤外線や可視光線、もしくはガンマ線を利用して信号を送ってくるかもしれない、というわけである。かと思うと、先方はけんめいに信号を送っているのだが、その手段がわれわれより千年も進んだ技術にもとづくために、こちらは解読のしようがないのだ、という者もいた。

他の研究所の天文学者たちは、恒星や銀河の中から、強力な電波を発する天体をえらんで、つぎつぎに輝かしい発見を行っていた。彼らは研究の成果を公表し、各種の学会に出席し、ある種の達成感と目的意識で満足感を得られる。それに対して、〈アーガス〉に勤務する天文学者たちは、研究内容を公表することもめったにない。アメリカ天文学会の年次総会とか、国際天文学連合の三年に一度のシンポジウムや総会における研究発表要請に際しても、たいてい無視された。事態を憂慮した〈アーガス〉の首脳部は、全米科学財団とも協議して、所有望遠鏡による観測時間の二十五パーセントを、ＳＥＴＩとは無関係な研究にふりむけることを決定したのだった。その結果、重要な発見がいくつか記録された――たとえば、逆説的だが、光より速いスピードで動いているかに見える銀河系の外の天体に関して。あるいは海王星の大きな月、トライトンの表面温度に関して。また、ちかくの銀河の、いかなる星も見えない外縁部にある暗黒の物質に関して。こうした一連の発見によって沈滞した空気は一掃され、士気がしだいに向上しはじめた。自分たちもまた、天文学の最先端の発見に貢献しているのだという誇りを、〈アーガス〉のスタッフたちはいだくことができたのである。全天

空の探索に要する時間はのびる一方だったが、学者としての彼らの前途には確実な安全ネットが付加されたと言ってよかろう。たとえ地球外知的生物が存在する証(あかし)しをさがしだせなかったとしても、自然の宝庫の中から他の秘密をもぎとる可能性がひらけたのだから。

〝地球外知的生物の探索〟は、もっと楽観的に〝地球外知的生物との交信（CETI）〟を標榜(ひょうぼう)する人々を除いた世界中の関係者のあいだで、SETIという略語で呼ばれているが、その実体はひたすら忍耐強い観測、すなわち、この施設のすべてが本来その目的のためにつくられた、退屈しごくな営みにほかならない。が、観測時間の四分の一を、この地上でもっとも強力な配列の電波望遠鏡をつかった他の研究にふりむけられるとあれば、退屈な残り四分の三の時間もなんとかしのげるというものである。それに、他の研究所から訪れる天文学者たちのためにも、ささやかな観測時間が保証された。こうして部内の士気は向上したのだが、それでもドラムリンの考えに同調する者が依然すくなくはなかった。彼らは現代テクノロジーの精髄ともいうべき〈アーガス〉の百三十一個の電波望遠鏡をもどかしげに見やりながら、それを自分たち自身の、もっと有益な研究に利用できたらなあ、と心ひそかに嘆くのだった。その日もエリーは、ドラムリンをなだめたりすかしたりしてSETIの意義を訴えたのだが、効き目はなかった。ドラムリンはその日、とりわけ虫の居所が悪かったらしい。

だいたい、彼の講演にしてからが、地球外知的生物などどこにも存在しないのだ、と説くのが狙(ねら)い一半だったと言っていい。

たかだか数千年のうちに、これほど高度のテクノロジーをわれわれが実現したとすれば、

真に進歩した文明はどれくらいのことを実現し得たはずだろう、という問をドラムリンは投げかけた。そういう文明が本当に実在するならば、星を自在に動かしたり、銀河を再編したりする程度のことは、やってのけて当然ではないか。にもかかわらず、現代の天文学のすべてに照らして、自然の物理的プロセスによって説明し得ない現象など、ただの一つもない。となれば、地球外知的生物に呼びかける根拠など、いったいどこにあるのか。だいたい、なぜ〈アーガス〉は、いまに至るも電波信号をただの一つも捕捉し得ないのか？〈アーガス〉の首脳陣は、これまでにどれくらい多くの星――それこそ何十億という星――を調べ終ったか、わかっているのだろうか？　なるほど、この実験は価値あるものだったが、その使命はもはや終ったのだ。残りの天空のすべての領域を探索する必要など、もうありはしない。答は明らかだ。この地球のちかくにも、宇宙の最深部にも、地球外知的生物の存在する徴候はない。彼らは存在しないのだ。

それが、ドラムリンの主張の要旨だった。

一問一答に入ると、〈アーガス〉の天文学者の一人が〝動物園の仮説〟をもちだした。その要旨とは、こうである――霊長類の研究家は、ジャングルに棲むチンパンジーの生態を観察するとき、なるべく彼らの生活に干渉しないようにする。それと同じで、地球外知的生物はたしかに存在するのだが、彼らは、この宇宙に他の知的生物が存在するという事実をわれわれに知らせまいとして、姿を見せないのではなかろうか。

それに答えて、ドラムリンは別の問を提起した――〈アーガス〉で〝言い触らされて〟い

るように、もしわれわれの銀河系に百万もの文明が存在するとしたら、そのなかにただの一人の密猟者も存在しないなどということがありうるだろうか？　銀河系の全文明が非干渉のルールを守るなどということがあるのだろうか？　この地球をひそかにのぞき見している者が一人もいないなどということが考えられるだろうか？

「でも、この地球では」と、エリーは答えた。「密猟者とそれを取り締まる猟区管理官は、ほぼ同等のテクノロジーを持っています。もし猟区管理官のほうが、レーダーとかヘリコプターを導入して決定的な差をつけたら、密猟者は失業してしまうでしょうね」

〈アーガス〉のスタッフの何人かはその発言に拍手を送ったが、ドラムリンの反応は冷淡そのものだった。「きみはむりをしてるんだよ、エリー。それは悪あがきというものだ」

★

頭をすっきりさせたいとき、エリーは、たった一つの贅沢(ぜいたく)、一九五八年型のサンダーバードで長いドライヴにでかけることにしていた。この車はとてもいいコンディションに保たれていて、リア・シートの両側には小さな丸いオペラ・ウインドウがついており、ルーフは取り外しが可能なハード・トップになっている。彼女はよくそのハード・トップを外し、窓を巻きおろして黒髪を風になびかせながら夜のドライヴにでかけた。何年間もその習慣を保っているうちに、周辺の貧しい町はすべて覚えたし、孤立した山や台地の形状もすべて頭に入ってしまった。ニューメキシコの南西部のハイウェイを巡回するパトカーの乗員たちの顔も、

のこらず覚えてしまったほどである。夜勤が終ると、〈アーガス〉の門衛所（まだ鉄条網のフェンスができる前のことだった）のわきを通り抜け、素早くギア・チェンジして、一路北を目ざす。サンタフェにちかづいたあたりで、サングレ・デ・クリスト山脈の上にかすかな曙光がさしはじめる。（サングレ・デ・クリストとは〝キリストの血〟という意味のスペイン語だが、なぜ宗教はもっとも尊崇する人物の血や肉体、心臓や膵臓にちなんだ地名をつけるのだろう、とエリーは疑問に思うことがある。たとえば、さほど目立たないとはいえ、なぜ頭脳にちなんだ名前をつけようとしないのだろうか？）。

その夜エリーは、南西のサクラメント山脈の方角を目ざした。闇のなかをとばしていると、さまざまな疑問が湧いてくる。ドラムリンの主張は正しいのだろうか？　ＳＥＴＩと〈アーガス〉は、一握りの頑迷な天文学者による、一種の共同幻想なのだろうか？　彼が指摘したように、異星人からのメッセージを受信しないままに年月がたっても、〈アーガス〉は交信のための新たな手段を工夫しつづけ、高価な装置を次々に考案しながら活動をつづけていくことになるのだろうか？　この計画が失敗したと断定できる明確な証拠とは何なのだろう？　わたしはいつになったらこの活動から足を洗い、もっと安全な、目に見える成果が保証されているジャンルに進むのかしら？　つい最近、日本の野辺山天文台は、ＤＮＡの建築ブロックともいうべき複雑な有機分子、アデノシンが、濃密な分子雲中にあるのを発見した、と発表した。自分だって、地球外知的生物の探索を断念したら、生命に関連した分子を宇宙にさがしもとめるという仕事に専念できるだろう。

CamScannerでスキャン

高い山道にさしかかったとき、エリーは南の地平線に目を走らせた。ケンタウルス座が夜空に見えた。あの星の形に、古代のギリシャ人は、ゼウスに叡知を吹きこんだという半人半馬の架空の動物の姿を見たのだ。が、彼女はどんなに想像力を働かせても、ケンタウルスに似た形をそこに描くことはできなかった。エリーが好きなのは、ケンタウルス座でいちばん明るい星、α星だった。それは、地球から四・二五光年しか離れていない星なのだ。この星は、実は三連星であり、相互に相手の周囲をまわっている二つの恒星の周囲を、もっと離れた三番目の星がまわっている形になっている。地球から見ると、三つの星は一つに重なり合って、一つの光点として見えるのだ。今夜のように、とくべつ空が澄んでいる晩には、メキシコの上空あたりに見えることが多い。ときどき、何日も砂嵐がつづいて、砂漠の粉塵が空中に舞っているときなどは、夜気が澄んでいる高い山中にまで車をとばし、外に降りてα星をながめるのがエリーは好きだった。探知は困難だが、α星の周囲にも惑星が存在する可能性はある。もしかすると、三連星のどれか一つの周囲をまわっている惑星があるかもしれない。天空におけるなんらかの機械的バランスにめぐまれて、内側の二つの太陽の周囲を8の字形にまわっている惑星がもしあったら、きっと面白いだろう。それにしても――と、エリーは思った――空に三つの太陽が浮かんでいる世界に住むのはどんな気分だろう？　きっと、ニューメキシコより、もっと暑いにちがいない。

★

二車線のハイウェイの両側に、ずらっと野ウサギが並んでいるのに気づいて、エリーは楽しくなった。野ウサギは前にも見たことがある。テキサス西部までドライヴの足をのばすときなど、よくお目にかかるのだ。どのウサギも路肩に四つん這いになっているのだが、サンダーバードの新しいハロゲン・ヘッドライトに一瞬照らしだされると、後ろ肢で立って前肢をだらんとさげ、魅せられたようにじっとしている。数マイルにわたって点々と立っている彼らは、轟然と闇を裂いてゆく自分に、儀杖兵よろしく敬礼しているように思われた。夜の幻のような車が接近すると、彼らは一様に顔をあげる。一千のピンク色の鼻がピクピクと動き、二千の明るい目が闇のなかでキラキラと輝く。

あの野ウサギたちにとって、これはある種の宗教的体験なのかもしれない、とエリーは思った。見たところ、大半がまだ若いウサギらしい。連中は、自動車のヘッドライトなるものを初めて見るのだろう。考えてみると、たしかに、時速百三十キロで眩い光線が移動してゆくさまは、驚くべき光景にちがいない。面白いのは、道路の両側に何千匹ものウサギが並んでいるのに、路面の中央、センターラインのちかくにはただの一匹もいないことだった。慌ててとびだしてくるウサギも皆無だし、長い耳をだらんとたらして倒れている死体にもお目にかからない。それにしても、連中はなぜ道路に沿って並んでいるのだろう？　ひょっとすると、アスファルトの温度と関係があるのかもしれない。あるいは、ちかくの草むらで餌をあさっていたところへ明るい光線が急接近してきたので、好奇心に駆られて路肩にでてきた、とも考えられる。しかし、道路をピョンピョンとわたって向う側のいとこたちに会いにいこ

うとする者が、ただの一匹もいないというのも不思議な話ではないか？　連中は、ハイウェイのことをどう思っているのだろう？　見たこともない生物の手でつくられた、目的もさだかでない異様な存在？　たぶん、そんな疑問など、彼らの頭に一度も浮かんだことがないにきまっている。

　周波数の如何にかかわらず、一定の連続スペクトル・レヴェルを持つ無秩序な雑音を、〝白色雑音〟と物理学では呼ぶが、ハイウェイをとばす車のタイヤの唸り音は、その白色雑音の一種と言っていい。無意識のうちに――ここでも――自分が一定のパターンをさがして耳を傾けていることに、エリーは気づいた。このところ彼女は、白色雑音の多くの音源に耳を傾けるようになっていた。真夜中に急に唸りだす冷蔵庫のモーター音。浴槽を満たす水の音。キチンのとなりの小さな洗濯室で洗い物をするときの、洗濯機の音。そして、ユカタン沖のコスーメル島にスキューバ・ダイヴィングを楽しみにいったときに聞いた、荒々しい潮騒――あのときは早く仕事にもどりたくて、自分だけ途中で切りあげて帰ってきたのだが。ほとんど毎日のように聞えるそれらの雑音にエリーは耳を傾けて、星間で聞える雑音と比べて一定のパターンが少ないかどうか、無意識のうちに確認しようとしてしまうのだ。

　この八月、エリーはＵＲＳＩ（国際電波連盟）の会合に出席するため、ニューヨークにいってきた。あの街の地下鉄は危険だといろいろな人から聞かされていたのだが、白色雑音の誘惑には勝てなかった。ガタンゴトンというあの音のなかに重要な鍵がある、という気がしたのである。で、会議を半日すっぽかして、三十四丁目からコニーアイランドまで乗り、ま

たマンハッタンにもどってきてから別の線に乗りかえて、いちばん遠いクィーンズまでいってしまった。最後にジャマイカ地区のある駅で乗りかえると、すこし頰を紅潮させ、息を弾ませて——陽気が暑かったせいだと自分では思ったのだが——会場のホテルにもどってきたのだった。ときどき地下鉄の電車が急カーヴにさしかかると車内のライトが消え、トンネルの壁の一連のライトが、青白く輝きながら背後にとびすさってゆく。それはあたかも、巨大な若い星の群のあいだを、超相対論的速度の宇宙船にのって突き抜けていくような気分だった。そして電車が直線に入ると、車内のライトがいっせいに点灯し、電車ならではのさまざまな事物が意識にわりこんでくる——キナくさい臭い、揺れる吊り革、保護用のケージに入っていて黒く塗装されている監視用小型テレビカメラ、ニューヨークの地下鉄網の図案化されたカラーマップ、そして、駅に電車がすべりこむときのかん高いブレーキ音。

自分はちょっと異常なのかもしれない、とエリーはそのとき思ったものだった。が、ファンタジーにふけるのはむかしからの癖なのだ。たしかに、雑音に耳をすますという行為に自分はすこし執着しすぎているかもしれないが、それがとくに悪いことだとも思えないし、他人にも気づかれてはいない。いずれにせよ、これは仕事のためでもある。その気なら、コスーメルにスキューバ・ダイヴィングにでかけたときの費用にしても——無意識のうちにあの潮騒に聴き入ったりしていたわけだから——必要経費として落してもよかったのかもしれない。どうやら自分のなかには本当に、雑音に対する病的な執着が棲みついてしまったようだ。

そんなことを考えているうちに、電車がいつのまにかロックフェラー・センター駅に着い

たのに気づいて、エリーはハッとしたのだった。電車の床に散らかった新聞のあいだを通ってプラットフォームに降り立ったさい、『ニューズ・ポスト』紙の大きな見出しが目に入った――〝ゲリラ、ヨハネスブルグの放送局を占拠〟。

彼らがわたしたちの好意を抱く連中だと、〝自由の戦士〟と呼ばれるんだわ、とエリーはそのとき思った。その反対だと、彼らは〝テロリスト〟と呼ばれる。そして、めったにないことだが、わたしたちが態度をきめかねるときには、連中は一時的に〝ゲリラ〟と呼ばれるのだ。すぐ隣の新聞には、自信に満ちた、健康そうな男の大きな顔写真がのっていて、こういう見出しがついていた――〝世界はいかにして終末を迎えるか。ビリー・ジョー・ランキン師の新刊よりの抜粋。今週号に独占掲載〟。ちらっと一瞥するなり、エリーはその見出しを忘れようとした。雑踏にもまれつつホテルにむかいながら、彼女は思った――準同形電波望遠鏡のデザインに関するフジタの講演にまにあえばいいのだが。

★

絶えまなく聞えるタイヤの唸り音のなかに、異なる時期、異なる道路工事夫の手で行われたアスファルト舗装の継ぎ目をのりこえる鈍い音がまじってくる。かりに〈アーガス計画〉が異星人からのメッセージを受信したとして――と、エリーはハンドルを握りながらあらためて考える――それがきわめて緩慢な速度で発信されたものだったとしたらどうだろう？たとえば、一時間に一ビット、もしくは一週間、いや、十年間に一ビットの情報を送ってき

たとしたら？　きわめて古くから存在する、とてつもなく忍耐強い文明があったとして、われわれ地球人が数秒後、いや、数分後にはパターン認識に飽きてしまうことも知らずに、長々と、呟くように情報を送ってきているとしたら？　そう、たとえば、彼らの寿命は何万年もの長きにわたるとする。そして、ものすごおく、ゆうっくりとしゃべるのがふつうだとしたら、どうだろう？〈アーガス〉には決して理解できまい。だいたい、それほど長命な生物は存在し得るだろうか？　果して宇宙の歴史には、それほど緩慢に生殖する生物が高度の知的文明の水準まで進化し得るだけの時間が存在しただろうか？　化学結合の統計的な崩壊速度や、熱力学の第二法則による肉体の分解原則に照らしても、彼らの生殖のスピードは、われわれ地球人のそれに等しくなるのが自然ではないだろうか？　寿命にしたって、そうだ。それとも、そういう生物は年季を経た厳寒の世界に住んでいて、そこでは分子の衝突もきわめて遅い速度、たとえば一日に一回という速度で起きるのだろうか。エリーは、メタン・アイスの崖の上に、見馴れたデザインの電波発信機がのっているさまを、ぼんやりと想像した。それは、はるか遠方の赤い矮小な太陽の光をかすかに浴びており、真下ではアンモニアの海の波浪がはげしく岸辺に打ちよせている――それはきっと、コスーメルの潮騒の音と区別のつかない白色雑音を発してもいることだろう。

同様に、それとはまったく逆の可能性も考えられる。つまり、宇宙の果てにものすごい早口の小さな生物がいて、彼らは一瞬の遅滞もなくキビキビと動きまわり、英語の本にして百ページに匹敵する量のメッセージを、わずか十億分の一秒間で発信している、という想定だ。

もちろん、こちらの受信機の帯域がごくせまく、きわめてせまい幅の周波数しか聞きとれなかったら、長い時定数を受け容れざるを得なくなる。したがって、異常に急速度の変調は、まず検知不可能だろう。これはフーリエの積分定理の単純な結論であり、ハイゼンベルクの不確定性原理とも密接な関連がある。だから、こちらの聴取可能な帯域が一キロヘルツだとすると、一ミリセコンドよりも速いスピードで変調される信号は聞きとれない。それは、ぶうーんという、曖昧な雑音でしかあるまい。〈アーガス〉の帯域は一ヘルツよりもせまいから、われわれに探知してもらおうと思ったら、発信音はきわめて緩慢に、一秒につき一ビットの情報を送るよりものろい速度で変調を行わなければならない。もっと緩慢な――たとえば、数時間よりも長い――変調は、もしこちらに人間離れした忍耐力があり、なおかつ、それだけの時間にわたって発信源に望遠鏡をむけつづけることができれば、より容易に探知できるだろう。が、宇宙には探査すべき領域があまりにもたくさんあり、探査対象となる星の数は数千億の多きに達する。たぶん、一生探査しつづけても、そのうちの二、三の星を捕捉できるにすぎまい。われわれが生きているうちに全天空を探査しようとして、十億の周波数で全領域をさぐろうとあせるあまり、無口な異星人と早口の異星人の双方の信号をわれわれは聞きのがしているのではないか、という不安が胸に湧いた。

だが、彼らはきっと――と、エリーは思い直す――どんな変調周波数が適当か、われわれよりずっとよく知っているに相違ない。彼らはたぶん、星間通信の経験があるだろうし、新たに誕生しつつある文明と交信した体験もあるだろう。受信する側にとって受け容れやすい

パルス・レートの幅広い帯域があるとしたら、発信する側の文明は、当然その種の帯域を利用しようとするだろう。たとえば、マイクロセコンドで変調するとか、時間単位で変調するとか。その場合の経費はどれくらいになるだろう？　が、彼らの大多数は、地球の基準に照らせばずっと優れた技術水準と厖大なエネルギー源を持っているにちがいないのだ。もし彼らに、本当にわれわれと交信したいという気持があれば、きっと、われわれが受信しやすいような配慮をしてくれるに相違ない。彼らはきっと、多くの異なる周波数で信号を送ってくるはずだ。多くの異なるタイムスケールをも使用してくれることだろう。彼らはきっと、われわれの後進性を承知していて、同情すら覚えているかもしれないではないか。

とすると、これまでに、まだ一度も信号を受けとってないのはなぜなのだろう？　ドラムリンの主張は正しいのだろうか？　宇宙に散らばる何十億という天体は、生命がめばえることもなく、不毛のまま朽ちはてるのだろうか？　知的な生物はやはり、広大無辺な宇宙の片隅にある、このちっぽけな星にしか育たないのだろうか？　しかし、どんなにむりやりそう思いこもうとしても、やはり、だめだった。その種の見方は、従来人間が抱いてきた恐れや自惚れと、あまりにもみごとに符合しすぎるのだ。死後の世界に関する根拠のない教義や、占星術のような疑似科学とあまりにもぴったりと癒着してしまう。それは地球中心の唯我論の現代版であり、この地球こそが宇宙の中心であるという、われわれの祖先たちの心をとらえつづけてきた自惚れの復活にすぎない。ドラムリンの主張は、その種の考え方にもとづく場合にのみ信憑性を持つというべきだろう。とにかく、人間はその種の説を信じたくてたま

CamScannerでスキャン

らないのだ。

　でも、ちょっと待って、とエリーは胸に呟いた。わたしたちは〈アーガス〉システムをつかって、北方の空すらまだ一度も完璧に探査してはいない。あと七、八年探査をつづけて、やはり成果がゼロだったら、そのとき初めて心配してもおそくはないだろう。とにかく、人類はいま初めて、他の天体の生物の探索を可能にしつつあるのだから。もし失敗したら、わたしたちは、この地球上の生命は実に貴重にして稀有な存在であるという、知るに値する事実をある程度確認し得たことになる。また、もし成功したら、わたしたちは、この地球における生命の歴史に変革をもたらし、地球単位の偏狭なエゴイズムを打破することになる。これだけ重大なことがわたしたちの事業の成否にかかっているのなら、わたし個人のちょっとした職業的リスクなど物の数じゃないわ、とエリーは思った。道路の端にサンダーバードをよせると、彼女はいきおいよくUターンし、二度やつぎばやにシフト・アップして、〈アーガス〉本部の方角に猛スピードで引き返しはじめた。依然として道路の両側にならんでいるウサギたちが、最初の曙光を浴びてピンク色に染まりながら、首をかたむけて彼女の出発を見送っていた。

第四章　素数

月、このわれらが哀れな異教の星に、モラビア派信徒は一人もいないのだろうか、そこに文明を植えつけ、キリスト教を広める宣教師はただの一人も訪れていないのだろうか？

——ハーマン・メルヴィル『ホワイト・ジャケット』（一八五〇）

沈黙のみが偉大である。他のすべては弱点にすぎない。

——アルフレッド・ドヴィニー『狼（おおかみ）の死』（一八六四）

冷たい暗黒の真空は、背後にとおざかった。パルスはいまやごくありきたりの黄色い矮星に接近しつつあり、はやくもこの薄明の世界の辺縁に流れこみはじめていた。ここに至るまでに、はるかな空間をとんできた電波は、水素ガスの惑星のかたわらを通過し、氷の月に突入し、生命の前身がうごめきつつある厳寒の星の有機雲を突破して、最盛期をすぎること十億年の惑星の上を通過してきた。いま、パルスが流れこもうとしている星は温暖で、青白く輝き、幾多の星を背にゆっくりと回転していた。

この星には、数量においても種類においても厖大な生命が存在する。高山の凍てついた頂きには獲物にとびつくクモがいるし、海底の峡谷にあいている熱い通気孔には、硫黄をたべる虫がいる。濃密な硫酸中でしか生きられない生命もあれば、濃密な硫酸によって破滅させられる生命もある。酸素によって毒される有機体もあれば、酸素中でしか生きられず、酸素そのものを吸っている有機体もある。

つい最近になって、この惑星にはごく低級な知能をもつ、ある特殊な生命体が繁殖した。彼らは、海底やさほど高くない上空の軌道に前哨地を築いた。彼らは、この小

さな星のありとあらゆる場所に群をなした。夜から昼への移行を示す境界はゆっくりと西に移動し、その動きにともなって、彼らの種に属する数百万の生命体が朝の洗顔の儀式を行う。彼らは外套や腰布を身にまとう。コーヒーや茶やタンポポをこした熱い液体を飲む。自転車や自動車を運転し、牛を駆る。そして、学校の宿題に頭を悩ませ、春の種まきの見通しを立て、世界の運命につかのま思いを致す。

電波にのった最初のパルスは、大気と雲を通過して地上にぶつかり、一部が宇宙にはね返された。なにごともなく回転する〈地球〉に後続のパルスがひっきりなしに到着し、この惑星のみならず、それが属する系全体を押しつつんだ。ここに至るまで、他の天体に遮断された電波のエネルギーはごく微量にとどまった。そのほとんどは苦もなくここまで進んできたのである――黄色い恒星とそのとりまきたちが、それぞれ異なる軌道を描いて暗黒の宇宙に突進しているこの世界に。

夜間勤務をはじめた当直職員は、バレーボールの球の絵の上にプロ・チームの〝マローダーズ〟の名をあしらったダクロンのジャケットを着ていた。管制ビルにちかづいたところで、彼は、夕食をとりにでかける電波天文学者の一団とすれちがった。

「いつまで緑色の小人捜しをつづけりゃ気がすむんだい、あんたたちは?」彼らの一人が声をかけてきた。「スタートしてから、もう五年以上になるだろう、ウィリー?」

陽気にからかう口調の奥には、ある種のトゲが含まれているのが、はっきりと感じとれる。

「こっちにもチャンスをくれんかね、ウィリー」別の男が言った。「クェーサーの真光度観測計画は、成功まちがいなしなんだ。しかし、肝心の望遠鏡使用時間がたったの二パーセントとあっちゃ、いつまでたったって終りそうにないからな」

「ああ、そうだろうとも、ジャック」

「なあ、ウィリー、こちらは宇宙の誕生をふり返ってるんだ。こちらの観測計画だって、重要性では劣らないはずだぞ――こちらの観測対象である宇宙は、まぎれもなく実在している。そちらはどうだね、緑色の小人が一人でも存在するかどうか、きみらのだれもわかっちゃいないんじゃないのかい」

「文句があったらアロウェイ博士に言ってくれよ。きみたちの意見なら喜んで聞くと思うぜ、彼女は」すこし気分を害した口調で、当直職員は言い返した。

彼は管制室に入った。電波探査のプロセスをモニターしている十二のテレビ・スクリーンを、ひとわたり見まわす。〈アーガス〉はヘルクレス座を調べ終えたばかりのところだった。地球から数億光年も離れている、銀河系のはるか彼方にある広大な銀河の群、ヘルクレス銀河団の中心部をのぞいたのである。二万六千光年彼方の、銀河系をめぐる軌道に沿って移動している、重力的にかたまった約三十万個の星の群、M―13にも照準をしぼってみた。二重系のラス・アルゲティイも調べたし、ツェータ・ヘルクレスとラムダ・ヘルクレスも調べた。そのちかくにある、太陽と似かよった星や、異なる星もすべて調べた。概して、肉眼で見え

る星は、地球からせいぜい数百光年の距離しか離れていないのである。彼らは十億もの周波数をつかって、ヘルクレス座内の数百に分割された天空領域を慎重にモニターしてみたのだが、これという信号は聞えなかった。それに先立つ数年間には、へび座、かんむり座、うしかい座、りょうけん座といった、ヘルクレス座の真西にある星座を探査してみたのだが、やはり成果はゼロだった。

望遠鏡の何台かは、依然ヘルクレス座にむけられている。聞きのがしたデータがあったら、拾い直すためだ。残りの望遠鏡はすべて、その隣の天空領域、ヘルクレス座の東の星座にむけられている。いまから数千年前、東地中海に住んでいた人々の目に、その星座は絃(げん)を張った楽器のように見えたらしく、ギリシャ人のカルチャー・ヒーロー、オルフェウスと結びつけられた。その星座は、〝こと座〟と呼ばれている。

管制室における主役は、人間よりもコンピュータである。それは、夜明けから日没まで望遠鏡がこと座を追うようコントロールし、電波光子を収集し、望遠鏡の故障の有無を監視し、人間が利用しやすいようにデータを処理する。だから、たとえ一人でも当直職員を置くこと自体、一種の贅沢(ぜいたく)というものなのだ。キャンディの入った壜(びん)、自動コーヒー販売機、スタンフォード大学人工知能研究所の開発になるトールキンの物語に登場する妖精(ようせい)文字で書かれたようなポスター、あるいは〝ブラックホールはもう見えない〟と書かれたバンパー・ステッカー――それやこれやが散らばるなかを歩いて、ウィリーは中央制御台(コマンド・コンソール)にちかづいた。午後の当直職員が、メモ類をあつめて、夕食をとりにでかけようとしている。ウィリーは陽気に

うなずいた。一日のデータは、琥珀色に輝くマスター・ディスプレイ上に要約されているので、昼間の情況について問い合わせる必要もない。

「ごらんのとおり、大して変ったことはないよ」午後の当直職員が言った。「四十九番目の望遠鏡に、ちょっとした照準ミスがあったようだ――ともかく、そういう感じがしたんだがね」窓にむかって、曖昧に手をふってみせてから、「それと、クェーサーの観測班は、一時間ほど前に百十番台と百二十番台の望遠鏡の使用を切りあげたぜ。どうやら連中、優秀なデータを収集したらしいな」

「ああ、そうらしいね。あの連中ときたら……」

声が急にうすれて制御台に目が吸いよせられた。突然、警告灯が眩く点滅しはじめたのだ。〝強度VS周波数〟と記されたディスプレイ上で、垂直の棒線が急上昇しつつあった。

「おい、見ろよ、単色信号だぜ」

〝強度VS時間〟と記された、別のディスプレイでは、ひとまとまりのパルスが左から右に流れてスクリーンから消えている。

「これは数字だな」ウィリーが、かすれた声で言った。「だれかが数字を放送してるんだ」

「きっと空軍の干渉だろう。四時ごろだったかな、カートランド基地から飛び立ったらしいAWACS（早期警報管制機）を見たもの。あの連中が、おれたちをからかってるんじゃないか」

現在、一定の周波数帯を天文学のためにあけておくという厳粛な協定が存在することはた

しかである。が、それらの周波数がきわめて澄明な通話帯であるという、まさしくその理由から、軍部はときどきそれを使ってみたい誘惑に駆られるらしい。かりに世界大戦が勃発したら、それを最初に探知するのは電波天文学者たちだろう。彼らが日頃観察している宇宙には、地上同調軌道をまわる戦闘管理衛星や損害分析衛星に対する命令電波をはじめ、遠隔の戦略基地に対する発射指令暗号電波等が、たちまちのうちに充満するにちがいないのだ。が、たとえ軍事連絡電波がなかったとしても、十億もの周波数に同時に聴き入る電波天文学者は、なんらかの妨害が入るのを覚悟せざるを得ない。雷鳴、自動車のエンジン点火装置、直接放送衛星等は、すべて電波干渉源になる。が、コンピュータは日頃からそれらの周波数を覚えており、その特徴も心得ているので、それらが聞えても自動的に排除する。もっと曖昧な信号をとらえた場合、コンピュータはより慎重に耳をすまし、前もって把握するようプログラムされている信号リストに合致するかどうかを確認する。ときどき、訓練飛行中の電子諜報航空機――なかにはご丁寧に空とぶ円盤のような形をしたレーダーを背負っているものもある――が上空を通過することがある。と、〈アーガス〉の電波望遠鏡群は突然、まぎれもない知的生命の信号を探知するのだ。が、それはきまって、ほんのちょっぴり地球から離れたところにいる、ある特殊にして憂鬱そうな生命体の信号であることが判明する。つい数カ月前のことだが、ほとんど芸術の域に達した最高水準の電子防諜装置を搭載したF-29Eが、高度八万フィートの上空を通過したところ、百三十一の望遠鏡のすべてが警報を発したこともあった。軍事にうとい天文学者たちの目に、その電波信号は、地球外文明の発信した最初

のメッセージと受けとってもおかしくないくらい複雑なものに見えた。が、彼らはすぐに、最西端の望遠鏡が最東端の望遠鏡より優に一分早くその信号をとらえたことを知った。その結果、はるか宇宙の彼方の文明から発信されたと見えた信号は、地球をとりまく稀薄な大気中をとぶ物体から放たれたものであることが、たちどころに判明したのである。たったいまとらえられた電波は、そのたぐいのものであるにちがいなかった。

＊

右手の五本の指は、デスク上の低い箱のなかの、等間隔にすえられた五つの装置にさしこまれている。この自動マニキュア機が発明されてから、エリーは週に三十分の時間を節約できた。といって、その三十分の有効な使い道があるわけでもなかったのだが。

「ついさっきも、ヤーパラー夫人に話してたんですよ」母親の声が、耳元の受話器から伝わってくる。「ヴェアサイマー夫人が亡くなったので、いまではヤーパラーさんが隣のベッドに移ってきたんですけどね。わたしは自慢話なんか性に合わないんだけど、あなたが素晴らしい仕事をしてくれてるおかげで、とても鼻が高いわ」

「うれしいわ、お母さん」

エリーは爪の艶をしらべて、もう一分ほどつづけたほうがよさそうだ、と判断した。いや、一分半くらいにしたほうがいいかもしれない。

「わたしはね、あなたの四年生のときのことを考えていたの——覚えている？　土砂降りの

雨の日に、あなたが学校にいきたがらなかったときのことを? 急に体調が悪くなったので欠席しましたという手紙をあす書いてくれ、とあなたは言ったわね。わたしは断わったわ、こう言って——〝ねえ、エリー、容姿の美しさを別にすると、この世でいちばん大切なのは教育なのよ。容姿は自分の努力で変えようがないけれど、教育は自分の努力しだいでどうにでもなるんですもの。だから、学校にいきなさい。きょうの授業でどんなに大切なことをおそわるか、わからないじゃないの〟。そうでしょう?」

「ええ、お母さん」

「わたしが言いたいのは、あのときわたしはそう言ったでしょう、ということなの」

「ええ、よく覚えているわ、お母さん」

四本の指の爪は完璧（かんぺき）な艶を放っていたが、親指の爪はまだ鈍くくすんでいた。

「それでわたし、レインコートとゴム長をだしてあげたわね——あれは黄色いコートで、きちんとボタンをはめると、あなた、とても可愛（かわい）かったわ——それから、むりやり学校につれてったのよ。ヴァイスブロード先生の数学の授業で、あなたが質問に答えられなかったのは、その日だったんじゃなかった? あなたは自分に腹を立てて、ちかくの大学の図書館に直行したわね。そして、その問題に関する本を読みあさって、ヴァイスブロード先生よりも詳しくなってしまった。あの先生、とても感心してたっけ。あとでわたしに話してくれたくらいだから」

「お母さんに? 知らなかったわ。いつヴァイスブロード先生と話したりしたの?」

「PTAの席よ。先生は言ったわ、〝あなたのお嬢さんは実にガッツがありますな〟って。ともかく、そういう趣旨のことをね。〝わたしに叱られたのがくやしかったらしくて、本物のエキスパートになってしまいましたよ〟ってね。エキスパート、って言葉をつかったんですものね。あのとき、あなたにも話したと思うけど」

エリーは両足をデスクの引出しにのせ、自動マニキュア機にさしこんだ指で体の安定を保ちながら回転椅子にもたれかかっていた。ブザーが鳴ったのは、耳でとらえるよりさきに、感じでわかった。彼女はやおら立ちあがった。

「急用ができたわ、お母さん」

「この話は前にしたことがあると思うけどねえ。あなたはわたしの言うことに耳を貸さないんだもの。ヴァイスブロード先生はとてもいい人でしたよ。あの人のいい面が、あなたには見えなかったんです」

「悪いけど、切らせてもらうわよ、お母さん。疑似信号らしきものを、とらえたようなの」

「疑似信号？」

「ほら、宇宙からのメッセージかもしれない電波よ。前にも話したでしょう」

「やっぱりね。あなたも、わたしがそちらの言うことを聞いてないと思ってるのね。この母にしてこの娘あり、だわね」

「じゃあね、お母さん」

「その用事がすみしだいまた電話をくれると約束してくれれば、切ってもいいわ」

「わかったわ、お母さん。約束する」

いつもながら、母親と話していて、不満と孤独を感じとると、エリーは、早く会話を切りあげたい、どこかに逃げだしたい、という衝動に駆られる。そういう自分が、われながら、たまらなくいやだった。

★

エリーはきびきびと管制室に入って、中央制御台にちかよった。

「こんばんは、ウィリー、スティーヴ。じゃあ、さっそくデータを見せてちょうだい。けっこう。で、振幅プロットはどこ？　いいわね。干渉計の位置は？　これも合格。あのゾーンには、ちかくに星があるのかしら？　まあ、あれはこと座のα星、ヴェガじゃないの。ずいぶんご近所の星ね」

話しながらも彼女の指は、せわしげにキーボードを叩いていた。

「ヴェガは地球からわずか二十六光年しか離れてないのよ。まえにも観測したことがあるけど、成果はなかったわ。初めてアレシボ天文台のスタッフに加わったとき、わたし自身が観測したんですもの。で、電波の絶対強度は？　驚いたわね。流束密度の単位で言うと、数百ジャンスキーか。これだったら、ふつうのFMラジオでもとらえられそうよ。

ようし、と。ヴェガにごくちかいところで疑似電波をとらえたわけね。周波数は約九・二ギガヘルツで、単色信号、つまり、非常に狭い波長領域の電磁波とは言い切れない。帯域幅

は数百ヘルツ。直線偏移していて、二つの振幅に限られたパルスを発信している、と」

彼女がキーで下す指令に応じて、スクリーンには全電波望遠鏡の配列が映しだされた。

「この電波は百十六の望遠鏡でとらえられているわけね。とすると、一台か二台の望遠鏡の故障のせいではない、と。けっこう。時間基線はたっぷりあるはずだわ。その電波は星と一緒に動いてる？　それとも、電子諜報衛星（ちょうほうえいせい）や飛行機が放っている可能性もあるかしら？」

「電波が恒星移動していることはたしかです、アロウェイ博士」

「けっこう。だとすると、かなり信憑性（しんぴょうせい）が高くなるわね。この地上で発信されたものではないし、モルニア軌道にある人工衛星が発信したものでもない。もっとも、この点は確認が必要だわ。ウィリー、もし手があいたらNORAD（北米防空司令部）に電話して、人工衛星が発信源である可能性が皆無かどうか、問いただしてちょうだい。もし人工衛星を除外できるとすると、残る可能性は二つしかないわ。だれかの悪戯（いたずら）か、それとも、とうとう宇宙の彼方（かなた）の知的生物がわたしたちにメッセージを送ってきたか。スティーヴ、補助手動装置をつかってちょうだい。いくつかの望遠鏡をチェックして、悪戯の可能性があるかどうかたしかめてみて。信号の強度がかなり大きいから、確認できるはずだわね。とにかく、わたしたちのやり方がまちがっていることを教えようとして、だれかが手のこんだ悪戯をしかけたという可能性もあるんだから」

そのころには、アーガス・コンピュータの警報に接した何人かの科学者や技師たちが、中央制御台の周囲に集まっていた。どの顔にも、曖昧（あいまい）な笑みが浮かんでいた。他（ほか）の天体から本

当にメッセージが届いたのだと考えている者は、まだ一人もいなかった。が、日頃慣れきった退屈な日課に変化が生じたという感覚、いわば、〝きょうは学校の授業がお休みだぞ〟といった解放感のようなものが彼らの顔には浮かんでいたし、淡い期待すら一様に抱いてもいるようだった。

彼らの存在に気づいて、エリーが言った。「あなたがたのなかで、地球外知的生物からの発信以外の可能性を思いついた人がいたら、説明を聞かせてちょうだい」

「発信源がヴェガだとは、ちょっと考えられないんですがね、アロウェイ博士」彼らのなかの一人が言った。「ヴェガ系は、誕生してからまだ数億年しかたっていません。その惑星だって、まだ形成過程にあるんです。たったそれだけのあいだに、知的生物が進化し得たはずはありませんよ。だから、発信源はもっと遠い星、ないし銀河じゃないですか」

「でも、そうだとすると、発信には途方もないエネルギーを必要とすることになるからね」騒ぎを見にきたクェーサー観測グループの一人が口をはさんだ。「これは即刻、固有運動の厳密な調査を開始する必要があるな、電波源がヴェガとともに移動しているかどうか確認するために」

「もちろん、固有運動に関するあなたの指摘は正しいわ、ジャック」エリーは言った。「でも、もう一つ可能性があってよ。このメッセージを送ってきた連中は、ヴェガ系で成長したんじゃないのかもしれないわ。たまたまヴェガを訪問しているのだ、とも考えられるでしょう」

「いや、それもどうですかね。ヴェガ系には四六時中岩石が降り注いでいるはずだ。あれは、ついに完成され得なかった太陽系、もしくは、いまだ初期形成過程にある太陽系のようなものでしょう。その知的生物なるものがかなり長期にわたって滞在したら、彼らの宇宙船は降り注ぐ岩石に破壊されてしまうでしょうな」

「だから、彼らはきっと、つい最近ヴェガ系に到着したばかりなのよ。あるいは、降り注ぐ隕石を溶解させてしまう能力を持っているのかもしれない。大きな隕石が衝突軌道にのると、うまく回避するのかもしれないしね。じゃなかったら、リング面じゃなく極軌道にいるので、隕石と衝突する可能性が限られているのかもしれないわ。とにかく、説明はいくらでもつくわよ。でも、あなたの最初の指摘は正しいわ。電波源がヴェガ系にあるのかどうか、あれこれ臆測する必要はないのよね。それをはっきり確認することが可能なんですもの。固有運動の調査には、どのくらい時間がかかるかしら？　それはそうとスティーヴ、本当ならあなたの勤務時間は終ったはずでしょう。せめてコンスエラに、夕食には遅れそうだと伝えておいたほうがいいんじゃない」

　そのとき、隣のコンソールで電話していたウィリーが、自信なげな笑みを浮かべながら言った。「いま、NORADのブレイントリー少佐に話が通じました。こういう信号を発信する衛星は存在しないはずだ、と断言しています。とくに、九ギガヘルツで発信するような衛星はね。もっとも、これはわれわれがあちらに問い合わせるたびに返ってくるセリフですが。とにかく、ヴェガの赤緯と上昇角度に重なる位置を航行している宇宙船は一隻もない、と言

ってます」
「隠密衛星についてはどうかしら？」
低いレーダー断面積を持つ〝隠密〟衛星は、すでにかなりの数量が打ち上げられている。それらはいざというときまで秘密裡に、どこからも探知されずに地球軌道をまわるよう設計されており、核戦争が勃発して第一線の軍事諜報衛星が全滅したさいに、最後の切り札としてミサイル発射の探知や軍事連絡に従事することになっている。ときどき、この隠密衛星が天文台の大型レーダー・システムにひっかかることがあるのだ。と、すべての大国が申し合わせたようにそんな衛星など関知しないと言いはるので、すわ地球外知的生物の到来か、と色めきたつむきがでてくるわけである。西暦二〇〇一年、すなわちキリストが再臨すると言われる〝千年王国〟の接近とともに、UFOの熱狂的信奉者たちが、ふたたび勢いづいているのだ。
「干渉計による計測の結果、モルニア・タイプの軌道をまわる衛星という可能性は排除されました、アロウェイ博士」
「ますます有望ね、これは。じゃあ、動くパルスをじっくり見てみましょう。これが二進法だとすると、だれか十進法に置きかえてくれた？ 数列はどうなのかしら？ いいわ、頭のなかで並べてみましょう……59、61、67、……71……ねえ——これはみんな素数じゃない？」
期せずして、管制室内にざわめきが走った。エリーの顔にも一瞬、深い感動のようなもの

がひらめいたが、すぐに厳粛な表情に変った。それは、興奮のあまり自分を見失うまいとする自戒、すこしでも非科学的な、愚かしい感情を露呈すまいとする決意でもあっただろう。

「じゃあ、判明したことを手短かに要約してみましょう。なるべく簡潔に列挙していくから、なにか言い洩らしたことがあったら注意してね。まず、わたしたちはとても強力な、必ずしも単色ではない信号をとらえた。この信号の帯域のすぐ外側には、雑音以外のものを伝えている。周波数は存在しない。この信号は、電波望遠鏡から発信されているかのように直線偏移している。周波数は九ギガヘルツで、銀河の電波雑音中、最小のそれにちかい。相当遠方の者に受信してほしいと願う者が、いちばん用いそうな周波数である。電波源の恒星運動は確認できたので、どこか地上から発信されたものではなく、天空の星のあいだにあって、移動している天体から発信されたものと思われる。この電波源の位置に合致する天空領域にある人工衛星は——アメリカのものであると、他国のものであるとを問わず——存在しない、とNORADは言明している。いずれにせよ、電波源が地球軌道にないことは、干渉計による計測が裏がきしている。

自動モード以外のデータはスティーヴがしらべてくれたけれども、やはり、だれか歪んだユーモアのセンスの主がコンピュータにしかけたプログラムとは思われない。こちらがとらえている天空領域にはヴェガが含まれている。これはA－ゼロ主系列矮星で、必ずしも太陽に似てはいないが、わずか二十六光年の彼方にあって、氷塊や岩石から成る典型的なリングにとりまかれている。惑星の存在は知られてないとはいえ、わたしたちのまだ探知してない

惑星がヴェガの周囲にある可能性は否定できない。この電波源が、地球とヴェガをむすぶ直線の背後にあるかどうかを調べるために、わたしたちは固有運動の調査を開始する。その結果が判明するのは――どのくらいになるかしらね？――うちの干渉計だけに頼れば数週間後、もっと長い基線の干渉計計測を行えば、数時間後になる。

最後に、わたしたちに伝達されようとしているのは、素数、すなわち、一か、その数字自体でしか割り切れない整数の長い数列であるらしい。素数のみを発信するような、天体物理学的なプロセスは存在しそうにない。したがって――もちろん、慎重の上にも慎重を期さなければならないけれども――現在わたしたちが参照できるいかなる基準に照らしても、これは本物であるように思われる。

ただし、これが、ヴェガ周辺の惑星で進化した生物から発信されたものとする想定には、問題がある。なぜなら、その場合、彼らはすさまじい早さで進化をとげたことになるから。ヴェガは、誕生してからまだ四億年しかたっていない。わたしたちのレヴェルにもっともちかい文明が芽生えるのに適した場所とは思えない。したがって、固有運動の調査がきわめて重要になる――だいたい以上になるでしょうけど、だれかのでっちあげである可能性についても、もうすこし厳密に調べてみたいわ」

「あれを見てごらん」背後のほうにいた、クェーサー観測班の天文学者の一人が言った。彼がながめている西方の地平線は淡いピンク色の光に染まって、太陽がいま沈んだばかりであることを示している。「もう一、二時間もすれば、ヴェガも沈むはずだね。たぶんオースト

ラリアでは、ちょうど空にのぼったところじゃないのかな。シドニーを呼びだして、彼らにも、われわれと同時に観測してもらってはどうだろう」

「名案だわ。あっちでは、まだ午後の半ばでしょうからね。一緒に観測すれば、固有運動の調査のための十分な基線が得られるでしょうし。わたしのいまの要約のプリントアウトをちょうだい。オフィスから、オーストラリアにファックスで送ってみるから」

中央制御台の周囲にむらがった人の輪から、エリーはつとめて落ち着きはらった仕草で離れて、自分のオフィスにむかった。そうっと、慎重にドアを後ろ手にしめてから、彼女はささやくように呟いた。「びっくり仰天、玉手箱だわ！」

★

「イアン・ブロードリックにつないでくださる？　ええ、こちらは〈アーガス計画〉のエリナ・アロウェイ。ちょっと緊急な用件なの。ありがとう、じゃあ、このまま待つわ……もしもし、イアン？　また空振りかもしれないんだけど、疑似信号をつかまえたの。そちらでもチェックしていただけないかと思って。周波数は九ギガヘルツで、数百ヘルツの帯域を持ってるわ。いまファックスで基本データを送ってますから……そちらのアンテナには、九ギガヘルツにも感応できる回路がすでに設けてあるのね？　それはツいてるわ……ええ、ヴェガはちょうど視野の真ん中にあるの。こちらが受信しているのは、どうも素数のパルスみたいなのよ……ええ、本当に。わかったわ、このまま待ってます」

こういうとき、地球の天文学界はなんて遅れているのだろう、とあらためて思ってしまう。天文学界ではまだ、コンピュータのデータ・ベース・システムがオン・ラインでつながれていないのだ。非同期式のファックス網だけでも実現すれば、その価値は……。

「ねえ、イアン、望遠鏡が回転を終えるあいだに、振幅＝時間プロットを見てもらえないかしら？ 低振幅パルスを点、高振幅パルスをダッシュに見立てるのよ。そうすると……そうなのよ、この三十分というもの、こちらではそのパターンをずっと見ているの……ええ、たぶんね。とにかく、過去五年間で最高に有望な線よ、これは。でも、わたし、一九七四年頃、ソ連がビッグ・バード衛星事件ですっかりミソをつけたこと、いまだに頭の片隅に残ってるの。たしかあれは、アメリカがビッグ・バード衛星のレーダーをつかって、巡航ミサイルの誘導のために、ソ連の領土の高度測量を行っていたのね……ええ、地勢測量をしていたわけよ。で、ソ連はその電波を全方向性アンテナでとらえていたんだわ。連中には、天空のどこからその信号がやってくるのかわからなかったらしいのね。わかっていたのはただ一つ、毎朝ほぼ同じ時刻に、同じパターンのパルスがとらえられるということ。軍部では軍事通信用ではない、と請け合うので、これはてっきり地球外知的生物からの信号だろう、とソ連の天文学者たちは思いこんでしまったわけ……大丈夫よ、こんどのは衛星から発信されたものではないということを、確認ずみだから。

ねえイアン、ご面倒でもヴェガがそちらの空にある限り、ずっと追っていただけないかしら？ 超長基線干渉計の計測結果については、またあとで報告するわ。わたし、経度上ほぼ

等間隔に配置されている他の国の電波天文台が、順次ヴェガを追ってくれるようにたのんでみるつもりなの。ええ、ヴェガがまたこのニューメキシコの空に現われるまでね……ただ、中国に直接電話をかけられるかどうかが、わからないの。国際天文学連合の電報を打ってみようと思ってるけど……けっこうよ。本当にお世話さま、ありがとう、イアン」

この施設全体の管制を行っているのは、人間よりもコンピュータなのだから、そこが〝管制室〟と呼ばれているのは皮肉もいいところなのだが、エリーはいま、その部屋の戸口に立ちどまって、部下や同僚たちをながめた。一群の科学者たちは、表示されるデータに目をこらしながら熱心に論じ合い、信号の正体について軽い冗談を交わし合っている。この連中はとくに洗練された人たちじゃないわ、とエリーは思った。そう、彼らは俗に言う〝二枚目〟でもない。でも、いわく言いがたい魅力が彼らにはある。それぞれ、自己の専門分野では卓越した能力を持っているし、とりわけ、なにかを発見する能力に秀でており、自分の仕事に完全に没頭しているのだ。エリーがちかづいていくと、みないっせいに沈黙して、期待に満ちた眼差しをむけてくる。送られてくる数字は、いまや自動的に二進法から十進法に変換されていた……881、883、887、907……みな、例外なく素数である。

「ウィリー、世界地図をもってきてちょうだい。それから、マサチューセッツ州ケンブリッジのマーク・アウアバークを電話で呼びだして。彼はたぶん、自宅にいるわ。わたしがこれから書くメッセージを彼に伝えて、すべての天文台、とくに電波天文台には洩れなく、国際天文学連合の電報で知らせてもらうの。北京電波天文台の電話番号も、彼から聞きだしても

らえないかしら。それがぜんぶすんだら、大統領科学顧問を電話で呼びだして」
「アメリカ科学財団はとばすんですか？」
「アウアパークとの連絡がすんだら、大統領科学顧問を呼びだしてちょうだい」
騒然たる会話にまじって、一声、歓喜の叫び声が聞えたような気が、エリーはした。

★

自転車で、小型トラックで、徒歩の郵便配達夫の手で、あるいは電話で、世界中の天文学センターに一つのメッセージが配達された。いくつかの主要な電波天文台には——たとえば、中国、インド、ソ連、オランダ等——メッセージはテレタイプで電送された。カタカタという音とともに打ちだされた文面に目をとめた宿直警備員や、たまたまそこを通りかかった天文学者は、さっとそのプリントアウトを引きちぎると、好奇の色も露わに隣のオフィスに持って入った。メッセージにはこう書かれていた——。

〈アーガス〉は、系統的天空探査により、赤経一八時三四分、赤緯プラス三八度四一分の位置に、変則的な間欠電波源を発見。周波数九・二四一七六六八四ギガヘルツ、帯域幅約四三〇ヘルツ。二重モード振幅の密度は、約一七四ジャンスキーと一七九ジャンスキー。捕捉した振幅は、素数の数列を記号化したものと判明。全経度における緊急観測を乞う。共同観測の詳細はコレクト・コール電話にて問い合わされたい。

〈アーガス計画〉統轄者
E・アロウェイ　アメリカ合衆国ニューメキシコ州ソコロ

CamScannerでスキャン

第五章　数列の解読

CamScannerでスキャン

ああ、輝ける天使よ、もう一度口をきいておくれ

――ウィリアム・シェイクスピア『ロメオとジュリエット』

CamScannerでスキャン

来賓用の宿舎は、いまやSETI関係の学者の中からとくに選ばれた名士たちで満室というより、あふれ返らんばかりの騒ぎだった。ワシントンから公式の派遣団が到着しはじめたときにはもはや〈アーガス〉に空き部屋はなく、ちかくのソコロのモーテルに急遽振り分けることになった。唯一の例外は、大統領科学顧問のケネス・ダヘーアだった。彼は、信号発見の翌日、エリーの緊急電話に応えて駆けつけてきたのである。それから数日間にわたって、各種の機関の代表が続々とつめかけてきた――アメリカ科学財団、NASA、国防省、大統領科学顧問委員会、国家安全保障会議、そして国家安全局。どの機関に属しているのか定かでない官吏も二、三人いた。

彼らのうちの何人かは、前夜、第一〇一望遠鏡の下に集まり、ピタッと照準の合ったヴェガを初めてながめた。ヴェガのほうでも、その人気に応えるようにキラキラと青白く瞬いて、美しい姿をさらしてみせた。

「この星なら前にも見たことがあるけど、名前までは知らなかったね」政府職員の一人が言った。たしかにヴェガは、天空の他の星よりひときわ明るく見えるが、それ以外に特徴があ

るわけではない。夜空に瞬く何千もの裸の目の一つにすぎない。

発見された電波パルスの性質、起源、考えられる重要性について、科学者たちは連日熱心な討議をつづけていた。つめかけてくるお役人たちのなかでも比較的下位の連中に対して情況説明を行う役目は、〈アーガス計画〉の広報課が負った。地球外知的生物に対する関心はもともと広範囲にわたっているので、〈アーガス計画〉の広報課はかなりの人員を擁しているのである。とにかく、だれかが新たに到着するたびに、個人的情況説明が必要になった。幹部クラスの政府職員に情況説明を行うのは、エリーの役目だった。しかも、彼女はそれと並行して、科学者たちの討議にも付き合わなければならないし、同僚たちが活発に提起する懐疑的な意見にも対応しなければならない。それやこれやで疲労の極に達しつつあった。信号の発見以来、朝まで熟睡した晩が一晩もなかったのだから、むりもあるまい。

最初、彼女たちは発見の事実をセンセーショナルに扱わないようにつとめた。それが地球外の天体からのメッセージだときまったわけではない以上、当然の配慮だったと言えよう。急いで発表して早とちりしたり事実を誤認したりしたら、とんでもないことになる。もっと心配なのは、データ分析にも悪影響を及ぼしかねない、ということだろう。マスコミの好餌になったら最後、科学が打撃をこうむるのは必至なのだ。〈アーガス〉と同じく、ワシントンもすべてを秘密にしたがった。が、科学者たちはそれぞれ自分の家族に打ち明けていたし、国際天文学連合の電報も世界中をかけめぐっている。それに、ヨーロッパ、アメリカ、日本、各地の天文学界は依然として初歩的なデータ・ベース・システムを採用しているので、発見

のニュースがいまなお伝送されているところも多かった。

なんらかの新発見があった場合、それを一般に公表するためのプランは前もって策定されていたとはいえ、こんどの事態はほとんど不意打ちも同然だったと言っていい。で、彼らはつとめてさりげない声明を起草し、どうしても必要な場合にかぎって発表した。それでも一般国民のあいだに大きなセンセーションが湧き起ったことは言うまでもない。

〈アーガス〉側ではマスコミの忍耐を要請したが、いずれ国中の報道機関の取材攻勢にさらされるのは時間の問題だろう、ということは覚悟していた。いまのところ、受信中の信号にはなんの情報も含まれていない、ただ退屈な素数がくり返し送られてくるだけだ、と彼らは説明して、マスコミ陣が〈アーガス〉の施設に襲来しないよう牽制した。が、マスコミは、刺激的な続報が公表されないことに苛立ちを見せた。「いいですか、〝素数とはなにか〟というテーマだけでも、あと追い記事がいくらでも書けるんですからね」と、電話でエリーに訴えた記者もいた。

そのうち、テレビ局の撮影チームが、チャーターした軽飛行機やヘリコプターで〈アーガス〉の上を低空でとびまわるようになった。彼らがときどき放つ強力な干渉電波は、〈アーガス〉の望遠鏡によって容易に捕捉された。深夜、宿舎のモーテルに帰った政府の職員に夜討ちをかける記者もいた。もっと大胆な連中になると、〈アーガス〉の構内に無断侵入を図ろうとしたが、その手段も多彩だった——ビーチ・バギー、モーター・サイクル等は序の口で、馬にのって侵入を図った者までいた。あまりのことに、エリーは、鉄条網の強度につい

て再確認を余儀なくされたほどである。

ところでダヘーアは、到着直後に、いまやエリーの日課ともなった情況報告のごく初期の内容のものを聞かされていた——信号の驚くべき強さ、その射出源がほぼヴェガの位置と重なっていること、そしてパルスの特質。

「ぼくは一応、大統領の科学顧問ということになってるけど」と、ダヘーアは言った。「本職は生物学者だからね。なるべくわかりやすく説明してほしいんだ。その電波源がヴェガの位置、つまり、二十六光年彼方にあるとすると、メッセージが発信されたのは二十六年前だということはわかる。きっと一九六〇年代に、とがった耳を持った珍妙な形態の連中が、自分たちは素数が好きなんだということを、われわれ地球人に教えたかったんじゃないかね。でも、素数そのものは、それほど難解じゃない。とくに自慢に値するものでもないんだろう。とすると、連中はむしろ、遅れているわれわれ地球人に算数の講義でもしてやろうというつもりなのかな。われわれとしては、馬鹿にするな、と憤慨するべきなのかもしれんね」

「というより、こう考えたらどうかしら」エリーは微笑しながら言った。「いま送られてきている一連の素数は、標識信号なのよ。予告信号とでも言えばいいかしら。目的は、わたしたち地球人の注意を引くことにあるんだわ。奇妙なパターンのパルスを放つ電波源は、クェーサー、パルサー、電波銀河その他いろいろあるけれど、素数となると、とても特殊だし人工的よね。たとえば、2以外の偶数はどれをとっても素数ではないんだし。放射プラズマや爆発中の銀河が、こういう整然とした数学的信号を送ってくるとは考えられないわ。素数は

やっぱり、わたしたちの関心を引くための信号なのよ」

「でも、そうだとしたら、なんのためにわれわれの関心を引こうとしているんだろう？」

「さあ、それはわからないけど。でも、この問題では性急さは禁物よ。ひょっとすると、もうすこしたつと素数の送信が終って、なにか別のもの、もっと内容の濃い本物のメッセージが送られてくるのかもしれないし。とにかく、辛抱強く耳をすましつづけることだと思うわ」

マスコミむけの説明で面倒なのもその点、つまり、現在受信中の信号には実質的な内容が皆無、という点だった。パルスは依然として数百の素数を順に伝え、また最初にもどって、単純な二進法による数値をくり返してゆく——1、2、3、5、7、11、13、17、19、23、29、31……9は3で（それともちろん、1と9で）割り切れるから素数ではないんです、とエリーは記者たちに説明する。10も5と2で（それと10と1で）割り切れるので、素数ではない。11はその点、1と11でしか割り切れないので素数なのだ。

それにしても、どうして素数ばかりが送信されてくるのだろう？　エリーは、いわゆる〝学者馬鹿〟を連想した。一般的な社会常識や言語能力にはまったく欠けるくせに、気の遠くなるような算術を苦もなくやってのける手合いが、よくいるではないか。そう、一瞬考えただけで、西暦一一九七七年六月一日は何曜日か、すらっと言ってのけるような人物が。案外、この信号にはなんの意味もないのかもしれない。彼らはただ、そうしたいから、それが好きだから、素数を送信しているだけのことなのかもしれない。

信号を受信してからまだ数日しかたっていないのは事実だが、エリーは興奮と同時に深い失望をも覚えていた。これだけの長期間探査をつづけた末に、とうとう自分たちはある種の信号を捕捉した。ところがその内容たるや、拍子抜けするほど薄っぺらで空疎だったのだ。自分としては、〝エンサイクロペディア・ギャラクティカ（銀河百科事典）〟とでも呼べるような、内容の濃いメッセージを期待していたのに。

でも、わたしたちはこの数十年間に、誕生以来数十億年を経ている星のひしめく銀河にあって、どうにか電波天文学と呼べるものをつくりあげたにすぎないんだわ、とエリーは思い直した。地球と同程度の文明が栄える星から信号を受信する確率は、ごくごく僅少であるはずだ。彼らがすこしでもわれわれより遅れていたら、そもそもわれわれと交信する技術能力を持ってはいないだろう。だから、信号を送ってくる者がいるとしたら、それは地球よりずっと進んだ文明に属しているにちがいない。彼らはひょっとすると、メロディアスで完璧な投影フーガすら作曲してのけられるだろう。それに応える対位旋律は、終末部から逆に書かれたテーマでなければなるまい。それはとうていわたしたちにはむりだわ、とエリーは思った。それはもちろん自分の手に余ることだし、ある種の天才を必要とすることであって、人間の平均的な能力の範疇をこえている。過去にはバッハとモーツァルトぐらいが、どうにか鑑賞に値する成果をあげているにすぎないのだから。

もっと大胆に、自分とは比較にならないほど聡明な人物の頭の働き具合を想像してみよう、とエリーは思った。そう、たとえばドラムリンや、つい最近ノーベル賞を獲得した若いナイ

ジェリアの物理学者エダよりも頭のいい人物がいるとしたら、どういう思考法をするだろう？　でも、だめ、やはり想像がつかない。そういう連中なら、〝フェルマーの最終定理〟や〝ゴールドバッハの予想〟をわずか数行の方程式で提示できるかもしれない。地球人にとっては難解至極でも、彼らにとっては造作もないという問題も、多々あることだろう。それは想像がつく。が、彼らの心中まではどうしても推しはかれない。人間よりはるかに聡明な生物とは、いったいどんな考え方をするのか、まるで想像がつかないのだ。が、それはむりもない。当然ではないか。想像できると考えるのは自惚れというものだ。それは、およそ前例のない原色を見分けたり、数百人の知人たちを個々の体臭だけで識別したりすることに等しいのだから……そういう世界を論じることはできても、体験することは不可能なのだ。とにかく、自分よりずっと知能水準の高い存在の行動様式を理解するのは、至難の業にきまっている。でも、それにしても、かりにそうだとしても——なぜ素数だけしか送ってこないのだろう？

★

〈アーガス〉の電波天文学者たちは、この数日間に少なからぬ成果をあげていた。ヴェガは既知の運動をしている——地球に接近、もしくは離れる速度にしても、あるいは天空を斜めに横切ってもっと遠方の星の方角に移動する速度にしても、すでに解明されている。その事実をもとに、〈アーガス〉の電波望遠鏡はウエストヴァージニアとオーストラリアの電波天

文台との連携によって、問題の電波源がヴェガと連動しているという事実を確認したのである。可能な限り厳密に計算したところ、信号はヴェガのある天空領域から送信されており、ヴェガ特有の特徴的な動きをなぞっていたのだ。これが途方もない規模の擬装工作でない限り、素数のパルスの発信源がヴェガ系にあることはほぼ確実となった。おそらくヴェガ周辺の惑星にいると思われる発信者の移動にともなう、それ以上のドップラー効果は認められなかった。発信者は、軌道運動に起因する観測の困難さをそれで償ってくれたのだろう。それは宇宙規模の好意だったのかもしれない。

「こいつは未曾有の、素晴らしい発見だが、うちの組織のでる幕じゃなさそうだな」ワシントンに帰るという、国防省高等研究所の所員が言った。

エリーは信号が発見された直後に、いくつかの電波望遠鏡をヴェガにむけて、他の周波数をさぐらせたのだった。と、案の定、一四二〇メガヘルツの水素線、一六六七メガヘルツの水酸基線、その他多くの周波数で、同じ信号、同じ単調な素数の数列が発信されていることが明らかになった。ヴェガは、電波スペクトルのすべての領域にわたって、さながら電磁波のオーケストラを奏でるように、素数を発信しているのである。

「どうも合点がゆかんな」ベルトのバックルをいじりながら、ドラムリンが言った。「こんなにはっきりした信号を聞き逃していたはずはないんだが。ヴェガなら、だれもが観測していたんだからな。もう何年も前から。アロウェイ君にしたって、もう十年も前にアレシボでヴェガを観測していたはずだ。先週の火曜日になって、ヴェガは突然素数を発信しはじめた

というのかね？　なぜ、いまなんだ？　いまという時期の、どこに特別な意味があるんだね？　〈アーガス〉が探査を開始してからわずか数年後に発信しはじめたというのは、なぜなんだね？」

「きっと、彼らの発信機はこの数世紀間故障していたんでしょう」ヴァレリアンが答えた。「それが、ここにきてやっと直ったのかもしれない。あるいは、この地球むけには百万年ごとに一年間発信するというきまりになっているのかもしれない。生物が存在する可能性のある天体は、ほかにもたくさんあるんだからね。たぶん、この近所に住んでる子供はわれわれだけじゃない、ってことなんだ」

が、ドラムリンは明らかに納得できない様子で、首をふってみせた。

策士的な性格とはおよそ正反対のヴァレリアンではあったが、いまドラムリンの放った最後の問いかけには、ある種の底意がひそんでいるような気がしてならなかった。これは〈アーガス〉のスタッフが、地球外知的生物探査活動の打切りを阻止するために仕組んだ、一か八かの大芝居なんじゃないのかね？　ドラムリンはそう言いたかったのではなかろうか？　が、そんな大芝居など、どう逆立ちしたって打てるはずもない。ヴァレリアンは首をふった。そのときかたわらを通りすぎたダヘーアの目には、ＳＥＴＩの二人の権威が黙然とむき合ったまま首をふっているさまが映ったのだった。

いま〈アーガス〉に集まっている科学者たちと官僚たちのあいだには、根本的な見解の対立から生じる一種の緊張関係、相互不信の芽が生じはじめていたと言っていい。ある電気技

師は、得意の専門用語をつかって、それを"電気抵抗の不整合"と呼んだ。官僚側に言わせると、科学者たちはあまりにも思弁的で、口が軽く、定量的すぎる。科学者側に言わせると、官僚たちはあまりにも想像力に欠け、口が重く、定性的すぎる、ということになる。エリーとダヘーアはなんとかそのギャップを埋めようと試みたが、架橋はともすれば下流に流されがちだった。

その夜は至るところにタバコの吸い殻やコーヒー・カップが散らばっていた。ラフな装いの科学者たちや、軽いスーツ姿のワシントンの官僚たち、それに幹部クラスの少数の軍人たちが、管制室、講義室、小講堂等を埋め、入りきれない連中が戸外の庭にも屯していた。そこでは星明かりやタバコの火に照らされながら、熱心な討議がつづけられていた。が、彼らの神経は一様にささくれだち、焦燥の色が顔に現われはじめていた。

★

「アロウェイ博士、こちらはC^3I担当国防次官補、マイケル・キッツ氏です」

キッツを紹介し、自分は彼の一歩背後に退いたダヘーア。彼はいったいなにを言外に伝えようとしているのだろう？　ともかく、相矛盾した感情がないまざった心理状態にあるのはたしかなようだ。もろもろの感情を分別によって自縛しようとしているのだろうか？　どうやらこちらに、忍耐を要求しているらしい。このわたしをそれほど短気な人間とダヘーアは思っているのだろうか、とエリーは胸に呟いた。C^3Iは、"シー・キューブド・アイ"と発

音し、〝通信、司令、統制、情報〟を意味する。アメリカとソ連が戦略核兵器の多角的削減をめぐって活発な駆引きを行っている現在、きわめて重要な職掌と言えよう。なによりも用心深さを要求される仕事であることはたしかだ。

キッツは、エリーのデスクの向いにある二つの椅子の一つに腰をおろし、ぐっと前に身をのりだして、カフカの引用に目を走らせた。が、とくに感銘を受けた様子でもない。

「単刀直入に言わせていただこう、アロウェイ博士。われわれは、この情報を世界中に公表することが果してアメリカの利益にかなうかどうか、懸念しているんだ。きみがいち早く世界中に電報を打ったのが適切だったかどうか、疑問なしとしないね」

「それは、中国に電報を打ったことをさしてるんですか？　ソ連やインドにも打電したことを？」冷静を保たなくては、とは思うのだが、どうしても声がトゲトゲしくなってしまう。「最初の二六一の素数をアメリカだけの秘密にしたかった、とおっしゃるの？　地球外知的生物はアメリカ人だけと交信するつもりだった、とでもおっしゃりたいの、キッツさん？　他の天体からのメッセージはこの地球上に住むすべての人間にあてられたものだとは思いません？」

「すくなくとも、事前にわれわれのアドヴァイスを求めてもよかったと思うが」

「そして信号を見失う危険をおかせばよかった、とおっしゃるの？　いいですか、あのときは、ヴェガがこのニューメキシコの地平線に沈んだあと、たとえば北京の上空にのぼったときに、なにかしら重要な、ユニークなメッセージが発信される可能性だってあったんですよ。

しかもあの信号は、アメリカだけにむけられた指名電話じゃないんです。地球だけにむけられた指名電話でもないわ。太陽系内のすべての惑星を対象とした呼出し電話なんです。じっさい、呼出し音に気づいてなんとか受話器をとりあげることができただけでも幸運だったんですから」

ダヘーアが、また無言の信号を送ってくる。なにを言いたいのだろう？　いまの初歩的な比喩(ひゆ)は気に入ったが、そうキッツにつっかかるな、とでも言ってるのだろうか？

「いずれにせよ」エリーはつづけた。「もう手遅れですわ。ヴェガ系に知的生物がいるらしいということは、世界中に知れわたったんですから」

「さあ、手遅れと断定できるかな、アロウェイ博士。きみは、これからもっと中身の濃いメッセージが送信されてくるかもしれない、と見ているそうじゃないか。こちら(ヒア)のダヘーア博士は――」自分の発した、意図せざる類音に一瞬聴き入ってから、「ダヘーア博士の話では、一連の素数はわれわれの注意を引きつけるための予告信号のようなもの、ときみは考えてるそうだね。その見通しが的中して、もしなにかしら微妙なメッセージが――他国が即座には察知できないようなメッセージが――届けられたら、こんどこそは秘密にして、まずわれわれと討議してもらいたいな」

「人間はそれぞれに願望を抱いてるものですわ、キッツさん」無意識のうちにエリーは、ダヘーアが眉(まゆ)をつりあげてみせるのも無視して、軽(かろ)やかに言っていた。キッツの態度に、彼女はどこかしら苛立(いらだ)たしい、挑発的(ちょうはつてき)なものを感じとっていたのだ。たぶんキッツのほうでも、

同様のものを彼女に感じとっていただろう。「たとえばわたしの場合でしたら、この信号の意味を理解したいという願望を抱いています。ヴェガではなにが起きているのか、それは地球にとってなにを意味するのかを、理解したいと思っています。その場合、他の国々の科学者たちが理解を助けてくれるということもあり得るわ。彼らのデータが必要になるかもしれないし、彼らの頭脳だって必要になるかもしれない。これは、ある一つの国が単独で処理するには難しすぎる問題だ、とも言えるんじゃないかしら」

ダヘーアの面上には、いまやかすかな懸念の色が浮かんでいた。「あのう、アロウェイ博士。キッツ次官補の提言は、それほど一方的なものだとは思えないがね。いずれそのうち、他国の協力を求めるようになる可能性はかなりあると思うんだ。彼が言ってるのはただ、だれよりも先にわれわれに相談してくれ、ということであってね。それも、新たなメッセージが届いたならば、の話なんだから」

ダヘーアの口調は穏やかではあったが、お愛想ぶってもいない。エリーはあらためて、彼の顔を注視した。ダヘーアは折紙つきの好男子ではないが、知的で善良そうな顔をしている。きょうはブルーのスーツにきりっとしたオクスフォード・シャツという出立ちで、あたたかい笑みが、思いつめたような真剣さをやわらげている。でも、彼はどうして、こんないやらしい男のご機嫌をとらなければならないのだろう？　それも任務の一端なのかしら？　それとも、キッツの言ってることには本当に一理あるのだろうか？

「いずれにせよ、いますぐどうこうという問題ではない」キッツは吐息をついて、立ちあが

った。「きみが協力してくれれば、国防長官もお喜びになると思うね」一歩もゆずらないかまえだった。「わかっていただけたかな？」
「すこし考えさせてください」エリーは答えて、さしだされた手を、死んだ魚を握るように握った。
「ぼくもすこしたったらいくよ、マイク」ダヘーアが、戸口にむかったキッツに快活な口調で言う。
いったんドアに手をかけたキッツは、なにか思いだしたことがあったらしい。胸の内ポケットからある書類をとりだし、またもどってきて、エリーのデスクの端にそれを慎重に置いた。「これを忘れていたよ。〝ハッデン原則〟のコピーだ。きみも知ってるだろう。アメリカの安全に不可欠な事項は機密扱いにしてもかまわない、という政府の権利を定めたものだ。たとえそれが、当初機密事項に分類されてなかったとしてもね」
「じゃあ、素数を機密扱いにしたいとおっしゃるの、あなたは？」信じられないように、わざと目を大きく見ひらいて、エリーはたずねた。
「あとで会おう、ケン」彼女の問いかけを無視して、キッツは廊下に消えた。とたんにエリーは、質問の雨をダヘーアに浴びせかけた。「彼はいったい、なにを狙ってるの？　ヴェガ星人の殺人光線？　世界を壊滅させる終末機械？　どういうことなの、これは？」
「彼はただ慎重なだけなんだよ、エリー。でもきみは、彼の言葉にウラがあると見抜いてるようだから言ってしまおう。いいかい、かりになんらかのメッセージが——それも、中身の

あるメッセージが――送られてきたとして、その中に、イスラム教徒やメソジスト派の信徒を怒らせるような内容が含まれていたらどうする？　そういう場合われわれとしては、アメリカが非難の矢面に立たないよう、公表には慎重を期すべきだと思わないか？」

「馬鹿なこと言わないで、ケン。あの男は国防次官補よ。もし政府が本当にイスラム教徒やメソジスト派信徒のことを心配しているのなら、国務次官補を派遣してくるはずだわ――さもなきゃ、そうね、大統領の朝食に陪席して祈りをささげる、例の熱狂的な宗教家たちの一人を。あなたは大統領の科学顧問でしょう。いったい大統領に、どんな助言をなさったの？」

「まだなんの助言もしてないよ。ここにやってきて以来、彼女とは電話で短い会話を交わしたきりだからね。正直に言うが、ぼくは彼女から、機密扱いに関してなんの指示も受けていない。キッツの言ったことは根拠がないと思うね。彼は自分の独断で動いてるんじゃないかな」

「どういう経歴の主なの、あの人は？」

「ぼくの知る限りでは、法律の専門家なんだね。政権に加わる前は、電子産業界のトップ・エグゼクティヴの一人だったんだ。たしかに、C³Iには精通しているだろうが、だからって他のジャンルのことにも詳しいとは限らない」

「わたしは、あなたを信頼してるわ、ケン。この〝ハッデン原則〟をわたしに呑ませようとする罠にしたって、あなたとは無関係だと思ってる」キッツの置いていった書類をヒラヒラ

とふり、一息ついてからダヘーアの目をとらえた。「ところで、あなたはご存知かしら、こんどの信号の偏波のなかにもう一つのメッセージが隠されてるかもしれない、ってドラムリンが考えてることを?」

「いや、ぜんぜん」

「つい二、三時間前、デイヴ・ドラムリンはこんどの電波の偏波の大ざっぱな調査を終えたのよ。彼はポワンカレの球体によってストークス・パラメータを再現してみせたの。それに関しては、時間を追って撮った素敵な映画があるわ」

ダヘーアはぼんやりとこちらを見返している。生物学者たちは顕微鏡で偏光を利用することがないのかしら、とエリーは思った。

「簡単に説明しましょうか。いったいに、光が進んでくるときには——それが可視光であろうと、電波光であろうと、他のいかなる光であろうと——わたしたちの視線に対して直角に振動しているの。その振動が光路をとりまくように回転している場合、光波は楕円(だえん)偏光している、と言われるの。そして、時計の針がまわる方向に回転している場合は、右方偏光、逆の方向に回転している場合は左方偏光と呼ばれてるわ。まったく、無味乾燥な命名法ですけどね。それはともかく、この二種類の偏光を使い分けることで、情報を伝達できるわけよ。すこし右に偏光した場合はゼロ、すこし左に偏光した場合には1というぐあいにね。おわかり? それは完全に可能なの。この地球では振幅変調(AM)と周波数変調(FM)が採用されてるけど、わたしたちの文明は伝統的に偏光変調を採用してないのね。

ところが、ヴェガから送られてきた信号をみると、偏光変調が行われているの。この場合は電波だから、偏波変調と言ったほうがいいわね。だから、いま一生懸命それを調べているの最中なんだけど、ドラムリンが発見したところでは、二種の偏波が同等に行われているのではないらしいのよ。右方偏波と同じ程度に左方偏波が行われているわけではないようなのね。だからたしかに、その偏波のなかに、いままで見逃してきた別のメッセージが隠されている可能性があるの。それでわたし、あなたの友人の意図をすなおに受け取れないんだわ。キッツは、ただ独断的な忠告をしている、というだけじゃないんじゃないかしら。彼はきっと、わたしたちがなにか別の発見をしつつあるということに気づいてるんじゃないかと思うの」

「まあ、そうきめてかかることもないさ、エリー。きみはもう四日間も、満足な睡眠をとってないんだろう。科学と政府とマスコミを相手に、一人で奮闘してきたんだからね。きみはすでに、今世紀最大の発見に並ぶ発見をした。しかも、ぼくの理解が正しければ、いまやそれよりもっと重要な発見をしようとしている。すこしぐらい神経が苛立つのもむりはない。キッツのやつが〈アーガス〉まで軍事組織並みに扱うと脅したのは、勇み足だと思うよ。きみが彼を疑うのもむりはない。しかし、彼の主張もまんざら的外れとも思えないがね」

「あなたはキッツという人物をよく知ってるの？」

「何度か会議に同席したことがあるくらいで、よく知ってるとは言えない。ただね、エリー、もし本物のメッセージを捕捉する可能性があるんだったら、知らせる人間をもうすこし絞ったほうが得策だとは思わないかい？」

「そうね。じゃあ、ワシントン関係の人間をふるいにかけるときは手を貸して」

「いいとも。それから、その書類をそこに置きっ放しにしておくと、だれかが入ってきたとき見当ちがいの判断を下すかもしれない。どこかにしまったほうがいいんじゃないか」

「これからも、いろいろと手を貸してくださる？」

「この先も状況に変化がなければ、手伝えると思うね。ただ、すべてが機密扱いにされたら、なにかとやりにくくなるだろうけれども」

にっこり笑うと、エリーはオフィス備えつけの小さな金庫の前にひざまずいて、六桁から成る組合わせ番号、314159を叩いた。大きな黒い文字で〝合衆国政府対ハッデン・サイバネティックス会社〟と題されている書類にもう一度チラッと目をくれると、彼女はそれを金庫に収納した。

＊

集まった人間は約三十名——主として〈アーガス計画〉に関連のある技師や科学者、それに国防情報庁副長官を含む私服の政府高官数人という顔触れだった。ヴァレリアン、ドラムリン、キッツ、ダヘーアも顔を揃えていた。女性はエリー一人。突当りの壁にはたて・よこ二メートルのスクリーンが設置され、前方に大型のテレビ投射システムが置かれている。エリーは、目の前のキーボードを叩きながら、一同に信号解読の説明を行っていた。

「長年にわたってわたしたちは、地球外知的生物が送信したと思われるメッセージをコンピ

ユーク解読する準備を進めてきました。そして、ドラムリン博士が終えたばかりの分析から、偏波変調のなかにメッセージが隠されているかもしれないということを知ったのです。右偏波と左偏波のあいだの頻繁な変換は、なにかを意味しています。それは決して、通常の不規則な雑音ではありません。たとえていえば、宙に投げられたコインのようなものですね。ふつうは、表がでる率と裏がでる率は同じようなものでしょう。ところが、裏の二倍も表がでたとしたら、そのコインにはきっとなにか仕掛けがある、内部に詰め物がしてあるにちがいない、という結論を下しますね。この信号の場合がまさしくそれで、偏波変調の度合いが一定ではないのです。としたら、なにかしらそこに作為があるとしか考えられない……これをごらんください。コンピュータがたったいま明かしたことは、もっと興味深いものです。つまり、〝裏〟と〝表〟の配列がくり返し現われるんです。この配列はとても長いところを見ると、かなり複雑なメッセージなのでしょう。これを送信してきた文明は、われわれが正しく解読することを切望しているにちがいありません。

ほら、ご覧になれるでしょう？ これが何度もくり返されるメッセージです。わたしたちが見ているのは、初めてくり返された部分です。すべての情報、すべての点とダッシュは——もしそう見立てるならば——この前のデータ群の配列とまったく同一です。これらの点やダッシュの総数を分析すると、何百億という数にのぼるのです。素晴らしいじゃありませんか！ 元はと言えば、これは三つの素数の積なんですから」

ドラムリンとヴァレリアンはいずれもにこやかに微笑していたが、エリーの見るところ、

二人の心中にはまったく別の感情が動いているようだった。

「だからどうだというんだね？　その素数の積とやらはなにを意味するんだ？」ワシントンからの訪問者がたずねた。

「これはつまり――たぶん――わたしたちにはなんらかの画像が送られてきてるんだと思います。いいですか、このメッセージは莫大な数の単位の情報から成っています。この莫大な数が、それよりは小さな三つの数から生じたとします。つまり、三つの数の積がそれを生んだということですね。ですから、このメッセージには三つの次元があるんです。わたしの推測では、これは静止したホログラムのような静的な三次元の画像か、あるいは時間とともに変化する二次元の画像、つまり映画ですね。かりにこれが映画だと仮定しましょう。ホログラムだとすると、再現するのに時間がかかりますから。わたしたちには、理想的な解読法があるんです」

スクリーンには、完全な白と完全な黒から成る、曖昧な、動くパターンが映しだされた。

「ウィリー、なにか灰色の補間プログラムをかけてくれる？　極端なものでなければどれでもいいわ。そしてそれを、時計の針の向きとは逆方向に、約九十度回転してほしいんだけど」

「どうやら補助側波帯チャンネルがあるようですね、アロウェイ博士。これは、画面に同調する音響なのかもしれません」

「じゃあ、それも入れてみて」

素数の役割に関して、これ以外に考えられるのは、現在、国家の防諜機関や一般企業間で広く採用されているパブリック・キー式暗号の一環だとする解釈ぐらいしかない。パブリック・キーとは、第二の解読キーがなければ解読不可能な暗号解読キーを意味する。一つの方法は愚者にのみ理解できるようなメッセージをつくることであり、もう一つの方法は、ある程度知的な人間からメッセージを隠しつづけることである。

　エリーは、目の前に並んだ顔をぐるっと見まわした。国防次官補のキッツは、なんとなく浮かない顔をしている。たぶん彼は、異星人のインヴェーダーの姿でも映しだされるのではないかと思っているのだろう。もっと意地悪く考えれば、エリーたちにも見せたくないような秘密兵器の設計図でも予想しているのかもしれない。ウィリーは真剣そのものの表情で、しきりに唾を呑みこんでいる。たしかに、映像は単なる数字よりずっと衝撃度が強い。ヴィジュアルなメッセージが見られるかもしれないと思うと、だれもが未知の不安と興奮に襲われるようだった。なかでダヘーアは、とても素晴らしい表情を浮かべていた。一瞬彼は、役人や官僚や大統領顧問であるよりは、本来の科学者そのもののように見えた。

　スクリーンにうつった映像は、依然曖昧模糊としている。が、それに加わった、腹の底に響くような深みのある音響は、最初、音声スペクトルの上方に駆けあがってから下降しはじめ、しだいに低くなって、最後は一点ハ音より一オクターヴ低い音階に落ち着いた。一同の耳は、かすかな、それでいて力強い音楽をとらえはじめた。スクリーンの映像がやがて回転し、修整され、しだいにピントが合いはじめる。

CamScannerでスキャン

エリーも無意識のうちに身をのりだして、黒と白の、粒子の粗い映像に目をこらした……それは、思いもかけないものだった。アール・デコ調の大きな鷲の像に飾られた重厚な演壇。リアルに描かれたその鷲の爪がつかんでいるのは……

「インチキだ！　ペテンだ！」信じられないといった驚愕の叫びが湧き起り、ヒステリックな笑い声がうずまいた。

「だから言っただろうが。きみはまんまと一杯くわされたのさ」ほとんど上機嫌ともとれる声で、ドラムリンがエリーに語りかける。彼はにこやかに笑っていた。「こいつは手のこんだ悪戯だな。きみのおかげで、この場にいる全員が貴重な時間を無駄にさせられたわけだ」

エリーの目にも、いまやはっきりと見えたのだが、鷲の爪がつかんでいるのは、ナチの鉤十字だったのである。カメラは鷲の上方にゆっくりと移動し、リズミカルな歓呼の声をあげている群衆に手をふるアドルフ・ヒットラーの笑顔をアップでとらえた。勲章を一切つけてないヒットラーの制服は、簡素で控え目な印象を漂わせている。アナウンサーの深みのあるバリトンの声が、室内に響きわたった。ときどきかすれはするが、ドイツ語をしゃべっていることはまちがいない。

自分のほうにちかよってきたダヘーアに、エリーはささやいた。「あなた、ドイツ語はわかる？　なんて言ってるの、アナウンサーは？」

ダヘーアはゆっくりと翻訳していった。「〝総統は、われらが祖国に集まった全世界の代表を歓迎し、一九三六年度オリンピック大会の開幕を宣言する〟」

第六章　重ね書きの羊皮紙

CamScannerでスキャン

そして、守護者たちが幸せでなければ、他のだれが幸せであり得るだろう？

──アリストテレス『政治学』第二巻第五章

アルバカーキを離れること百マイル以上、飛行機が早くも巡航高度に達したとき、エリーは、航空券の封筒にホチキスで留められた、小さな白いカードにぼんやりと目を走らせた。それには青い文字で、彼女が初めて旅客機にのったときから変っていない文句が記されている――〝これは、ワルシャワ協定第四条に規定されたラゲッジ・チケット（バゲッジ・チェック）ではありません〟。なぜ航空会社は――と、エリーは思う――このカードがワルシャワ協定のチケットとまちがわれるのを、それほど心配しているのだろうか？　そもそもワルシャワ協定のチケットとはいったいなんなのだろう？　どうして自分はいままで一度もそれを目にしたことがないのだろうか？　それはどこにしまわれているのだろう？　たぶん、あるとき不注意な航空会社がこの注意書きを四角いカードに印刷するのを怠ったがために、それをワルシャワ協定のチケットと勘ちがいして立腹した乗客たちから訴えられ、破産に追いこまれた――そんなふうな、いまでは忘れられた重大事件が過去の民間航空史上にあったのに相違ない。どのカードがワルシャワ協定で規定されたラゲッジ・チケットではないかということに関して、世界中の航空会社がこれほど神経をとがらせているからには、なんらかの

経済的理由があるにきまっている。それにしても、これまでにこの文面の印刷に要したインクや活字をもっとほかのことに利用していたら、どんなに有益だったことか。たとえば、このカードに世界の探険史を略述したっていいではないか。あるいは、ちょっとした科学知識をメモしてもいいだろうし、航空機事故が起る平均的な頻度を記したって面白いだろうに。

もし、軍用機をつかったらどうかというダヘーアの誘いにのっていたら、エリーはたぶん、もっと別のとりとめもない連想にふけっていたことだろう。軍用機を利用できればなにかと便利ではあろうが、といって、不用意にそういう誘いにのると、軍による〈アーガス〉の支配を許すきっかけにもなりかねない。そう考えて、エリーとヴァレリアンは敢えて民間機を利用することにしたのだった。ヴァレリアンは、隣の席に落ち着くが早いか、もう目をとじている。ヴェガからのメッセージに関しては、いまや、タマネギの二層目の皮がはがれかけている兆しがあったが、最終的なデータ分析の処理を終えると、とくに慌てる必要もなかった。民間機を利用しても、ワシントンにおける翌日の会議に十分まにあう時間に着くはずだった。一晩熟睡するゆとりすら持てるだろう。

エリーは、前席の下に置かれている、革のケースにきっちりとくるまれたファックスにちらっと視線を走らせた。それは、ヴァレリアンの旧式のモデルよりも、一秒につき数百キロビットも速い送信能力を持ち、グラフィック表示もずっとすぐれている。あすはこれをつかって、アドルフ・ヒットラーがヴェガでなにをしているのかを、大統領に説明しなければなるまい。わたしはやっぱり緊張しているんだわ、と彼女は思った。大統領に面会するのはこ

んどが初めてなのだ。二十世紀後半の基準に照らしても、現大統領はさほど悪くないほうの部類に入るだろう。それはともかく、こんどは髪をセットするひまがなかったくらいだから、顔のお化粧にも手がまわらなかった。でも、ホワイトハウスにはわたしの顔を観賞してもらいにいくんじゃないんだから、とエリーは思い直した。

それにしても、継父はわたしのことをどう思っているだろう？　科学には不向きだと、いまでも思っているのだろうか？　それから、母親はどうだろう？　このところ老人ホームの車椅子にすわったきりの母親は、どう思ってくれているのだろう？　信号が発見されてからこの一週間のあいだに、母親にはどうにか一回短い電話をかけたきりだった。あすにはもう一度電話する、と約束してあるのだが。

これまで何百回とそうしたように、エリーは窓外をながめて、想像の翼をひろげた。かりに異星人がわれわれのような目を持っていて、地上十二キロから十四キロの巡航高度から地球を見おろしたら、どういう印象を受けるだろう？　眼下には中西部の広大な大地がひろがっていて、農民や産業人の手になる、正方形や長方形や円形の微細な幾何学模様が描かれている。ここ同様、広大な南西部においても、知的生物が存在する唯一の証拠と受けとれるのは、山中や砂漠のあいだをときどき突っ切っている直線くらいのものだろう。もっと進んだ文明世界の大地は、住民の手で全面的に改造されて、完璧な幾何学模様を描いているのだろうか？　それとも、真に進化した文明とは、その種の人工的な証拠を一切残さないものなのだろうか？　そういう異星人たちは、ちらっとこの地表を一瞥しただけで、われわれが偉大

な宇宙的進化の発展段階のどのレヴェルに到達しているのか、読みとれるのだろうか？

そのほかに、どんなことを彼らは見抜けるのだろう？　たぶん空の青さから、彼らは、一気圧〇度Cの理想気体一㎤中に含まれる分子の数、いわゆる〝ロシュミット数〟を概算できるだろう。それは、約3×10^{19}なのだが。それから、地表を蔽う雲の影の長さから、雲の高度を簡単に読みとることもできるだろう。雲とは濃縮された水分であることを知っていれば、気温の変化率も概算できるにちがいない。なぜなら大気の温度は、この窓から見えるもっとも高い雲の位置で、零下四〇度Cまで降下するからだ。浸食された大地、U字形や樹枝状の川の流れ、風雨に打たれて変形した噴火口や湖の存在――これらのすべては、太古の昔に展開された、大地を形成しようとする力と浸食作用との闘いを物語ることだろう。じっさい、この地球が、真新しい文明の芽生えた老齢の惑星であることは、一瞥しただけでわかるはずだ。

この銀河系にある惑星のほとんどは、蒼古としていて前技術的段階にあるだろう。生命すら存在しないかもしれない。われわれよりずっと古い文明の栄えているところは、数えるくらいしかないはずだ。この地球のように技術文明が開花しつつある星は、呆れるほど稀少なはずである。まさにその点こそが、この地球という星の、根本的にユニークな唯一の点かもしれない。

昼食のあいだに、機がミシシッピ渓谷に接近するにつれて、眼下の大地はゆっくりと青みがかってきた。現代の空の旅では、移動の感覚を味わえる余地がほとんどないんだわ、とエ

リーは思った。目が、依然として熟睡中のヴァレリアンに走る。彼は妙に語気を強めて、機内の昼食などまっぴらだ、と言ったのだった。彼のむこう、通路のむかい側には、とても若いホモ・サピエンス――たぶん、三歳ぐらいだろう――が、安心しきって父親の腕に抱かれている。ああいう幼児の目に、空の旅はどう映るのだろうか？　まず特別な場所につれていかれて、大きな部屋に入り、備えつけのシートに腰をおろす。その部屋は四時間にわたって、轟々と鳴動しつづける。それから席を立って外にでると、不思議なことにまったく別の場所にいる。たぶん、輸送手段の原理はわかりづらいだろうが、基本的な概念は呑みこみやすいだろう。粘性流体の運動方程式である〝ナヴィエ＝ストークス方程式〟などを、早手まわしにマスターする必要もあるまい。

機が着陸許可を待ってワシントン上空を旋回しはじめたときには、夕方ちかくになっていた。ワシントン・モニュメントからリンカーン・メモリアルにかけて、人波で埋まっているのが見えた。つい一時間ほど前、『タイムズ』のファックスで読んだのだが、あれは経済的不平等と教育の機会不均等に抗議する黒人たちの大抗議集会なのだそうだ。彼らの不満の正当性を考えれば、あれでもあの人たちは自制しているほうだ。この集会とヴェガからの信号に対して、大統領はどういう対応を見せるだろう？　あすにはその二つの問題に関して、公式声明が発表されるはずだった。

★

「〝それはとびだしていく〟とはどういう意味なの、ケン？」

「つまり、われわれのテレビ電波はこの地球を離れて宇宙に進んでいくということです、大統領閣下」

「で、どのくらい遠くまで突き進んでいくんです？」

「お言葉ですが、〝突き進んでいく〟というのとはちょっとちがうのです、大統領」

「じゃあ、どういうふうに伝わっていくというの？」

「電波は円形の波となって、ちょうど池の小波（さざなみ）が広がるように、地球から広がっていくのです。そのスピードは光速に等しく――ですから秒速十八万六千マイルですが――永遠にとびつづけます。どこかに文明の栄えている天体があるとして、彼らの受信機の感度がよければよいほど、遠くにいてもわれわれのテレビ電波をとらえることができるんですね。われわれにしても、いちばんちかい恒星の惑星からテレビ電波が発信されていれば、とらえることが可能なんです」

一瞬、大統領は身を強（こわ）ばらせ、全面ガラス張りのフランスドアからローズ・ガーデンのほうをながめていた。それから、ダヘーアのほうをふり返って、「じゃあ……現在放送中のすべてのテレビ番組が、こうしているいまも、宇宙の果てまで伝わっているというの？」

「そうです。あらゆる番組が、です」

「あのくだらない番組のすべてが？　やたらと車が衝突するカー・チェイスも？　プロレスも？　ポルノ専用チャンネルも？　夜のニュース番組も？」

「なにもかもです、大統領閣下」自分も慨嘆に耐えないというように、ダヘーアは首をふってみせた。

「わたしはあなたのいうことを誤解してるんじゃないでしょうね、ダヘーア？　つまり、わたしの記者会見の模様とか、テレビ討論とか、大統領就任演説の中継とか、それがみんな宇宙に流れているわけなのね？」

「それにかぎれば朗報と言ってよろしいでしょう、大統領閣下。遺憾なのは、あなたの前任者のテレビ会見の模様もすべて宇宙に流れたということですね。それから、リチャード・ニクソンの演説も。ソ連が放送している、彼らの指導者たちの演説もそうですし、あなたの政敵があなたを非難した数々の罵言も伝わっているのです。だから、これは功罪相半ばというところでしょうか」

「まあ、なんてことでしょう。でも、わかったわ、説明をつづけて」

大統領はフランスドアからむき直って、トム・ペインの大理石の胸像に目をこらしている。前大統領がスミソニアン博物館にあずけたその胸像は、博物館の地下室からまたホワイトハウスに運ばれてきたのである。

「こういうふうにお考えください。このたびヴェガから送信されてきた数分間のテレビ画像は、一九三六年、ベルリン・オリンピックが開催されたときに放送されたものなのです。当時はドイツ国内でしか放送されなかったとはいえ、それはある程度の完成度をもって実現された、地上最初のテレビ中継放送でした。ラジオ放送とちがって、テレビ電波は地球をとり

まく電離層を突破して宇宙にこぼれてるのです。あのときドイツ国内で放送された内容を目下調査中ですが、結果がでるまでにはもう少々時間を要するでしょう。たぶん、ヒットラーのあの開会宣言は、ヴェガでとらえられた放送内容のほんの一部分なのかもしれません。

ですから、彼らの立場からすれば、ヒットラーのテレビ画像は、この地球上に知的生物が存在する最初の証拠だったわけです。わたしは皮肉で言ってるわけではありません。彼らにしてみれば、ヒットラーが何者なのかもわからないでしょうからね。ともかくも彼らはそれを記録して、すぐこちらに送り返してきたわけですよ。つまり、〝やあ、きみたちの挨拶、ちゃんと聞えたよ〟とでも言いたいんじゃないでしょうか。わたしには、とても親近感のこもったジェスチャーのように思われますが」

「すると、ベルリン・オリンピックのとき以降、第二次大戦が終るまで、ほかにテレビ放送は行われなかったわけね？」

「ええ、とりあげるに値するような放送はなにも。イギリスではジョージ六世の戴冠式のときに特定の地域で放送が行われましたが、せいぜいそんなところです。大々的なテレビ放送は一九四〇年代末期に開始されました。放送されるテレビ番組の電波は、すべて光速で地球を離れるのです。かりに地球がここにあるとしますね——」空中の一点を指でさして、「すると円形の波が光速で地球からとびさるのです。そうして最初のテレビ電波が放射されたのが、一九三六年でした。それはどこまでも広がって、地球から遠ざかっていきます。そのうちに、遅かれ早かれ、いちばん地球にちかい文明に到達する。それは驚くほど近かった。わ

ずか二十六光年しか離れてない、ヴェガの惑星だったのですから。彼らはそれを記録して、また地球のわれわれに送信してよこしたわけです。それからまた二十六年後に同じ映像が地球にもどってきたがヴェガに届くまでに二十六年、それからまた二十六年後に同じ映像が地球にもどってきた計算になります。とすると、彼らは受信から発信までに何十年もかけていない、ほとんど受信すると同時に送り返してきたことになります。彼らは準備万端整えて、われわれのテレビ電波が届くのを待ちかまえていた感じですね。捕捉し、記録すると同時に送り返してきたわけですから。しかし、彼らが事前にここにやってきていたのでなければ——たとえば、百年ほど前に探査隊を派遣するとかして——われわれがいずれテレビを発明しそうだということも予知し得なかったでしょう。ですから、アロウェイ博士はこう考えています——ヴェガの文明はつねに周辺の惑星系を観察していて、ハイ・テクノロジーを発達させる隣人がいないかどうか目を配っているのではなかろうか、と」

「冷静に検討すべき問題がたくさんあるようだわね、ケン。あの連中——ヴェガ星人とでも呼べばいいのかしら——ともかく、こんどの映像を送信してきた連中は、あのテレビ番組がなにを意味するのか、本当にわかってないと思う？」

「彼らが高度の知能を有していることは疑問の余地がありません、大統領閣下。一九三六年に放送されたときの電波は、ごく微弱なものだったはずです。それを捕捉し得たということは、彼らの受信装置の感度がおそろしく優秀だったことを意味します。しかし、受信した放送内容まで彼らが理解できたとはとうてい思えません。おそらく、彼らはわれわれとは似て

も似つかぬ形態をしていることでしょう。歴史もちがえば風俗習慣もちがうはずです。鉤十字とは何なのか、アドルフ・ヒットラーとは何者なのか、彼らに理解できたはずがありません」

「よりによって、アドルフ・ヒットラーだなんて！　考えただけでも腹立たしいわ、ケン。あの誇大妄想狂の息の根をとめるまでに、四千万もの人命が失われたのよ。それなのに、彼が地球の輝けるスターとして、初めて他の天体の文明にテレビで紹介されたというわけ？あんな男がわたしたちの代表になったとはね。これでは、あの狂人の野放図な夢がまんまと実現したようなものじゃありませんか」

一息つくと、彼女は平静な口調にもどってつづけた。「妙なことを言うようだけど、あのヒットラー自身は、例のナチス式敬礼をまともにできたためしがないのね。いつも、腕がまっすぐのびなくて、変な角度で曲がっているの。それと、例の阿呆らしい、肘を曲げた敬礼。ヒットラー以外の男が、もしあんな不格好なハイル・ヒットラーの敬礼をしたら、きっとロシア戦線にとばされていたでしょうね」

「でも、ヒットラーの場合は、ちょっとちがうんじゃないでしょうか。彼は答礼をしていたにすぎないんですから。彼自身がハイル・ヒットラーの敬礼をしていたわけじゃないんです」

「でも、同じことよ」にべもなく言い返してから手をふって、大統領はダヘーアをローズ・ルームからつれだし、通路を進んでゆく。そのうち、不意に足をとめて、科学顧問の顔を見

つめた。
「もしナチス・ドイツが一九三六年にテレビ放送をしていなかったとしたら、どうだったかしら？　その場合はどうなっていたと思う？」
「たぶん、ジョージ六世の戴冠式の模様か、一九三九年のニューヨーク万国博の模様がヴェガに届いていたでしょう――それだけの強度に電波が達していたならば。でなければ一九四〇年代末期か一九五〇年代初期のなんらかの番組が届いていたでしょうね。〝ハウディ・ドゥーディ〟とか、ミルトン・バールのショウとか、陸軍とマッカーシーの聴聞会の模様とか――この地球における知的生物の存在を証明する、それら素晴らしい証拠が続々と送られたわけですよ」
「ああいう低俗な番組がわたしたちの大使となって宇宙に送り届けられるなんて……この地球からの使節として」一息ついた大統領は、いまの自分の言葉をしばし反芻している様子だった。「ふつう大使と言えば、最良の人材を抜擢するものでしょう。それなのにわたしたちは、四十年間も、いかがわしい連中ばかり宇宙に送りつづけてきたようなものだわ。各テレビ局のお偉方たちにも、この事実をよく認識してもらいたいものね。さっきのヒットラーの話にもどるけれど、やっぱり、ヴェガ星人がこの地球に関して最初に知り得たニュースはヒットラーだったのかしら？　彼らはわたしたちのこと、どう思っているでしょうね？」

★

ダヘーアと大統領が閣議室に入ると、あちこちで立話していた面々は沈黙し、すでにすわっていた連中は起立した。大統領は機械的に手をふって、寛いだ雰囲気で話し合いたい意を伝え、国務長官と国防次官にさりげなく挨拶した。それから、ゆっくりと慎重に周囲を見まわして、集まった面々を確認してゆく。なにかを期待するように見返す者もいれば、大統領の面上にかすかな不安の影を読みとって目をそらす者もいた。

「例の天文学者はもうきているの、ケン？　アロウスミスといったかしら？　アロウルートだったかしら？」

「アロウェイです、大統領閣下。彼女とヴァレリアン博士は、昨夜ワシントンに到着しました。たぶん、交通渋滞にひっかかって遅れているのでしょう」

「ついさっき、アロウェイ博士がホテルから連絡してきました、大統領閣下」一分のすきもなくスーツを着こなした若い男性が、口をはさんだ。「ファックスで新しいデータが届いたそうでして。この会議で報告したいので、すこし遅れるそうです。とりあえず、彼女抜きではじめたらいかがでしょう」

国防次官補のマイケル・キッツがぐっと身をのりだし、信じられないといった面持で言った。「これだけの問題に関するデータを、連中は防諜措置も施してない民間電話で、ワシントンのホテルに送信してるというのかい？」

するとダヘーアが、もっとキッツが身をのりださなければ聞きとれないような低い声で言い返した。「しかし、彼女のファックスには、すくなくとも商業用暗号化装置がそなわって

CamScannerでスキャン

いるからね、マイク。それに、この件に関しては、まだ防諜上の指針が確立されてないだろう。もし指針が確定すれば、アロウェイ博士もそれを遵守するだろうさ」

「よろしい、ではじめましょう」大統領が言った。「これは国家安全保障会議の非公式な会合であり、当分のあいだ、ここに集まった面々を〝特別緊急機動グループ〟と呼ぶことにします。あらかじめ要望しておくけど、この部屋でこれから交わされる討議の内容は決して――ただの一言も――外部の人間に洩らさないでいただきたいの。例外は、目下海外にいる国防長官と副大統領だけです。あなたがたのほとんどは、今回ヴェガという恒星系から送信されてきた信じがたいテレビ画像について、昨日、ダヘーア博士から説明を受けたと思います。ダヘーア博士その他の関係者たちは、ヴェガに届いた最初のテレビ番組のスターがアドルフ・ヒットラーだったのは単なる偶然だと言います。でも……不愉快であることに変りはないわ。こんどの事態が国家の安全にマイナス要因をもたらす可能性について検討するよう、私はCIA長官に要望しました。このメッセージを送信している者がだれであろうと、われわれにとって直接的な脅威となる可能性はないか。これからなんらかの新しいメッセージが送信された場合、他国に先に解読されたら問題が生じないのか。でも、なによりも先にマーヴィン、こんどの事態がいわゆる〝空とぶ円盤〟と関係があるのかどうか、あなたの見解を聞きたいわ」

鉄縁の眼鏡をかけた、初老にちかい、いかめしい顔をしたCIA長官は、要旨以下のように答えた――未確認飛行物体、通称UFOについては、とりわけ一九五〇年代から一九六〇

年代にかけて、ＣＩＡと空軍が折にふれ重大な関心を払ってきた。というのも、一つには、それが国内の攪乱と通信網の混乱を狙った敵対勢力の陰謀である、という噂が流れたからである。比較的信憑性の高い目撃事例のいくつかは、調べてみると、ソ連ないしキューバの高性能偵察機によるアメリカ領空の侵犯であったことが判明した。この種の領空侵犯は、敵国の防空態勢をテストするためによく実施されることで、アメリカもソ連に劣らず同種の領空侵犯やその疑似行為を行っている。キューバのミグ機が、ミシシッピ盆地の上空二百マイルまで潜入したのち探知されたときには、北米防空司令部が、公表は不適当と判断した。同種の事件が発生すると、空軍は、ＵＦＯが目撃された地区周辺に空軍機はいなかった、と発表し、敵性機による領空侵犯には言及しないのが通例である。それがかえって、民間人のＵＦＯ神話を定着させてしまう結果になりやすい。

この説明を聞いていた空軍参謀長は渋い顔をしたが、沈黙を守った。

ＣＩＡ長官はつづけた――ＵＦＯを目撃したという報告のほとんどは、各種の自然現象を誤認したケースである。その他、珍しい飛行機や実験機を誤認したケースもある。気球、鳥、雲に反射した自動車のヘッドライト、発光性の昆虫、それに異常な気象条件下で目撃される恒星や惑星すら、ＵＦＯと報告される場合がある。単なるでっちあげや、本物の精神障害による幻想と判明した事例も多々あった。一九四〇年代後半に〝空とぶ円盤〟という言葉がつくられて以来、ＵＦＯの目撃報告は百万件以上にのぼったが、そのうち、地球外知的生物の訪問と関連づけ得る有力な証拠に基づいていたものはただの一件もなかった。が、空とぶ円

盤は他の天体からの使者だという見方は、人々の心を強く惹きつけ、さまざまな出版物やグループ――それに、一部の学者まで――がその主張をくり返してきた結果、UFOは他の天体の生物と関連があるのだという説がいまに至るも生きのびている。キリスト教の〝千年至福〟派の教義のなかにも、最近、他の天体の信者がUFOにのって飛来したという説がまぎれこんでいる。〝ブルー・ブック計画〟と呼ばれた空軍の公式調査は、具体的進展が見られないという理由で一九六〇年代に廃止されたが、空軍とCIA協同の下部レヴェルによる調査はその後もつづけられた。学界では、UFOは実体のない空騒ぎという見解が主流を占めていたため、ジミー・カーターからUFOの包括的研究を依頼されたNASAは、国家機関としては珍しく、大統領の要請を拒否したのである。

「じっさい――」テーブルについていた科学者たちの一人で、この種の会議の進行法に不慣れな人物が、口をはさんだ。「あのUFO騒ぎのおかげで、真面目なSETIの活動がかえって困難になったんですからね」

「わかったわ」大統領が吐息をついた。「この場にいる人で、こんどのヴェガからの信号はUFOと関係があると見なしている人はいる？」

ダヘーアは指の爪をじっと見つめていた。答える者はいない。

「いずれにせよ、UFO信者たちからは、だから言ったじゃないか、という声がいっせいにあがるでしょうけどね。つづけてくれる、マーヴィン？」

「では、わたしの立場から今回の事件を整理してみましょう、大統領閣下。一九三六年、ベ

ルリン地区の一握りのテレビ視聴者に対して、ごく微弱なテレビ電波がオリンピック大会開会式の模様を送信しました。それは明らかに国威発揚のための試みです。ドイツの技術の進歩と優越性を誇示するのが目的でした。それ以前にもテレビ放送は何度か行われましたが、いずれも小規模のものだったのです。じっさいには、われらがアメリカのほうが、ドイツの先をこしているのです。ハーバート・フーヴァー商務長官が、短時間ながらテレビに登場したのは……たしか、一九二七年四月二十七日でしたからね。それはともかく、ナチス・ドイツの放送したテレビ電波は光速で地球を離れ、二十六年後にヴェガに到達します。彼らは——それがどういう生物かはさておき——数年間その電波信号を吟味してから、とてつもなく強力な電波で送り返してくる。あの微弱な電波を受信した能力は端倪すべからざるものですし、それをこれほど強力なパワー・レヴェルで送信してくる能力にも侮りがたいものがある。そこにはたしかに、国家の安全に関わる問題がありましょう。たとえば電子防諜に携わっている向きなどは、あれほど微弱な電波を探知した技術を知りたがっています。ヴェガにいる連中が、技術的にわれわれより進歩していることは、まずまちがいないでしょうな——その差は、わずか数十年とも考えられるし、それ以上のひらきがあるとも考えられる。

彼らは、彼ら自身に関する他のいかなる情報をも送ってきてはおりません——ある特定の周波数を除いて、送信された信号は、彼らの惑星が母星のヴェガの周囲を回転することから生じるドップラー偏移を示してはいません。つまり、彼らはわれわれのために、データ変換のためのステップを簡略化してくれたのです。それをみても、彼らは……友好的と言ってい

いでしょう。いままでのところ、軍事的、もしくはそれに準じる性質の情報は一切送られてきていません。彼らが伝えているのは要するに、彼らの電波天文学が優秀なレヴェルにあるということ、素数を好むということ、それに、地球の発した最初のテレビ電波を送り返す能力を持っているということ——以上の三事に尽きます。それを他の国に知られたところで、アメリカの国益を損うとは考えられません。それに、よろしいですか、例の三分間のヒットラーの映像電波自体は、他の主要国もくり返し受信しているのです。たしかに、連中はまだ、その電波の読み方に気づいていません。しかし、いずれソ連やドイツ等が偏波変調に気づくのは時間の問題でしょう。大統領閣下、これはわたしの個人的見解で、国務省の同意が得られるか否かはわかりませんが、われわれが情報を秘匿しているという非難を受ける前に、いっそ世界に公表してしまったほうが得策ではないでしょうか。現状に変化がなければ——これ以上の大きな変化が生じなければ——一連の経過を公表するなり、例の三分間のテレビ画像を公開するという手もありましょう。

それはそうと、目下のところ、一九三六年のあのテレビ放送の全内容がいかなるものであったのか、依然として調べがついておりません。ヴェガの連中が、はたしてあれを送信する前になんらかの改竄をしたのかどうか、知る術がないのです。もちろん、あれがヒットラーに相違ないこと、画面に登場するオリンピック・スタジアムも一九三六年当時のそれに合致することは確認できます。が、あの瞬間、ヒットラーは画面に見るように微笑していたのではなく、本当は口ひげを撫でていたのではないか、というような点になると、確認する術が

ないわけです」

そのときエリーが、すこし息を弾ませながら、ヴァレリアンをしたがえて到着した。すぐに壁ぎわの目立たない席にすわろうとするのを、ダヘーアが目ざとく見つけて、大統領の注意をそちらにむける。

大統領が言った。「アロウェイ博士ね？　ぶじに到着してくれて嬉しいわ。なによりもまず、こんどの素晴らしい発見に対して、おめでとう、を言わせていただきます。本当に偉大な発見ですもの。それから、マーヴィン……」

「わたしの説明でしたら、ちょうど区切りのいいところです、大統領」

「けっこう。アロウェイ博士、あなたはなにか新しい情報を入手したそうね。さっそく説明していただこうかしら？」

「遅刻したことをお詫びいたします、大統領閣下。でも、わたしたちはとうとう、宇宙的規模の大当りを引きあてたような気がするのです。わたしたちは……そうですね……こういうふうにお話しするとご理解いただけるでしょうか。古代、数千年も昔、羊皮紙がまだ欠乏していたころ、人々は古い羊皮紙のうえに新たな情報を書き記して、いわゆる〝重ね書き羊皮紙〟といわれるものをつくりました。つまり、ある文面の下にまた文面があり、そのまた下にも文面があったわけです。今回のヴェガからの信号は、もちろん、かなり強力なものです。すでにご存知のように、まず素数があり、〝その下に〟偏波変調の形をとって、あの気味の悪いヒットラーの映像がありました。そしてこのたび、素数と、返信されてきたそのオリン

ピック放送の下に、わたしたちは信じがたいほど豊かなメッセージを発見したのです――すくなくとも、それがメッセージであることはまちがいないでしょう。わたしたちの知るかぎり、それは最初からそこにあったのです。それをとうとう探知できたんですわ。最初の合図の信号よりは弱いとはいえ、どうしてもっと早く気づかなかったのだろうと思います」
「で、その内容は？」大統領が訊いた。「どんなことが書かれているんです、そこには？」
「いまのところ、まだ皆目わかりません、大統領閣下。ワシントン時間できょうの早朝、〈アーガス計画〉のスタッフ数名が、それを探知しまして――それからずっと、わたしも電話で討議に加わって、解明に努力してきたんですが」
「無防備な民間電話をつかってかね？」キッツが言った。
「でも、標準の商業用暗号化措置は採用してますから」エリーの顔には、ほんのりと赤みがさした。ファックスのケースをひらくと、彼女は素早く透明画のプリントアウトを吐きださせ、映写機をつかってそれをスクリーンに映しだした。
「では、これまでにわかったことを説明いたします。わたしたちのところには、約千ビットから成る情報のかたまりが送信されてくるのです。そのかたまりをブロックと呼ぶとすると、一つのブロックが送信されたのち、その内容が一ビットずつ正確にくり返されます。それから小休止があって、次のブロックが送信されてくるのです。それもやはり、もう一度くり返されるのですが、このくり返しは、送信ミスを最小限に留めるための措置かと思われます。わたしたちがその内容を正確に受けとるように、彼らは万全の配慮を払っているのでしょう。

この情報の一ブロックが書物の一ページに該当するとすれば、〈アーガス〉は毎日数十ページ分の情報を受け取っていることになります。その内容については、さきほど申しあげたとおり、まだわかりません。ただ、例のオリンピック開会式のメッセージのような、単純な映像コードでないことだけはたしかです。もっと深みがあり、もっと内容が濃いように思われます。彼らは初めて、自前の情報を送ってきたと言っていいんじゃないでしょうか。これまでに得られた唯一の手がかりは、ページごとにナンバーが付されているということです。つまり、各ページのはじめに、必ず二進法によるナンバーがついているんです。ご覧になれますね？　そして、ページが変るたびに、そのナンバーは大きくなるわけです。現在受信中のページ数は……一万四百十三ページ。かなり大部な本なんです、これは。逆算すると、この本の一ページ目が送信されたのは、約三カ月前になります。比較的早い時期にわたしたちがそれを捕捉できたのは幸運だったと言っていいでしょう」

「だから言ったじゃないか、え？」キッツがぐっとテーブルの上に身をのりだして、ダヘーアにささやく。「そういうメッセージを、日本人や中国人やロシア人にわたしていいのか？」

「その内容を解明するのは、よほどむずかしいのかしら？」キッツの声を無視して、大統領が訊いた。

「もちろん、わたしどもは最善の努力を尽しますし、国家安全局に協力してもらうのも有益でしょう。ですが、ヴェガからの説明抜きでは、そう、ヴェガから解読の手引き(プライマー)のようなものを送ってもらわない限り、短時日での解読は困難だろうという気がします。とにかく、英

語とかドイツ語とか、この地球上の言語で書かれてないことは明白ですしね。わたしたちの望みは、このメッセージが二万ページか三万ページくらいで終って、そこからまた一ページ目にもどってくれることなんですが――そうすれば、欠落している部分を埋めることができますから。案外、メッセージの全文がくり返される前に、〝マクガフィー読本〟のような、メッセージの解読を可能にする手引きが送られてくるのでは、という気がするんですが」

「ちょっとよろしいでしょうか――」

「大統領閣下、彼はこの分野での先駆者の一人、カリフォルニア工科大学のピーター・ヴァレリアン博士です」

「どうぞ、ご意見を聞かせてちょうだい、ヴァレリアン博士」

「はい。このメッセージは、われわれむけの意図的な送信です。この地球という星にわれわれ人間がいることを、彼らは承知しているのです。われわれ地球人のテクノロジーがどの程度の水準にあるか、われわれの知能水準がどのくらいか、彼らは一九三六年のテレビ放送を傍受することによって、ある程度知り得たことでしょう。われわれにメッセージを読みとってほしいと願わなければ、あれだけの手間ひまをかけて送信してくることもなかろうかと存じます。ですから、メッセージのどこかに、解読する鍵もひそんでいるのではないかと思うのですが。あらゆるデータをあつめて、慎重に分析すれば、活路がひらけるのではないでしょうか」

「なるほど。で、あなたはメッセージの内容についてどう考えてるの?」

「目下のところ、判断に迷っております、大統領閣下。わたしとしては、[illegible]博士の見解をくり返すしかありません。とにかく、こみ入った、複雑なメッセージであることはたしかでしょう。先方は、われわれがそれを受信することを切望しているのです。ひょっとすると、『銀河百科事典』の一巻かもしれませんね。ヴェガという星は太陽の二倍の質量を有しており、明るさは太陽の六十倍です。また、それだけ早く核燃料を燃焼させているわけでして、寿命も太陽よりずっと短いのです――」

「そうなら、いまヴェガでは、なんらかの異常事態が起こっているのかもしれませんな」ＣＩＡの長官が口をはさんだ。「たとえば、彼らの惑星が破壊される運命にあるとか。それで、完全に滅びる前に、自分たちの文明をだれかに知ってもらいたがっているのかもしれません」

「さもなければ――」べつの声が言った。「彼らは新しい移住先を捜しているのかもしれない。それで、地球が最適だということがわかったんだ。連中がヒットラーの映像を送ってきたのは、なんらかの魂胆があってのことかもしれんぞ」

「ちょっと待ってください」ハリーが口をはさんだ。「予想はいろいろと立てられますが、どんな可能性も成り立つというわけではありません。わたしたちがメッセージを受信したかどうか、先方は確認する手段がないんです。ましてやわたしたちが首尾よく解読しつつあるかどうかなど、わかるはずがありません。いいですか、かりにメッセージの内容が攻撃的なものだったとしても、こちらには返答する義務などないんです。返答したとしても、二十六光年

彼方のヴェガに届くまでには二十六年、それに対する先方の答が届くまでにはさらに二十六年を要します。光のスピードは相当なものだとはいえ、限界は厳然としてあるんですもの。だから、わたしたちはヴェガから安全に隔離されている、という言い方だってできるわ。万が一メッセージの内容が不穏なものだったとしても、こちらには対策を検討する余裕が十分あるんです。だから、パニックに陥る愚だけは避けようじゃありませんか」

最後のくだりを言いながら、エリーはキッツにむかってにこやかに笑ってみせた。

「とてもわかりやすい説明、ありがとう、アロウェイ博士」大統領が言った。「しかし、事態は急速に動いているわね。めまぐるしいくらいにね。しかも、〝ひょっとすると〟とか、〝もし〟とかの要素が多すぎるし。わたしは大統領として、まだ公式声明すらだしてないんですもの。あのろくでもないヒットラーの映像に関しては言うに及ばず、最初の素数に関してすらもね。彼らが送信しているとあなたの言う〝書物〟については、慎重に考慮しなくてはね。それから、あなた方科学者たちの見解がまちまちだから、世間では無責任な噂がとび交っているようよ。フィイリス、あのファイルはどこだったかしら？　ほら、この見出しの数々を見てごらんなさい」

大統領が次々にかかげてみせる新聞の切抜きには、ニュアンスの差こそあれほぼ同趣旨の煽情的な見出しが躍っていた――〝ギョロ目のモンスターからの電波信号傍受、と宇宙科学者が言明〟、〝宇宙からの電報が地球外知的生物の存在を立証〟、〝天国からの声？〟、そして、〝エーリアン襲来！　エーリアン襲来！〟。大統領は切抜きを投げだして、ヒラヒラとテーブ

ルに舞いおちるに任せた。
「すくなくとも、ヒットラーの件はまだ洩れてないようだわ。でも、いずれはおぞましい見出しが紙面に躍るでしょうね――〝ヒットラーは宇宙で生きていた！〟とか、もっともっと性の悪いものが。この会議はいったんここで休会して、またあとで再開しましょう」
「お言葉ですが、大統領」ある種の義務感に引きずられるように、ダヘーアがためらいがちに言った。「実は、この場で討議していただきたい国際的な問題があるのです」
大統領は吐息をついて、先を促した。
ダヘーアはつづけた。「説明がまちがっていたら訂正してください、アロウェイ博士。問題のヴェガは毎日ニューメキシコの上空にのぼりますが、その間、この複雑な書物――であれ、なんであれ――その何ページ分かをわれわれに送信します。それから八時間くらいたつと、ヴェガは地平線上に沈みます。ここまでは正しいかな？　よし。で、翌朝、ヴェガはふたたび東の空にのぼるのですが、その間、前夜われわれの前から姿を消していた長さの分だけ、われわれが受けとるページ数には欠落が生じることになります。おわかりですか？　ですから、きょう三十ページ目から五十ページ目まで受信したとすると、あすは八十ページ目から百ページ目まで受信するということになる。われわれが昼間どんなに注意深く受信につとめたとしても、夜間ヴェガが送信している分はキャッチできないのです。となると、膨大な量のページ数が欠落することになる。いずれメッセージが最初にもどってくり返されたとしても、この事情は変りません」

「まったくそのとおりなんです」エリーが立ちあがって、巨大な地球儀にちかづいた。ホワイトハウスは、地球が傾いているという事実が我慢ならないらしく、地球儀の回転軸は完全な垂直になっていた。それをゆっくり回転させながらエリーはつづけた。「地球は回転しています。ページの欠落を認めたくないなら、二十四時間ヴェガからのメッセージを受信できるよう、地球の経度上ほぼ等間隔の位置に電波望遠鏡を配置しなければなりません。自国領土のみから受信しようとする国は、大切な書物を拾い読みすることになるんですわ――ひょっとして、いちばん肝心な部分を読みのがしてしまうことにだってなりかねません。これは、アメリカの惑星探査機が直面しているのと同じ問題なんです。惑星探査機は、どこかの惑星のちかくを通過するさい、収集した情報を送ってよこすんですけど、そのときアメリカは、たまたま反対側をむいてるかもしれない。それでNASAは、地球の経度上ほぼ等間隔の三カ所に、電波追跡基地を設けました。この数十年、それらの基地はみごとな役割を果してきました。でも……」声が自信なげに薄れた。エリーはそこで、なにかを促すように、NASAの長官、P・L・ギャリスンの顔を真っ向から見すえた。いかにも善良そうな雰囲気を漂わせる、痩身の、青白い顔をしたギャリスンは、パチパチと瞬きして言った。

「ええ、その通り。われわれはそれを〝ディープ・スペース・ネットワーク〟と呼んでまして、大変誇りに思っております。各基地の所在地は、カリフォルニアのモハーヴェ砂漠、スペイン、それにオーストラリアです。もちろん、われわれは資金不足に悩んでおりますが、それ相応の援助をいただければいかなる事態にも即応できる態勢を整えられます」

CamScannerでスキャン

だ。
「スペインとオーストラリアですって？」大統領がたずねた。
「純粋に科学的な目的のためですから」国務長官が口をはさんだ。「とくに問題はないでしょう。ただ、この解読作業が政治的意味合いを持つとなると、問題なしとしませんな」
このところ、スペイン、オーストラリア両国とアメリカの関係は、かなり冷却しているのだ。
「この解読作業は当然、政治的意味合いを持ってきますとも」
いささか皮肉っぽく大統領が答えると、
「しかし、われわれは地表に縛りつけられる必要はないでしょう」空軍の将軍が言った。「地球の自転に伴う問題の解消法はほかにもあります。地球軌道に大型の電波望遠鏡を打ち上げればいいんですよ」
「なるほど」大統領はまたテーブルを見まわした。「いま現在、われわれは宇宙に、電波望遠鏡を持っているの？　もし持ってないとしたら、打ち上げるまでにどのくらいの時間が必要なのかしら？　この件に詳しい人は？　あなた、ギャリスン博士？」
「いま現在、アメリカは宇宙に電波望遠鏡を持ってはおりません、大統領閣下。われわれNASAでは、過去三年、会計年度ごとにマクスウェル観測基地のための予算を要求したのですが、予算管理局からそのつどはねられまして。むろん、精密な設計プランはできあがっているのですが、建設完了までにはかなりの年月、そう、すくなくとも三年は必要でしょう。それに関連して、みなさんにこのさい想起ねがいたいのですが、昨年の秋まで、ソ連が地球

軌道に打ち上げたミリメートル波とサブミリメートル波の電波望遠鏡が機能していたはずなのです。故障した原因は不明ですが、いま、われわれが慌てて新規の望遠鏡を打ち上げるよりは、ソ連に何人かの宇宙飛行士を送ってもらって、故障した宇宙基地を修理してもらったほうが、はるかに能率的ではないでしょうか」

「それが最良の策というわけね？」大統領はたずねた。「通常の光学式望遠鏡なら、NASAは宇宙に打ち上げてあるけど、大型の電波望遠鏡は打ち上げてないわけね。なにか、それの代替機能を果すものはないのかしら？　諜報（ちょうほう）関係の意見はどう？　国家安全局の意見は？　名案を持ってる人はだれもいないの？」

「ですから——」ダヘーアが言った。「アロウェイ博士たちの読みが正しいとすると、送られてくる電波はかなり強く、たくさんの周波数にのっています。アメリカの上空でヴェガが沈んでも、その電波を探知し記録し得る電波望遠鏡を有している国は五、六カ国にのぼります。むろん、それらの望遠鏡は〈アーガス〉のそれほど優秀ではないし、スタッフもまだ偏波変調には気づいてないでしょう。しかし、われわれが自前の電波望遠鏡基地の打上げをのんべんだらりと待っているうちには、ヴェガからのメッセージの送信は終ってしまうかもしれません。となると、唯一の解決策は、いますぐ多くの国々と協力することだ、ということになりませんか、アロウェイ博士？」

「そのとおりですわ。このメッセージの解読を独力で為（な）し得る国など存在しないと思います。これには、地球の各地に散らばっている多くの国々の協力が不可欠なんです——実際問題と

して、現在機能中の大型電波望遠鏡のすべてが必要になるでしょう——オーストラリア、中国、インド、ソ連、中東、そして西ヨーロッパ。たまたまメッセージの重要な部分が送信されてきたときに、ヴェガをとらえている望遠鏡がなかったが為に欠落が生じでもしたら、それこそ無責任というものですもの。ハワイとオーストラリア間の東太平洋、それとおそらく、中部大西洋をカヴァーするためにも、なんらかの措置が必要になるでしょうね」

「それだったら——」CIAの長官が、いまいましげに言った。「ソ連は現在、Sバンドから Xバンドまでを捕捉可能な衛星追跡船を何隻か就航させている。たとえば、アカデミック・ケルディシュ号とか、ニェジェーリン元帥号とかだ。連中との交渉しだいでは、そうした船を大西洋や太平洋に配置してもらって、ギャップを埋めることも可能かもしれませんな」

エリーが口をすぼめてなにか言おうとしたときには、すでに大統領が口をひらいていた。

「わかったわ、ケン。たぶん、あなたの言うとおりでしょう。でも、もう一度くり返すけれど、事態の展開があまりにも急すぎるわね。ほかにも検討を要する問題がいろいろとあるし。CIA長官と国家安全局のスタッフにお願いしたいんだけど、他の国々、とくに非同盟国との協力以外に選択の道がないのかどうか、あらゆる角度から検討して、今夜中に結論をだしてちょうだい。それから国務長官には科学者たちと協力して、他者との連携が不可欠な場合に協力を要請すべき国や個人のリストを作成していただきたいわ。それと、そうして協力した場合に予想される結果も検討してみてちょうだい。たとえば、われわれの協力要請から洩れた国が、つむじを曲げないかどうか？　最初はデータの提供を約束しておきながら、あと

でそれを脅迫の手段につかうような国はないかどうか？　各経度上で一つ以上の国と協力すべきかどうか？　予想されるあらゆる事態を想定して、検討してちょうだい。それから――」ピカピカに磨かれた長いテーブルを囲んだメンバーの顔を順に見すえながら、「この討議内容は絶対に他言しないこと。あなたもよ、アロウェイ。それでなくとも、問題が山積してるんだから」

第七章　星間雲W－3中のエチルアルコール

CamScannerでスキャン

悪魔は神と人間のあいだをとりもつ使者兼通訳であって、われわれの請願を神に伝え、神の助力をわれわれにもたらすのだ、というがごとき意見は、決して信じてはならない。事実は正反対であって、悪魔とは害をもたらすのに熱心な悪霊とわきまえねばならない。彼らは正義のなんたるかを知らず、慢心でふくれあがり、羨望に顔青ざめ、精妙な詐術を弄する存在なのだ……

——聖アウグスティヌス『神国論』第十三巻第二十二章

異端が生じるだろうということはキリストも予言しているが、旧弊が廃されるだろうということは、だれも予言していない。

——トマス・ブラウン『医者の宗教』第一巻第一章

本来ならアルバカーキでヴェイゲイの飛行機を出迎えてから、彼を自分のサンダーバードにのせて〈アーガス〉まで連れ帰りたかった。ソ連代表団の残りのメンバーは、〈アーガス〉の公用車で運べばいいのだから。ひんやりとした朝の大気の中を飛行場までとばしたらどんなに楽しかっただろう、とエリーは思った。たぶん、道端に儀仗兵よろしくずらっと並んだウサギたちの前を、また通ることになったかもしれない。それに、帰りの車中、ヴェイゲイと水入らずで、実のある長い会話を交わすことも、彼女は楽しみにしていたのである。ところが、大統領直属のGSA（調達局）から派遣された新任の警護員たちによって、その案は葬られてしまった。二週間前の記者会見における大統領の厳粛な発表とマスコミの過激な報道に刺激されたのだろう、人里離れた砂漠にある〈アーガス〉本部の周辺には、すでに大勢の群衆がつめかけていた。暴力事件が発生する恐れもある、とエリーは告げられていた。これから先、彼女は、目立たぬよう武装した警護員の同乗する、政府さしまわしの車でしか移動してはならないという。ソ連代表団を出迎えにゆく小編成の車の列は、あまりにも控え目で抑制したスピードを保ちながら進んでゆく。エリーは右足がムズムズしてきて、後部シー

トのノヴァにはあるはずもないアクセル・ペダルをぐいっと踏みこみたくなってしまった。

久方ぶりにヴェイゲイとすごすのは、どんなにか楽しいだろう。最後に彼とモスクワで会ったのは十年前だから、彼が西側諸国の訪問を禁じられていたときだった。この十数年、ヴェイゲイが外国旅行をする機会は、ソ連政府の政策の変化と彼自身の衝動的な行動の結果に左右されて、増えたり減ったりしてきた。彼がやむにやまれずなんらかの政治的挑発行為を行うと旅行許可はとり消され、随時編成される科学代表団の団員候補に彼に匹敵する能力の持ち主が見つからないと、また許可がおりる。ゼミナール、特別講義、非公式会議、合同研究、国際機関の委員会――彼のもとにはほぼ世界中から各種の会合への招待状が舞いこんだ。ソ連科学アカデミーの正式会員であると同時に物理学のノーベル賞受賞者でもあるヴェイゲイは、一般のロシア人よりは行動の自由を享受できたと言えよう。じっさい、ソ連政府の忍耐のギリギリの限度のところで、彼がきわどい綱わたりを演じているように見えることが、過去に何度もあったのである。

ヴェイゲイの正式な名前は、ヴァシリー・グレゴリヴィッチ・ルナチャルスキー。世界の物理学界では、そのファースト・ネームと父称のイニシャルをとってヴェイゲイという愛称で呼ばれている。彼がソ連の政権と不安定で曖昧な関係を保ちながらも延命している事実は、エリーにとっても他の西側の科学者たちにとっても不思議の種子だった。彼は、ゴーリキー、レーニン、トロツキーらとボルシェヴィキの同志だった、アナトリー・ヴァシリエヴィッチ・ルナチャルスキーの遠い親戚だという。アナトリー・ルナチャルスキーはのちに教育担

当人民委員をつとめ、一九三三年にこの世を去るまでソ連の駐スペイン大使をつとめている。ヴェイゲイの母親は、ユダヤ人だった。彼はソ連の核兵器開発にも携わったと噂されているが、そのころはまだ若年だったはずだから、ソ連初の核爆弾の実験には、さほど重要な役割は果さなかっただろう。

ヴェイゲイの研究所はスタッフ、施設とも優秀で、彼自身、旺盛な研究活動をつづけている。ということは、国家保安委員会（KGB）の横槍が入ることが比較的少ないことを意味しよう。外国旅行の断続的な規制にもかかわらず、国際会議にはかなり出席しているほうで、そのなかには、高エネルギー物理学の〝ロチェスター・シンポジウム〟や、相対論的天体物理学の〝テキサス会議〟といった主要な会合が含まれている。国際緊張の緩和を意図する科学者たちの、非公式だが大きな影響力を発揮することもある会合、〝パグウォッシュ会議〟のメンバーでもある。

エリーの聞いたところでは、一九六〇年代にカリフォルニア大学バークリー校を訪れたヴェイゲイは、過激な政治スローガンや瀆神的でスカトロジックな文句を記した安価なボタン・バッジが氾濫しているさまを見て、大いに喜んだという。たしかに、あのバッジをひとめ見ただけで当人のいちばん切実な社会的関心が読みとれたものだわ、とエリーも当時を想起して淡いノスタルジーを覚える。ソ連でもあの種のバッジは人気を呼んで、すごい売れゆきを示したそうだが、やはりお国柄か、人気サッカー・チームの〈ダイナモ〉とか、月に最初に着陸して大成功をおさめた〝ルナ〟宇宙船シリーズの名前をあしらったものが多かった

らしい。ヴェイゲイはカリフォルニアで何十個も買ったそうだが、とくに気に入ったものが一つあったという。それは彼の掌大のサイズで、〝セックスのために祈れ〟と書いてあった。彼はそれをつけて公式の学会にも出席した。なぜそんなに気に入ったのかと問われて、こう答えた――「きみたちの国だと、この文句はただ一点のみを指弾される。わたしの国では、二つの点を指弾されるんだ」

さらに深くつっこまれると、彼はただこう答えるにとどめた――わたしの有名なボルシェヴィキの親類は、社会主義国家における宗教の地位に関する本を書いたことがあるんだよ、と。爾来、彼の英語は――エリーのロシア語とは比較にならないほど――上達したのだが、反逆的なバッジをつけようという意欲は、悲しいことに、薄れてしまったらしい。

あるとき、お互いの国の政治制度の長短について活発に論じ合ったさい、エリーはこう自慢したことがある――わたしはベトナム戦争たけなわのころ、ホワイトハウスの前で、アメリカの介入に反対するデモを自由に行うことができたわよ、と。するとヴェイゲイは答えたものだった――わたしも同じころ、クレムリンの前で、アメリカのベトナム介入に反対するデモを自由に行うことができたさ。

が、彼は、ニューヨークで催された会議の合い間にエリーにつれられてスタテン島を訪れたときなど、ソ連の他の学者たちとちがって、悪臭を放つゴミを満載した塵芥船や、自由の女神像の前に群れるカモメなどを写真に撮ったりはしなかった。海岸沿いの豪華ホテルからアレシボ天文台にバスで移動するさい、ソ連の学者たちはきまって、崩れかけた住宅やプエ

ルトリコ人たちのトタン張りの小屋などを写真に撮るものだが、ヴェイゲイはちがった。それにしても、彼らはその写真をだれにわたすのだろう？　たとえば、KGBの本部には、資本主義社会の矛盾や不平等や惨苦を例示するための大図書室があるのかもしれない、とエリーは思ったりする。自分の国の欠陥に直面して落胆したソ連人たちは、資本主義社会も決して天国ではないことを知って安堵するのだろうか？

この数十年、ソ連には、なぜか東欧圏以外に出国を許されない優秀な科学者が大勢いる。たとえばコンスタンティノフは、一九六〇年代中期まで、西ヨーロッパへの旅行を一度も許されなかった。ワルシャワで催された国際会議の席上——討議がすでに終って、テーブルには飲み干されたアゼルバイジャン産ブランディーのグラスがいくつも並んでいたが——なぜあなたは国外旅行を許されないのか、と訊かれたコンスタンティノフは、こう答えた——

「なあに、わたしが国外にでれば二度と帰ってこないことを、連中は知ってるからさ」

が、一九六〇年代末期から一九七〇年代初期にかけて、アメリカとソ連の学界にも雪どけが訪れると、彼も外国旅行を許されたのである。そして、そのつど帰国した。けれども、このごろはまた許可がおりず、新年を迎えるたびに、彼は西側の友人たちに年賀状を送ることで憂さばらしをしている。その葉書には、ブラックホールの半径を求める〝シュヴァルツシルドの方程式〟の上に置かれた天球に、彼が脚を組み、首うなだれてすわっているさまが描かれていた。モスクワを訪れる知人に対しては、物理学の比喩をつかって、自分は深い井戸の底にいるようなものだ、と語るらしい。おそらく、彼が国外に旅する許可は二度とおりな

いだろう。

政治問題について問われると、ヴェイゲイはこう答えるのがつねだった――一九五六年のハンガリー革命はファシストのシンパによって組織されたのであり、一九六八年のプラハの春は人民から遊離した反社会主義グループによって演出された、というのがソ連政府の正式見解である、と。が、つづいてこうも付け加えるのだ――ただし、自分の聞かされたことがまちがっていて、いずれの事件も真の人民の蜂起だったとしたら、それを鎮圧したソ連政府はまちがっている、と。アフガニスタン問題になると、政府の弁明の引用すらしなかった。あるとき、研究所の自分のオフィスで、彼は私物の短波ラジオをエリーに見せたが、そのボディーには、ロンドンとパリとワシントンの放送の周波数がキリール文字で整然と書かれていた。ほら、わかったろう、と彼は言った――わたしはあらゆる国のプロパガンダを自由に聞けるのさ。

ある時期、彼の多くの同僚が黄禍論を説く政府のレトリックを鵜呑みにしたことがあった。そういう連中の一人は、エリーの想像力に挑むように言ったものである――「考えてもみたまえ、ソ連と中国の全国境線に、中国軍の兵士たちが侵入を企図して、蟻の這いでるすきもなくずらっと並んでいるさまを」

そのとき彼らは、研究所の所長室で、サモワールを囲んで立っていたのだった。「現在の中国の出生率が変らないとすると、彼らが中国領土内にあふれかえって、ソ連領土内になだれこんでくるまでにどのくらいかかると思う?」

ランドルフ・ハーストのような人物なら、こうした質問をさぞ喜んだことだろう。が、ヴェイゲイはちがった。彼は、暗い予言に意表をつく算術の味つけをして答えたのである——
「そういう日は、絶対に訪れんだろうね」
国境線にそれだけ多数の中国軍兵士を貼りつけにしたら、出生率は自動的にさがるはずだから、その設問自体がナンセンスだ、というのが彼の論旨だった。計算の前提がまちがっているのだ、というところに力点を置いたような話しぶりだったが、ヴェイゲイの真意を誤解する者はほとんどいなかった。エリーの知るかぎり、中ソ関係が最悪だった時期にも、彼は偏頗な愛国心や人種的偏見の渦に呑みこまれるようなことは決してなかった。
それにしても、あのサモワールのなんと素晴らしいことか。ロシア人があれを愛してやまないわけが、エリーにはよく理解できるのだった。成功をおさめた彼らの無人月面走行車〝ルナホート〟は浴槽に針金の車輪をつけたような形をしているが、あれにもきっと、サモワールを考案した彼らの祖先の知恵が生かされているのではないか、という気がするのだ。
ある晴れた六月の朝、エリーはヴェイゲイにつれられて、モスクワ郊外の広大な展示場にあるルナホートの模型を見にいったことがあった。タジク自治共和国の物産を展示するビルの隣に大きな建物があり、その中に、ソ連の非軍事用宇宙探査船の実物大模型が、天井に触れなんばかりにぎっしりと並んでいた。世界で初めて地球軌道をまわった宇宙探査機スプートニク一号、世界で初めて動物——のちに宇宙で死んだライカ犬——をのせた宇宙探査機スプートニク二号、世界で初めて他の天体に到達した宇宙探査機ルナ二号、世界で初めて月の

裏側を撮影した宇宙探査機ルナ三号、世界で初めて他の惑星に無事着陸した宇宙探査機ヴェネラ七号、そして世界で初めて人間――ソ連宇宙飛行士英雄ユーリ・A・ガガーリン――をのせて地球を一周したヴォストーク一号。建物の外では、子供たちが、ヴォストークの発射ブースターのひれをすべり台代りにして遊んでいた。きれいにカールした金髪と赤いコムソモールのネッカチーフを風になびかせて、彼らは嬉々として大地にすべりおりてきた。大地はロシア語で、〝ゼムリヤ〟という。北極海には、〝ノヴァヤ・ゼムリヤ（新天地）〟と呼ばれるソ連領の大きな島がある。人類史上、単一の爆発としては最大規模といわれる五十八メガトンの水爆実験が一九六一年に行われたのは、この島だった。が、あの六月の朝、その公園ではモスクワっ子ご自慢のアイスクリームの売り子が声をはりあげ、歯の欠けた老人が恋人たちを見るようにヴェイゲイとエリーに微笑みかけ、そこかしこで何組もの家族づれが戯れていた。新天地ならぬ旧天地もまたいいものだ、とエリーはしみじみ思ったものである。

彼女の数すくないモスクワ訪問やレニングラード訪問の折、ヴェイゲイはきまって楽しい夜を演出してくれた。親しい友人たち五、六人を誘って、ボリショイ・バレーやキーロフ・バレーを観にいくのだ。どう手をまわすのか、ヴェイゲイはきまって切符を入手してくれる。エリーが感謝すると、同行するヴェイゲイの友人たちもまた、外国の賓客と一緒でなければ自分たちもこういう舞台は鑑賞できないのだと言って、彼女に感謝する。ヴェイゲイは黙って笑っていた。どういうわけか彼は細君を同道しないので、エリーも彼女を一度も見たことがない。うちの家内は医者で、患者の応接に忙殺されているのさ、というのがヴェイゲイの

説明だった。エリーはあるとき、あなたがいちばん残念に思っていることはなにか、とヴェイゲイにたずねたことがある。そのときは、彼の両親がアメリカに移住しなかったという事実が、会話にあがったのだ。「残念なことはたった一つしかないね」と、彼はもちまえのざらついた声で答えた。「つまり、娘がブルガリア人と結婚したことだな」

あるとき彼は、モスクワのコーカサス・レストランで晩餐の席を設けてくれた。ハラーゼという名の、ロシア語で〝タマダー〟という職業的司会者が、とくにその夜のために雇われていた。彼は乾杯の音頭をとる名人だったが、エリーのロシア語はまだまだ拙かったので、彼が発する乾杯の文句のほとんどを翻訳してもらう必要があった。彼はエリーのほうをむくと、その夜の成行きを予言するように言った。「わたしらはね、乾杯の文句も言わずに酒を飲むやつを〝アル中〟と呼ぶんですよ」

宴の最初のほうで出た、どちらかといえば平凡な乾杯の文句は〝すべての惑星に平和を〟だった。平和を意味する〝ミール〟というロシア語は、〝世界〟や、大昔までさかのぼる〝農民たちの自治的な集落〟をも意味するのだ、とヴェイゲイは説明してくれた。それから話が発展して、村落程度の集落が現在の国家に匹敵する存在であったころのほうがこの世は平和だったのではないか、という議論になった。「すべての村は惑星だからね」と、グラスを高くかかげてヴェイゲイが言えば、エリーも、「そしてすべての惑星は村なのよ」と応じたことだった。

この種の晩餐は、たいてい、ちょっとした騒ぎになる。大量のウォトカやブランディーが

アッというまになくなるのだが、泥酔する人間はまずいない。午前一時か二時ごろになって、一同にぎやかに外にでてタクシーをさがすのだが、まずつかまえられたためしがない。ヴェイゲイは一度ならず、五、六キロの距離をものともせずに、ホテルまで歩くエリーをエスコートしてくれた。彼は世話好きで、その物腰は姪に対する叔父のような慈愛に満ち、政治的見解の表白には慎重だった。が、学問上の主張には遠慮会釈がなかった。同僚たちのあいだではかなりの艶福家で通っているのに、エリーに対してはおやすみのキスすらしようとしない。それがエリーにはなんとなく物足りなかったのだが、彼が自分に好意を持ってくれているのはまちがいないと思っていた。

ソ連の学界では、かなり多くの女性が活動していた。男性との比率でいえば、アメリカのそれをはるかに凌いでいたと言えよう。だが、実質的な地位となるとやはり低く、相当がんばっても中くらいの地位にしかつけないらしい。アメリカにおけると同様、男性の科学者は、積極的に自説を開陳する才色兼備の女性を前にすると、当惑の色を隠そうとしない。なかには、エリーの発言を遮ろうとしたり、聞えないふりをする者もいた。するとヴェイゲイはきまって前に身をのりだし、ふだんより大きな声をあげて言うのである——「いま、なんと言われたのかな、アロウェイ博士？　もう一度言っていただけんかな、聞えなかったので」

周囲の面々は押し黙り、エリーは砒化ガリウム検知器や星間雲W—3中に存在するエチルアルコールに関して話しつづける。この星間雲中の二百プルーフのアルコールは、地球上の全成人がきわめつけのアル中だとしても、太陽系が存続するかぎり彼らを満足させ得るほど

多量に存在するのである。その話を聞いて喜んだのは、〝ダマダー〟だった。にぎやかに乾杯を重ねながら、彼らはさまざまなことを語り合った——はたして、他の天体の生命体もアルコールで酔っ払うのだろうか？　公共の場所での泥酔は、銀河系全体の問題なのだろうか？　そしてとりわけ、われらがトロフィム・セルゲイヴィッチ・ハラーゼほど乾杯の音頭のとりかたの達者な〝ダマダー〟は、他の天体に存在するのだろうか？

★

アルバカーキ空港に着いてみると、ソ連代表団をのせた旅客機は、珍しく三十分前に到着していたことがわかった。ヴェイゲイはどこにいるのだろう。ロビーを捜していると、土産物店でなにかを値切っている彼の姿がエリーの目に映った。ヴェイゲイのほうでも、目の隅で彼女の姿をとらえたらしい。こちらを見ずに指をあげると、

「ちょっと待っててくれ、アロウェイ」

言ってから、ことさら冷淡な表情を浮かべている店員相手に駆引きをつづけた。「十九ドル五十セントだって？　きのうニューヨークでこれとまったく同じものを見かけたが、十七ドル五十セントだったぞ」

エリーはカウンターにちかよった。ヴェイゲイは、全裸の男女がさまざまなポーズをとっているレーザー写真をあしらったトランプ・カードを、カウンターに広げているところだった。ひとむかし前なら社会的な物議をかもしたその種のカードも、いまでは単に悪趣味な品

と見なされているにすぎない。カウンターいっぱいにヴェイゲイがカードを並べるそばから、店員はあきらめ顔で、それをまた集めている。ヴェイゲイが勝利をおさめつつあった。

「わたしにまけさせようなんて、殺生ですよ。こっちはただ、ここに雇われてるだけなんですから」店員がぼやいた。

「きみたちは計画経済の欠点をあげつらうがね、エリー」二十ドル札を店員にわたしながらヴェイゲイは言った。「本当の自由経済の下だったら、このカードは十五ドルで買えるはずだな。いや、十二ドル九十五セントくらいまで値切れるかもしれん。そんな顔をしたもうな、エリー。これはお土産に買ってるんだから。ジョーカーを入れると、このケースには五十四枚のカードが入っている。わたしの研究所で働いている労働者たちに配ると、とても喜ばれるのさ」

エリーは微笑して、彼の腕をとった。「またお会いできて嬉しいわ、ヴェイゲイ」

「この日を待っていたよ、エリー」

★

ソコロにむかう車中、彼らは暗黙の了解の下に、とりとめもない世間話しか交わさなかった。ヴァレリアンは前部シート、新任の警護員である運転手の隣にすわった。ふだんからさほど饒舌ではない彼は、助手席にゆったりともたれかかって、満足そうに二人の会話に耳を傾けていた。エリーとヴェイゲイは、そもそもソ連代表団が派遣されてきた当の目的、つま

り、アメリカ、ソ連両国がともに受信していながら未解読のままの、重ね書きされた信号の三階目にあたる複雑なメッセージについては、ほとんど車中では触れなかった。

アメリカ政府はしぶしぶながら、メッセージの解読にソ連の協力は不可欠だという結論を下したのである。ヴェガからの信号は、並みの電波望遠鏡ですら探知可能なほど強力であるという事実に照らしても、その判断は妥当だった。ましてや、ソ連における近年の電波探査活動の充実ぶりには、目を見張らせるものがある。数年前、ソ連はユーラシアの地表九千キロにわたって多数の小型電波望遠鏡を設置したし、つい最近はサマルカンド近郊に大規模な電波天文台を完成させたばかりである。それに、大西洋、太平洋の両海洋で、衛星追跡船を巡航させてもいる。

もっとも、ソ連が提供するデータの中には、不必要なものがまじっていることもたしかだった。というのも、日本、中国、インド、イラク等の天文台も、ヴェガからの電波をとらえてくれているからだ。じっさい、いまやヴェガを天空にとらえ得るすべての国の天文台が、信号を追跡していると言っていい。イギリス、フランス、カナダ、オランダ、スウェーデン、ドイツ、チェコスロヴァキア、ヴェネズエラ、それにオーストラリア各国の天文学者たちは、ヴェガが天空にのぼってから沈むまで、片時も目を離さずに観測して、メッセージの断片を記録していた。天文台によっては設備が旧式で、個々のパルスをとらえられないところもあった。そういう場合でも、天文学者たちは雑音に聴き入った。エリーがキッツに指摘したように、地球は自転しているので、それらの国々のすべてがメッセージという大きなハメ絵の

断片を解読することになるのである。どの国もパルスに隠された意味を読みとろうとつとめたが、それはやはり容易ではなかった。第三層のメッセージが果してなんらかの言語で書かれているのか、それとも図形で書かれているのか、という根本的な問題すら、解明し得た人間はまだ一人もいなかった。

メッセージの送信が——かりにそういうことがあったとして——一ページ目にもどり、インーロゲクション、つまり解読のキーがくり返されるまでは解読不可能という事態も、十分にあり得る。"もしかすると、これはとても長いメッセージなのかもしれないわ"と、エリーは——砂漠と亜寒帯林の比較を弁じるヴェイゲイののんびりした口調に聴き入りながら——思った。"じっさい、さまざまな可能性が考えられるのだ。メッセージが一ページ目にもどってくるまでに百年かかるとも考えられるし、解読の手引きなど存在しない可能性もある。ひょっとすると〈メッセージ〉——この言葉は最近世界中でカッコつきで使われはじめた——は、それを解読する能力もない遅れた天体が内容を悪用するのをさけるための、ある種の知能テストのようなものなのかもしれない。それはともかく、アメリカ、ソ連両国が協力を約した覚え書きの調印が厳粛に行われた瞬間、電波望遠鏡を保有する他のすべての国が協力に同意したのだった。それは、世界的な〈メッセージ〉解読協力機構とでもいうべき〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉に発展したのである。〈メッセージ〉の解読のためには、世界中の科学者のデータと知能の活用が不可欠となったのだ。

新聞はその話題でもちきりだった。歯がゆいほどすくない事実——素数、オリンピック大

例のテレビ映像、複雑な〈メッセージ〉の存在——があきることなく、あらゆる角度から論じられた。なんらかの形でヴェガからの〈メッセージ〉を耳にしてない人間は、この地球上に一人もいなかったといっても過言ではあるまい。

〈メッセージ〉の宗教的な意義については、大小さまざまの宗派によって論じられ、分析された。わざわざそのために創始された宗派すらあった。〈メッセージ〉の送り手は神だと主張する宗派もあれば、悪魔だと主張する宗派もあった。そのどちらとも言えないという立場をとる宗派も、意外なことに、存在した。例のテレビ画像の一件が洩れるに及んで、ヒットラーとナチに関する不健全な興味が息を吹きかえしたのは、驚くにあたるまい。ヴェイゲイは、その日曜日の『ニューヨーク・タイムズ・ブックレヴュー』紙の新刊広告中に、鉤十字をあしらったものが八つもあったとエリーに話した。八つぐらいなら最近ではふつうね、と彼女は答えたが、それは多少の誇張がまじっていることは自分でも承知していた。二、三週間前には、同種の広告は二、三点しかなかったのである。

たぶん、宇宙を意味するスペースという言葉とナチス・ドイツが標榜したアーリア民族という言葉を合成したのだろう、〝スペーカーリアン〟と自称する団体が、空とぶ円盤はヒットラー統治下のドイツで発明されたことを証す絶対的な証拠、なるものを発表した。実はナチスの新たな〝純血の〟人種がヴェガで成長し、彼らがいま地上の悪を一掃しようとしてるのだ、というのが〝スペーカーリアン〟の主張だった。

かと思うと、電波信号に聴き入るのを罪悪と断じて、天文台の閉鎖を主張する者がいる一

方、信号をキリスト降臨の前兆と見て、もっと大型の電波望遠鏡の建設を——宇宙基地まで含めて——呼びかける者もいた。一部には、ソ連提供のデータは捏造された疑いがあるから採用を見合わせろ、と忠告するむきもあったが、それは取越し苦労というものだった。ソ連のデータは、イラク、インド、中国、日本等の国々が発表するものとピッタリ符合していたからである。それとは対照的に、世界政治における風向きの変化をいち早く感じとって、たとえ未解読のままに終ろうとも、〈メッセージ〉の存在そのものが、民族国家間の反目を緩和する役割を果している、と見なす人々もいた。〈メッセージ〉を送信している文明がわれわれより進んでいることは確実であり、しかも——すくなくとも二十六年前の時点においては——自滅の道を歩んでない以上、技術文明は必ずしも自壊の道をたどるとは限らないという希望を、見出す人々も少なくない。核兵器とその運搬手段の大幅削減の実験が慎重裡に進められている現在、〈メッセージ〉を希望の証しと受けとる人々も大勢いたのである。〈メッセージ〉は少なからぬ人々によって、近年最大の吉報と見なされた。過去数十年間、若者たちは未来に多くの希望をつながぬように心がけてきた。が、いまやとうとう明るい未来を謳歌できる可能性がひらけてきたのだ。

もともと楽天的な予言を好む性の人々は、この十年来〝千年至福〟派の運動が抱懐してきた主張に、心ならずも、傾斜しつつある。将来キリストが地上に再臨し、この世を千年間統治したのち世界は終末を迎えるだろうという、いわゆる〝千年至福〟説の信者の中には、〝第三千年期〟が遠からず実現すれば、イエスか仏陀かクリシュナか予言者がこの世にもど

ってきて、人類を罰し、裁き、神権政治が地上に確立される、との説をなす者がいる。そういう時代がくれば、それこそ〝選ばれし者〟が大量に天に召されることになるだろう。が、それには異議を呈する千年至福信者もいるし、キリスト降臨が実現するためには、この世がまず物理的に破壊されることが絶対条件だとする者も大勢いる。矛盾点が多い古代の予言も、その一点においてはすべて一致している、というのである。その種の〝地球終焉派〟千年至福信者は、世界平和が進展しそうな形勢に頭を悩ませ、核兵器の備蓄が地球的規模で減少しつつある傾向に不安を抱いている。彼らの信仰の核心が成就するためのもっとも現実的な手段が、日ごとに解体されつつあるからだ。地球の破滅をもたらしそうな他の要因——人口過剰、工業汚染、地震、火山の爆発、大気の温室効果、氷河時代の再来、彗星との激突等——は、実現までに時間がかかりすぎるか、可能性が薄すぎるか、もしくは黙示的な性格が弱すぎるのである。

千年至福派の敬虔な信者の大集会において、こう説いた指導者たちもいた——すなわち、事故に備える場合は別として、生命保険に入るという行為は不真面目な信仰のしるしであり、高齢者むけならともかく、不要不急の墓地を買ったり葬儀の準備をしたりするのは忌むべき瀆神行為である、と。信ずる者はすべて、たかだか数年後には生きながら天国に召され、神の玉座の前に立つのだ、と言いたいのだろう。

ヴェイゲイの有名な縁者アナトリー・ルナチャルスキーは、ボルシェヴィキ革命家でありながら世界の宗教に学問的関心を寄せた稀有な人物であったことは、エリーも知っている。

が、ヴァイゲイ自身が、世界中に波及しつつある宗教的熱狂にふれて述べた言葉は、きわめて醒めていた。「わたしの国における最大の宗教的関心は」と、彼は言ったのだ。「はたしてヴェガ星人はきちんとトロツキーを批判しているかどうか、ということくらいだろうな」

★

一行が〈アーガス〉本部に接近するにつれて、路傍のただならぬ光景が目に入ってきた。そこかしこに乗用車やレジャー・カーが駐まっており、キャンプ用のテントが林立して大勢の人々がむらがっていた。かつては人っ子一人いなかったサン・オーガスティンの平原が、夜ともなればあかあかとキャンプ・ファイアで照らしだされるのである。道路沿いにむらがっている人々は、決して裕福そうではなかった。エリーは二組の若い夫婦に目を留めた。いずれのカップルも、男はTシャツにジーンズという格好で、ハイスクールに入学したさい上級生に教えられたのだろう、すこし肩をいからせた姿勢で活発に話し合っていた。彼らの一人は、二歳くらいの男の子がすわっている古びたベビーカーを押している。女たちは夫のあとにしたがっていたが、そのうちの一人は、歩き方を覚えたばかりの幼児の手を引いており、もう一人は、一、二カ月後にこの小さな惑星の新たな住民となるらしい胎児を身ごもっている様子だった。

集まった群衆のなかには、幻覚剤のサイロシビンを聖餐としている、タオス郊外の隠者村からきた神秘家もいれば、エチルアルコールを聖餐としている、アルバカーキ近郊の修道院

からきた尼僧もいた。野外生活一筋の人生を送ってきた、ショボついた目の、なめし革のような肌の男たちもいれば、ツーソンのアリゾナ大学からやってきた、本好きの青白い顔をした学生たちもいた。絹のネクタイやピカピカの銀のストリング・タイを法外な値段で売っているナヴァホ族の商人たちもいたが、これなどは、白人と原住アメリカ人の間の歴史的商業関係を小規模ながら逆転したものと言えよう。チューインガムや嚙みタバコをさかんに買っているのは、休暇を利用してデイヴィス・モンサン空軍基地からやってきた兵士たちだった。九百ドルもしそうなスーツを着て、似合いの色のステットソン・ハットをかぶった、エレガントな身なりの白髪の男性は、たぶん、近郊の牧場主だろう。じっさい、そこにはあらゆる階層の人々が集まっていた。バラックずまいの連中、高層ビルに住む連中、アドービ・レンガ造りの小屋に住む連中、寮ぐらしの連中、そしてトレーラー・ハウスに住んでいる人々。暇つぶしにやってきた連中もいれば、ここにきたことをいずれ孫たちに語り伝えたいがためにきたという連中もいた。〈アーガス〉の失敗を望んできた者がいる一方では、奇跡の目撃を確信してきた者もいた。控え目な信仰、騒々しい浮かれ騒ぎ、神秘的な陶酔、静かな期待――それらが渾然となってかもしだす熱気が、明るい午後の陽光のなかに立ちのぼっているかのようだった。〝アメリカ政府官庁専用車〟とボディーに記された車の隊列が通りすぎると、興味なげにふり返る者が何人かいた。

ハッチをあけたワゴンの荷台で昼食をとっている家族があるかと思うと、〝スナックモーヴィル〟とか〝スペース・スーヴェニア〟とボディーに大書された移動売店でいろいろな品

を買っている連中もいる。〈アーガス〉のほうで周到に設置した臨時トイレの前には、長い列ができていた。車や寝袋や毛布や組立て式のピクニック・テーブルのあいだを駆けまわっている子供たちは、めったに叱られる様子がない。叱られるとすれば、ハイウェイや第六一望遠鏡のちかくのフェンスに近よりすぎたときだった。そのフェンスの前では、頭をツルツルにそった、やけに物腰の丁寧な、サフラン色の長衣をまとった若者たちが、聖なる言葉"オム"を荘厳な口調で唱えていた。この種の騒ぎにつきもののポスターも、あちこちで売られていたことは言うまでもない。地球外生物のリアルな空想画もあれば、マンガや映画で有名になったキャラクターを描いたものもあった。"われわれのなかにエーリアンがいる"という文句をあしらったものもあった。金色のイヤリングをした男がだれかの小型トラックのドア・ミラーをつかってひげをそっているかと思うと、メキシコ風の肩かけをかけた黒髪の女が、通りすぎるエリーたちの車にむかって、コーヒー・カップをうやうやしげにかかげてみせたりした。

第一〇一望遠鏡のちかくの新しい正門に接近したとき、急造の演壇上からかなりの数の群衆にむかって演説をぶっている青年の姿がエリーの目にとまった。彼は、地球が稲妻に打たれている図をあしらったTシャツを着ていた。聴衆のなかにも、同じ謎めいた図柄のTシャツを着ている者が散見された。正門を通過してから、エリーの提唱で、一行は道路のわきに停まって窓をおろし、耳を傾けた。演壇上の若者はこちらに背をむけており、エリーたちの目には聴衆の顔が見えた。みんな感動している様子だわ、と彼女は思った。

演壇の若者は、熱弁の真っ最中だった。「……それに、悪魔との契約がむすばれたのだと言う者もいるぞ、科学者は自分たちの魂を売りわたしたのだ、という者が。ここに並んでいる望遠鏡のなかには、例外なく、貴重な宝石が入ってるんだ」第一〇一望遠鏡のほうに手をふって、「科学者だって、否定はしていない。それは悪魔のとり分だ、と言う者もいる」

「宗教家の名を借りたゴロツキだな」うんざりした口調でヴェイゲイが言い、すぐにでも走りだしたそうに前方の道路を見やる。

「でも、もうすこし聴いてみましょうよ」エリーは答えた。好奇心に抗いがたいような薄い笑みを、彼女の唇は含んでいた。

「信仰厚き人々、神を恐れる人々は、いわゆる〈メッセージ〉なるものが宇宙にいる存在から送られたのだと信じてるようだ。宇宙にいる生物、それはわれわれに危害を加えようとしているエーリアン、人類の敵以外の何物でもない！」叫ぶように言い放ってから、演出効果を狙って一息つき、「みんなはもはや、この世の堕落、社会の腐敗にうんざりしているはずだ。つくづくいやけがさしているはずだ。そして、この腐敗をもたらした元凶こそ、正邪の区別もつかぬ、増上慢の、神をも恐れぬテクノロジーなんだぞ、諸君。いまはまだ、だれの見方が正しいのかはわからない。〈メッセージ〉を送ってよこしたのはだれか、狙いはなにか、こちらの見当はとっくについているが、まだ断言はすまい。答はいずれ明らかになる。が、いまの段階でもわかっていることが一つある。それは察しがつくだろう、みんな。科学者と政治家と官僚どもは、われわれ庶民になにかを隠している、ということだ。連中がまだ

話してない事実がきっとある。例によって、連中はわれわれ庶民をだましているんだ。ああ、神よ、われわれはあまりにも長いあいだ、彼らの投げてよこす嘘を鵜呑みにしてきた、彼らの生みだした腐敗に耐えてきた。が、もう我慢もこれまでだ」

驚いたことに、そうだ、その通り、と同調する声が、聴衆のなかから海鳴りのように湧き起こってきた。壇上の若者は、エリーが漠然と懸念していた大衆の怒りにみごと火をつけたらしい。

「科学者どもは、われわれが神の子ではない、と思ってる。われわれは猿の子孫だと、連中は思ってるんだ。科学者どものなかには、有名な共産主義者までいる。そんな連中に、われわれのこの地球の運命を決めさせていいのか、みんな?」

ノー、という声が、聴衆のあいだから雷鳴のように湧いた。

「一握りの不信心者どもに神との対話をさせていいのか?」

「ノー!」またしても、怒濤のような声。

「悪魔と取引きさせていいのか? 彼らは異星の怪物たちにわれわれの未来を安売りしようとしてるんだぞ、みんな。兄弟姉妹たちよ、この地には邪悪なる者がはびこってるんだ」

それまでエリーは、てっきり演説者に気づかれてないと思っていた。が、彼はくるっとこちらをふりむくと、エンジンをかけたまま停止している車の列を金網ごしに指さすではないか。

「あの連中は、われわれを代弁してはいない! われわれの代表ではない! われわれの名

をかたって勘引きする権利はないんだ！」

フェンスのちかくにいた男たちが、金網を押したり揺すぶったりしはじめた。ヴァレリアンと運転手の顔に、懸念の色が浮かぶ。エンジンをかけ放しにしておいたので、彼らは一瞬のうちにスタートすることができた。本部の建物にたどりつくには、砂漠をまだ何マイルも走らなければならないのだ。タイヤの悲鳴と聴衆のざわめきを圧するように響きわたる演説者の声が、エリーの耳にはっきりと聞えた。

「必ずやこの地の悪を制圧してみせるぞ。ああ、誓って制圧してみせるとも」

第八章　ランダム・アクセス

CamScannerでスキャン

神学者の仕事は呑気なもので、宗教とは天から降りてきて、生来の純潔さを保っているのだ、と言っていればすむ。歴史家に課された任務はもっと憂鬱である。歴史家は、この地上を長らく支配した宗教が、心弱き者や堕落した者のあいだに広めた過誤と退廃の不可避の混合を、発見しなければならぬのだから。

——エドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡史』第十五巻

CamScannerでスキャン

エリーは、ゆきあたりばったりに局を選ばずに、周波数の順にテレビのチャンネルを合わせていった。隣同士のチャンネルで、〝大量殺人者のライフスタイル〟とおふざけ番組の〝ユー・ペット・ユア・アス〟をやっていた。テレビというメディアが、まだまだ理想の水準からほど遠いことは、それだけで明らかである。ジョンスン・シティ・ワイルドキャッツとユニオン・エンディコット・タイガーズの白熱したバスケットボールの試合を中継している局もあった。若い男女のプレイヤーたちが、力の限り戦っている。次のチャンネルでは、断食(だんじき)の好ましい実践法と好ましくない実践法を対比するペルシャ語の説教が流れていた。おつぎは、禁断のチャンネルの一つ。この局は、世界のどこでも顰蹙(ひんしゅく)を買うような性行為の紹介を専門にしているらしい。そのお隣が主なコンピュータ局の一つで、いまでは落ち目のアドベンチャー・テレビゲームの専門チャンネルだ。これを自宅のホーム・コンピュータにつなぐと、新しいアドベンチャー・ゲーム——きょうのタイトルは〝銀河のギルガメシュ〟——を一回だけ楽しむことができる。視聴者に面白(おもしろ)さの味見をさせて、フロッピー・ディスクを買わせようという魂胆である。電子予防装置がとられているので、一回のプレイのあい

CamScannerでスキャン

だにプログラムを採録することはできないようになっている。この種のテレビゲームのほとんどは、まったく見当ちがいの方法で大人たちに未来を予見させようとする、不毛の試みなんじゃないかしら、とエリーは思う。

つぎに目がとまったのは、かなり以前のニュース・ショウの再映シーンだった。真剣な面持のニュース・キャスターが、アメリカ第七艦隊の駆逐艦二隻がトンキン湾で北ベトナムの魚雷艇から一方的な攻撃を受けたことを深刻な口調で伝え、アメリカ大統領が反撃に〝必要なあらゆる措置〟をとる許可を議会に要請した、と述べた。これはエリーのお気に入りの番組の一つ、〝きのうのニュース〟で、過去のニュース番組の再映が売物になっている。番組の後半は、前半で流された誤った情報の詳細な解剖と、番組独自の主張にあてられている。その主張とは、いかなる政権からどんな非難を浴びようと、事実無根のそしりをどんなに受けようとも、テレビ局が独自に取材したニュースは信頼が置ける、というものだ。これは〈リアルTV〉と称するプロダクションの制作だが、同プロダクションは、ほかにもいくつかの番組を制作している。市町村、州、国政レヴェルの選挙公約のその後を追って、公約違反の背景を分析する番組〝プロミス・プロミス〟もそうだし、広く普及している偏見、プロパガンダ、神話の仮面をはぐ週に一度の番組、〝ペテンとたわごと〟もそうだ。トンキン湾事件の画面の隅にでている日付は、一九六四年八月五日。一瞬、ハイスクール時代の思い出――ノスタルジアという言葉は適当ではない――が、胸中に湧きあがってきた。エリーはなおもチャンネルをまわしつづけた。

さまざまな番組が、画面に現われては消えてゆく。ヒバチ（火鉢）が今週の焦点になっているオリエンタル料理シリーズ、ハッデン・サイバネティックス社制作の第一世代多目的家事ロボットの長時間広告、ソ連大使館提供のロシア語によるニュース解説番組、いくつかの子供むけニュース番組、数学専門局が流しているコーネル大学の新しい分析幾何学コースの目のまわりそうなコンピュータ・グラフィックス、そして、これでもかと言わんばかりに昼の時間帯に集中しているくだらない昼メロ・シリーズの数々。それらを通りすぎると宗教専門局が集まっていて、そこでは、熱気を帯びた〈メッセージ〉論議があきずにくり返されていた。

すでにアメリカ全土で、教会に通う人の数が飛躍的に増大していた。〈メッセージ〉は——とエリーは思う——各人が自分の信仰をそこに映して安心したり敵意に燃えたりする鏡のようなものとなったのである。それは、この地上の相互排除的な、黙示的にして終末論的なあらゆる教義を、一括して切り捨てる鋭利な刃（やいば）にも見たてられたのだ。ペルー、アルジェリア、メキシコ、ジンバブエ、エクアドル、それにホピ族インディアンのあいだでは、自分たちの初期文明は果して宇宙から移植されたのだろうか、という深刻な議論が生れた。移植説をとる者は植民主義者として排撃された。カソリック信徒は地球外知的生物が浴している恩寵（おんちょう）を論じ、プロテスタントはイエスが地球にさきがけて近隣の惑星に伝道にゆき、そこから地球にもどってきた可能性について論じた。イスラム信徒たちは、〈メッセージ〉が偶象崇拝を禁ずる戒律に抵触するのではないかと恐れた。クウェー

イマーム（マホメットの後継者）なりと名のりをあげた男が現われたという。ハシディズム信徒のあいだでは、救世主の出現への期待が燃えあがった。他の正統派ユダヤ教徒たちのあいだでは、アストリュックに対する関心がにわかに甦ったらしい。この狂信者は知識が信仰を歪めることを恐れるあまり、一三〇五年、当時の指導的なユダヤ教の聖職者であったバルセロナのラビをそそのかして、二十五歳以下の信徒による科学や哲学の研究を禁じさせたのである。したがわない者は、〝破門〟だった。似たような宗教論議は、イスラム圏においても顕著だった。縁起のよいことに〝多くの市民〟を意味するポリデモスという名を持つテサロニケの哲学者は、世界の宗教、政府、人民の〝再統合〟を熱っぽく唱道して注目を集めていた。彼を批判する者は、なによりもまず〝再〟の意味をつまびらかにせよ、と迫った。

一方、UFOの信奉グループは、ブルックス空軍基地における二十四時間監視態勢をとっていた。この基地には、一九四七年に不時着大破した空とぶ円盤の乗員たちの、完璧な死体四体が冷凍室に保存されている、と言われているのである。彼らは身長一メートルで、きれいに揃った小さな歯を持っているという。インドではヒンズー教のヴィシニュ神の霊を、日本では阿弥陀仏の化身を、それぞれ目撃したという報告がよせられていた。聖地ルールドでは何百件もの奇跡の治療が行われたと発表され、チベットでは新たな菩薩が顕現した。オーストラリアでは、お隣のニューギニアから新たなカーゴ・カルトが輸入された。特定の時期に、先祖の霊が船などにたくさんの宝をつんでもどってくると説くこの信仰の信者がこんど促されたのは、粗末な軍用滑走路の模型の作製だった。それによって、地球外知的生物から

の気前のよい贈り物を吸いよせられるというわけだろう。世界自由思想家連合は、〈メッセージ〉を神の存在しない証拠と呼び、モルモン教はそれをモロニ天使の二度目の顕現と断じた。じっさい〈メッセージ〉は、さまざまなグループからさまざまな証拠に擬せられた――多神の証拠、一神の証拠、そして無神の証拠。〝至福千年説〟は燎原の火のように広がった。キリストの再臨する千年王国は一九九九年に実現すると予言する者もいた――これはかつてサバタイ・ゼヴィが千年王国実現の年に指定した一六六六年の6を、9に倒置してわりだしたものらしい。かと思うと、イエスの誕生と死の二千年記念年と目される一九九六年か二〇三三年を選ぶ者もいた。古代マヤの暦の〝偉大なサイクル〟は二〇一一年に完結すると言われているが、その年に――この独立した文化的伝統によれば――宇宙が終焉を迎えるのだという。マヤの予言とキリスト教の千年至福説の結合は、メキシコと中央アメリカである種の終末論的熱狂を醸成していた。もっと早い時期における実現を信ずる千年至福信徒のなかには、自分の富を貧者に分け与える者もでてきた。それは、いずれ富など無価値になるという信念のせいでもあったし、早くキリストを再臨させてくれと神に乞い願う、ある種の賄賂のようなものでもあっただろう。狂躁、狂信、恐怖、希望、白熱の論争、静かな祈り、苦悩に満ちた再評価、模範的な自己犠牲、偏狭な独善、そして画期的な新思想への渇仰――それらが至るところに蔓延し、この地球という小惑星の地表を熱っぽく蔽いつくそうとしていた。

そしていま、この大騒動の中から、われわれの住む地球は広大な宇宙というつづれ織りの一本の糸にすぎないのだという認識が、ゆっくりと立ち現われつつあるように、エリーには思

われるのだった。一方、〈メッセージ〉そのものの解読は、依然として難航しつづけているのだが。

彼女は、歯に衣着せない論調で鳴るニュース解説専門局にチャンネルをまわした。言論の自由を保証した憲法修正第一項で守られているそのチャンネルでは、彼女、ヴェイゲイ、ダヘーア、そして、彼らほどではないにせよピーター・ヴァレリアンまでもが、無神論、共産主義信奉、〈メッセージ〉の隠匿、を含むありとあらゆる罪障のゆえに指弾されていた。それは見当ちがいもいいところだった。エリーの考えでは、ヴェイゲイはコチコチの共産主義者ではないし、ヴァレリアンは深い、控え目な、それでいて洗練されたキリスト教信仰の主なのだから。もしわたしたちが幸いにも〈メッセージ〉の解読に成功しそうになったら、まっさきに、この信心ぶった、軽薄なニュース解説者に教えてやろうじゃないの、とエリーは思った。彼女たちとは対照的に、ドラムリンは、素数とオリンピック放送の解読に道をひらいた真の功労者として英雄扱いされていた。現在必要なのは彼のような科学者である、というのだ。エリーは溜息を洩らして、またチャンネルを変えた。

こんど映ったのはTABS、つまり〈ターナー・アメリカン放送網〉だった。広範囲の衛星放送が導入されて、一八〇チャンネルのケーブル・テレビが出現するまでアメリカのテレビ界を支配していた大放送網のなかで、唯一競争に生き残った局である。この局では、めったにテレビに登場することのないパーマー・ジョスが、視聴者にむかって説教していた。よく通る声、無精ひげがわずかに目立つ整った顔立ち、人類の運命を心配するあまり満足に眠

ってないんじゃないかと思わせるような目の下の隈——それらの特徴から、大方のアメリカ人同様、エリーもすぐに彼だと見分けがついた。

「科学はいったい、われわれのためにどんな貢献をしてくれたのでしょうか？」彼は熱っぽく問いかけた。「われわれは、本当に以前より幸せになったのでしょうか？　もちろん、わたしは種子なしぶどうとかレーザー・テレビ等の、表面的な恩恵をさしているのではありません。われわれは、人間としての根本から幸せになったのでしょうか？　それとも、科学者たちはわれわれに玩具を、テクノロジーを生かしたガラクタを与えることによって、われわれの尊い信仰を葬りさろうとしているのでありましょうか？」

この人はもっと単純な時代を渇望してるんだわ、とエリーは思った。彼は、両立せざるものを両立させることに全精力を費やしてきた。一方では大衆的宗教の堕落を厳しく非難してきたのだが、それゆえにこそ、返す刀で進化論や相対性理論を攻撃することも正当化され得ると考えているふしがある。それならいっそ、電子が存在する事実そのものを攻撃すればいいのに。ところが、パーマー・ジョスには電子が見えないし、聖書は電磁気とは縁もゆかりもない。どうして電子の存在を信じる必要がある、と彼は反問することだろう。パーマー・ジョスの説教を聞くのは初めてだったが、いずれ〈メッセージ〉にも言及するにちがいない、とエリーは思った。その予感は的中した。

ジョスは話題を〈メッセージ〉に移した。「科学者たちは情報を独占し、われわれにはほんの断片しか教えません——われわれを怒らせないだけの量を与えておけばいい、と考えて

いるのです。われわれの愚劣な頭では彼らのしていることを理解できない、と思っているのです。彼らがわれわれに与えるのは、証拠のない結論です。臆測ではなく聖典のように見せかけた発見であり、仮説です――しかし、世の常識ある人々はそれを単なる推測と呼ぶのです。彼らの唱道する新理論が果して旧理論のように人々の役に立つのかどうか、彼らは決して明らかにしようとしません。自分たちの知っていることを過大評価し、われわれ一般人の知っていることを過小評価する――それが科学者です。われわれが説明を求めると、いや、それを理解するには何年もかかる、と彼らは言う。それは、わたしにもわかる。なぜなら、宗教においても、理解するのに何年も要する事柄があるからです。たとえば一生かかっても、万能の神の本質を理解することはかないますまい。ところが、彼らの前に立ちふさがる、何年がかりの研究、洞察、祈りについて、彼ら科学者が宗教界の指導者に教えを乞いにきたという話を、わたしは寡聞にして知らない。

　そしていま、彼らはヴェガ星から〈メッセージ〉を受けとりつつある、と称しています。しかし、星には〈メッセージ〉など送れるはずがない。だれかが送っているのです。それはだれなのか？　いうところの〈メッセージ〉の狙いは神聖なものなのか、悪魔的なものなのか？　〈メッセージ〉が解読されたとき、最後の署名は〝あなたの真実なる神〟で終るのでしょうか、はたまた〝あなたの誠実なる悪魔〟で終るのでしょうか？　科学者たちが〈メッセージ〉の内容をわれわれに公表するさい、彼らは真実を余すところなく教えてくれるでしょうか？　それとも、われわれの理解にあまるという理由から、もしくは、解読の結果が彼

らの予想とはちがったという理由から、一部を隠そうとするでしょうか？　みなさん、われわれ人類を絶滅する手段を考案した張本人こそ彼ら科学者たちであるという事実を忘れてはなりません。

　だからこそ、わたしはみなさんに言いたい——科学は一握りの学者の群に独占させるにはあまりに重要だ、と。解読作業には主要な宗教の代表者も加わるべきだ、と声を大にして言いたいのです。われわれもまた生のデータに接するチャンスを与えられるべきです。〝生の〟というのは、科学者たちの用語ですが。でなければ、それが許されなかったら、いったいどういう結果が惹起されましょう？　彼ら科学者は、〈メッセージ〉について何事かを報告するでしょう。それは、彼らが本当に確信していることかもしれない。が、そうではないかもしれない。いずれにせよ、現状のままでは、われわれは彼らの発表を頭から信じる以外ないのです。けれどもみなさん、科学者は万能でしょうか？

　この世には彼らに理解できるものもあれば、これは誓って言うけれども、逆に、なにひとつ理解できないことも厳として存在するのです。彼らはたしかに、他の天体からの〈メッセージ〉を受信したのかもしれない。が、そうではないかもしれない。いうところの〈メッセージ〉が〝金の仔牛の偶像〟ではないと、彼らには断言できるのでしょうか？　彼らにはその見きわめをつける能力がない、としかわたしには思えないのです。なんといっても、あの水素爆弾をこの世にもたらした張本人こそ彼ら科学者なのですから。ああ、主よ、彼ら心優しき人々にもっと寛大であり得ないわたしを許したまえ。

わたしは神と対面してきました。わたしは自分の全存在を賭けて、全霊をあげて、神を崇拝し、信頼し、敬愛しています。この世のだれにもまして深く神を信じていると思っています。わたしの神への信仰以上に深く科学を信仰している科学者は、この世に二人とおりますまい。

彼らは科学上の新説が誕生すると、古い〝真実〟を簡単に捨て去ります。それを誇りにしています。知識には限りがないと、彼らは考えています。この世の終りまでわれわれは無知の状態に封じこめられるのであり、自然界にはいかなる確実性も存在しないのだ、と想像しています。ニュートンはアリストテレスの理論を覆しました。そのニュートンの理論をアインシュタインが覆しました。あすにはまただれかがアインシュタインの理論を覆すでありましょう。われわれがある一つの理論を理解したと思うと、もうそれに代る新たな理論が誕生しているというのが、科学なるものの実相です。それでも、もし彼らがあらかじめ、この理論は一時的なものなのですよ、と断わってくれていたら、わたしはそれほど気にもしない。が、彼らはその理論をなんと呼ぶか？　おこがましくも、〝法則〟と呼ぶのです、みなさん。〝ニュートンの重力の法則〟と彼らは呼ぶ。いまもなお、そう呼んでいるのであります。しかし、もしそれが自然の法則だとしたら、何故に覆されるのでしょうか？　自然の法則を破棄できるのはただ一人神のみであって、科学者ではない。その道理が、彼らにはわからないのです。もしアルバート・アインシュタインの理論が正しいのなら、アイザック・ニュートンは単なるアマチュア、未熟な科学者もどきだったということになりましょう。

なればこそ胸に留めていただきたい、科学者がつねに正しいとはかぎらないのだ、ということを。彼らはわれわれから信仰を、信念を奪いとり、その代りに、なんら精神的価値を有するものを与えようとはしない。科学者たちが本を書き、それをヴェガからの〈メッセージ〉だと称したからとて、わたしは断じて神を捨てるつもりはない。科学を崇拝するつもりはない。十戒の第一を破るつもりはない。金の仔牛の偶像の前にひれ伏すつもりなど、毛頭ないと断言しておきます」

★

まだ若くて、いまほど著名でもなく、尊敬もされていなかった頃、パーマー・ジョスはサーカスの雑役夫だった。それは『タイムズウィーク』誌に紹介された彼のプロフィールにも記されていたから、秘密でもなんでもない。なんとかひとかどの芸人にのしあがろうとして、彼は痛さをがまんして、円筒図法で描かれた地球の図を胸に刺青で彫ったという。そして、オクラホマからミシシッピに至る町村のお祭りで、それを公開したのだった。いってみれば、村々を巡回してまわるサーカスの黄金時代の生残り、もしくは落伍兵の一人だったのだ。彼の胸には青い海原が広がっており、そこでは四人の風神が頬を大きくふくらませて、西風や北西風をぷうっと吐きだしていた。胸筋を屈伸させることによって、北風の神ボレアスを中部大西洋沿いにふくらませることができる。そこで彼は、びっくりしている見物人たちにむかって、オヴィディウスの『変身譚』第六巻の一節を朗唱した。

CamScannerでスキャン

われは雲にのって天翔る暴力の権化
海に大波をかきたて、巨木を倒す
悪魔の怒りにとりつかれて
地球の最深の洞まで貫き通す
そして底知れぬ海の底から湧き起るや
恐怖に打たれた地獄の影をまき散らし
この世の果てまで死の地震を投げつけるのだ！

古代ローマから甦る熱風の狂宴。ときどき両手を添えながら、彼は大陸が漂流するさまを胸板に再現する。西アフリカが南アメリカに押しつけられて、さながらジグソー・パズルの断片のように、臍のうえでほぼ完璧に合体する。彼には、〝地球男・ゲオス〟なる渾名が奉られた。

ジョスは幼時から本好きで、小学校教育しか受けていなかったから、並みの人間は科学と古典文学の双方に通じることは難しい、というような〝常識〟に毒されずにすんだ。どこかしら粗野だが好感のもてる容貌が幸いして、サーカスが興行をうつ町々で、地元の図書館の司書たちとねんごろになった。ぼくはなんとか自分を向上させたいのだ、とジョスは彼女たちに話した。そして勧められるままに、友人のつくり方とか、不動産投資法とか、相手にそ

れと意識させずに意のままに操縦する法、とかいったテーマの本を読みあさった。が、その種の本はどこかしら底が浅いことに気づいていた。それと比べると、古典文学や近代科学には深みがあった。休みの日がくると、彼は待ちかねたように興行中の町や郡の図書館に通った。そこで地理と歴史を独習した。象使いのエルヴィラという娘から、そんなとこにいってどうするのと訊かれると、これはみんな仕事に上達するための勉強なんだ、と答えた。ジョスは先天的な女たらしではないかと彼女は疑っていたのである。〝港々に図書館司書ありね〟と、彼女は一度からかったことがある。が、ジョスの口上が確実に上達しつつあることは、エルヴィラも認めざるを得なかった。語る内容は高級でも、語る口調は俗耳に入りやすかった。他の団員たちが驚いたことに、ジョスの小屋はしだいに収益をあげはじめた。

ある日のこと、インドとアジアが衝突してヒマラヤ山脈が褶曲するさまを実演していると、突然、曇天から一条の稲妻がひらめいて、彼に命中した。その日はオクラホマ南東部につむじ風が吹いて、南部一帯の空が荒れ模様だったのである。おがくずをまいた板張りの舞台にくたくたとくずれ落ちたジョスを、一握りの観客が畏怖の目で見つめていた。が、その間にジョスは、自分がその肉体から遊離していく感覚をはっきりと感じとった。さながら長い暗いトンネルの中を通るように、上へ上へとのぼってゆき、眩い光にゆっくりとちかづいていった。そしてその光彩の中に、古の英雄のような、というより、神のような人影が立っているのが見えてきたのだという。

そのうち意識がもどると、自分がまだ生きていることに気づいて淡い失望すら覚えた。彼

は地味な内装の寝室のベッドに横たわっていて、ビリー・ジョー・ランキン師が上からのぞきこんでいた。ランキン師といっても、現在活躍中のランキンではなく、二十世紀第三半期の代表的伝道師であった、彼の父親のほうである。ランキン師の背後では、僧帽をかぶった十数人の男たちが〝キリエ・エレイソン〟（主よ憐れみたまえ）を歌っているさまが見えたような気がしたが、たしかではなかった。

「おれは死ぬのかな、それとも生き返れるのかな？」

ジョス青年がささやくように訊くと、

「おまえは死に、そして生きるのだ」ランキン師は答えた。

やがてジョスは、自分が生きて在る現実の世界の実相を発見したという強い自覚に打たれた。が、それをかみくだいて説明するのは至難であるうえに、稲妻に打たれたさいに見た高貴な映像と、それのもたらす至福の悦びをも感じていた。彼は、その二つの感覚、現実感覚と天上感覚が、つねに胸中でせめぎ合っているのを感じていた。その後、いろいろな機会に、ときにはだれかと話している最中に、その二つの感覚のいずれかが強く騒ぎだし、言葉や行動に現われるようになった。しばらくたつと、ジョスは、その二つの感覚をつねに胸中に飼って生きることに満足するようになった。

あとで知らされたのだが、稲妻に打たれたとき、ジョスは本当に一度死んだのだった。医者も死を宣告した。が、仲間たちが彼をかこんで祈り、聖歌をうたい、人工呼吸によって――主としてマッサージしたのは、胸の地図のモーリタニアの部分だったが――蘇生させせよ

らなかったのであろう。彼らのおかげで、ジョスはこの世に帰還できたのだった。彼は文字通り新生したのだ。それは自分の知覚した体験と一致していたので、彼は仲間たちの証言を喜んで受け容れた。このときのことを、ジョスはふだんめったに話さないが、それが自分の人生の岐路になったと確信している。彼が稲妻に打たれたのは、それなりに意味のあることだった。そして甦ったのもまた、理由あってのことだったのに相違ない。

彼の後援者となったランキンの教えを受けて、ジョスは真剣に聖典を研究しはじめた。とりわけ深い感動を覚えたのは、復活の概念と救世の教義を学んだときだった。当初、ランキン師のための雑用を引き受けていたジョスは、そのうち、遠方の地での説教や厄介な説教にかぎって師の代役をつとめるようになった——とりわけ、師の息子ビリー・ジョー・ランキンが神の呼びかけに応じてテキサス州オデッサに去ってからは、その役まわりがふえていった。やがてジョスは、厳しい訓戒よりわかりやすい説明に重点を置く、彼独得の説教スタイルを身につけていった。平易な言葉とやさしい比喩が彼の武器で、それを縦横に駆使しながら、さまざまな教えを説いた——洗礼と来世の意義について、キリスト教の啓示と古代ローマやギリシャの神話との関連について、この世界を創った神の意図について、そして、理解の仕方によっては科学と宗教のあいだには共通性がある、ということについて。

「おまえは生れ変ったのだ、ジョス」ランキン師は彼に言った。「だから本来、名前を変えるべきなのだが、パーマー・ジョスというのは伝道師には最適の名前だな。これを変えるわけにはいくまいて」

医師や法曹家と同じく、宗教家もまた同業者の仕事ぶりをめったに批判しないことに、ジョスは気づいた。が、ある晩彼は、そうばかり言ってはいられない場合もあることを発見した。その晩彼は、新しい〈神の教会〉の礼拝に出席して、オデッサから凱旋した若きビリー・ジョー・ランキンが満員の会衆に説く教えに聴き入ったのである。ビリー・ジョーは〝報い〟と〝応報〟と〝至福〟の直截な教義を説くのを得意としたが、その夜は〝癒やし〟の夜だった。そして会衆は告げられたのである、今夜の〝癒やし〟の道具は、キリストが磔にされた十字架の断片よりも尊く、フランシスコ・フランコ総統が敬虔なカソリック教徒を畏怖させるために自室にしまっておいたアビラの聖テレサの大腿骨より尊いもの、およそ聖なる遺物のなかでも最高に尊いものである、と。ビリー・ジョー・ランキンが得意気にふりまわしてみせたのは、イエス・キリストの体を包みこんで守った羊水と称するものだった。その液体は、かつて聖アンが所有していた古代の壺に入れられて保存されていたという。それをほんのちょっぴりつけるだけで、どんな病人も神の特別な恩寵によって快癒するはずだ、とビリー・ジョー・ランキンは言明した――その至尊の聖水が、今夜自分の手元にあるのだ、と。

ジョスは愕然とした。ランキンがこれほど見えすいたペテンを弄することもさりながら、教区の信徒中に、それを額面通りに受けとるほど浅はかな連中が実在するという事実にびっくりしたのだ。大衆をだます手口なら、サーカス時代にいくらでも目撃してきた。が、あれは娯楽だったのだ。これとはちがう。これは宗教なのである。宗教とは本来、事実の糊塗と

は無縁な、もっと真摯な営みのはずではないか。ましてや奇跡をでっちあげるなどもってのほかだ。ジョスはさっそく説教壇から、この種の詐欺行為を弾劾しはじめた。

伝道師としての熱意が燃えさかるにつれて、彼は、聖書の記述をすべて字義通りに信ずる根本主義派の他の逸脱行為をも非難しはじめた。その矛先を向けられた対象には、心の清き者は蛇の毒をも恐れるなかれ、という聖書の記述に立脚して、蛇を撫でられるかどうかでその人の信仰の強さを試そうとする者も含まれていた。あるとき彼はヴォルテールの言葉を言い換えてみせたが、その説教は後日多くの人々に引用された。最初の牧師とは最初の愚者に出会った最初のペテン師のことさ、と揶揄する不心得者に、結果的に力を貸すことになるような聖職者はいないと自分は信じる、と彼は言ったのである。そういう聖職者に支えられるような宗教は有害な宗教なのである。たしなめるような仕草で、ジョスは優雅に指をふってみせた。

どんな宗教にも、その一線を越えたら信者の理性を冒瀆することになるような教義上のボーダーラインがあるはずだ、とジョスは主張した。そのラインがどこに引かれるべきかについては、理性ある人々の見解は分かれるだろうが、いずれにせよ、もし宗教がその限界をこえたら、それらの人々の支持を失うことを覚悟しなければならない。人々は馬鹿ではないのだ、と彼は説いた。その主張がカチンときたのだろう、老ランキンは死の直前、身辺整理をしたさい、もうおまえには二度と会いたくないという伝言をジョスに送った。

同僚たちの行き過ぎを批判する一方で、ジョスは、科学もまたすべての解答を握っている

CamScannerでスキャン

わけではない、と説きはじめた。たとえば進化論のなかに、彼はさまざまな矛盾を見出したのである。頭をひねりたくなるような発見もあるし、仮説と一致しない事実もある。科学者たちはきっとなにかを隠しているのだ、と彼は主張した。地球が誕生したのは六千年前だとするアッシャー大司教の見解が正しいとはかぎらないように、四十六億年前だとする科学者たちの主張も、正しいとはかぎらない。だいいち、進化なるものをしかと自分の目で見た者は、この世に存在しないではないか。天地が創造された瞬間から、その後の経過を正確に時計で計った者はいないではないか（あるとき彼は、辛抱強いタイムキーパーが、宇宙の誕生以来の時間を秒刻みで数えているさまを想像した——〝二兆三千億四千万秒、二兆三千億四千万一秒……〟）。

それに、アインシュタインの相対性理論にしたって、正しさが立証されたわけではない。光より速いスピードで旅することはだれにもできない、とアインシュタインは言った。どうしてそんなことがわかるのだ？　アインシュタイン自身は、光速にどれだけ近づいたというのだ？　相対性理論とは、この世を理解するための一手段にすぎない。遠い未来における人類の可能性まで制約することなど、アインシュタインにはできないはずだ。ましてや、神のなされたまうことを制約するなど論外だ。神がその気になれば、光よりも速く移動することは可能のはずである。神がそう望めば、われわれ人類にも光より速く移動できる能力を与えてくれるはずである。公平にみて、科学にも逸脱があるし、宗教にも逸脱がある、とパーマー・ジョスは考えた。理性的な人間なら、そのいずれにもまどわされないはずである。聖典

の解釈法が幾通りもあるように、自然界の解釈法もまた一つと決ったわけではあるまい。いずれも神の手で創られたからには、双方が共存できないはずはない。もし双方のあいだに不一致があるとすれば、科学者か神学者のいずれか——もしくは双方——が職務を怠っているのである。

パーマー・ジョスは、科学と宗教の公平な批判に満足することなく、それを道徳的公正さに対する熱望や、知性に対する信徒たちの敬意と結びつけた。彼は徐々に、全国的な名声を博していった。学校における〝科学的創造性〟の教育、人工中絶や試験管ベイビーの倫理性、あるいは遺伝子工学の是非に関する論争にあって、彼は終始中庸の道を選び、科学と宗教の両極端を調和させようとつとめた。いずれの陣営も彼の干渉に腹を立てたが、庶民のあいだの彼の人気はかえって上昇した。しまいには大統領たちの信頼すら、ジョスは獲得するまでになった。彼の説教は主要な新聞の署名記事中でたびたび引用された。が、ジョス自身は、殺到する各種の招待や、エレクトロニクス利用の教会を設立したらどうかという甘言などは一顧だにしなかった。彼は依然として質素な暮らしぶりを変えず、南部の田舎を離れることがあるとすれば、大統領から招待されたときや、教会会議に出席するときに限られていた。政治に関しては、ごく常識的な愛国心の域をこえた介入はしないことを原則とした。必ずしもその性廉潔(れんけつ)とはいえないライヴァルたちの蝟集(いしゅう)する宗教界にあって、パーマー・ジョスは、当代のキリスト教ファンダメンタリズムの伝道師たちのなかでは、人格、識見、ともに一頭地を抜いた存在と目されるまでになったのである。

★

エリーはダヘーアから、どこか静かな場所で夕食を共にできないか、と言われていた。彼は、〈メッセージ〉の解読の進捗状況について、ヴェイゲイ以下のソ連代表団と討議するため飛行機でやってくることになっていたのだ。が、ニューメキシコの中南部にはいまや世界中の報道陣がつめかけており、彼らに見とがめられたり、聞き耳をたてられたりせずに話し合えるようなレストランは、周囲百平方マイル内に一軒もない。で、結局エリーは、〈アーガス〉本部内の来賓用宿舎にちかい自分の質素なアパートメントにダヘーアを招き、手料理でもてなすことにした。話すべきことはたくさんあった。ときどき、全計画の成否が、大統領の支援という細い糸で辛うじて支えられているように思われることすらあったのだから。が、ダヘーアが到着する直前に感じた軽い胸のときめきは、単にそのせいだけでもないことを、彼女は漠然と意識していた。食後、皿洗い機に食器を二人で入れながら、パーマー・ジョスに話題が移ったのは、ジョスの影がそれだけ大きくなりつつあったせいでもあるだろう。

「あの人は、かなり怯えているみたいね」エリーは言った。「でも、とても視野のせまい人だわ、彼は。〈メッセージ〉のおかげで聖書の好ましくない解釈が生れるかもしれない、もしくは、自分の信仰まで揺らぐかもしれない、と恐れてるのよ。科学の新しい法則はつねに古い法則を包含するものだということがわかってないのよ。その一方では、最近の科学の成果をどう利用しようかと、腐心している人もいるようだし。あれでも、一般大衆からは理性の声だ

と思われてるんですものね」

「しかし、地球の滅亡をねがう千年至福信者や〝地球至上派〟などとくらべれば、パーマー・ジョスは穏健派の良心だと思うがね」ダヘーアは答えた。「案外、科学の方法論を彼に十分説明しなかったわれわれの側にも、落ち度があったのかもしれない。このごろ、そのへんのところがとても気になるんだ。それとエリー、きみは本当に断言できるかな、あの〈ヘメッセージ〉を発信しているのが――」

「神や悪魔ではない、って？　あなた、本気でそんなことをおっしゃってるの、ケン？」

「たとえば、その、われわれが善とか悪とか呼んでいる価値基準を司っている、きわめて進歩した存在、というふうには考えられないかな。つまり、ジョスみたいな人物の目からみたら、神とも悪魔とも区別のつけがたいような存在である、というふうには？」

「ねえ、ケン、ヴェガ系にいる存在がだれであろうと、この宇宙の創造主でないことだけは保証できるわ。旧約聖書に登場するような神ではないこともたしかね。いいこと、ヴェガにしろ太陽にしろ、この太陽系のちかくにある星はみんな、宇宙全体からみたら、ごく変哲もない銀河の辺境に位置してるのよ。〝我は有りて在る者なり〟という神が本当に存在するんだったら、なぜこんな田舎をウロチョロしてるのかしら？　もっと差し迫った仕事がたくさんあるはずなのに」

「まじめに考えてくれ、エリー、ぼくらはいま、ちょっとした窮地に立ってるんだ。ジョスは相当な影響力を持つ男だからね。現大統領を含めて、三代の大統領と親しく付き合ってき

たし。どうやら現大統領は、ジョスにもなんらかの譲歩をすることを考えておられるようだな。もっとも、彼をはじめとする一群の伝道師たちを〈予備解読委員会〉に出席させて、きみやヴァレリアンやドラムリンたちと討論させることまでは考えてないようだけど。ヴェイゲイたち、ソ連代表団との同席などは、まず考えられないだろう。ソ連の科学者たちが、ファンダメンタリズムの牧師たちと委員会で論じ合っている図などは想像もできないからね。でも、こちらの態度如何では、すべての問題が解決する可能性もあるんだ。いっぺん、パーマー・ジョスに会いにいってみてはどうだろう？　大統領の話だと、ジョスは科学に魅了されてるんだそうだ。彼をこちらの味方にすることができたら、どうなると思う？」

「じゃあ、あのパーマー・ジョスを改宗させようというわけ？」

「まさか、彼を棄教させることなど、できっこないだろうさ――ただ、いろいろな点で彼の理解を深めさせることはできるだろう。たとえば、〈アーガス〉の存在意義に関して、あるいは、〈メッセージ〉の内容が不届きなものだったらそれに応答する必要はない、ということについて。それから、ヴェガと地球間の距離自体が、われわれの安全を保証している、ということについて」

「でも、ケン、あの人は、光の速度が宇宙におけるスピード・リミットだ、ということすら信じてないのよ。わたしとジョスでは、きっと話がかみ合わないわ。それに、わたしには、キリストの教義を信じようとして信じられなかった長い歴史があるの。キリスト教の偽善や矛盾のことを考えると、頭がカッカしてしまうのよ。わたしとジョスが会ったところで、あ

なたの望むような、あるいは大統領の願うような、成果をあげられるとは思えないわ」
「エリー、ぼくは、だれに金を賭ければいいかは、ちゃんと心得ている。ジョスと会った場合、事態がよくなりこそすれ、悪くなるとは思えないがな」
彼の笑みに応えて、エリーもしぶしぶと微笑を浮かべた。

★

電波追跡船が所定の位置につき、レイキャヴィクやジャカルタのような場所にも小規模ながら満足すべき性能の電波望遠鏡が設置されたので、地球のすべての経度上にヴェガからの電波捕捉網を布く態勢は完全にできあがったと言ってよかった。パリでは、世界中の国々が〈メッセージ〉の解読のために協力する組織、〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉の本会議が開催される予定だった。その準備として、〈メッセージ〉のかなりの量を捕捉した国々が予備会議をひらく運びになったのは、きわめて自然な成り行きと言えるだろう。アメリカとソ連の科学者たちは、すでにほぼ四日間にわたって討議をつづけていたが、その主たる目的は、ダヘーアのような、科学者と政治家の仲介役をつとめている連中に、最新の成果を知らせることにあった。ソ連代表団の団長は一応〝ヴェイゲイ〟ルナチャルスキーということになっている。が、団員のなかにはヴェイゲイに劣らず有名な科学者や技師も含まれていた。その代表的存在が、つい最近、〈インターコスモス〉というソ連主導の国際宇宙探査機関の長に任命されたゲーンリク・アルハンゲルスキーであり、中型機械工業相にして中央

委員会のメンバーでもあるティモフェイ・ゴスリーゼであったと言えよう。

ヴェイゲイが並々ならぬ精神的重圧を感じているのは明らかだった。チェーン・スモーキングを再開したのもその証拠とみていい。親指と人差し指でタバコをつまみ、掌を上向けて、彼は言った。

「地球をとりまく各地点に、隙なく電波望遠鏡が配置されたことは、わたしも認める。しかし、それで十分な観測態勢が成ったかどうかという点では、まだ不安が残るな。〈ニェジェーリン元帥号〉上のヘリウム液化装置が故障したり、レイキャヴィク観測所の発電装置が故障したりしたら、それだけで〈メッセージ〉の連続受信に隙間が生じる危険があるのだから。〈メッセージ〉が冒頭部にもどるまでにかりに二年かかるとすると、もしどこか聞きのがした部分が生じたら、ギャップを埋めるのに二年待たなくてはならんわけだ。それに、だいたい〈メッセージ〉が反復されるとはかぎらんのだからね。反復されないとしたら、ギャップも永久に埋まらんことになる。不測の事態に対処する方法を、ぜひとも考えておくべきだと思うがね、わたしは」

「たとえば、どういう対策が考えられますか？」ダヘーアがたずねた。「〈コンソーシアム〉参加国のすべての天文台に、非常用発電機を設置する、というようなことですか？」

「ああ。それと全天文台に、独立した増幅器、分光計、自己相関器、ディスク・ドライヴ等を設置したいね。必要な場合、遠隔の天文台に液化ヘリウムを空輸する態勢も整えておきたいものだ。

「きみの意見は、エリー？」

「まったく同感ね」

「ほかには？」

「われわれとしては、広い幅の周波数でヴェガの観測をつづけるべきだろうな」ヴェイゲイは言った。「ひょっとすると、あすには、メッセージ周波数帯のたった一つを使って、異なる〈メッセージ〉が送信されてくる可能性もないではないからな。それと、天空の他の領域も探査したほうがいい。〈メッセージ〉解読の鍵は、ヴェガではなく、どこか他の天体から送信されてくるということも考えられるし――」

「いまヴェイゲイが指摘した点はとても重要だな」ヴァレリアンが口をはさんだ。「〈メッセージ〉を受信していながら解読が停滞しているという現在の状態は、きわめて特異だと思うんだ。そういう経験が、われわれにはまったくないしね。だから、あらゆる可能性に対処しておいたほうがいい。ごく単純な予防策を怠ったからとか、簡単な計算を見のがしたからという理由で、いまから一、二年後に地団駄を踏むような愚は避けたいからね。〈メッセージ〉が反復されるというのは、単なる臆測にすぎないんだ。われわれの知るかぎり、冒頭部にもどってくるということは〈メッセージ〉のどこにも約束されてないんだからね。どこかに欠落部分が生じたら永遠に補充できない可能性だってある。それと、装備面での充実をもっと促進すべきだという意見にも賛成だな。とにかく、〝重ね書きの羊皮紙〟には第四層があることは確実なんだ」

「人員の問題もあるな」ヴェイゲイが言った。「この〈メッセージ〉の送信が一、二年ではなく、永遠につづくとしたら、どうだろう。あるいは、これは天空のあらゆる領域から送信される長い一連の〈メッセージ〉の、ほんの冒頭部にすぎんとしたら。現在、世界各国で活躍中の電波天文学者の数は、せいぜい数百名というところではないかな。こんどのような重要問題に直面すると、決して十分な数とはいえんね。各先進国は、第一級の能力を備えた電波天文学者や電波技術者をもっともっと養成しなくちゃいかんな」

そのときエリーは、沈黙がちのゴスリーゼが丹念にメモをとっているのに気づいた。そういう姿を見ると、ロシア語に堪能なアメリカ人よりも、英語に堪能なロシア人のほうがはるかに多いことに、あらためて驚いてしまう。二十世紀の初頭までは、ほとんど世界中の科学者がドイツ語を話せたし、それが無理でも、ドイツ語を読むことができた。ドイツ語の前はフランス語だったし、その前はラテン語だったのだ。たぶん次の世紀には、英語に代る別の言語が科学者たちの必修言語になることだろう。それはたぶん、中国語あたりだろうか。目下は英語がその座についているので、世界中の科学者が英語のこまかいニュアンスや不規則性をけんめいに学んでいるのだ。

短くなったタバコの火を新しいタバコに移しかえると、ヴェイゲイはつづけた。「実は、この機会にみなさんに聞いてもらいたいことがもう一つある。これはほんの臆測でね。〈メッセージ〉が反復されるという見方ほどの説得力もない。反復説は臆測にすぎないと強調されたヴァレリアン教授の言は妥当至極だと思うがね。わたしは通常、これほど初期の段階で、

これほど推測的な見解を公にすることはめったにない。が、もしこの臆測が正しいとすれば、われわれは直ちにそれに即応した行動を起すべきだと思うのだ。正直なところ、もし同僚のアカデミー会員アルハンゲルスキーが熟慮の結果同様の結論に達しなかったなら、わたしはたぶん、この見解を公にする勇気は持てなかったろうと思う。アルハンゲルスキーとわたしは、クェーサーの赤方偏移の量子化についても意見を異にしたし、超高輝度の光源や、ニュートリノの静止質量や、中性子星のクォーク現象をめぐる解釈でも対立した……じっさい、多くの件で意見の対立を見てきたんだ。結果的には、彼が正しかったこともあれば、わたしが正しかったこともあった。いずれにせよ、ある主題に関して、初期の推測段階で意見が一致したことはただの一度もなかったと言っていいだろうね。ところが、この件にかぎって、われわれの見解は一致したんだよ。あんたからみんなに説明してくれんかね、ゲーンリク・ドミッチ?」

アルハンゲルスキーは、ヴェイゲイの発言を鷹揚に聞いていた。愉快がっているふしすら見受けられた。彼とヴェイゲイが多年ライヴァル関係にあったことは事実であり、白熱した論争を何度も演じてきたばかりか、ソ連政府の核融合研究にどの程度協力すべきかという問題をめぐって、有名な論争を交わした仲でもあった。

「われわれが推測するに――」アルハンゲルスキーは言った。「あの〈メッセージ〉は、ある種の機械をつくるための説明書ではないかと思うのだな。もちろん、いまのところ、まだ〈メッセージ〉の正確な解読法はわからない。われわれの推測の根拠は、どこそこを参照せ

ようという指示らしきものがかなり多く挿入されている、ということでね。実例を一つあげようか。一五四四一ページ目には、もっと前のページ、一三〇九七ページを参照せよ、という明瞭な指示がある。幸い、一三〇九七ページは、ちゃんと受信ずみなんだがね。このページはタシュケント近郊のわれわれの天文台で受信しており、一五四四一ページはこのニューメキシコで受信されている。一三〇九七ページには、われわれがまだ全経度をカヴァーしてなかった時期に送信されたらしいページへの言及がある。こうした例が、この〈メッセージ〉にはかなり見られるんだね。それから、これが重要な点なんだが、前のほうのページほど指示が簡単で、あとのページに進むにつれて複雑になっている。あるケースなど、たった一ページに、前のほうのページの参照指示例が八つもあるんだ」

「でも、それはさほど説得力のある論とは思えませんけどね」エリーが言った。「たとえば、あの〈メッセージ〉はなんらかの数学の例題だとも考えられるでしょう——前のページにでた例題にもとづいてあとのページの例題が組み立てられている、というような。でなければ、あれは大河小説のようなもので、後半でとりあげられる事件が、登場人物の少年期の体験とか、とにかく、ヴェガの生物が若いときに体験する事柄と関連しているのかもしれないわ——彼らの寿命はわたしたちと比べればずっと長いのかもしれないし。あるいは、緊密な相互参照の多い宗教の教典のようなもの、という見方もできるんじゃなくて」

「〝十戒〟ならぬ〝十億戒〟かな」

ダヘーアが笑いながら言うと、

「あるいはね」タバコの煙をすかして、窓ごしに電波望遠鏡をながめながらヴェイゲイが言った。ずらりと並んだ電波望遠鏡は、なにごとかを天空に訴えかけているように見えた。

「しかし、相互参照のパターンを厳密に調べてみれば、なんらかのマシーンを製作するための説明書とみたほうが自然であると、きみにも納得がいくと思うがな。そのマシーンの用途については皆目見当がつかんが」

第九章　ヌーミナス

CamScannerでスキャン

驚異が、崇拝の源である。

——トマス・カーライル『衣服哲学』（一八三三―一八三四）

私の考えでは、宇宙的な宗教感覚こそが、科学研究のためのもっとも強固にして高貴なモティーフなのだ。

——アルバート・アインシュタイン『観念と意見』（一九五四）

CamScannerでスキャン

ケン・ダヘーアに恋していることに初めて気づいたのがいつだったか、エリーは正確に思いだすことができる。それは、ワシントンに何度も足を運んだときのことだった。

パーマー・ジョスとの対面のお膳立ては、一朝一夕にはまとまらない様子だった。ジョスのほうでは、〈アーガス〉本部を訪問することに難色を示しているらしい。自分にいま関心があるのは、科学者が〈メッセージ〉をどう解釈するか、ではなくて、彼ら自身が信仰を抱いてないという事実だ、というのが最近のジョスの態度のようだった。科学者の姿勢を冷静に見きわめるためにも、もうすこし中立的な会見の場が必要だ、と彼は考えているらしい。エリーのほうでは、どこにでも喜んで赴くという方針は不変で、そのために、大統領特別補佐官の一人が、目下準備に奔走しているのが実情だった。ジョスとの会見の場に、他の電波天文学者が同席する予定はない。なるべくエリー一人で、というのが大統領の意向だったからである。

エリーがもう一つ楽しみにしているのは、〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉に出席するため、数週間後にパリに旅立つことだった。彼女はヴェイゲイと協力して、世界的

規模のデータ収集活動をスタートさせている。いまでは〈メッセージ〉の信号電波の受信はきわめて日常的なことになっており、ただの一ページの欠落もなく進行している。それで、自分でも驚いたことに、エリーにはちょっとした時間的余裕ができたのだった。この機会を利用して、久しぶりに母とじっくり話をしよう、どんなに痛烈なことを言われても、終始なごやかに語り合おう、と彼女は心にきめた。なすべきことはほかにもあった。目を通す必要のある論文や電子郵便の類が、たくさんたまっていたのである。郵便物のなかには、同僚からの祝福の手紙や批判の手紙ばかりではなく、宗教家からの弾劾文や、自信たっぷりに書かれた疑似科学的予測、それに世界中から送られてくるファン・レターなどがまじっていた。『天体物理学ジャーナル』誌は、この数カ月、手にとるひまがなかったけれども、実をいうとエリーは、この伝統的な雑誌に掲載されるもっとも異色な記事とでも言うべき論文を、最近寄稿していたのである。

ヴェガからの電波はかなり強力なので、ハム無線に飽きたアマチュアたちのなかには、独力で小型電波望遠鏡や信号分析器をつくる者が輩出した。〈メッセージ〉を受信しはじめた初期の段階には、有益なデータを寄せてくれたアマチュアが少なくなかったのだ。彼らはいまもなお、SETIの専門家すら知らないと称する情報を、頻々とエリーのもとに送りつけてくる。そうした熱心なアマチュアたちを激励する手紙も書かなければ、と彼女は思っていた。事実、アマチュアたちの協力を必要とする電波天文学関係の研究は他にもいろいろと――たとえば、クェーサーの観測――あるのだから。が、じっさいにはその種のもろもろの

義務を果す代りに、エリーは余暇のほとんどをダヘーアとすごしていたのだった。
　もちろん、大統領の科学顧問が〈アーガス計画〉にできるかぎり深く精通するよう手を貸すのは、エリーの義務でもあった。現在の状況を大統領に正確に把握してもらうのは、なによりも重大な課題だったのだから。ヴェガからの〈メッセージ〉に関して、他の国の指導者たちも、アメリカ大統領並みに詳細な説明を受けてくれているといいのだが、と彼女は願っていた。現大統領は科学には素人でありながら、なみなみならぬ愛着を持っており、単に実用的な利益という観点のみならず、科学の成果を知るのが楽しいという個人的な理由も働いて、支援を惜しまないでくれるのだ。同様な理由から科学に理解を示してくれた大統領は、ジェイムズ・マディスンやジョン・クィンシー・アダムズ以降、何人かいたはずである。
　とはいえ、ダヘーアが〈アーガス〉本部ですごす時間がこのところめっきり増えたのは、そうした現実的な理由のせいだけとは言えないようだった。彼は毎日一、二時間、盗聴防止回路の無線をつかって、ワシントンのオールド・エグゼクティヴ・オフィス・ビルにある科学技術政策局のオフィスと連絡をとる。それ以外の時間は、エリーの見るかぎり、なんとなく……そこらをぶらぶらしているのだ。コンピュータの内部構造をのぞいているときもあれば、特定の電波望遠鏡を見にいくときもある。ワシントンからきた助手を伴うこともあったが、一人のときのほうが多かった。ときどきエリーが、彼に割りふられた予備のオフィスのひらきかけの戸口から中をのぞいてみると、部屋の主は両足をデスクにのせて報告書を読んでいるか、電話で話すかしていた。こちらに気づくと陽気に手をふって、また仕事にもどる。

ヴァレリアンやドラムリンと気さくに話し合っていることもあれば、下級技師や女性秘書たちと話し合っているこどもある。彼女たちがダヘーアのことを〝チャーミング〟だと噂し合っているのも、エリーは何度か耳にした。

ダヘーアはエリーに対してもいろいろな質問をしかけてきた。最初は各種の活動計画に関する純粋に技術的な問だったが、それはやがて将来に予想されるさまざまな事業計画にまつわる問に発展し、ついにはとりとめもない世間話にまで広がった。最近では、エリーと一緒に時間をすごす口実として〈アーガス計画〉関連の話題をもちだしているのではないか、と思われるくらいだった。

ワシントンでのある晴れた秋の日の午後、大統領は〝ダイロン・フリー〟危機に対処するために、〈特別緊急機動グループ〉の会合を延期せざるを得なくなった。ニューメキシコから夜間の飛行機でとんできたエリーとダヘーアは、思いがけなく数時間の自由時間を持てることになったわけである。二人は、エール大学で建築を学んでいた女子学生、マヤ・イン・リンが設計したベトナム戦争記念碑を訪ねることにした。愚劣な戦争の荘重な記念物を前にしているにもかかわらず、ダヘーアはなぜか嬉しそうだった。それを見ているうちに、エリーはまたしても、彼の性格の欠点を捜しはじめていた。二人のあとには、肉色の特別製イヤフォンをはめた、調達局の私服警護員がさりげなくつき従っている。

ダヘーアは、途中で拾った小枝の切れはしにきれいな青い色をした毛虫をおびき寄せてのせていた。毛虫は巧みに体をくねらせつつ、十四対の肢を軽快に動かして小枝を這いのぼっ

てゆく。先端に達すると、後部の五対の肢でしっかりとつかまりながら、前半身をのばして、新しい小枝を見つけようと宙をかきむしる。効果がないとみるると、くるっと巧妙に向きをかえて、元きた方向にもどりはじめる。するとダヘーアは小枝をさかさに持ちかえて、毛虫が出発点にもどっても、また宙をかきむしるしかないようにしむける。檻に入れられた肉食獣さながら、毛虫は何度も小枝の上を往復したが、最後の数回などはかなり根気をなくしているようにエリーの目には見えた。その小さな生き物が大麦の葉枯れ病の元凶だと承知しつつも、彼女はいささか哀れを催してきた。

「なんて素晴らしいプログラムが組み込まれてるんだろうな、この小さな虫の頭には！」ダヘーアは叫んだ。「何回くり返されようと、うまく働くんだ――〝最適脱走ソフトウェア〟とでもいうかな。こいつは、小枝から転落しないようにする術を知ってるんだよ――小枝がちゃんと宙に浮かんでるかぎりはね。ふつうはこの毛虫も、いまみたいなことは体験しないわけだ。小枝はきまって、もっと大きな枝に接続してるわけだから。このプログラムが自分の頭に組み込まれていたとしたらどうだろう、って想像したことあるかい、エリー？つまり、こいつは小枝の端に達したときに、ほとんど無意識のうちに引き返すのかな？それとも、さんざん頭をしぼった末に、引き返そうという考えが浮かぶのかな？ほかの九対の肢で小枝につかまりながら、前の五対の肢で宙をかきむしるなんてことは、自然にでてくる考えだと思うかい？」

エリーはわずかに頭をかしげて、毛虫よりもダヘーアの顔を注視した。彼は苦もなく、こ

ちらが毛虫になったさまを想像しているらしい。この人は単に職業的興味からそんな想像をしているのだと自分に言い聞かせて、彼女はさりげなく答を返そうとした。

「それより、その毛虫はどうする気？」

「草むらにもどしてやるよ。ほかに名案でもあるかい？」

「そのまま殺しちゃおうとする人もいるでしょうね」

「こういう生き物にも意識があるんだと気づいたら最後、なかなか殺せないものさ」

彼は毛虫のとりついている小枝を持ちつづけた。

しばらくのあいだ沈黙したまま、二人は、約五万五千人の戦死者の名前が刻まれている黒いみかげ石の記念碑の前にさしかかった。

「戦争を準備する政府は例外なく、敵国を怪物のように仕立てあげるものだわ」エリーは言った。「国民に、向う側の連中もまた人間なのだと思わせたくないのね。敵もまた自分たちと同じように考えたり感じたりできるんだと知ったら、彼らを殺すことにためらいを覚えるでしょうから。戦争にあっては、殺すことがすべてですものね。敵を怪物のように仕立てあげたほうが、なにかと都合がいいのよ」

「ほら、このきれいな生き物を見てごらん」ややあって、ダへーアは答えた。「さあ、よく見てごらん」

エリーは言われたとおりにした。気味わるさに目をそらしたくなるのを抑えて、ダへーアになったつもりで毛虫を見つめた。

CamScannerでスキャン

「こいつの動作を見てごらん」彼はつづけた。「もしこいつがぼくやきみ並みの大きさだったら、だれしもびっくり仰天するだろうな。まさしく、本物の怪物に見えるだろうから。ところが、こいつはこれだけの大きさでしかない。そして、黙々と葉っぱをたべ、他人にちょっかいをださず、自然界にささやかな美しさを添えてるんだ」

毛虫のことは気にしないで、エリーはダヘーアの手をとった。二人は、戦死した期日の順に延々と刻まれている名前の前を、無言のまま歩いていった。むろん、そこに刻まれているのはアメリカ人の戦死者に限られている。同じ戦争で命を落とした二百万人の東南アジアの人々の記念碑は、各自の友人や遺族の胸中にしかない。この戦争に関して、アメリカでもっとも広く知れわたった公的なコメントは、政治による軍事力の無力化を衝いたものだった。それは、第一次大戦の敗北の責を問われたドイツ軍部が〝背後から刺された〟せいだと弁解したことと、心理的につながっているのではないかとエリーは思う。ベトナム戦争は国民の意識にとりついた膿疱のようなもので、それをあえて押しつぶそうとする勇気を持った大統領は、これまで一人もいなかった。(戦後ベトナム民主共和国が実施した政策もまた、その仕事をいっそう困難にしたと言ってよかろう)。あの戦争の最中、アメリカ軍の兵士たちが当然のことのように、敵のベトナム人たちを〝ベト公〟とか、〝細目野郎〟とか、〝スロープ頭〟とかの蔑称で呼んでいたことをエリーは思いだす。人類の歴史に新しい展望を切り拓くには、敵対勢力を怪物扱いしようとする悪癖を、まず第一に断つ必要があるのではないだろうか？

日常会話におけるダヘーアの口調は、およそ学者らしくなかった。彼が街頭の売店で新聞を買っているところに行きあわせたりしたら、とても科学者とは思えないだろう。ダヘーアの口調には、依然としてニューヨークっ子の猥雑な訛りがしみこんでいるのだ。最初のうち、彼の同僚たちは、彼の研究内容と日常の言葉づかいの落差の大きさを面白がっていた。が、彼の研究態度と人柄が知れわたるにつれて、その訛りはだれにでもある特異な癖の一つと見なされるようになった。とはいっても、たとえば、〝グァノシン・トライファスフェイト(三リン酸塩)〟という言葉を彼が発音したりすると、無害なこの物質がなんらかの爆発物のような凶暴性を秘めているように聞えてくるところが面白い。

エリーとダヘーアは、自分たちが互いに魅かれ合っていることになかなか気づかなかった。が、周囲の連中はとっくに気づいていたらしい。数週間前、ヴェイゲイがまだ〈アーガス〉本部に滞在していたとき、彼がよくやることなのだが、言語の矛盾性について、ひとくさりぶったことがあった。そのとき槍玉にあがったのはアメリカ英語だった。

「どうしてアメリカ人たちは、〝同じ過ちをふたたびくり返す〟という言い方をするんだろうね、エリー？　この場合、〝ふたたび〟という句は要らんのじゃないかね？　それと、〝バーン・アップ(焼き尽す)〟という言葉と〝バーン・ダウン〟という言葉は、同じ意味を表わすんだったね？〝スロウ・アップ(速度を落す)〟と〝スロウ・ダウン〟もほぼ同じ意味

CamScannerでスキャン

たったな？ とすると、なぜ〝スクルー・アップ（ヘマをする）〟という言い方がよくて、〝スクルー・ダウン〟という言い方がだめなのかね？」

おっしゃりたいことはよくわかるわ、と言うように、エリーは物憂げにうなずいたのだった。ヴェイゲイが俎上にあげるのはアメリカ英語だけではない。エリーはロシア語の矛盾性についても彼が同僚にこぼすのを、フランス語の棚おろしがはじまるのは耳にしていたのである。たぶん、パリでの会議がはじまれば、フランス語の棚おろしがはじまるのはまちがいない。概して言語というものが多くの矛盾を内包しているという点については、彼女も認めるのにやぶさかではない。が、もともと言語というものは、いろいろな起源から発しているのだ。それがちょっとした外圧にあうたびに進化発展をとげてきたわけだから、なんの矛盾もなくきれいに首尾一貫していたら、それこそ驚きというものではないだろうか。けれども、そうして言語をくさすときのヴェイゲイは本当に楽しそうなので、エリーはいつも、あえて反論しようという気が起きないのだった。

「それから、〝ヘッド・オーヴァー・ヒールズ・イン・ラヴ（～に首ったけ）〟という句にしてもそうだぞ」ヴェイゲイはつづけた。「これはごく一般的な表現だったね？ でも、本当は〝ヘッド（頭）〟と〝ヒールズ（踵）〟の位置が逆、もしくはさかさまになるべきなんじゃないかな。ヘッド・オーヴァー・ヒールズ、つまり、踵のうえに頭があるんじゃ、ごくあたりまえのことだろう。ところが、だれかに首ったけになって気もそぞろになると、踵と頭がひっくり返ってしまうような気分、つまり、〝ヒールズ・オーヴァー・ヘッド〟というよう

な気分になるんじゃないか。まちがってるかね、わたしの見解は？　まあ、あんただったら、恋におちる気分がどんなものか、わかってるはずだな。しかし、この〝ヘッド・オーヴァー・ヒールズ〟という句をつくった人物は、恋心のなんたるかをわかっとらんね。恋に夢中になった人間でも、ごくふつうに歩きまわるもの、と彼は思ったわけだ。本当はそういうとき、人はさかさになって宙をふわふわと飛んでるような気分なんだがな、ちょうど、ほら、例のフランスの画家がよく絵に描いたように——なんといったかな、あの画家の名前は？」

「あら、あの画家はロシア人よ」エリーは答えた。マルク・シャガールの名がでたおかげで、いささか気づまりな会話の袋小路に、小さな抜け道ができた。あとになってエリーは思ったのだった——あのときヴェイゲイは自分をからかっていたのだろうか、それとも自分の反応をさぐっていたのだろうか、と。たぶんヴェイゲイは、エリーとダヘーアのあいだになにかが進行中であることに、漠然と気づいていたのだろう。

ただ、ダヘーアのほうでは、エリーとの仲の進展をためらう気持が心のどこかに働いていたことはたしかだった。彼はあくまでも大統領の科学顧問として〈アーガス〉に駐在しているのだから、それも当然と言えただろう。いわば政府の代表として、彼は、この前例のない、微妙な、きわどい問題にタッチしているのである。その当事者の一人と恋愛関係に陥るのは、危険な行為と言えなくもない。大統領は、彼の公正な判断を望んでいるのだ。その期待に応えるためには、ときにエリーの反対する方針を打ちださなければなるまいし、エリーの支持する方針を却下することも必要になろう。エリーと恋に陥った場合、ダヘーアの行動がなん

らかの制約を受ける可能性は十分に考えられるのだ。

エリーにとって、ことはそれ以上に面倒だった。大規模な電波天文台の責任者という安定した地位につく前、彼女も人なみに何人かの男性と付き合ったことがある。だれかに恋して、それを広言したことも何度かある。が、結婚を真剣に考えたことは、ただの一度もなかった。恋の終りを自覚するのはいつも彼女のほうで、それとさとって悲嘆にくれる相手を慰めるために引用した四行連詩を——あれは、ウィリアム・バトラー・イエーツだったろうか？——エリーはいまでもぼんやりと覚えている。

とこしえにつづいてこそ
真の愛と汝(なれ)は言う
ああ、愚かな、この戯(たわむ)れにまさる営みは
この世に数多(あまた)あるものを

それにエリーは覚えているのだ、母親と交際していた頃(ころ)のジョン・ストートンはとても自分に優しくしてくれたのに、正式な継父となったとたん、見せかけの優しさの衣を脱ぎ捨てたことを。男性なるものは、結婚すると同時に、それまでほとんど見せなかった怪物のような本性を露(あら)わにするものらしい。もともとロマンティックな性格の自分は、とてもそんな変身に耐えられそうにない、とエリーは思うのだ。母親が犯した過ちを、自分は決してくり返

したくない。もっと深い胸の底には、盲目的に誰かを愛してしまうことを恐れる気持、いずれだれかに奪われるか、もしくは自分を捨て去るかもしれない男性にのめりこむのを恐れる気持も働いていた。しかし、だれかを熱愛しなければ、のちのち、その体験を愛しむ気持も起るまい。（ただし、その理屈はどことなくこじつけめいた気もするので、エリーは本心からそう思っていたわけではなかった）。それに、だれかを熱愛しなければ、彼を裏切ることにもならないはずだ。母は亡き父を裏切ったのだという思いは、いまもなおエリーの心の奥深くに刻みこまれているのである。亡き父を慕う気持は、強まりこそすれ衰えてはいなかった。

ただ、ケン・ダヘーアにかぎって、世間一般の男性とはちがうように思えてならない。それとも、自分は男性に対して、むかしほど高望みをしなくなったのだろうか？　自分の知っている多くの男性とちがって――と、エリーは思う――ケンは、なにかの試練に直面すると、かえって優しい、理解にあふれた一面を見せる。たぶん、各種の政治的折衝において、つとめて妥協点を見出そうとする傾向があるのは、その任務自体のしからしめるところなのだろう。が、ときどき、その柔軟な姿勢の下に、コツンとした手応えを感じることもある。いずれにしろエリーは、ケンが自分の生活と科学をみごとに調和させている点や、彼が仕えた二代の大統領に対して、科学に対する支援を一貫して働きかけてきた努力に敬意を払っていた。

二人はなるべく人目に立たないようにして、〈アーガス〉本部内のエリーの居室ですごすことが多かった。そして、さまざまな話題に関して、互いの意見を活発にぶつけ合う。こん

なに会話が楽しいと思うことも珍しかった。ときどき、どちらか一方の見解に未熟な点があると、他方が完全な知識で補うこともあった。ベッドのなかでも彼は思いやりがあり、工夫にも富んでいた。

彼と一緒にいると、自分があまりにも自由にふるまえることに、エリーは驚いてしまう。それも、二人の愛のなせる業なのだ。この人に愛されているのだという思いが、そのまま自尊心を高めるまでに、彼に対する敬意は深まっていった。彼を慕う気持が高まれば高まるほど、エリーは自分が好きになった。彼のほうでも、それは同じのようだったから、二人の関係の底には、愛と敬意の永劫回帰とでも呼ぶべきものが存在していたといってもいいだろう。すくなくともエリーは、そう思っていた。いつもは、大勢の友人に囲まれるとかえって孤独を味わうことが多いのだが、ケンと一緒にいるときは別だった。

彼が相手だと、エリーは安心して過去の体験や記憶の断片、子供のころの悲しい出来事などを話すことができた。そして彼は、単に面白がるだけでなく、心から興味を持ってくれるのだ。ケンは何時間も倦むことなく、こちらの幼年時代について問を浴びせてくる。それはいつも直截で、ときに執拗でもあったが、底にある優しさは変らなかった。愛する者同士が赤児のように話し合えるわけが、エリーにはわかってきた。自分のなかの幼児的な部分をなにはばかることなく露出できるような関係は、ほかに存在しないのだ。一歳の自分、五歳の自分、十二歳の自分、二十歳の自分が、それぞれに、愛する者のなかにも相応する部分を見出すことができれば、自分のなかにあるそれらすべての潜在的な幼児性を本当の意味で充足

させることができる。長きにわたった、それら潜在意識下の分身の孤独は、愛によって癒やされるのだ。たぶん、愛の深さは、二人の関係のなかで、各自の潜在意識下の分身がどれくらい解放されるかによって計られるのではあるまいか。ダヘーア以前に付き合ってきた男性たちが相手だと、自分のなかのいくつもの分身に相応するものは、せいぜい一つ見つかればいいほうだった。それ以外の満たされぬ分身たちは、いつも不満をかこってぶつぶつと文句を言っていたのである。

★

パーマー・ジョスとの会見予定日に先立つ週末、二人はエリーのベッドに横たわっていた。ヴェニーシャン・ブラインドのすきまから洩れる遅い午後の陽光が、からみ合った肢体のうえで踊っていた。

「ごくふつうの会話を交わしているときには——」エリーは言った。「亡くなった父のことを話していても、せいぜい……淡い喪失感に襲われるくらいですむの。ところが、一人でいるときに、心ゆくまで父の思い出にふけったりすると——たとえば、父のユーモアのセンスとか、あの……熱っぽい正義感などを思いだそうとすると——もう、だめ、わたし、こらえきれずに泣きだしてしまうのよ」

「それは不思議でもなんでもないな。感情というものは、言葉に表現すると薄められるものだからね」エリーの肩をなでながら、ダヘーアは言った。「それが、言葉の機能の一つなん

じゃないかな――だからこそぼくらは、自然界を言葉で形容することによって、畏怖の情に圧倒されずに、理解することができるんだから」

「でも、そうだとすると、言語の発明は人類にとっての祝福とばかりも言えないんじゃないかしら。わたしはね、ケン、もし――亡くなった父とたった数分間でも一緒にすごすことができるのなら、なにを犠牲にしても惜しくはないわ、いま持っているものをすべて没収されたって」

すてきなパパたちやママたちがふわふわと浮かんでいたり、ちかくの雲めがけてパタパタと飛んだりしている天国を、エリーは思い描いた。人類の発祥以来この地上で生きて死んだ何兆、何千億という人々。それがすべて収容されているのだとしたら、天国というところはとてつもなく広大な場所でなければなるまい。それでもきっと、大混雑を呈しているはずだ。もっとも、宗教上の天国が、天文学における天空と同程度の広さがあるならば、べつだが。もしそうだとしたら、もちろん、十分なスペースがあることになる。

「きっと概数があるはずだわ」エリーは言った。「銀河系に存在する知的生物の総人口を示す数が。だいたい、どのくらいだと思う、あなたは？　かりに、それぞれ十億の人口をもつ星が百万あるとしたら、知的生物の総数は、だいたい、10^{15}ということになるわね。でも、そういう膨大な数の地球外知的生物のほとんどが地球人より進歩した存在だとしたら、個性の重要さを言い立てることも無意味に思えてくるけど――これもまた、鼻もちならない地球至上主義と言われるかしら」

「そりゃそうさ。それに、銀河系に存在する知的生物の総数がわかれば、ゴロツーブキットウィンキーや、ヴォルガ・セグンや、ソニー・ポケット通信機の銀河生産率がわかる。それがわかれば、銀河総生産が計算できる。それがわかれば、全宇宙総生産が――」

「からかってるのね、わたしを」怒った様子などみじんもない、優しい笑みを浮かべて、エリーはつづけた。「でも、いまの数をちょっと考えてみて。彼らのことを本気で考えてみて。それだけの数の生物のいる惑星がそれほどたくさんあって、しかも、彼らがみんなわたしたちより進歩した存在だとしたら――。考えただけで、ぞくっとしてこない？」

ダヘーアの念頭にあることは読みとれたが、彼女はかまわずつづけた。「ねえ、これをみて。わたし、ジョスとの会見に備えて、にわか勉強をしていたんだけど」

ベッドサイド・テーブルに手をのばして、古いエンサイクロペディア・ブリタニカ・マクロペディアの第十六巻をとりあげた。〝ルーペンスからソマリア〟の巻だった。栞がわりにコンピュータ・プリントアウトの断片をはさんでおいたページをあけると、エリーは〝神聖、もしくは聖性〟の項目を指さした。

「これでみると、神聖なものや聖なるものを感じる人には、ある特別な、不条理な、とは言わないけど――非合理的な側面があることを、科学者たちも気づいているみたいね。彼らはそれをヌーミナス（荘厳な）と呼んでるわ。この言葉を最初に使ったのは……えーと……ルドルフ・オットーという人物で、彼が一九二三年に著した『聖性の概念』という本のなかにでてくるのね。人間は生れつき、荘厳なるものをさぐりだして崇める特質を持っている。こ

彼は言ってるわ。オットーはそれを〝ミステリウム・トリメンドゥム（荘厳な神秘）〟と呼んでるけど。わたしのラテン語の能力でも、その大よその意味は理解できるわ。この〝ミステリウム・トリメンドゥム〟を前にすると、人間は自分をとても卑小な存在に感じるんですって。といっても、わたしの読み方が正しければ、個人的な疎外感を味わう、というのともちがうのよ。オットーは〝荘厳なるもの〟を〝まったく異次元のもの〟と見なし、それに対する人間の反応を〝完き驚愕〟と見なしてるの。ところで、もしそれが、〝神聖な〟とか〝聖なる〟という言葉を宗教人が用いるときに意味するものと一致しているのなら、わたしにも理解できるわ。あの〈メッセージ〉を受信したときは言うに及ばず、単なる電波音に耳を傾けているときですら、わたし、それとまったく同じ感動を覚えるんですもの。あらゆる科学は、その種の畏怖の情を人間の胸に呼び起すと思うんだけど。ねえ、ここのところを読むから聞いて」

エリーは事典の説明を読みあげた。

過去数百年間、多くの哲学者や社会科学者たちは〝神聖なるもの〟の消失を論じ、宗教の衰退を予言した。しかし、宗教の形態は変遷するものであり、宗教的感情の本質やその表現が万古不変ではないことは、宗教史の研究が教えるところである。現在、人間は

……

「こういう宗教関係の項目まで、男女差別主義者が書いてるのね。人間を〝man〟の一語だけで代表させてるんですもの」エリーはまた事典にもどった。

現在、人間は、伝統的に肯定された聖性の認識とは根本的に異なる、絶対的な価値構造を育(はぐく)ませ得る新たな状況に直面しているのかどうか、それが重要な問題である。

「だから？」

「だから、わたしはこう思うのよ――体制的な宗教家たちは、荘厳なるものをじかに知覚し得る手段、たとえば六インチの天体望遠鏡などをわたしたちに与える代りに、荘厳なるものの認識を制度化しようとしてるんだ、って。もし宗教の本質が荘厳なるものの知覚にあるのだとしたら、どちらがより敬虔(けいけん)だと言えるかしらね、体制的な宗教に従う人々と科学を教える人々とでは？」

「ちょっと考えさせてくれる、頭を整理したいので」ダヘーアは言った。彼はエリーの常用句を借用したのである。「いまはのどかな土曜の午後だろう。それなのに、裸でベッドに横たわっているこのカップルは、エンサイクロペディア・ブリタニカをひもといている。彼らはいったいアンドロメダ銀河が〝キリストの復活〟より荘厳かどうかを論じ合っている。彼らはいったい、楽しい時のすごし方を知っているのかいないのか、どっちだろうね？」

第二部　マシーン

CamScannerでスキャン

〈全能の教師〉は、宇宙の構造における科学の原理を示すことによって、人間に研究と模倣の重要性を教えた。〈彼〉は、〝われらがもの〟とわれわれが呼ぶこの天球の住民たちに対して、こう述べられたのではなかろうか——〝わたしは人間のすみかとして地球を創った。人間に科学と芸術を教えるために、星の輝く天空を与えた。こんどは人間が自分自身の慰藉を見出し、わたしの寛大さを範にして、互いに慈しみ合う番である〟。

——トマス・ペイン『理性の時代』（一七九四）

CamScannerでスキャン

第一章　春分点の歳差

われわれは
神が存在すると称して
ゆきあたりばったりのいい加減な偶然や変化にこの世を支配させ
空疎な夢や嘘でおのれを欺こうとするのだろうか？

——エウリピデース『ヘキュバ』

CamScannerでスキャン

結果的には、意外な展開となった。エリーが事前に描いていた段どりは、こうだった——パーマー・ジョスが〈アーガス〉本部を訪れて、電波望遠鏡が信号を受信するさまを見学し、すでに数カ月分のデータが貯えられた磁気テープやディスクのいっぱいつまった広大な部屋を観察する。それから彼は科学的な質問をいくつか投げ、0や1がずらっと並んだ、いまだに解読不能な〈メッセージ〉の母体であるコンピュータ・プリントアウトをいくつか点検する……。

ところが、ジョスは〈アーガス〉への訪問を拒否したのである。自分が仔細に点検したいのは磁気テープではなく人間の心なのだ、というのがその理由だった。であれば、むしろピーター・ヴァレリアンが相手をつとめたほうがよかっただろう。彼は性格的にも温厚で、明瞭に意見を交換し合う能力を持ち、しかも、日々に新たなキリスト教信仰によって支えられているのだから。しかし、その案に、大統領は明らかに反対だったらしい。彼女は小人数の会合を望み、エリーの出席をとくに希望したのだ。

ここカリフォルニア州モデストにある〈聖書科学調査研究所兼博物館〉での討議を強く主

張したのは、パーマー・ジョスだった。エリーはダヘーアの肩ごしに、ガラスの仕切りでこの図書室と隔てられている展示場のほうを見やった。仕切りのすぐ向うには、レッド・リヴァーの砂岩に残された恐竜(きょうりゅう)の足跡を漆喰(しっくい)で型どりしたものが展示されている。恐竜の足跡の周囲には、サンダルをはいた人間の足跡も点々と残っていて、説明書きによれば、それこそはここテキサスにおいて恐竜と人類が同時代に住んでいたことを物語る証拠であるという。結局、説明書きが言いたいのは、進化論は眉(まゆ)つばである、ということらしい。二時間前にエリーは気づいたのだが、その足跡の化石は偽造だという古生物学者の主張は、ここでは一顧だにされていなかった。恐竜と人間の足跡が入りまじったその化石は、〝ダーウィンの過誤〟と題する大々的な展示の一部だった。その左には、地球が自転することを示すフーコーの振子が展示されている。地球の自転については、彼らもすんなりと認めているのだ。その右手には、小さな講堂の演壇に設けられた、松下電器製の豪勢なホログラフィーのセットが見える。それによって、有名な聖人たちの立体像が信者たちに直接話しかけられるようになっているのだ。

目下のところ、それよりもっと直接的にエリーに話しかけているのは、ビリー・ジョー・ランキン師だった。ジョスがランキンを招いたことは最後までわからなかったので、知らせを聞いたときには彼女もびっくりした。ジョスとランキンは、キリストの再臨がまぢかに迫っているかどうか、地球の破滅が再臨の必要要件になるのかどうか、あるいは伝道における

時の[illegible]争の問題について、長いあいだ神学的論争をつづけていた仲なのである。が、彼らはつい最近和解に達した。それは大いに喧伝されたのだが、アメリカにおけるファンダメンクリスト派の共通の利益のために実現したのだという。アメリカとソ連の和解の動きが、世界各地における宗教論争にも大きな影を投げている、一つの証左とも言えよう。会見の場所をここにしたのは、パーマー・ジョスが和解にさいして呑まざるを得なかった譲歩の一つだったのかもしれない。おそらくランキンは、なんらかの科学的論点が問題になった場合、この場の展示物を自分に有利な事実証拠として援用できると考えたのだろう。

討論が開始されて二時間たったいま、ランキンは弾劾と懇願を交互にくり返していた。一分の隙もない服装、マニキュアしたばかりの爪、にこやかな笑み――端然とした彼の服装は、どことなく無精ったらしい、もっさりとしたパーマー・ジョスのそれとは対照的だった。ジョスはごく微かな笑みを浮かべて目を半眼にとじ、頭をたれて、あたかも祈りをささげているかのような姿勢をとっている。口はほとんどきかなかった。これまでのところランキンの主張は――自己陶酔に陥っているしゃべり方をのぞいて――テレビにおけるジョスの説教とほとんど教義的に差がなかった。

「あなた方科学者は、とても恥ずかしがりなんだな」ランキンは言った。「本音をなかなか明かそうとしない。だから、論文の題名だけを見たのでは内容がわからないんだ。相対性理論に関するアインシュタインの最初の論文は、〝運動物体の電気力学〟と題されていた。あの有名な $E = mc^2$ の公式のことなど、おくびにもだしていない。そうなんだ。〝運動物体の

電気力学〟とくるからね。たぶん、大きな学会で、大勢の科学者たちがギャーギャー言い合っているところに神が顕現したら、彼らはきっとその現象に関する論文をものして、〝空気中における樹枝状発光について〟とかいう題名をつけるんじゃないかな。そのなかには方程式をわんさと盛り込み、〝各仮説の統合〟などについてあれこれ空論をもてあそびはするものの、〝神〟という言葉はただの一度も使わないにちがいないのだ。だいたい、あなた方科学者は万事懐疑的にすぎるよ」

わずかに頭を横に動かしたことから推して、この場合の〝科学者〟のなかには、たぶんダヘーアも含まれているのだろう。

「あなた方はすべてに疑問符をつける、あるいはつけようとする。〝それは放っとけばいいじゃないか〟とか、〝壊れないものなら直す必要もあるまい〟という言葉など、あなた方には無縁なんだろう。とにかく、あなた方はきまって、あるものが、あなた方の基準でいう〝真実〟であるかどうか、確認しようとするのだ。そして、あなた方の基準でいう〝真実〟とは、単なる経験的な真実、肉眼で見え、手で触れることの可能なデータにすぎない。霊感とか啓示の入る余地はどこにもない。あなた方は最初から、宗教に関わりのあるすべてを締めだしてかかっているのだからな。わたしが科学者を信用できんのは、科学者がすべてを疑ってかかっているからなのさ」

なるほど、うまい立論の仕方だな、とエリーはつい思ってしまった。しかも、このランキンにして、現代のテレビ伝道師たちのあいだでは、さほど頭の切れない男と目されているの

だ。いや、この人は決して馬鹿ではないわ、とエリーは思い直した。彼は自分の信徒たちを馬鹿だと思っているのだから。じっさい、本当の彼はかなり頭のいい男なのだろう。ここでわたしは反論すべきなのだろうか？　ダヘーアと博物館の連中は、討議を逐一記録している。その記録は公表しないという申合わせができているが、かりに自分が思いどおりのことをしゃべったら、〈アーガス〉の仲間たちや大統領は当惑するだろうか？　その点、エリーは気になったのだが、ランキンの舌鋒は鋭くなる一方なのに、ダヘーアもジョスも口をはさもうとする気配がない。

「あなたはきっと反論を期待してるでしょうね」気がついたときには、エリーは口をひらいていた。「そういう問題に関して、科学者の側の〝公式な〟見解といえるものはありません。それに、全科学者を代表して、あるいは〈アーガス計画〉を代表して反論できる能力も、わたしにはありません。でも、お望みなら、純粋に個人的意見を申しあげてもいいわ」

　ランキンは勢いよく頭をふり、笑みを浮かべて歓迎の意を示した。ジョスは、相変らず大儀そうな態度で聴いている。

「まず最初にご理解いただきたいのは、わたしには、だれかの信仰そのものを攻撃するつもりはない、ということです。たとえそれが誤謬に満ちていようと、あなたにはお好きな教義を信奉する権利がありますもの。それに、あなたがおっしゃることや、ジョス師が言われたことは――数週間前に、テレビで見たんですけどね――そう簡単には反駁できません。考える時間が必要だわ。でも、とにかく、あなた方の主張がまちがっている理由を、思いつくま

まに述べさせてもらうことにします」

ここまでのところは、わたしも抑制心のかたまりだな、とエリーは思った。

「あなた方は、科学者の懐疑的な態度が我慢ならないとおっしゃる。でも、わたしたちが懐疑的になったのは、この世があまりにも複雑だからです。デリケートだからです。最初に発表される法則は、だれのものだろうと、必ず正しいとはかぎりません。それに、人間には自己欺瞞に陥る能力があります。科学者も例外ではありません。社会的に嫌悪すべき教義はすべて、科学者によって、ある時期支持されたという事実があります。それも、著名な科学者、超一流の有名な科学者によって、です。それはむろん、科学者にかぎりませんわ。政治家も、尊崇されている宗教界の指導者も、そうした教義を支持してきました。いい例が奴隷制度であり、ナチの人種差別主義でしょう。科学者は過ちを犯します。神学者も過ちを犯します。人間ならだれしもが過ちを犯します。それこそが、人間のしるしなのですから。あなた方自身、こういう格言をお持ちでしょう――〝過ちは人の常、許すは神の業〟。

だから、過ちを防ぐには、すくなくとも、過ちを犯す機会を減らすには、懐疑的になるしかないんです。着想が湧いたら、テストします。厳密な証拠によってチェックするんです。だいたい、この世に公認の真実があるなんて思えないわ。でも、異なる意見を自由に闘わせれば、そう、ある仮説を実験によって存分に吟味すれば、そこから真実が浮かびあがってくるんです。それがすなわち、科学の歴史が体験してきたことですもの。

一方、宗教に目を転じてみても、対立する見解はいくらでもあるようね。たとえば、キリ

ト教徒は、宇宙が誕生してから特定の年数しかたっていないと考えているようだわ。そこにある展示物を見ても、ある宗派のキリスト教徒（それにユダヤ教徒とイスラム教徒）は、宇宙が誕生したのはたかだか六千年前だと考えているのは明らかだわね。それとは対照的に、ヒンズー教徒は——彼らの数も相当多数にのぼるけれど——宇宙が誕生してから無限の歳月がたっており、その間、より小さな誕生と破壊が果てしなくくり返されてきた、と考えているわ。ところで、その二つの説がいずれも正しいということは成り立たないでしょう。宇宙の年齢は特定の数に帰せられるのか、それとも無限なのか、どちらかであるはずです。あそこにいるあなた方のお友だち」——〝ダーウィンの過誤〟の前をぶらついている数人の博物館係員をガラスの仕切りごしに指さして——「あの人たちは、その件についてヒンズー教徒と討論すべきだわ。神はあなた方に教えたのとはべつのことを、ヒンズー教徒に教えたようですもの。でも、あなた方は他宗の人たちと話し合うことはまずないのね」

これはすこし言いすぎかしら、とエリーは胸に呟いた。

「ことほどさように、この地球上の主要な宗教の教義は相矛盾しているんです。そのすべてが正しいとは、まず考えられないでしょう。それに、そのすべてが誤りだとしたらどうでしょう？　むろん、その可能性だってあり得るんですから。だから、〝真実〟を云々するさいはよほどの慎重さが必要だということになりません？　その場合、相異なる主張の中から真実を選り分けるには、懐疑的になる以外にないわ。わたしは、新奇な科学的着想にはすべからく懐疑的態度で接するのと同様に、あなた方の宗教的信条に対しても懐疑的態度で接しま

CamScannerでスキャン

す。でも、一つだけ相違があるわね。科学者の世界では仮説と呼ばれるものが、あなた方の世界では霊感とか啓示とか呼ばれるんですから」

ジョスがすこし身じろぎしたが、答えたのはランキンだった。

「神の啓示、すなわち、旧約聖書と新約聖書における神の予言で、その通り実現した事柄は枚挙に遑がないからね。救世主の出現は、イザヤ書五十二章、ゼカリヤ書十四章、創世記十七章で予言されている。彼がベツレヘムで生れるということは、ミカ書五章で予言されているのだ。それから、彼がダビデの家系から生れることは、マタイ伝一章と――」

「ルカ伝で語られているわね。でも、それはあなたにとってつごうの悪いことじゃないのかしら。マタイとルカは、イエスにまったく異なる系図を与えてるんですもの。なおつごうの悪いことに、彼らは血統をダビデからマリアにではなく、ダビデからヨセフへとたどってるんですもの。それとも、あなたは父なる神を信じていらっしゃらないの？」

ランキンは、エリーの声など耳に入らなかったかのようにつづけた。「イエスの伝道と受難は、イザヤ書五十二章と五十三章、ならびに詩篇第二十二篇で予言されている。イエスが銀三十で裏切られるだろうということは、ゼカリヤ書十一章にはっきりと明示されているしな。あなたが正直な人なら、これら、実現された予言の証拠を無視できないと思うがね。それに、聖書はわれわれの時代のことまで語っている。イスラエルとアラブ、悪魔の支配するゴグとマゴグ、アメリカとロシア、核戦争――すべては聖書に語られているのだ。正常な判断力をすこしでも持っている人間なら、それは容易に見てとれるはずだ。有名な大学の教授

ならアともな」

「あなたの欠点は」エリーは答えた。「想像力に欠けていることだわ。あなたの引かれた予言なるものは——ほとんど例外なく——曖昧で、漠然としていて、不正確で、悪用されやすいものばかりじゃないの。どれをとっても、多様な解釈が成り立つものばかりだわ。あなたがあげようとしない、もっと率直な予言にしたってそうよ——たとえば、神の王国は聴衆のなかのだれかがまだ生きているうちに実現するだろうという、イエスの約束がいい例ね。言っときますけど、神の王国はわれわれ一人一人の心の中にある、なんて言い訳はお断わりよ。概してあなたは、あなたから見て実現されたと判断できる章句ばかり引用して、残りは無視しているんだわ。それに、むかしは、なんとか予言が実現するのを見たいという渇仰があって、それが宗教家たちに有利に働いたということも忘れないでほしいものね。

でも、あなた方の崇める神、全知全能にして慈悲深い神が、もし本当に将来の世代のために記録を残そうとしたなら、そう、たとえばモーゼの遠い子孫たちに対して自分の存在をはっきり伝えたいと願ったなら、それは造作もないことだったはずよ。曖昧な言葉をやたらと吐き散らす代りに、ごく単純な真理をさす言葉を残せばよかったんだわ……」

パーマー・ジョスがわずかに身をのりだして、言った。「たとえば……？」

「たとえば、〝太陽は恒星である〟という言葉だっていいでしょう。もしくは、〝火星は砂漠や噴火口のたくさんある荒涼たる場所で、シナイ半島に似ている〟とかね。あるいは、〝運動中の物体は運動しつづける傾向がある〟でもいいわ。それとか——そうね」メモ用紙に数

字を走り書きして、「〝地球の重量は人間の子供の体重の百万×百万×百万×百万倍である〟でもいいんじゃないかしら。さもなければ――あなた方お二人は特殊相対性理論がお嫌いのようだけど、それは粒子加速器や宇宙線の中でごく日常的に確認されてるんですけどね――それはともかく、そのことと関連して、〝この世に特権的な基準系は存在しない〟というのはどうかしら？　あるいは、〝なんじ、光より速く移動するなかれ〟でもいいわ。とにかく、三千年前の人間には知り得たはずがないことなら、なんでも」

「それ以外にも、なにか考えつくかね？」ジョスが訊いた。

「そうね、そういう形でいいなら無限に考えられるわ――物理学のすべての定理について、すくなくとも一つずつ作れるでしょう。たとえば……〝熱と光は最小の小石にも宿る〟とか、こういうのだっていいはずよ――〝地球の原点は2に関係あるが、磁鉄鉱のそれは3に関係がある〟。これはつまり、重力は逆2乗則にしたがうけれども、磁気双極子の力は逆3乗則にしたがう、ということを踏まえてるんですけどね。さもなきゃ、生物学における真理をベースにしたっていいわ」ダヘーアにむかってうなずいてみせたのだが、彼は沈黙の誓いでもたてたかのように黙りこくっている。「たとえば、こういうのはどう――〝からみ合った二本の糸状体が生命の秘密である〟」

「それはなかなか興味深いね」パーマー・ジョスが言った。「もちろん、あなたはDNA、すなわちデオキシリボ核酸のことを言ってるんだろうね。そういえば、医師の杖、医学のシンボルのことを知ってるかね？　これは陸軍の軍医部隊の記章でもあるんだが、〝ヘルメス

の杖〟と呼ばれている。杖を中心にして二匹の蛇がからみ合っている図で完璧な二重の渦巻状をなしている。古代から、その図が生命保存の象徴だったんだ。これなどはまさしく、伝承が科学的真理と一致した例と言えるんじゃないのかね？」

「あれは渦巻きではなく、螺旋だと思いますけど。それはともかく、これだけ象徴だの、予言だの、神話だの、伝承だのがたくさんあれば、なかには最新の科学的事実と偶然一致するものもでてくるでしょうね。その点については断言できないけど、あるいはあなたのおっしゃるとおりかもしれないわ。〝ヘルメスの杖〟は、神からのメッセージかもしれない。もちろん、それはキリスト教のシンボルでもないし、現代における他のいかなる支配的宗教のシンボルでもないけれど。それはそうと、あなた方にしたって、神々は古代ギリシャ人のみに話しかけた、などという主張はなさりたくないでしょうね。わたしが言いたいのは、つまり、かりに神がわたしたちにメッセージを送ることを望んだとして、その手段が古代の文字しかなかったとしても、もっといい方法があったんじゃないか、ということなの。それに神は、なにも文字だけにたよる必要はなかったんじゃないのかしら。もし本当に神が存在するなら、地球の周囲をめぐる巨大な十字架があったっていいんじゃないかしら。月の表面に十戒が刻まれてたっていいんじゃない？　どうして神は、聖書の中でのみ歴然としていて、現実の世の中ではこれほど曖昧模糊としているのかしら？」

パーマー・ジョスはとっさに反論しようとしたらしい。彼の顔には意外にも、愉しげな表情が浮かんでいた。が、エリーの舌には弾みがついて止まらなくなっていたし、ジョス自身、

ここで口をはさむのは礼を失すると考えたようだった。

「そうだわ、それになぜ、神はわたしたちを見捨てたの？」エリーはつづけた。「むかし神は、第二火曜が訪れるたびに予言者やイスラエルの太祖たちと語り合っていたんでしょう？　神は全知全能だと、あなた方はおっしゃる。だとしたら、三十年に二、三度くらい、自分の望みを明瞭な言葉でじかにわたしたちに伝えることくらい造作もないはずだわ。それができないのはなぜなの？　なぜわたしたちは、一点の曇りもなく、明瞭に、神の姿を見ることができないんですか？」

「われわれは現に見ているとも」荘重な響きをこめて、ランキンが言った。「神はいつでもわれわれのあいだにおられるのだ。そして、われわれの祈りに答えてくださる。この国の何千万もの人々は、生れ変って、神の栄えある恩寵を目撃しているのだからな。聖書は、モーゼやイエスの時代と同じく、現代においても、はっきりとわれわれに語りかけているのだ」

「そんなことを訊いてるんじゃないわ。おわかりでしょう、わたしの言いたいことは。燃える繁み、火の柱、空から高らかに〝我は有りて在る者なり〟と告げる声——それはみんなどこに存在するの？　自分が実在することを疑問の余地なく知らしめる能力を持っているはずの神が、どうしてあんな漠然とした、どうとでもとれる方法でしか顕現しないんでしょう？」

「しかし、あなたはまさしく、天からの声をとらえたと言ってるんじゃなかったかな」エリーが一息ついたとき、パーマー・ジョスはさりげなく言って、こちらの目を見つめた。

うとしてたんだ。アブラハムやモーゼの時代には、無線機や望遠鏡もなかった。彼らには、FM放送でしゃべる全能の神の声は、聞きたくても聞けなかっただろう。たぶん、今日、神は新たな方法でわれわれに話しかけ、新たな知恵をわれわれに得させようとしてらっしゃるのだ。もっとも、あれは神ではないという可能性も――」

「ええ、悪魔からのメッセージだという説ね。それはわたしも聞いたことがあるわ。馬鹿馬鹿しい！　そちらに異存がなければ、その〝メッセージ＝悪魔〟説は、しばらく棚上げにしませんか？　あの〈メッセージ〉は神の、あなた方の神の、声だとお二人とも考えてらっしゃるんでしょう？　でも、祈りに答えて祈りを投げ返す神なるものは、あなた方の宗教のどこに存在するんですか？」

「ナチのテレビ映像を祈りと見なすつもりはないがね、わたしは」ジョスが言った。「あれはわれわれ地球人の注意を引くためだ、とあなたは言ってるじゃないか」

「では、なぜ神は科学者を選んで話しかけてきたんだと思います？　あなた方伝道師を選ばずに？」

「神はつねにわたしに語りかけているとも」鈍い音がでるほど強く、ランキンは人差し指で自分の胸をついた。「それから、ジョス師に対してもな。啓示はまちがい、と神はわたしに語られた。世界の終末が迫るとき、われわれは歓喜につつまれるのだ。罪人は審判を受け、選ばれし者が天国に召されて――」

「神はそれを電波スペクトルで告げろ、とあなたに言ったのかしら？　あなたと神の対話は、わたしたちが確認できるように、どこかに記録されていて？　それとも、ただあなたがそう言ってるにすぎないのかしら？　なぜ神はそれを、信者たちではなく、電波天文学者たちに告げようとするのかしら？　ほぼ二千年ぶりに人間につかわされる神のメッセージが、素数であり……一九三六年のオリンピック大会におけるヒットラーの映像だというのは、ちょっと奇妙だと思いません？　あなた方の神は並はずれたユーモアのセンスをお持ちなのね」

「わたしの神は、どんなセンスだろうと自由にお持ちになれるとも」

両者のあいだに本物の敵意が芽生えたのを感じとって、ダヘーアは警戒心をかきたてられたらしい。彼は言った。「ちょっと、みなさん、この会見のそもそもの目的を、もう一度みんなで思いだしたほうがいいと思うんだが」

〝なだめ屋のケン〟の登場ね、とエリーは思った。彼はときに大胆な発言をすることもあるのだが、それはまとめ役の責任を負ってないときに限られている。率直な意見を吐露することもあるが……それは二人でいるときだけだ。政治的な役割を負っているとき、とりわけ大統領の代理をつとめているときの彼は、じつに物わかりがよくなって、悪魔とすら喜んで妥協するのではないか、と思われるほどだ。エリーはあらためて気持を引きしめた。神学的な語法は、神経にさわりかけてきていた。

「本題にもどるとして」エリーは自分自身の思考を切り換えると同時に、ダヘーアの意向にも水をさした。「あの信号の発信者が神だとしたら、なぜ天空の限られた場所から——地球

にちかい明るい星から——のみ、送られてくるのかしら？　なぜそれは天空のあらゆる領域から、ちょうど宇宙の黒体背景放射のように、同時に送られてこないのかしら？　一つの星から送られてくれば、それは他の文明からの信号と見るのがふつうでしょう。もしあらゆるところから同時に降りそそいでくれば、それこそあなた方のいう神からの送信とみても不都合がないのに」

「その気になれば、神は、こぐま座の尻の穴からだって発信させることができるとも」ランキンの顔は真っ赤に染まっている。「いや、これは失礼。つい興奮してしまった。とにかく、神に不可能事はない、とわたしは言いたいのだ」

「ランキンさん、あなたは自分の理解をこえるものはすべて神に委ねてしまうのね。あなたにとっての神とは、この世のあらゆる謎、人間の知性が挑むべきすべての謎を掃き捨てる場所なんだわ。なにか不可解なことに直面すると、あなたはくるっと背をむけて、神のみわざだ、と言うのよ」

「わたしは侮辱を受けにここにやってきたのではないぞ、きみ……」

「ここにやってきた？　ここはあなたの本拠地じゃなかったかしら」

「きみ……」反射的に抗弁しようとして、ランキンは思い直したらしい。深々と息を吸いこんでつづけた。「ここはクリスチャンの国だ。クリスチャンは、この問題に関して正確な知識を持っている。クリスチャンには、神の聖なる言葉が正確に人々に理解されるようつとめる義務があるのだ……」

「わたしだってクリスチャンです。でも、あなたにはわたしの思いなど代弁できはしない。あなたは大昔の五世紀頃の宗教的熱狂の中にとじこもっているからだわ。あれからこの地上ではルネッサンスが起り、啓蒙運動が花ひらいたのよ。その間、あなたはどこにいらしたの？」

ジョスとダヘーアが、同時に椅子から身を浮かした。「おねがいだ」エリーの顔を真っ向から見すえて、ケンは懇願した。「もっと冷静に本来の議題を論じ合わなければ、大統領の意向にも背くことになるじゃないか」

「でも、〝率直な意見の交換〟を希望したのはあなたよ」

「そろそろお昼がちかい」パーマー・ジョスが言った。「すこし休憩して昼食にしたらどうだろう？」

図書館の会議室の外にでると、エリーは〝フーコーの振子〟を囲む手すりにもたれかかって、ダヘーアと二言三言ささやき交わした。

「あの知ったかぶりの、聖人ぶった、自信過剰のいやらしい男、一発お見舞いしてやりたいくらいよ……」

「どうしてだい、エリー？　無知と誤謬は、いずれそのまま彼に跳ね返ってくると思わないのかい？」

「そりゃ、あの男が口をとじてさえいれば問題ないわ。でも、何百万人もの人間を堕落させてるのよ、彼は」

CamScannerでスキャン

「しかし、むこうでもきみのことをまったく同じように考えてるよ、エリー」

★

ダヘーアとつれだって昼食からもどってくると同時にエリーは、ランキンが落着きをとりもどしていることに気づいた。最初に口をひらいたパーマー・ジョスのほうは、単なる儀礼的配慮の枠をこえて、いかにも愉しげな表情を浮かべていた。

「アロウェイ博士」ジョスは言った。「あなたがご自分の発見を説明したがっていること、ここには神学的な論争のためにやってきたのではないこと、はよくわかっているつもりだ。が、もうほんのすこし、われわれの議論に付き合っていただけないだろうか。それにしても、あなたの舌鋒は鋭くていらっしゃる。ランキン師が信仰の問題であれほどムキになるのを最後に見たのはいつだったか、思いだせないほどだ。数年ぶりであることはまちがいないな」

ちらっと、ランキンのほうを見やった。ランキンは襟のボタンを外し、ネクタイをゆるめた格好で、黄色いメモ用紙に何事かいたずら書きしている。

「実のところ、さきほどあなたの言われたいくつかのことに、わたしは驚いている。自分はクリスチャンだ、とあなたは言われた。それは本当かな？　どういう意味で、あなたはクリスチャンを名のられるのだろう？」

「クリスチャンといっても、〈アーガス計画〉の所長に就任したとき、身上書の宗教欄にそう記入したわけじゃないんですよ」ごく軽い口調で、エリーは言った。「イエス・キリスト

は尊敬すべき歴史上の人物だ、と思う意味で、わたしはクリスチャンなんです。山上の垂訓は、この世でもっとも偉大な倫理的訓戒の一つだと思うし、史上最良の演説だと思っています。〝汝の敵を愛せ〟という言葉など、現代の核戦争の危機をも解決できる、長期的視野に立った教えじゃないかしら。イエスが現代に生きていたらどんなに心強いだろう、と思うわ。そうしたら、この地球という惑星に住むすべての人間が恩恵を受けるでしょうからね。でも、イエスはあくまでも一個の人間だった、とわたしは思うの。偉大な人間、勇敢な人間、人が目をそむけたがる真実を見抜く洞察力を持っていた人間だと思います。でも、彼が神だとか、神の子だとか、神の孫息子だなどとは決して思わないわ」

「神を信じたくないんだな、あなたは」単純な事実のように、ジョスは言った。「神を信じなくてもクリスチャンでいられる、とあなたは思っている。率直におたずねしたい——あなたは神を信じているかね？」

「その問は曲者ね。もしノーと答えた場合、わたしは神が存在しないと確信していることになるわけ？ それとも、神が存在するとは確信していないことになるわけ？ その二つは必ずしも同じ意味ではないはずでしょう」

「なるほど。おっしゃるとおりかどうか、考えてみようじゃないか、アロウェイ博士。あなたを〝博士〟と呼んでもかまわんだろうね？ あなたは科学者だから、ある事柄を説明するための仮説は必要以上に増やしてはならないとする、いわゆる〝オッカムの剃刀〟の正しさを認めてるだろうと思う。つまり、同じ体験の解釈として、それぞれに正しい二つの異なる

説明がいくつかあったら、単純なほうを選んだほうがいい、という定理だ。それが正しいことは科学の歴史自体が裏づけている、と言っていいだろうね。さて、そこで、もしあなたが、神の存在に関して深刻な疑念を――わが身を信仰に委ねるのをためらうほどの疑念を――抱いているのなら、あなたは神が不在の世界を想像できるはずだ。神の手を借りずに誕生した世界、神の庇護なしに日々の生活が営まれる世界、神の手に抱かれずに人々が死ぬ世界をね。そこでは罰もなければ報いもない。信仰に忠実に生きた聖人もいなければ予言者もいない――そんな連中など馬鹿だとあなたは思うだろうね、彼らは自らを欺いていたのだ、と。そういう世界、つまり、神が不在の世界とは、人間が、いかなる存在理由もなしに、そう、いかなる目的もなしに生きる世界だ。そこではただ、さまざまな原子が――人間を構成している原子も含めて――複雑な衝突をくり返しているにすぎない。ちがうかね？

わたしにとって、それは非人間的な、おぞましい世界だ。そんなところには絶対住みたくない。しかし、もしあなたがそういう世界を想像できるのなら、なぜ二股をかけるのかね？ なぜ、クリスチャンではあるが神の存在は信じられない、などという折衷的な態度をとるのかね？ 神のいない世界を想像できるなら、いっそのことはっきりと、神は存在しないと言い切ったほうが簡単だろうと思うがね。つまり、あなたは〝オッカムの剃刀〟に忠実ではないのだ。単なる詭弁を弄しているんだ。もし神の存在しない世界を想像できるのなら、何事にも徹底する良心的な科学者が、なぜ不可知論の立場をとるのだ？ はっきり無神論者だと言い切ったほうが、はるかに自分に忠実なんじゃないのかね？」

「あなたはてっきり、神が存在するという仮説のほうがより単純なんだ、と主張するのかと思ったわ」エリーは言った。「でも、いま提示なさった立論のほうがずっとすぐれてるわね。そこでわたしの答ですけど、もしこれが純粋に科学的な問題の論議なら、あなたの見解に賛成するわ、ジョス師。科学の科学たる所以は、仮説を吟味して、修正していくことにあるんです。もしこの世のあらゆる事象を、超自然的な説明にたよることなく、自然の法則だけで説明し得るのなら、わたしはとりあえず、無神論者だ、と名のってもかまいません。でも、自然の法則が万能ではない証拠が一つでも発見されたら、わたしはためらわずに無神論を撤回します。自然の法則の欠陥を探知し得る能力は、いまでは完全にわたしたちに備わっているんですから。わたしが無神論者を名のらないのは、これが純粋に科学的な問題ではないからだわ。これは宗教的な問題であり、政治的な問題なんですものね。科学的な仮説の試験的な性格は、この分野にまでは適用できないのよ。あなたにしたって、神を仮説としては論じないでしょう。あなた方は一方的に、真理を手中にしていると思いこんでいらっしゃる。だからわたしは、あなた方が見逃しているものが一つや二つあるかもしれませんよ、と指摘しているわけ。でも、どうしても答えろと言われるなら、喜んでお答えするわ――わたしは、自分が正しいと断言することはできません、ってね」

「不可知論者とは、自分の信念を貫徹する勇気のない無神論者のことだと、いつも思っていたよ」

「それならばむしろ、不可知論者とは、すくなくとも人間が誤謬を犯す動物だということを知っている敬虔な人間、と言ったほうが適切なんじゃないかしら。自分が不可知論者だと言うとき、わたしはただ、信ずるに足る証拠を見出せない、と言ってるにすぎないんです。神――あなた方の信仰する神――が存在するという決定的な証拠もないし、神が存在しないという決定的な証拠もない、というのが妥当なところじゃないかしら。地球に住む人間の半分以上がユダヤ人でも、キリスト教徒でも、イスラム教徒でもない以上、あなた方の信仰する神が絶対に存在するという主張は成り立たないと思うわ。さもなきゃ、この地上の人間はとっくに全員がキリスト教に帰依していたはずですもの。くり返しになるけれど、もしあなた方の神に、自分の存在を人間に知らしめたいという気が本当にあったのなら、もっと効果的な方法がいくらでもあったんじゃないかしら。

その点、こんどのヴェガからの〈メッセージ〉は、なんと普遍的なことか。だって、それは世界中で受信されてるんですからね。歴史も、言語も、政治形態も、宗教も異なる国々で、電波望遠鏡は日夜ヴェガからの電波をとらえてるのよ。だれもが天空の同じ場所から、同じ偏波変調を持つ同じ周波数で、同じデータを受けとっているのよ。イスラム教徒も、ヒンズー教徒も、キリスト教徒も、無神論者も、等しく同じ〈メッセージ〉を受信してるんだわ。そこに疑念をはさむ者がいたら、ただ電波望遠鏡を――大型である必要はないから――ヴェガにむけさえすればいいんだわ――そうすれば、必ず同じデータが得られるんですから」

「こんどの電波信号は神がよこされたものだと、あなたは言いたいんじゃないだろうね」ラ

CamScannerでスキャン

ンキンが言った。

「とんでもない。わたしはただ、ヴェガの文明は——あなた方の神よりはるかに劣る能力しか持っていなくとも——自らの意志を明瞭に伝えることができる、と言いたいだけ。あなた方の神にしたって、よしんば口伝ての交信とか古代の文字とかの曖昧な手段にたよるにせよ、もし本当にその気持があれば、一点の疑問の余地なく自分の存在を明示できたんじゃないのかしら」

そこで一息ついたが、ジョスもランキンも言い返そうとしない。で、彼女はまた話題を〈メッセージ〉のデータにもっていこうとした。

「どうでしょう、最終的結論は、〈メッセージ〉の解読がもうすこし進むまで留保することにしてみては？　お二人とも、データをごらんにならない？」

こんどは二人も同意した。そう言われるのを待っていた気味もあった。が、見せることのできたのは延々とつづく0と1の行列で、それはとくに啓発的でもなく、霊感の獲得に役立ちそうもない。〈メッセージ〉の予想ページ数と、解読に役立ちそうな鍵について、エリーは慎重に説明した。〈メッセージ〉はなんらかのマシーンの設計図ではないかというソ連の科学者の見解については、ダヘーアとの暗黙の了解にしたがって、一切触れなかった。いまの段階では、それはあくまでも一つの臆測にすぎないし、ソ連側もまだ公然と論じてはいないのである。その場で思いついて、彼女はヴェガ自体に関する情報をいくつか紹介した——その質量、表面温度、色、地球からの距離、誕生してからの年月、そして、その周囲をまわ

CamScannerでスキャン

っている岩石のリング——これは一九八三年に赤外線天文学衛星によって発見されたのだが。

「このヴェガについては、天空でいちばん明るい星であるということ以外に、なにか特徴はあるのかね？」ジョスがたずねた。「あるいは、なにかしら地球と関連のあることとか？」

「そうね、星としての特性に関しては、とくに目立つこともありません。でも、こういう面白い事実もあるわ——というのは、いまから一万二千年前、ヴェガは北極星だったんです。そして、いまから一万四千年後にも、また北極星になるんですけどね」

「北極星は北極星だと思っていたがな」依然としていたずら書きをつづけながら、ランキンがうつむいたまま言った。

「ええ、二、三千年のあいだはね。でも、永遠にその状態がつづくわけじゃないの。なぜかというと、地球はゆっくりと回転しているコマみたいなもので、その回転軸はつねに一定ではなく、緩慢なすりこぎ運動をしているからなんです。だから、軸の示す方角もすこしずつ回転しているわけ」鉛筆を地球の軸に見立てて、具体的に示してみせた。「専門的には、〝春分点の歳差〟と呼ばれているんだけど」

「発見者は、ロードスのヒッパルコス」ジョスがつけ加えた。「紀元前二世紀だったね、発見されたのは」

彼のような男が苦もなくその事実を言ってのけるとは意外だった。

「そのとおりよ。だからいまは——」エリーはつづけた。「地球の中心と北極をむすぶ軸の延長線は、こぐま座にあるポラリスという星をさしているの。それが現在の北極星というわ

けね。このこぐま座については、たしか昼食前にあなたも言及なさったわね、ランキンさん。地球の軸がゆっくりとすりこぎ運動をするにつれて、その延長線はポラリスではなく、天空の異なる位置をなぞっていきます。そして二万六千年のあいだには、天空に完全な弧を描くわけ。目下、北極はポラリスのすぐちかくをさしているから、船舶が方位を測るのにも十分役立ってるわ。でも、いまから一万二千年前には、さっきも言ったようにヴェガをさしてたんですけどね。このヴェガとポラリスのあいだには、特別な関係はありません。銀河系における星の配置は、地球が二十三度五分傾いて回転しているという事実とはなんら関係ないんですもの」

「一万二千年前というと、およそ紀元前一万年になるね。この地上にようやく文明の曙光がさしかけたときだ。ちがうかね?」ジョスがたずねた。

「そのとおりよ。でも、地球は紀元前四〇〇四年に誕生した、とあなた方がお考えなら別ですけど」

「いいや、そんなふうには信じてないさ。そうだろう、ランキン君? われわれはただ、地球の年齢はあなた方科学者が考えるように正確には割りだせまい、と思っているだけでね。地球の年齢ということになると、われわれは、きみたちの言う不可知論者かもしれんよ」ジョスの顔には、悪戯っ子のような、愛敬たっぷりの笑みが浮かんだ。「それはともかく、いまから一万年前に、地中海やペルシャ湾を航海していた連中にとっては、ヴェガが方角の指針になったというわけか?」

「その頃はまだ最終氷河期だったでしょうから、遠洋航海にはすこし早すぎたでしょうね。でも、ベーリング地峡を通って北アメリカにわたった狩人たちはいたと思います。その連中にとっては、真北の空にあれほど明るい星が瞬いているのはかけがえのない幸運に——お望みなら神意という言葉をつかってもいいでしょう——思われたでしょうね。この天文学上の偶然によって命拾いした人たちは数知れないと思うわ」

「なるほど。それは興味深い話だ」

「〝神意〟という言葉は比喩以外の何物でもありませんから、誤解なさいませんように」

「それはわかっているとも、安心したまえ」

そろそろ対話を切りあげる潮時ではないかという意を、ジョスはそれとなく示しはじめた。きょうの話し合いの成果に、彼は必ずしも落胆してはいない様子だった。が、ランキンのほうは、まだまだ言い足りないことがあるらしい。

「ヴェガが北極星だったということを文字通りの神意と見なさないとしたら、驚くほかないな。わたしは神に揺がぬ信仰を捧げているから、証拠などは要らん。新たな事実が判明するたびに、信仰がますますもって牢固たるものになるだけだ」

「だとすると、わたしがいままで話したことをすこしもご理解いただけなかったということね。あなた方とわたしで信仰の深さの競い合いをするのなんて、わたしはまっぴら。どうせあなたは自分が勝者だと言いたいんでしょうから。おみかけしたところ、あなたはまだ一度も自分の信仰を試したことがないみたいね。自分の信仰に命を賭ける気はおあり？　わたし

は喜んで、科学に対する信仰のために、命を賭けてみせるわ。あの窓の外をごらんなさい。大きな"フーコーの振子"があるわね。わたしの信仰に照らせば、自由な振子の振幅は――垂直の位置からどれだけ遠くに振りあげられようとも――絶対に大きくなることはないの。ただ小さくなる一方でね。わたしは喜んで振子の前に立ちましょう。そして、あの重しを顔の前までちかづけ、そこでパッと離して、反対側に遠ざかった重しが帰ってくるのを待つわ。もし科学に対するわたしの信仰がまちがっていれば、重さ五百ポンドの振子がわたしの顔を直撃することになるでしょう。さあ、いかが。わたしの信仰を試してごらんになる?」

「そんなことをする必要はない。あなたの科学的知識の正確さは疑わんとも」ジョスが答えた。が、ランキンの顔には、興味を誘われたような表情が浮かんでいた。この男はおそらく――と、エリーは思った――振子に直撃されたわたしの顔を思い描いているのではあるまいか。

「あなたのほうはいかが?」エリーはつづけた。「振子を離した直後に一フィート前に進んで、振幅を急いで短縮してくれるよう神に祈る気はあって? もしあなた方が思いこんでいたことがすべて間違いだとわかったら、どうお? あなた方が教えてきたことが神の意志でもなんでもなかったとしたら? 神ではなく、悪魔の教えなのかもしれないし、純粋に人間が考えついたことかもしれないでしょう? 神の意志に相違ない、ということがどうしてわかるの?」

「信仰、啓示、霊感、畏怖(いふ)」ランキンが答えた。「自分の限られた体験によって他人を裁く

ことはやめたがいい。あなたが父なる神を排斥したからといって、他の人々が神の威光の前にひれ伏すのをやめさせていいという法はあるまい」

「いいこと、わたしたち人間は、だれしもが自然の驚異に憧れる気持を抱いてると思うの。それは人間の心の奥深くに根ざした属性だわ。科学と宗教は、ともにその憧れに縛られてるのよ。わたしが言いたいのは、だからといって奇跡譚をでっちあげたり、針小棒大に誇張することはないじゃないの、ということなの。それでなくともこの世界には、驚異や畏怖の種子が満ちあふれているんですもの。驚異を生みだすことにかけては、わたしたち人間より自然のほうがずっとずっと上手じゃないかしら」

「たぶん、われわれはみんな、真実を求める旅の途上にあるのだろうな」ジョスが言った。

この希望に満ちた言葉をうまくとらえて、ダヘーアが巧みに閉会のきっかけとし、四人は控えめな別れの挨拶の言葉を交わし合った。これでなにか有益な結果がもたらされたのだろうか、とエリーは思った。自分の代りにヴァレリアンが出席していたら、険悪な雰囲気にもならず、もっと実りある成果が生れていたにちがいない。自分も、もうすこし感情を抑えればよかった。

「実に興味深い語らいでしたよ、アロウェイ博士。わざわざお越しいただいて、心から感謝しています」

ジョスの物腰は丁重ながらも他人行儀で、どこかしらよそよそしかった。が、彼は暖かくエリーの手を握った。車の待っている玄関にむかう途中、〝拡大する宇宙説の誤謬〟と題す

る、けばけばしい立体展示が目に入った。その前にある説明書きにはこうあった——〝われらの神は健在なり。哀れなるかな、異教徒の神〟。

エリーはダへーアの耳元にささやいた。「ごめんなさいね、あなたの立場をますます悪くしちゃったみたいで」

「そんなことはないさ、エリー。きみは素晴らしかったとも」

「パーマー・ジョスのほうは、なかなか魅力的な人物ね。彼を改宗させることはほとんどできなかったようだわ。わたしのほうが、もうすこしで改宗させられそうになっちゃった」

それはもちろん、冗談だった。

第二章　ワールド・メッセージ・コンソーシアム

CamScannerでスキャン

いまや世界のほぼ全域の配分が完了し、残された地域の分割、征服、植民地化も進行しつつある。夜、頭上に輝く星のことを考えてみたまえ、われわれの手の決して届かないあの広大な世界を。できれば私は、あの星々をも併合したい。そのことをよく夢想する。あれほど明瞭（めいりょう）に見える星が、あれほど遠く離れているのはなんと悲しいことか。

――セシル・ローズ『最後の意志と遺言』（一九〇二）

CamScannerでスキャン

窓ぎわにある二人のテーブルから、土砂降りの雨に叩かれている街路が見えた。ずぶ濡れになった歩行者が、襟をたてて小走りに通りすぎてゆく。店の前には、大きさと質に応じて分けられた牡蠣の水槽が置いてあって、それがこのレストランの名物の街頭広告になっているのだが、その上には縞模様の日よけが張りだしている。演劇関係の人間が集まるので有名なレストラン、〈シェ・デュー〉。内部はとても暖かく、居心地がよかった。天気予報では晴れることになっていたから、エリーは、レインコートも傘も持ってきていなかった。

やはり手ぶらのヴェイゲイが、新しい話題をもちだした。「わたしの友だちのメーラはね、エクディジアストなんだ——この発音でいいんだったね？　ストリッパーともいうようだが。彼女がきみの国で公演するときには、いろいろな大会や会合の余興に呼ばれて、大勢の学者の前で舞台をつとめることもあるらしい。彼女の話では、労働組合の大会などに呼ばれて労働者たちの前で裸になると、連中は熱狂して猥らな掛け声をかけたり、舞台にとびだしてきたりするそうだ。ところが、そのときとまったく同じ演技をしても、医師や弁護士たちは、ただじっとしているそうだね。もっとも、ごくりと生唾を呑みこんだりする者もいるようだ

が。そこでこういう疑問が湧いてくるんだな——つまり、彼らのどちらが健康なのだろうか？　大騒ぎする労働者たちより、じっと観ている弁護士たちのほうが健康なのだろうか？」

　ヴェイゲイには毛色の変った女友だちがたくさんいることは、最初からわかっていた。彼の口説き方たるやあまりにも直截で露骨だから、相手もあっさりノーと言えるのだ。もちろん、イエスと答える女たちも少なからずいる。が、エリーはそうした口説きの対象から除かれていて、彼女にしてみれば、それが嬉しくもあり、物足りなくもあるのだった。それはともかく、メーラというストリッパーの女友だちの話は初耳だった。

　その日の午前中、エリーとヴェイゲイは新たなデータの解釈と比較をめぐって、最終的な予備検討を行ったのである。間断なくつづく〈メッセージ〉の受信は、重要な新局面にさしかかっていた。ヴェガからは、ちょうど新聞の写真が電送されるように、各種の図面が送信されはじめたのだ。それらはすべて、走査線で構成される画像であり、それを形成する微小な黒白の点は、二つの素数から成っていた。その意味では、またしても素数が通信の主要素となったのである。ヴェガからはその種の画像が次々に送られてきたが、すべてにテキストがついているわけではなかった。それは、書物の巻末に付されているイラストレーションのようなものだった。それらの画像の送信がひとしきりつづくと、こんどは意味不明のテキストがつづいた。そして、ヴェイゲイとアルハンゲルスキーの推論、つまり、〈メッセージ〉はある種のマシーンを作製するための設計図ではないかという推測が的中していることは、

CamScannerでスキャン

それらの画像からも明らかなように思われた。むろん、そのマシーンの用途は依然として謎につつまれているのだが。あすエリゼー宮でひらかれる〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉では、エリーとヴェイゲイの二人が初めて〈メッセージ〉の詳細を他国の代表たちに説明することになっている。が、〝メッセージ＝マシーンの設計図〟説は、代表たちのあいだにひそかに広がりつつあるようでもあった。

昼食をとりながら、エリーは、ランキンとジョスとの会見の模様を説明した。ヴェイゲイは熱心に耳を傾けていたが、問はさしはさまなかった。エリーの口調はしだいに、大声では言えない個人的趣味を語るような調子を帯びていったのだが、それがたぶんヴェイゲイの頭の中で、ストリッパーの連想にむすびついたのだろう。

「メーラというお友だちは、国際的に活躍しているストリップティーズのアーティストなのね？」エリーはあらためて訊き返した。

「ヴォルフガング・パウリがフォリー・ベルジェールのショウの見物中に、かの〝排他原理〟を発見して以来、わたしは、できるかぎりパリをたびたび訪れるのが物理学者としての義務だと思っているのだよ。それが、パウリに対するわたしの敬意の表明と思っているくらいでね。ところが、どう説得してもわが国の役人どもは、純粋にこの目的だけのための旅行は認めてくれんのだ。で、やむなく他のつまらん研究目的もつけ加えなくちゃならんことになる。しかし、メーラに初めて会ったような類の施設においては、わたしは一介の自然現象の学徒となり、霊感がひらめくのをひたすら待つのさ」

ヴェイゲイの口調は突然、大言壮語調から実務的なそれに変った。「アメリカの学者たちは性的に抑圧されていて、罪悪感にさいなまれてる、とメーラは言ってるがね」
「そうなの。じゃ、ソ連の学者たちに関しては、彼女、どう言ってるの?」
「ソ連の学者となると、メーラはわたししか知らんのだ。したがって当然のことながら、高い評価を抱いとるようだね。あすにはぜひメーラに会いたいものだ」
「でも、コンソーシアムの会議には、お国の同僚たちも大勢出席することをお忘れなく」
軽い口調でエリーが言うと、
「ああ、だから、きみも出席してくれると思うと嬉しいのだ」むすっとした顔でヴェイゲイは答えた。
「なにか心配事でもあるの、ヴェイゲイ?」
しばらく考えこんでから、ヴェイゲイは答えた――それも、彼にしては珍しく、ためらいがちの口調で。「心配事というのではないが、まあ、気がかりなことではあるかな……つまり、あの〈メッセージ〉が本当になんらかのマシーンの設計図だとしたら、どういうことになるのか? われわれはマシーンを製作するのかな? としたら、だれが作る? みんなで協力して作るのかね? それとも、〈コンソーシアム〉一本にまとまって作るのか? 国連が製作するのか? 数カ国が競い合って作るのか? もし巨額の製作資金を要するようだったらどうするのか? 費用はだれが負担するのか? そもそも、負担しようという国が現われるだろうか? もしマシーンが作動しなかったらどうなるのか? マシーンの製作によっ

に経済的な打撃を蒙る国が現われるようなことはないか？　それとも回復の打撃を蒙る可能性はないのか？」

矢継ぎ早に問を発しながら、ヴェイザイはボトルに残っていたワインを二人のグラスにつぎ分けた。「かりに〈メッセージ〉が最初にもどってきて、その解読に成功したとしても、果してその解読はどの程度正確かな？　翻訳に関するセルバンテスの意見は、きみも知っとるだろう？　翻訳を読むのはタペストリーの裏を眺めるのに似ている、と彼は言った。〈メッセージ〉を完全に翻訳するのは、所詮不可能かもしれんね。とすると、マシーンの製作自体も完璧を期せないかもしれん。それに、われわれは本当に、必要なデータをすべて受信できるのかね？　まだ未発見の、他の周波数で、重要な情報が送信されているという可能性も、完全には払拭しきれんだろう。

マシーンの製作にはみんなが慎重になるだろう、とわたしは見てるんだがね、エリー。ひょっとすると、あすの会議に出席する連中のなかには、即時製作開始を主張する者も現われるかもしれん――解読の手引きを受信して、全文の解読に成功すると同時に製作を開始しろ、と主張する輩がな。アメリカの代表団は、どういう提案をしそうかね？」

「さあ、わからないわ」ゆっくりと答えはしたものの、エリーは思いだしていた――画像の送信がはじまった直後、果してそのマシーンは、現在の地球の経済力や技術力で製作可能なのかどうか、とダヘーアに訊かれたことを。彼女はそのとき、できるともできないとも明言はしなかった。そういえば、この二、三週間、ケンはなにかを思い悩んでいるようだし、苛

立っているように見えることすらある。むろん、この問題に関しては、彼も大きな責任を

「ダヘーア博士とキッツ氏は、きみと同じホテルに泊っているのかな？」

「いいえ、あの二人はアンバサドール・ホテルなの」

それは毎度のことだった。

ロシア人の場合は、限られた国家予算で消費物資より軍事関連技術を購入しなければならない国家的要請があるから、西側諸国を訪れるときも財布にゆとりがない。で、比較的高級なホテルに泊る西側諸国の学者たちとは対照的に、二流、三流のホテル暮らしを余儀なくされるのである。それは双方の学者たちにとって、変らぬ当惑の種子だった。たとえば、このレストランの、つましいとも言える食事の料金を払うのは、エリーにとってはたやすいことでも、ヴェイゲイにとっては、母国の学会における彼の比較的高い地位をもってしても、かなりの重荷なのである。それにしても、ヴェイゲイはいったいなにを……。

「ねえ、ヴェイゲイ、わたしにはなんでもストレートに言ってちょうだい。あなたはなにを言いたいの？　ケンとマイク・キッツが早手まわしに事を運ぼうとしている、とでも思ってらっしゃるの？」

「〝ストレート〟か。面白い言葉だな。右でも左でもなく、真っすぐに進むわけだね。わたしが心配しているのは、あすからの数日間に、われわれが本来作る資格もないようなものを急いで作れというがごとき、性急な議論が起きるんじゃないか、ということなんだ。われわ

れはなんでも知っている、と政治家たちは思っている。じっさいは、なにも知らんのだがね。そうなったら、かなり危険な事態に発展する可能性もあるだろう」

そうか、ヴェイゲイは〈メッセージ〉の解読に関して個人的責任を感じているんだわ、とエリーは思いあたった。マシーンを製作した結果とんでもない破局に立ち至ったら自分の責任だ、と彼は思っているのにちがいない。むろん彼には、個人的野望などないにきまっているのだが。

「わたしに、ケンの意向を訊いてみてくれ、とおっしゃりたいの？」

「もし差しつかえなければ、だがね。きみには、彼と話す機会がいくらでもあるんだろう？」

ごくさりげない口調だったが、エリーは思わず言ってしまった。

「まさかあなた、焼きもちを焼いてるんじゃないでしょうね、ヴェイゲイ？　わたしがケンに魅かれていることは、わたし自身よりあなたが先に気づいたようだけど。〈アーガス〉の本部にいらしたときにね。ええ、この二カ月、わたしはケンと同棲しているも同然の暮らしをしているわ。なにか言いたいことでもあって？」

「まさか、エリー。こちらはきみの父親でもなし、嫉妬に燃える恋人でもないんだ。きみが幸せになることだけを、わたしは望んでいるんだから。ただ、この歳まで生きてくると、不運な結果に終った恋をいろいろと見てきているものだから」

それ以上詳しいことを、彼は言おうとはしなかった。

二人はまたいくつかの画像の予備検討に移った。テーブルの上はじきに、それらの画像のコピーでいっぱいになった。気分転換に、二人は国際政治に関しても若干話じ合った――たとえば、南アフリカ危機解決のための〝マンダラ原則〟をめぐるアメリカ国内の論争について。あるいは、激しさをましつつあるソ連と西ドイツ間の非難の応酬について。例によって、エリーとヴェイゲイは、自国の外交政策をあげつらって楽しんだ。そのほうが、相手の国の外交政策を非難すること――それも簡単だが――より、ずっと面白いのだ。勘定を割りカンにすべきかどうか、というおきまりの議論をしているうちに、土砂降りの雨がいつのまにか小ぬか雨に変っていることにエリーは気づいた。

★

いまや、ヴェガから〈メッセージ〉が届いたというニュースは、地球という惑星の津々浦々に至るまで知れわたっていた。電波望遠鏡の何たるかも知らず、素数という言葉など聞いたこともないような人々までが、空から降ってきた声にまつわる不思議な物語を知っていた。夜空に住んでいることが発見された、人間でもなく神でもない奇妙な生物のことを知っていた。それらの生物の母星は地球ではなく、満月の晩でもはっきりと見える明るい星なのだ。各宗派の熱心な見解発表は依然としてつづいていたが、その一方で、驚異の感覚、ないし畏怖（いふ）の感覚、とすら呼ぶべきものが、ほぼ世界中の人々の胸に芽生えつつあることが、いまや明らかになった。なにかしら変化の兆（きざ）し、奇跡的とすらいえる変化の兆しが生れていた。

現状打破の気運、新たな未来のひらける可能性が、至るところで濃厚になりつつあったのである。

〝人類はとうとうハイスクールに進級した〟と書いたのは、アメリカのさる新聞の論説委員だった。

宇宙には、われわれ以外の知的生物がいる。われわれは彼らと交信できるかもしれない。彼らはたぶんわれわれより知的レヴェルが高く、歴史も古い。その彼らがいま、込み入った情報のつまった書をわれわれに送ってきている。なんらかの宗教的啓示がちかぢか顕現するのではないかという期待も、広まっている。

そういう雰囲気が世界中を蔽いはじめたせいだろう、各界の権威が不安を抱きはじめるという現象も一方では見られた。数学者は、自分たちの見逃した初歩的な公式が存在するのではないか、と心配した。宗教界の指導者層は、ヴェガ星の価値基準が──たとえどんなに破天荒であろうと──いずれ、教養のない若者たちを中心とした層に滲透するのではないか、と気に病んだ。天文学者たちは天文学者たちで、ちかくの星に関して、これまで誤解していた根本的事実があるのではないかと疑いはじめた。そして、政治家や政府の指導者層となると、地球より優れた文明下では、まったく別種の政治形態、現存するいかなる政治形態とも異なる政治形態が支配的なのではないか、と心配しはじめた。いずれにせよ、ヴェガ星人の文明が地球人類の歴史、制度、肉体機能の影響をいささかも受けていないことは事実なので ある。もし、われわれ人類が真理と思いこんでいるものが誤解であり、特殊なケースであり、

論理的ミスだったとしたら、どうだろう？　こうして各界の権威たちは、自分の専門的研究の理論的基礎を再検討しはじめたのだった。

どちらかといえば個別的な、この職業的混乱を圧倒する勢いで広がりつつあったのは、人々の旧態依然たる意識に風穴をあける新たな認識だった。すなわち、人類はいま新たな冒険に直面しているという認識、われわれはいまこそ曲がり角を曲がって新世紀に突入するのだという認識である。それは、第三ミレニアムの接近によって増幅された、意識の覚醒と言ってもいいだろう。この世には依然として政治紛争の火ダネが尽きず、なかには長びく南アフリカ危機のように、かなり深刻な局面を迎えているものもある。だが、世界各地で、旧来の好戦的愛国主義や、幼稚な自己中心的民族主義が衰えつつあることも事実だった。われわれは世界中に散らばっている数十億の小さな個体だが、同じ人類として、いまや史上未曾有の事態、場合によっては全人類に共通の危機に転じかねない事態に直面しているのだという、地球規模の連帯感が生れつつあった。われわれをはるかに凌駕する能力を備えた文明と対面しているのに、この小さな地球上で覇を競い合う大国同士が抗争をつづけるのは愚劣なことだ、という認識も定着しようとしていた。地上には、初めて希望の曙光がさしはじめたのである。なかにはそういう変化に違和感を覚えて、それをなにか別のもの——たとえば混乱や怯懦ととりちがえるむきもないではなかったが。

一九四五年以降、この地球上における戦略核兵器の貯蔵量は数十年にわたって着実に増加してきた。指導者が交代し、兵器体系が変化し、戦略が変っても、核兵器の数量は増加の一

途をたどってきた。ついには、この惑星上に二万五千発以上の核爆弾——一つの大都市に十発以上も落せるだけの量——が蓄積されるという異常な事態が生じたのである。絶えざる技術革新は、弾道弾の飛行時間の短縮、第一撃による重要目標の潰滅、警報と連結した弾道弾の発射、といった新戦術を推進しようとしている。これほど長期にわたって、これほど多くの国々における、これほど多くの指導者たちによって支持されてきた、これほど壮大な愚行に終止符を打つものがあるとしたら、それに等しい規模の壮大な危機でしかあるまい。そしてついに、ヴェガからの〈メッセージ〉の受信という未曾有の事態に直面して、世界は正気をとりもどしたのである。アメリカ、ソ連、イギリス、フランス、中国の五カ国は、ある協定に調印した。それは、一足とびに核兵器を全廃しようという趣旨ではなかった。いますぐユートピアを実現できると考える人間はさすがに少なかったのだ。が、ともかくも、アメリカとソ連は、戦略核兵器をそれぞれ千個まで削減することに同意した。それを実行するさい、核弾頭撤去のいかなる段階においても両国が著しい不利益を蒙らないように、細かい規定が設けられた。イギリス、フランス、中国の三国は、アメリカとソ連の保有する核弾頭が三千二百個のラインを割ると同時に、それぞれの核弾頭を削減しはじめることに同意した。〝ヒロシマ憲章〟が調印されて、世界は歓喜に湧いた。その条文の碑は、核爆弾で潰滅した世界最初の都市の犠牲者を悼む、あの有名な碑銘、〝安らかに眠って下さい、過ちは繰り返しませぬから〟と書かれたあの碑銘の隣に設置されたのである。

ほぼ毎日のように、アメリカとソ連から同数の核起爆装置が、両国の技術者の運営する特

別施設に引きわたされた。弾頭から取り外され、分断され、封印されたプルトニウムは、両国の代表から成るチームによって原子力発電所に運ばれ、そこで燃料として使用されて電気に生れ変った。アメリカのさる提督にちなんで〝ゲイラー・プラン〟と名づけられたこのプロジェクトは、剣を鋤に変える究極の行為として世界中の人々に歓迎された。その措置によっても、両国が依然として大規模報復能力を持つという事実には変りがないためか、しまいには軍の上層部も反対の態度を和らげはじめた。自分の子供を核爆発で死なせたくないと願う点では、将軍たちとて一般の民衆と変らないのだ。それに、核戦争は伝統的な軍人の武勇の概念とは相容れない。発射ボタンを押すだけの行為のどこに、勇猛さが認められるだろうか。最初の核弾頭解体式の模様は、世界中にテレビで生中継され、その後何度も再放送されたが、画面には白衣のアメリカ、ソ連、双方の技術者が登場し、彼らが、アメリカ国旗やソ連国旗の絵柄で飾られた、足のせ程度の大きさの灰色の物体を二個運びだすさまが映された。その光景を観た者は、世界中で莫大な数にのぼるだろう。テレビの夜のニュースでは定期的に、その日解体されたアメリカ、ソ連双方の核弾頭の数と、これから解体されるべき数が報じられるようになった。これから二十数年後には、この映像もまたヴェガに届くことだろう。

核弾頭の解体は、その後もとぎれなくつづいた。最初は、核兵器の相当数が解体されても、核戦略そのものに変化はなかったが、削減の影響がじわじわと広がるにつれて、敵の全滅を狙う兵器体系そのものが解体されていった。それこそはかつて軍事専門家たちが実現不可能と見なし、〝人間の本性に反する〟とまで断じたことだった。が、サミュエル・ジョンソン

が述べたように、〝死刑の宣告は精神の集中力を飛躍的に高める〟のである。この半年のあいだに、アメリカ、ソ連両国による核兵器の解体は大きな進展をとげ、まもなく双方は、かなりの権限を有する査察班を互いに相手国の領土内に常駐させることになっている――両国の軍部は公然と反対を表明しているが、もはや彼らの意見は無視されよう。そうした動きに歩調を合わせるように、国連もまた国際紛争の有効な調停能力を回復した。チリ＝アルゼンチン間の国境紛争や西イリアンの国境紛争が解決されたのは、その証しと言えよう。最近では、NATOとワルシャワ条約加盟国間で相互不可侵条約が締結されるという、単なる流言とは言い切れない噂までとび交っている。

かくして〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉の第一回会議に参集した各国代表団は、過去数十年に例を見ないほどの友好的精神にあふれていたのである。

★

会議には、ごく断片的なデータしか捕捉しなかった国まで含めて、〈メッセージ〉を受信したすべての国が参加し、科学者から成る代表団と政治家から成る代表団を派遣した。軍人の代表を送りこんできた国も、相当数にのぼった。少数ながら、外務大臣や国家元首の派遣に踏みきった国まであった。イギリスの代表団にはボックスフォース子爵も参加していたが、国璽尚書という彼の職名はなんて大仰なのだろうと、エリーはひそかに思っていた。ソ連代表団の団長はソビエト科学アカデミー総裁のB・Ya・アブヒーモフで、中型機械工業相ゴス

リーゼとアルハンゲルスキーが補佐役をつとめていた。アメリカ代表団の団長は、大統領の指名でダヘーアがつとめていたが、国務次官のエルモ・ハニカットと国防省のマイケル・キッツもお目付役として加わっていた。

会議場正面には、ソ連の衛星追跡船を含めて、地球各地の電波天文台の位置が一目でわかる、正積図法で描かれた巨大な地図が掲げられていた。エリーは、新装まもない会議場をぐるっと見まわした。すぐ隣が、フランス大統領の執務室である。七年間の任期の二年目に入ったばかりのフランス大統領は、会議が成功するよう最大限の努力を払っていた。長楕円形のマホガニーのテーブルの表面や、壁を飾るたくさんの鏡には、肌の色の異なるさまざまな顔や、国旗や、民族衣裳が写っている。政治家や軍人たちに顔見知りはすくなかったが、科学者や技師となると、どの代表団にも、顔馴染みがすくなくとも一人はいた――たとえば、オーストラリアのアヌンツイアタとイアン・ブロードリック、チェコスロヴァキアのフェデイルカ、フランスのブロードとクレビヨンにボイリュー、インドのクマール・チャンドラブラナとデヴィ・スハヴァティ、そして日本の広永と松井……電波天文学よりも一般的な工業畑から代表を選んだ国も多いことに、エリーは気づいた。とりわけその傾向が強いのが、日本だった。巨大なマシーンの建設がこの会議の主要議題になると知って、最後の瞬間に代表団の構成を変えた国が少なくなかったのである。

馴染みの顔はまだあった。イタリアのマラテスタもそうだ。イギリス勢に目を転じると、政治家に転向した物理学者のビーデンバウとクレッグと老獪なアーサー・チャトス卿の三人

CamScannerでスキャン

が、ヨーロッパのレストランのテーブル上に飾られているようなユニオン・ジャックの陰に顔をよせて何事か談笑している。スペインのハイメ・オーティスの顔も目についた。スイスからはプレブラがきていたが、エリーの知るかぎりスイスには電波望遠鏡が一台もないはずだから、奇妙な話ではあった。中国の宝(パオ)の顔も見える。宝は中国における電波望遠鏡の編成に手腕を発揮した人物である。スウェーデンのウィンターガーデンの顔もあった。サウジアラビア、パキスタン、イラクが大編成の代表団を送ってきたのは意外だった。それにもちろん、ソ連の代表団のなかにも顔馴染みは少なくない。なかでも、ナジヤ・ロズジェストヴェンスカヤとゲーンリク・アルハンゲルスキーは、この会議に出席したことを心から楽しんでいる様子だった。

ヴェイゲイ・ルナチャルスキーはどこだろうと捜していると、中国代表団の中にまじっていた。北京(ペキン)電波天文台長の禹人瓊(ユー・レンキオン)と握手しているところだった。ソ連と中国が親密だった頃(ころ)、二人は仲のよい友人同士だったことをエリーは思いだした。が、中ソの敵対関係が深まるとともに、二人の仲も切り裂かれた。中国はソ連に劣らず厳しく、科学者たちの海外旅行を禁じたのである。自分はたぶん、二十五年ぶりの彼らの再会を目撃しているんだわ、とエリーは思った。

「ヴェイゲイと握手している中国人の老人はだれだい？」

マイケル・キッツが馴れ馴れしく訊(き)いた。それは、エリーと親密になるための、彼流の手段であるらしい。この数日間、彼はしきりとその手の問を投げかけてくるのだ。が、エリー

にとって、それはむしろありがた迷惑な戦術だった。
「北京天文台長の禹よ」
「あの連中は互いに憎み合ってるんだと思ってたがな」
「マイケル」エリーは言った。「この世は、あなたが思っているよりいい面もあるし悪い面もあるのよ」
「いい面を数えたてるのはあんたに任せるが」キッツは答えた。「悪い面はこっちに任せてもらおうじゃないか」

★

会議はまずフランス大統領の歓迎の挨拶ではじまり——大方の予想を裏切って、彼はその後も議場に残って最初の発表を聴いていったのだが——共同議長のダへーアとアブヒーモフが議事進行と議題について話し合ったのち、エリーとヴェイゲイが共同でデータに関する発表を行った。聴衆の中には政治家や軍人も多数出席している。二人は、あまり技術的な問題に深入りしないよう注意しながら、現在までの経過をかいつまんで説明した。比較的近い天空における星の位置。電波望遠鏡の役割と機能。重ね書きされた〈メッセージ〉が解明されてきたプロセス。二人は最後に、最近受信された画像——各代表団の前にあるモニター・スクリーンに映されていた——に関する説明で発表をしめくくった。偏波変調が0と1の数列に変換し得ること、その0と1の配列の仕方によって画像が生れることを、エリーはわかり

やすく説明した。最近受信しつつある画像については、なにを意味するのかちんぷんかんぷんなものも少なくないという事実も、忘れずにつけ加えた。

次いで、世界中で受信された断片的なデータを組み合わせた像が、コンピュータ・スクリーンに映しだされた。薄暗くなった議場内のあちこちに、モニターの放つ白、グリーン、琥珀色の光に照らされた顔が浮かびあがる。スクリーンには、細かく入り組んだマシーンの内部構造が映っている。妙に生々しい、生物の器官を思わせるような部分もある。全体としてみると、それは完璧な十二面体を成していた。何百ページ分ものデータが組合わされて浮かびあがってきた、一つの精妙な三次元の構築物。それはスクリーン上で、ゆっくりと回転している。謎めいた部品の一つ一つに、意味不明のキャプションがついていた。

〈メッセージ〉の真意がいまもって不明であることを、ヴェイゲイはエリーよりも強調した。が、それがなんらかのマシーンの設計図であるらしいということは、いまや疑問の余地がなくなったことも説明した。その見当を最初につけたのは自分とアルハンゲルスキーである、ということを彼は言い洩らしたので、エリーはすかさずその事実を明らかにした。

この数カ月間、エリーはあちこちでヴェガからの信号について話していたから、科学者であると否とを問わず、ここに集まった聴衆が〈メッセージ〉の解読に尽きぬ興味を持っており、解読の手引きがまだ見つからぬことにやきもきしていることを知っていた。が、それにしても、本来穏健な集団であるはずの各国代表団が見せた反応は意外だった。彼女とヴェイゲイが共同発表を終えると、議場からは万雷の拍手が湧き起って、しばらくは鳴りやまなか

ったのである。ソ連と東欧圏の代表たちは、いっせいにリズミカルな手拍子をとった。アメリカをはじめとする西側諸国の代表たちの拍手は、各自バラバラだったが、それでも、高低がまちまちのその音は海鳴りのように議場に響きわたった。生れて初めて味わう喜びに包まれながらも、エリーは、代表たちの国民性のちがいを考えずにはいられなかった——アメリカ人はやはり個人主義者であり、ロシア人は無意識のうちに集団行動をとるものらしい。それに、アメリカ人は集団の中にいるとなるべく独自性を発揮しようとするが、ロシア人はできるかぎり協調しようとする。拍手の音ではアメリカ勢が他を圧倒していたとはいえ、どちらのスタイルの拍手もエリーには嬉しかった。一瞬、彼女は継父の顔を脳裡に甦らせていた。それから、実の父親の顔も。

午後の部に入ると、データの収集と解釈に関する他の発表が行われた。最近受信されつつある画像と関連のある、〈メッセージ〉の初期のページに関するきわめて犀利な分析を展開したのは、デイヴィッド・ドラムリンだった。〈メッセージ〉にはマシーンの設計図ばかりでなく、細かい構成部品のデザインやその組立て方まで示されている、と彼は主張したのである。地球上では未知の、まったく新しい工業技術に関する記述もいくつかあるようだ、という推論まで彼は披露した。エリーは口をアングリとあけ、ドラムリンのほうを指さしながら、ヴァレリアンにむかって、そんなことを知っていたか、と無言でたずねた。ヴァレリアンは口をすぼめ、両手をひらいて肩をすくめて見せる。ほかの連中はどう思っているだろうと、周囲を見まわしてみたが、どの顔にも疲労の徴候しか浮かんでいなかった。難解な技術

的説明もさりながら、いずれ政治的決断を下す必要に迫られるだろうと考えて、だれしも気疲れを覚えはじめていたのだろう。ドラムリンの発表が終ると、エリーは彼の卓見を賞讃してから、どうしていままで話してくれなかったんですか、とたずねた。ドラムリンはこう答えてから歩み去った――「なに、きみをわずらわせるほど重要な問題とは思わなかったのでね。そちらがキリスト教の狂信者たちと会見しているあいだ、こちらはちょっとした仕事をしていたというわけさ」

もしドラムリンが自分の博士論文の担当教官だったら、自分はまだ博士号をとれずにいただろう、とエリーは思った。結局わたしは、ついに自分の能力をドラムリンに認めてはもらえなかったのだ。たぶん、わたしとドラムリンはこのさきも、学者同士の親しい関係を保てずに終るのだろう。しかし、ドラムリンのいまの発表のことをケンは知っていたのだろうか、とエリーは吐息まじりに思った。が、共同議長をつとめているダヘーアは、蹄鉄型の議場に向き合った一段高い演壇の上に、アルハンゲルスキーと並んですわっている。この数週間来、彼と落ち着いて話すことはほとんど不可能だった。いずれにせよドラムリンには、新たな発見を自分に打ち明けるべき義務があったわけではない。それに最近は、自分もドラムリンもそれぞれの仕事に追われていた。でも、ドラムリンと話すとき、自分はどうしていつも妥協的な態度をとり、極端な問題にかぎって反抗しようとするのだろう。とにかく、あのままドラムリンの弟子でいたら博士号の取得など不可能だっただろうし、現在のような学究生活をつづけることもできなかったにちがいない。そう思う気持が心の片隅にあることはたしかだ

った。

★

二日目の午前になって、ソ連の代表の一人が演壇に立った。エリーの知らない人物だった。コンピュータ・スクリーンには、〝ステファン・アレクセイエヴィッチ・バルーダ〟と名前がでた。〝モスクワ、ソビエト科学アカデミー会員、平和研究所所長。ソ連共産党中央委員会委員〟。

「さあ、ソフトボールが終って、これからいよいよ硬式野球のはじまりだぞ」

マイケル・キッツが国務省のエルモ・ハニカットにささやく声が、エリーの耳に入った。バルーダはいま流行の、優雅な仕立てのビジネス・スーツをまとった小粋な男だった。西ヨーロッパ・スタイルのそのスーツは、おそらくイタリア仕立てなのではあるまいか。しゃべる英語にはよどみがなく、ほとんど訛りもない。バルト海沿岸の共和国の一つで生れたという彼は、重要機関の責任者とは思えないほど若かった。平和研究所とは、核兵器削減を目ざす長期的政策の戦略的意義を研究するための機関なのである。このバルーダを今回の会議に送りこんできたことなどは、さしずめ最近のソ連政府に見られる〝ニュー・ウェイヴ〟現象の格好の一例なのだろう。

「みなさん、事実をありのままに直視しようじゃありませんか」バルーダは切りだした。「いま、宇宙のはるか彼方から、ある〈メッセージ〉が送られてきつつあります。そのほと

んどは、ソ連とアメリカが受信しました。他の国々も、重要な断片を捕捉しています。それら、〈メッセージ〉に関わったすべての国々が、この会議に出席しているのです。それらの国々のうちのどの国でも――たとえば、わがソ連にしても――その気なら、〈メッセージ〉が数回反復されるまで待って、欠落している部分を独力で補うことができたでしょう。が、それには何年もの時間が、おそらくは数十年の時間がかかります。われわれは、それほど悠長にかまえてはいられません。で、われわれはすべての国々でデータを共有することにしたのです。

たとえば、地球周回軌道に、〈メッセージ〉の周波数と同調する高感度受信機をそなえた大型電波望遠鏡を打ち上げることは、どの国にも可能だったでしょう。わがソ連にもできたし、アメリカにもできた。おそらく、日本にも、フランスにも、ヨーロッパ宇宙機構にもできたでしょう。宇宙空間に打ち上げられた電波望遠鏡は常時ヴェガを指向できますから、どの国にもデータを独占することが可能だったはずです。しかし、そうした行為は敵対行為ととられかねません。ソ連とアメリカがその種の衛星を撃墜する能力を有しているのは歴然たる事実です。それもまた、われわれがデータを共有した理由の一つだったと申せましょう。

が、なによりも明瞭なのは、人類全体にとって、協力したほうが得策だ、という事実なのです。科学者たちが交換を望んでいるのはデータばかりではありません。彼らは互いの見通しを、推測を、そして……夢を、交換することを望んでいるのです。その点では、どの国の科学者も変りがないはずです。わたしは科学者ではありません。政治が、わたしの専門です。

だからわたしは、どんな国も大差がないことを知っています。どんな国も、用心深いという点では変りません。猜疑心が強いという点では変りません。もし可能なら、潜在的な敵国を優位に立たせたくない、どの国も思うものです。したがって、どこにおいても、すくなくとも二つの、対立する意見があったことでしょう。一つは、あらゆるデータを交換しよう、というものであり、もう一つは、なんとかうまく立ちまわって他国をだしぬこう、というものです。〝向う側だって、絶対になんらかの策を弄しているさ〟という声もあがりました。それはどの国とて同じだったでしょう。

しかし、結局、科学者がこの論争に勝利をおさめたのです。ですから、ソ連とアメリカが集めた――全部とは言わないまでも――ほとんどのデータが、交換されたのです。他のすべての国々が集めたデータも、大部分が交換されました。われわれがこの決断を下したことを、喜んでいない国は一つもないでしょう」

エリーがキッツにささやいた。「それほど〝硬式〟でもなさそうじゃないの」

「まあ、もうしばらく聞いてみたまえ」キッツもささやき返す。

「しかし、現在、われわれの前には別種の危険が横たわっています。わたしはその一つを、この会議で検討していただきたいのです」

バルーダの口調は、先日昼食を共にしたときのヴェイゲイのそれを思わせた。ソ連側の帽子の中にはどんなボールが隠されているのだろう？

「われわれが受信しつつあるのは、複雑なマシーンを製作するための説明書らしいという点

において、わがアカデミー会員ルナチャルスキー、アロウェイ博士、その他の科学者たちの見解は一致しているもののようであります。そこで、かりに、だれもが期待しているように〈メッセージ〉の終りがくるとします。そこでもう一度最初にもどって、この〈メッセージ〉を解読する鍵――英語では〝プライマー（手引き）〟と言うのでしょうか――が受信できたとします。と同時に、われわれはこの全面的な協力態勢を維持しつづけたとします。そして、あらゆるデータ、あらゆる幻想、あらゆる夢を交換したとするのです。

さてみなさん、ヴェガにいる知的生物は、この〈メッセージ〉を単なる遊びのために送っているのではないでしょう。彼らはわれわれに、あるマシーンを作らせたがっているのです。そのマシーンの正体を、彼らは教えてくれるかもしれないし、教えてくれないかもしれない。かりに教えてくれたところで、われわれがそれを信じなければならぬ根拠があるでしょうか？　だからわたしはここで、わたし自身の夢、わたし自身の幻想を明らかにします。それは、楽天的なものではありません。みなさん、もしこのマシーンが〝トロイの木馬〟だったとしたら、どうでしょう？　われわれが多大の努力を払ってこのマシーンを完成させ、スイッチを入れる、と突然、内部から侵略軍がとびだしてきたらどうでしょう？　もしくは、もしそれが地球を破滅させる終末機械だったとしたら？　それを完成させてスイッチを入れたとたん、地球が爆発して粉微塵になったとしたら、どうでしょう？　もしかすると、これは〝宇宙に誕生しつつある文明を抑圧するための、彼らなりの手段なのかもしれません。彼らにとっては、安いものなのです。ただ、〈メッセージ〉の送信代を払いさえすればいいので

すから。すると、花ひらきつつある文明は、従順に自殺をとげるというわけです。

わたしが提起しようとしているのは単なる推論であり、議論の叩き台にすぎません。この問題をみんなに考えていただきたいのです。それは、われわれ全員にとって建設的な作業であるはずです。われわれはみんな地球という惑星を共有しているのです。共通の利益を有しているのです。この問題提起が性急にすぎることは十分承知しております。みなさん、わたしの問はこうです――ひょっとしてわれわれにとっては、あらゆるデータを焼却し、すべての電波望遠鏡を破壊するほうが得策ではないのでしょうか？」

場内にざわめきが湧き起った。大勢の代表がいっせいに発言を求める。が、二人の共同議長の主要関心事は、この討議の内容を決して録音したりビデオに収録したりしないように、とクギをさすことにあるようだった。事実、会期中は報道陣からのインタヴューをいっさい受け付けない方針が定まっている。報道陣に対しては簡単な討議内容のパンフが毎日配布されることになっているが、それも、共同議長と各代表団の団長の承認を得ることが条件づけられている。現在の討議に関しては、その概容すら部外秘にされることだろう。

数人の代表が、議長に発言許可を求めた。

「〝トロイの木馬〟や〝終末機械〟に関するバルーダの発言が正しいなら」オランダの代表が叫んだ。「それを一般民衆に知らせるのがわれわれの義務じゃないのかね？」

が、彼は無許可で発言したので、マイクは作動していなかった。

討議はにわかに、予想外の緊急性を帯びはじめた。

エリーは急いで眼前のコンピュータ・ターミナルのキーを押して、早い発言順位を確保しようとした。が、トップはとれなかった。最初がスハヴァティ、エリーが二番目で、その次が中国の代表だった。

デヴィ・スハヴァティとは、エリーも面識がある。歳は四十五、六だろう。気品のある女性で、パック・バンドのハイヒールをはき、精妙な柄の絹のサリーをまとっている。髪型はヨーロッパ風だった。むかし医学を専攻した彼女は、その後インドにおける分子生物学の権威となり、現在はケンブリッジのキングズ・カレッジとボンベイのタタ研究所に在籍して、多忙な研究生活を送っている。インド人としては数少ないイギリス学士院会員でもあり、インド本国では政治的にもかなりの影響力を持っていると言われている。エリーがスハヴァティと最後に会ったのは、数年前、東京で催された国際シンポジウムの席だった。そのときはまだ〈メッセージ〉が受信される前で、二人の論文は多少の色眼鏡で見られていた。二人が親近感を抱き合ったのは、お互いに、地球外知的生物に関するそのシンポジウムに参加している数少ない女性の一人だという、ある種の連帯感が働いたせいもあっただろう。

「ただいまアカデミー会員パルーダ氏が提起されたのは、きわめて重要かつ微妙な問題であると思います」スハヴァティは切りだした。「"トロイの木馬"の可能性を頭から排斥するのは愚かなことでしょう。最近の歴史を考えれば、それは当然提起されてしかるべき問題であり、むしろ遅きに失したとすら言うべきではないでしょうか。しかし、その種の恐怖に金縛りにされることに対しては、わたしは断固反対するものです。ヴェガにおける知的生物が、

われわれ地球人とまったく同じ技術レヴェルにあるとは到底考えられません。この地球においてすら、文明というものは踵を接して発展するものではないのです。早くスタートを切るものもあれば、遅くスタートを切るものもあります。単に科学技術の水準に限れば、先行する文明に追いつく文明が存在することは、わたしも認めるにやぶさかではありません。インド、中国、イラク、エジプトに高度の文明が栄えていた頃、ヨーロッパとロシアの主人公は鉄器時代のレヴェルの遊牧民だったのであり、アメリカはまだ石器時代の文明に支配されていたのですから。

しかし、技術水準のギャップは、むかしより現時点におけるほうがずっと大きいでしょう。地球外知的生物の技術水準は、われわれよりはるかに進んでいるはずです。数百年、数千年、いや数百万年も進んでいるかもしれません。みなさん、それを、過去一世紀におけるわれわれ地球人の技術発展のテンポと比べてみてください。

わたしは南インドの小村で生れ育ちました。わたしの祖母の時代、そこでは足踏み式ミシンが科学技術のもたらした奇跡のように見られていました。わたしたちより数千年、数百万年も進んでいる生物には、どんなことが可能でしょうか？　わが国のある哲学者はかつてこう言いました――“われわれよりはるかに進んだ地球外文明の科学技術の産物は、魔法と区別がつかないだろう”と。

そんな彼らにとって、われわれ地球人がいったいどんな脅威になり得ると言うのでしょう？　彼らには、われわれを恐れる必要など毫もないのです。その状態は、今後とも末長く

つづくでしょう。いいですか、みなさん、これは実力的にほぼ互角だったギリシャ人とトロイ人の対決ではないのです。異星人同士が、ほぼ同様の武器で闘うSF映画ともちがうのです。もし彼らにわれわれを滅ぼす気があれば、簡単にやってのけるでしょう、たとえわれわれがマシーンを作ろうと作るまいと――」

「しかし、費用効果の問題はどうなる?」会場からだれかが叫んだ。「わからんのかね? そこがポイントじゃないか。われわれのテレビ放送によって、彼らは、われわれを滅ぼすべき時がきたことを覚った、そして〈メッセージ〉を送ってきた、とバルーダは言っとるんだ。ヴェガから地球に遠征軍を派遣したらえらく高くつく。しかし、〈メッセージ〉だけで用が足りれば、安いものなんだ」

大声の主がだれか、とっさにはエリーにもわからなかった。どうやらイギリス代表団の一員らしい。彼の発言も無許可だったので、拡声器にはのらなかった。が、場内の音響効果が優秀なせいだろう、その一言一句まではっきりと聴衆の耳に聞えた。議長席のダヘーアが静粛を求めた。もう一人の議長アブヒーモフは、かたわらの助手のほうに身をよせて何事か耳打ちしている。

「あなたはマシーンを作ることが危険だとお考えなのね」スハヴァティは応酬した。「わたしは、マシーンを作らないほうが危険だと思うわ。もしわたしたちが未来に背をむけるのなら、わたしはこの地球という惑星の一員であることを恥ずかしく思います。あなたの祖先たちにしたって――」彼女は会場の発言者にむかって指を突きつけた。「むかし、おそれげも

なく、インドやアメリカにむかって船出したじゃありませんか」

この会議は波乱の連続になりそうだわ、とエリーは思った。スハヴァティの言うことももっともだが、往時の航海者クライヴやローリーが現在の問題解決のいいお手本になるとも思えない。たぶん、スハヴァティは、過去のイギリスの植民地支配を皮肉っただけなのだろう。

エリーは、自分のコンソールのグリーンの発言ライトが点灯するのを待った。それがつくと、マイクが作動したしるしなのだ。

「議長」と言ってから、彼女は、いかにも形式張ってダヘーアに話しかけている自分に気づいた。この数日間、ダヘーアとはほとんど口をきいてない。あすの午後、会議の休憩時間を利用して会う約束になっているのだが、だれかに見られたらなんと言われるだろう。だめだめ、いまそんなことを考えては、と彼女は自分をたしなめた。

「議長」あらためて、エリーは呼びかけた。「いま問題になっている二つの疑問――つまり、マシーンが〝トロイの木馬〟か〝終末機械〟かという疑問に関して、実は新たな光を投じ得る証拠があるのです。この問題についてはあすの午前の会議で論じるつもりだったのですが、いま説明したほうがよさそうな情勢になってきましたわね」

目の前のコンソール上にあるキーで、スライド上映のためのコード・ナンバーを叩く。鏡に囲まれた会議場が、すこしずつ暗くなった。

「いまスクリーンに映した図は、同じ立体構築物を異なる角度から投影した図面だと、わたしとルナチャルスキー博士は確信しています。コンピュータ・シミュレーションによるこの

構築物の全体図は、きのう映しました。断言はしかねますが、いま映っているのはいわゆる〝マシーン〟の内部構造ではないかと思われます。むろん、そのサイズについては、依然として明瞭な指示はありません。つまり、幅は一キロメートルあるかもしれないし、逆に、顕微鏡で見なくてはわからないほど小さい、とも考えられます。ただ、ここでご注目いただきたいのは、この十二面体の内部の中央セクションに、ほぼ等間隔で並んでいる五つの物体です。いまのところ、わたしたちの目で見て正体の見当がつくのは、この五つの物体だけだと言っていいでしょう。

しかも、ごらんのとおり、この五つの物体は人間の体に合わせて作られた、ごく当り前の張りぐるみの安楽椅子のように見えます。これはなにを意味するのでしょう？　地球とはまったく異種の世界で進化した生物が、わたしたちと同じようにこの種の居心地のよい家具を好むとは、まず考えられません。ほら、このクローズ・アップをごらんになってください。これはまるで、わたしが子供の頃、母親が使っていた納戸にあった椅子とそっくりですわ」

じっさい、その椅子には、あの花柄のカヴァーまでかけられているかのようだった。そう思った瞬間、胸の奥が良心の呵責でチクリと痛んだ。こんどヨーロッパに発つ前、母親に電話しようとして、エリーはつい忘れてしまったのである。実のところ、〈メッセージ〉の受信以来、母親にはまだ一、二回しか電話していない。なぜそんなに冷淡になれるの、あなたは？　つい自分で自分を責めていた。

エリーはまたコンピュータ・グラフィックスをながめた。五角形が基調になっている正十二面体の構造は、五角形の各面を背にして並んだ五つの椅子の配置にも反映している。「わたしたち——ルナチャルスキー博士とわたし——の判断では、この五つの椅子はわたしたち地球人用に設置されているのです。とすると、このマシーンの内室の幅はせいぜい数メートル、マシーン全体の幅にしても、十メートルから二十メートルというところでしょう。たしかに、このマシーンの製作には想像を絶する高度の技術が要求されるでしょうが、この椅子から判断するかぎり、わたしたちは、一つの都市ほどもある大きさの物体をこしらえろと促されているわけではないのです。それはまた、航空母艦ほど複雑な内部構造を持ってもいないでしょう。このマシーンの正体が何であろうと、もしわたしたち地球人が一致協力すれば、作れないことはないと思いますわ。

わたしが言いたいのは、もしこのマシーンが爆弾だとしたら、内部に椅子を設置したりはしないだろう、ということなんです。これは〝トロイの木馬〟でも〝終末機械〟でもない、というのがわたしの見解です。その意味ではスハヴァティ博士が言明、もしくは示唆されたことに、全面的に賛成ですわ。これが〝トロイの木馬〟ではないかと疑うこと自体、わたしたち地球人がどんなに遅れた存在かということを示していると思うのです」

またしても、会場にどよめきが走った。こんどはダヘーアもそれを鎮めようとはしなかった。それどころか、会場から異議を唱える者のマイクを作動させてやったほどだった。発言者は、先刻もスハヴァティの発言に割りこんだのと同一人物だった。イギリスのフィリッ

ブ・ビーアンバウ。同国の不安定な連立内閣に参加している労働党出身の大臣である。

「……は、われわれの懸念をわかっておられんようだ。もしこれが文字通り木で造られた馬だったら、われわれは、そんな異星人の機械を市門の中に入れたりはすまい。われわれはホメロスを読んでいるんだから。ところが連中は、その中に家具を置いたりする。と、とたんにわれわれの疑問は霧消してしまうのだ。なぜか？　虚栄心をくすぐられるからだ。報酬をチラつかされるからだ。さあ、このマシーンで歴史的な冒険に出発しなさい、と連中は猫撫で声で言っている。あなた方の聞いたこともないようなテクノロジーを教えてあげますよ、と。彼ら——どう言ったらいいだろう？——つまり、われわれより偉大な存在は、われわれ地球人をねんごろにもてなしてあげるよ、と匂わせているんだろう、きっと。しかし、わたしは声を大にして言いたい、電波天文学者たちがいかに壮大な夢を抱こうとも、このマシーンが破壊の道具である可能性がほんの少しでも存在するかぎり、製作すべきではない、と。というよりもむしろ、さきほどソ連代表が言われたように、データ・テープを即刻焼却し、電波望遠鏡の製作自体を極刑に値する犯罪と規定したほうがいいと思うね」

　会議は収拾のつかない様相を見せはじめた。何十人もの代表が発言を求めて、いっせいにコンソールのキーを押す。どよめきはしだいに高まって海鳴りのような騒音となり、エリーは思わず、電波望遠鏡で宇宙の雑音に聴き入っていた頃のことを思いだした。このままでは意見の統一などできそうになかったし、二人の議長も混乱を鎮める妙手をさがしあぐねている様子だった。

発言の順番のきた中国の代表が、立ちあがった。が、エリーの目前のスクリーンには彼の経歴データが現われない。だれかに教えてもらおうとして、彼女は周囲を見まわした。その中国人が何者か、エリーには皆目見当がつかなかったのだ。国家安全委員会のスタッフでダヘーアの部下であるヴェン・〝ボビー〟・ブイが、こちらに身をかたむけて耳打ちした。「名前は西喬木。たたきあげの老兵ですよ。あの〝長征〟の最中に誕生して、まだ十代のとき、朝鮮戦争に志願兵として参加。その後は政府の役人として政治畑を歩き、文化大革命のときにはノック・ダウンされましたが、カウント9で立ちあがっています。現在は党中央委員会のメンバーで、かなりの地位にあります。最近はよくニュースをにぎわせますよ。中国の考古学関係の発掘なども指揮しています」

西喬木は年の頃六十、肩幅の広い長身の男性だった。深い皺のせいか、顔は老けてみえたが、腰はいささかも曲がっておらず、矍鑠としていて、凛とした覇気すら漂わせている。現大統領をのぞくアメリカ政府のスタッフの制服が三つ揃いのスーツだとすれば、中国政府指導者のそれは詰襟の上着だが、西もそれをきちんと着て、襟のボタンもはめていた。エリーのコンソールに、やっと彼の経歴データが現われた。そういえば最近ビデオ・ニュース・マガジンで、西喬木に関する長い評論を読んだことをエリーは思いだした。

「われわれが本当に破滅を恐れるならば」西は言った。「なにもしないがよろしい。さすれば、相手方の行動には若干の遅滞が生じるだろうからね。しかしだ、このことをみなさん、忘れんでほしい――われわれがここにいることを、彼らは承知しとるのだ。われわれが日夜

放送しているテレビ番組は、彼らの星にも届く。彼らがわれわれ地球人を意識しない日は、一日とてなかろう。われわれがどんなテレビ番組を放送しているか、みなさんも承知しとるだろうね？　彼らがわれわれのことを忘れるはずはない。われわれが無為をきめこもうとも、もし彼らがわれわれの存在を気にすれば、こちらがマシーンを作ろうと作るまいと、この地球にやってくるだろう。好むと好まざるとにかかわらず、われわれは彼らから身を隠すことはできんのだ、みなさん。われわれがもっとおとなしくして、テレビ放送など始めなかったなら、この問題は起きなかっただろう。ケーブル・テレビだけを利用して、大型の軍事レーダーなど使わなかったなら、彼らもわれわれの存在には気づかなかったはずだ。が、いまさらそんなことを言いたてても遅すぎる。あともどりはできんのだ。進路はすでに定まっている。

　このマシーンが地球を破壊しやせんかと本当に恐れるなら、この地球ではなく、どこか別の場所で組み立てればよろしい。さすれば、それがたしかに〝終末機械〟で、世界が吹っとばされたとしても……その世界はわれわれの世界ではないのだ。が、それには大金を必要とする。おそらく、法外な資金を必要とするだろう。だからもし、そこまで恐れる必要はないと思えば、どこか人里離れた砂漠で作ればいいのだ。たとえば、わが新疆自治区のタコビ砂漠でとてつもない大爆発が起きたとて死ぬ者はいない。それから、もしわれわれがなにも恐れんのだったら、ワシントンで作るもよし、モスクワや北京で作るもよかろう。あるいは、この

古代中国では、ヴェガとその近くにある二つの星は〝チ・ヌー〟と呼ばれていた。糸車を持った若い女、すなわち、織女、という意味だ。それは吉兆であってな。というのも、糸車はこの地上の人類のために新しい衣を織るのだから。

われわれは招待を受けたのですぞ、みなさん。史上未曾有の招待を。すなわち、それは宇宙の晩餐に出席せよとの招きかもしれん。地球はこれまで、ただの一度もそのような招きを受けたことはなかった。それを断わるのは、礼を失する行為とは言えんですかな」

CamScannerでスキャン

第三章　ワン・デルタ異性体

CamScannerでスキャン

星を眺めていると、私は、地図上の町や村を表わす黒点を眺めるときのように、いつも夢想にふける。私はそのとき自問するのだ、あのきらきら輝く空の点は、なぜフランスの地図の黒点のようには容易に近づけないのだろうか、と。

——ヴィンセント・ファン・ゴッホ

CamScannerでスキャン

美しく晴れあがった午後だった。秋とは思えないくらい温暖だったので、デヴィ・スハヴァティはコートをホテルに置いてきたほどである。彼女とエリーは、大勢の人でにぎわうシャンゼリゼーをコンコルド広場にむかって歩いていた。これほど多様な肌の色の人間があふれている街は、地球広しといえどもロンドン、マンハッタン、その他数えるくらいしかあるまい。スカートにセーター姿の女性とサリーをまとった女性が並んで歩いても、ふり返るような人間は一人もいなかった。

街角のタバコ屋の前には、さまざまな言語をしゃべる人々の、整然とした長い列ができていた。いずれも、合法化されたばかりの、アメリカ産インド大麻タバコを買いにきた連中だ。フランスの法律は、十八歳以下の青少年がインド大麻タバコを吸ったり買ったりするのを禁止している。並んでいる人々の多くは、中年かそれ以上の年輩だった。なかにはフランスに帰化したアルジェリア人やモロッコ人もまざっていただろう。インド大麻のなかでもとくに効き目の強いものは、主としてカリフォルニア州とオレゴン州で輸出用に栽培されている。いまフランスで売られているのは評判のいい新しい品種で、紫外線を照射して育てられるた

め、カナビノイドという成分がワン・デルタ異性体に変えられている。〃太陽にキスされた〃というのが、この製品のうたい文句だった。ウインドウの中に一・五メートルもの高さに積みあげられたこのタバコの箱の側面には、〃天国における楽しみからさっぴかれるほどのうまさ〃という宣伝文句がフランス語で記されていた。

大通りに面した店のウインドウには、鮮やかな色彩が躍動していた。エリーとスハヴァティは、街頭の売子から焼き栗を買って、特有の味を楽しんだ。どういうわけかエリーは、バンク・ナショナル・ド・パリ（パリ国立銀行）の頭文字であるBNPの広告を見ると、真ん中の文字を逆さまに読んで、ロシア語のビールと読んでしまう。謹厳な銀行の広告を見るたびにロシアのビールを飲めと勧められているような気がするのは、とても愉快だった。これはキリール文字のアルファベットではなくフランス語なのだということを、文字の読みとりを司る脳の部分に教えるのは、じっさい、ひと苦労だった。やがてコンコルド広場にさしかかって、オベリスクが目に入る。多大な費用をかけて掠奪され、近代の軍事記念碑に変えられた古代の軍事記念碑。二人はその威容に嘆声を洩らし、そこからもうすこし歩きつづけることにした。

実を言うとエリーは、デートの約束をダヘーアにすっぽかされたのだった。ともかく、結果的にはすっぽかされたも同然だった、と言っていいだろう。彼はその日の朝、電話をかけてきた。申しわけなさそうな口調だったが、心から残念がっている様子でもなかった。〃きのうの会議で重要問題が続出しただろう。だから国務長官がキューバ訪問を切りあげて、あ

下がりにやってくることになったんだよ。その準備でこちらは手一杯なんだ、わかってくれるね？〟

　エリーにはよくわかった。グベーアと寝たことを後悔もした。が、こんな日の午後を、一人ですごしたくはない。で、デヴィ・スハヴァティに電話をかけたのだった。

「〝勝利〟を意味するサンスクリット語の一つに、〝アブヒジット〟という言葉があるの」デヴィが言った。「古代インドでは、その言葉がヴェガをさしていたのよ。わたしたちの神話のヒーローたちが、邪悪な神アスラを征服したのも、この〝勝利の星〟ヴェガの加護を受けたからなの。あなた聴いてるの、エリー？……ところで、面白いことがあるんだけど、ペルシャにもアスラがいるのね。でも、ペルシャのアスラは善良な神なの。あそこでも宗教が生まれて、その最高神が光の神であり、太陽神なんだけれど、アフラ＝マズダと呼ばれているのね。それを信仰したのがゾロアスター教徒であり、ミトラ教徒だわ。アフラとアスラは同じ神を意味しているの。ミトラ教徒は初期キリスト教徒の強力なライヴァルだったし、ゾロアスター教徒は今日も存在するわ。ところで、ヒンズー教徒の神々は――そのほとんどが女性だけど――デヴィと呼ばれたの。それが、わたしの名前の由来よ。インドでは、デヴィは善良な神なのよ。ところがペルシャでは、デヴィは邪悪な神になるの。英語の〝デヴィル（悪魔）〟という言葉は、このペルシャの〝デヴィ〟から派生したのだ、と見ている学者もいるわ。このコントラストは歴然としていて、とても面白いわね。どうしてこういう意味の相違が生じたかというと、たぶん、遠い昔、アーリア民族がインドに侵入してきて、わたしの祖

先のドラヴィダ族を南に駆逐した故事に由来しているんでしょうね。だから、キルタル山脈のどちら側に住んでいるかによって、ヴェガも、神の加護者であったり悪魔の加護者であったりするんだわ」

この興味深い物語を、デヴィはたぶんエリーへのプレゼントのつもりで話してくれたのだろう。デヴィはきっと、二週間前エリーがカリフォルニアで宗教討論を行ったことをだれかから聞いたのだ。デヴィの心づかいが、エリーにはとても嬉しかった。が、同時に彼女は、〈メッセージ〉が正体不明のマシーンの設計図である可能性が強くなったことを、まだパーマー・ジョスに話してないのを思いだした。おそらくジョスは、マスコミの報道を通してその事実を知るだろう。本来なら、国際電話で自分が直接報告すべきだったのだ、と、エリーは自責の念に駆られた。が、ジョスはいま隠遁生活に入っているという。モデストにおけるエリーとの討論のあと、彼はいかなる声明も発表しなかった。一方ランキンはその後記者会見をひらいて、若干の危険はあるにせよ、科学者たちが〈メッセージ〉の全文を確保することには反対しない、と述べた。が、翻訳となると別問題であって——と、彼はつづけて言ったという——その作業は、社会のあらゆる階層、とりわけ宗教的、道徳的規範を守護している人々による定期的な点検を受けることが望ましい——。

エリーとデヴィは、チュイルリー庭園にさしかかった。そこではいま、目もあやな色彩の秋の花が咲き乱れている。痩せた老人たち——たぶん、東南アジアの人々だろう——が、何事か口論し合っている。黒い鍛鉄のゲートには、売物の色とりどりの風船がくくりつけられ

ていた。池の中央には大理石の海の女神アンピトリテが立っており、その周囲では、マゼランのような大望に胸をふくらませた子供たちが、玩具のボートを浮かべてレースに興じていた。と、突然、ナマズが一匹ざばっと水面に躍りあがって、先頭のボートに水しぶきをかけた。思いもかけない一瞬の幻に度肝を抜かれたのか、子供たちは急に静まり返った。日はようやく西に傾きかけている。エリーはふっとさむけを覚えた。

やがて二人はオランジェリー美術館にちかづいた。その別館ではいま、〝火星のイメージ〟展が開催されている、とポスターには書かれている。アメリカ、フランス、ソ連が共同で打ち上げた無人火星探査機は、壮大なカラー写真の数々を送ってきた。そのうちのいくつかは――一九八〇年頃ヴォイジャーが写した太陽系外惑星の写真のように――単なる科学写真の枠をこえて芸術の域にまで達している。たぶん、それらの写真が展示されているのだろう。ポスターには、火星の広大なエリュシオン高地の写真があしらわれていた。前景には、風化作用でできた、なめらかな三側面から成るピラミッドが写っており、基底部のちかくに衝突の衝撃でできたクレーターが見える。惑星地質学者の説明によれば、このピラミッドは、強烈な火星風が数百万年にわたって小山に砂をたたきつけ、表面を磨きあげた結果できたらしい。反対側のシドニアに送りこまれたもう一台の探査機は、流砂に呑みこまれてしまった。いまのところ、パサデナにいる制御担当官たちは、助けを求める探査機の孤独な叫びにも応えられずにいる。

歩きながらエリーは、スハヴァティの素晴らしい容姿に見惚れている自分に気づいた。大

きな黒い瞳、すきっとのばした背筋、美しいサリー。彼女に比べると、自分はなんと無粋なのだろう。いつもだとエリーは、相手の話題に口を合わせながら、頭ではまったく別のことを考えることができる。が、きょうは、二つの話題はおろか、一つの事柄に精神を集中させることすら覚つかなかった。マシーンの製作をめぐる何人かの意見の是非をデヴィと論じ合いながら、エリーは頭の中で、デヴィがさっき語った、三千五百年前のアーリア民族によるインド侵略の情景を思い描いていた。その頃、衝突した二つの民族は互いに勝利を呼号し、互いに愛国の情に駆られて歴史的事実を誇張したのだろう。その結果、史実は神々の戦いの神話にすりかえられる。もちろん、〝われわれの側〟が善であって、敵側が悪なのだ。象の頭を持ち、全身が青く塗られていたヒンズー教の神が、数千年のあいだに徐々に変身をとげて、山羊ひげと鋤型の尻尾と先の割れた蹄を持つ、ヨーロッパ風の〝悪魔〟に生れ変る過程を、エリーは思い描いた。

「パルーダの〝トロイの木馬〟説だけど——あながち愚劣な考えとは断じきれないかもしれないわね」無意識のうちに、彼女は言っていた。「でも、西が言ったように、わたしたちにはもう他に方法がないんだわ。彼らにその気があれば、光速の宇宙船でなら二十数年後にはこの地球にやってこれるんですもの」

二人はローマ風の凱旋門の前に達した。この門の上には、戦車を御しているナポレオンの、ヒロイックな、ほとんど神格化された像が立っている。たとえば、地球外知的生物の視点のように、脱地球的な目から見れば、ナポレオンのそのポーズはなんと無意味なことだろう。

CamScannerでスキャン

エリーとデヴィはちかくのベンチにすわって、しばらく休憩した。二人の長い影が、フランス国旗の色に染めあげられた花壇に落ちた。

エリーは急に、自分の胸の悩みを打ち明けたくなった。が、ダヘーアの名前がでればなんらかの政治的色彩が加わることは避けられないし、いまそれに触れるのはやはり不謹慎というものだろう。それに、自分はまだスハヴァティという女性とそれほど親しくなったわけではない。むしろスハヴァティに、これまでの人生について話してもらったほうがいい。そう考えてたずねてみると、スハヴァティはいやな顔もせず、すんなりと話してくれた。

彼女の故郷はインド南部のタミール・ナドゥ州で、カースト制度における最高位の階級、ブラーマンの家系に生れたのだという。が、両親はさほど裕福なほうではなく、南インドでいまも一般的な、家母長制に則っていた。最初はバナレス・ヒンドゥー大学で学び、のちにイギリスの医科大学に留学したとき、同級生のスリンダル・ゴーシュと相思相愛の仲となった。が、スリンダルはカーストの最下層階級、俗に〝不可触賤民〟と呼ばれるハリジャンの出だった。この階級は最大級の蔑視の的となっており、ブラーマンなどは彼らをひとめ見ただけで身が汚れると信じているほどである。スリンダルの祖先たちは、それこそコウモリやフクロウのように、夜行性の暮らしを余儀なくされたのだった。デヴィの両親は、もしスリンダルと結婚したら彼女を勘当すると脅した。そんな男との結婚を望むような女はもはや娘ではない、とまで父親は言い切った。もしスリンダルと結婚したら、娘はもはや死んだものと見なして喪に服するというのである。それでもデヴィはスリンダルと結婚した。「わたし

たち、それは深く愛し合ってたんですもの。それ以外の道など考えられなかったの」
が、結婚して一年もたたないうちに、スリンダルは、不衛生な場所で手術を行ったさいに感染した敗血症がもとで死亡した。
それは家族との和解をもたらすどころか、かえって亀裂を決定的なものにした。医学の学位を得たデヴィは、イギリスに留まる決意をした。そして研究をつづけるうちに、分子生物学にごく自然な親しみを覚えた。彼女にとって、それは医学研究の当然の帰結に思われたのである。ほどなく彼女は、自分の才能が精緻な手順を必要とするその分野にむいていることを発見した。その後、核酸の複製の研究をするうちに生命の起源に関心がむき、それがこんどは他の惑星上の生命に関する興味をかきたてたのだという。
「科学者としてのわたしのキャリアは、自由連想の連鎖から生れたようなものなのよ。一つの興味が起点になって、それが次々に発展していったんだわ」
最近の仕事は火星の有機体の特性分析だが、そのデータは、ついさっき二人がポスターで見た壮麗な写真を送ってきたのと同じ探査機によって、火星のいくつかの場所で計測されたのだという。スリンダルの死後、デヴィは独身を通しているが、交際を申しこんでくる男性は何人もいたらしい。現在つき合っているのはボンベイに住む男性で、〝コンピュータ関係〟の科学者とのことだった。
さらにすこし歩くうちに、二人はルーヴル美術館の中庭、クール・ナポレオンにさしかかった。その中央には、完成後、騒然たる論議をかもしているピラミッド状の入口があり、中

庭の周囲の高い壁龕の中にはフランス文明史を彩った英雄たちの彫像が飾られている。それぞれの偉人像――女性はほとんどいないようだった――の下には、姓が記されている。なかには文字の薄れているものもあり、その大部分は自然の風化が原因だろうが、不快を催した通行人がわざとすり消した例も散見された。その人物がだれなのか、まったく判読できないものも二、三あった。民衆の怒りをいちばん買ったらしい像の場合は、L、T、A、という文字が辛うじて残っているにすぎなかった。

日はすでに沈みつつある。ルーヴル美術館は夜にちかい時刻までひらいているのだが、二人は入らずに、セーヌ川の対岸にわたり、オルセー河岸にそって、元きた方角にもどりはじめた。名物の古本屋の主人たちは、シャッターをおろして店じまいの仕度をしている。二人はヨーロッパ風に腕を組んで、なおも散策をつづけた。

二人の数歩前を、フランス人の親子連れが歩いていた。四歳ぐらいの少女が、両側から両親に手を引かれている。ときどきピョンととびあがっては楽しんでいた。両親の手にぶらさがって重力ゼロを味わう瞬間、たとえようもない喜びを味わっているのは明らかだった。両親は〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉について話し合っていたが、新聞は連日そのニュースでもちきりなのだから、必ずしも偶然の一致とはいえなかっただろう。夫のほうは、〈マシーン〉の製作に賛成のようだった。それによって新しいテクノロジーが発展し、フランスの経済発展にも役立つかもしれないから、というのだ。妻のほうはもっと慎重だったが、その理由は曖昧な様子だった。二人にはさまれた少女は、星から送られてきた設計図

CamScannerでスキャン

の話などまったく知らぬげに、おさげ髪をふりあげながら宙にとびあがるのに夢中だった。

★

ダヘーアとキッツとハニカットは、翌日の午後に予定されている国務長官の到着に備えて会議を召集していた。それは秘密会議とし、アメリカ大使館の〝ブラック・ルーム〟でひらくという。〝ブラック・ルーム〟とは、電磁的に外部と完全に遮断された部屋で、最新式の電子盗聴装置の類をいっさい受けつけないらしい。ともかく、そう謳われていた。エリー自身は、どうせいまごろはどこかで、その種の予防装置をも無力化するような装置が開発されているにきまっている、と思っていたのだが。

実は、デヴィ・スハヴァティと別れてホテルにもどると、翌日の午前中に会議をひらくというメッセージが届いていたので、エリーはすぐにダヘーアと連絡をとろうとしたのだった。が、彼はどうしてもつかまらず、辛うじてマイケル・キッツと連絡がとれた。この問題に関するかぎり、秘密会議を行うのは反対だ、とエリーは明言した。〈メッセージ〉は全地球にむけられたものなのだし、事はあくまでも原則に関わるのだから、というのが、彼女のあげた理由だった。それはそうさ、とキッツは答えた――〝いまのところ、どの国もデータを隠してはいない。すくなくともわれわれはそうなんだからね。しかし、あすの会議はあくまでも諮問的なものであって、今後予想されるマシーン製作に関わる具体的交渉において、なんとかアメリカを優位に立たせるのが目的なんだ〟。キッツはエリーの愛国心や彼女の個人的

利益に訴え、ついには〝ハッテン原則〟まで再度もちだした。「あの文書はまだ未読のまま、きみの金庫に眠ってるんじゃないのかね。早く読んでもらいたいね、あれを」

エリーはもう一度、電話でダヘーアをつかまえようとした。が、だめだった。じっさい、あの人はどういう男なんだろう。最初は、必要もないのに〈アーガス計画〉本部のあちこちに顔をだす。こちらのアパートメントにもぐりこんで、同棲する。で、こちらが、とうとう信頼できる恋人にめぐり合えたと喜んだのもつかのま、こんどは電話でつかまえることすらできないのだ。よし、ともかくケンに会えるのならば、会議に出席しよう、とエリーは決めた。

いざ会議がはじまってみると、〈マシーン〉の製作に関して各人の態度が微妙に異なることが明らかになった。製作にだれよりも積極的なのはキッツだった。ドラムリンは慎重な賛成派で、ダヘーアとハニカットは表面上中立、ピーター・ヴァレリアンは、どちらとも決めかねて悩んでいる様子だった。キッツとドラムリンは、早くも〈マシーン〉製作の場所の設定まで論じ合っている。西が予測したように、月の裏側での製作、もしくは組立ては、資材の運送費の問題ひとつとっても、見込み薄だった。

「惑星大気内に飛行体が入ると楕円軌道がしだいに小さくなる特性を利用すれば、月の裏側よりはむしろフォボスやデイモスに資材を送るほうが安くつきますよ」ボビー・ブイが言った。

「なんだい、その〝フ、ォ、ボ、シ、ャ、デ、イ、モ、ス〟とは？」と、キッツ。

「火星の衛星ですよ。ぼくは、火星大気内の飛行体軌道の話をしてたんです」

「で、フォボスかデイモスに到達するには、どれくらいの時間がかかるんだね?」コーヒーカップを揺すりながらドラムリンが訊いた。

「たぶん、一年というところでしょう。でも、ひとたび惑星間輸送船団を編成し、パイプラインを常時――」

「月までなら、わずか三日でいけるというのにかね?」吐き捨てるようにドラムリンが言った。「時間の浪費はやめたまえ、ブイ」

「ぼくはただ、そういう案もあり得る、と言ってるだけですよ。考える材料を提供したまでです」

ダヘーアはと言えば、どこかしら気もそぞろで、苛立っている風だった。なにか大きな精神的重圧を受けているらしい。こちらの視線をさけたかと思うと、とりすがるように見つめたりする。これはまだ望みがあるのかもしれない、とエリーは思った。

「あれが"終末機械"ではないかという恐れがあるなら」ドラムリンが言った。「エネルギー供給をたしかめればいい。そのちかくに巨大なエネルギー源がなければ、"終末機械"にはなり得んよ。ギガワット級の原子炉を説明書が要求してなければ、"終末機械"である可能性はまずないんじゃないかな」

「あなた方は、どうしてそんなに〈マシーン〉の製作を急ぐの?」エリーはとうとう我慢できずに、キッツとドラムリンに言った。彼ら二人は、クロワッサンの皿を前にして、並んで

すわっていたのだ。

ハニカットとダヘーアの顔を見比べてから、キッツが答えた。「これは秘密会議だからな。ここで討議された内容は、あんたもロシア人の友人たちに洩らすわけにはいかん。それは承知してるだろうね。つまり、こういうことさ——〈マシーン〉の正体は依然として謎だが、デイヴ・ドラムリンの分析から、その製作には新たなテクノロジーがからんでいることが明らかになった。ことによると、まったく新しい産業が生まれる可能性すらある。〈マシーン〉の製作が測り知れない経済的メリットを生むことは必至なんだ。考えてもみたまえ、〈マシーン〉の製作によって、どんなに多くのものが学べるか。そいつは軍事的メリットを生む可能性だってある。ともかくソ連側がそう考えてるのは間違いないさ。いいかね、ソ連はいま窮地に立っているんだ。〈マシーン〉の製作は、彼らにとって、これからもアメリカと張り合っていかなければならない新しいテクノロジーのジャンルを生む公算が高い。〈メッセージ〉にはなんらかの決定的兵器の青写真が含まれているかもしれんし、なんらかの経済的メリットにもつながるかもしれん。それはなんとも言えんが、一つだけたしかなことは、アメリカと張り合って〈マシーン〉を製作しようとすれば、連中は国内経済を破綻させなければならん、ということだ。バルーダがしきりに費用効果を気にしていたことに気づいたかね？だから、いっそ〈メッセージ〉にまつわるもろもろをゼロにもどしてしまえば——データを焼き、電波望遠鏡を破壊してしまえば——ソ連は今後もアメリカとの軍事バランスを保てるというわけさ。ここにきて連中が〈マシーン〉製作に慎重になったのは、それが最大の理由

なんだ。だからこそわれわれは、当然のことながら、〈マシーン〉の製作に邁進しよう、と、こういう理屈になるわけだよ」

そこでキッツは、ニヤリと笑った。

このキッツという男は生れついての冷血漢なんだわ、とエリーは思った。が、彼は決して馬鹿ではない。自分が超然とした冷淡な態度をとれば人に好かれないことを、よく心得ている。だから、ときどき、ある種の洗練された馴れ馴れしさを装う術を身につけたのだろう。が、エリーから見れば、それは身につかぬ借り着、それも単分子膜程度の厚さしかない借り着にすぎなかった。

「じゃあ、こっちから一つ質問させてもらうが」キッツはつづけた。「きみは、データの隠匿うんぬんについてパルーダが言及したのに気づいたかね？　現実に欠落しているデータはあるのかい？」

「ごく初期のものにかぎればね」エリーは答えた。「送信がはじまってから数週間の分にかぎれば、あるんじゃないかしら。そのあとで中国が捕捉した分にも、若干の欠落があるわ。それから、どこの国とかぎらず、交換した分から洩れているデータも多少はあるし。でも、意図的に隠匿されている徴候はまずないわね。いずれにせよ、〈メッセージ〉が最初にもどってくれば、欠落分は補えるでしょうし」

「もし、〈メッセージ〉がまちがいなく最初にもどればな」唸るように、ドラムリンが言った。

と、ダヘーアが口をひらいて、これから予想される事態の対策に討議を誘導した。たしかに、打ち合わせておくべき事柄は多々あった。プライマー、いわゆる解読の手引が受信されたときはどうするか。〈マシーン〉製作に付随する開発計画について、アメリカ、ドイツ、日本のどの産業に予め通知しておくべきか。製作が決定した場合、必要な科学者や技師をどうやって選ぶか。そして、議会やアメリカ国民のあいだに、〈マシーン〉製作熱をいかにして植えつけるか。ただし、これはあくまでも予想される事態の対策にすぎないのであって、いかなる最終決定もまだ下されてはいない、ということを、ダヘーアは急いでつけ加えた。と同時に、ソ連の言いだした〝トロイの木馬〟説にも一理ないわけではないことも、ダヘーアは強調した。

と、それをやりすごすように、キッツが乗組員の構成問題をもちだした。「ヴェガの連中は、〈マシーン〉に用意した五つの椅子に、五人の乗員をのせろと言ってるわけだろう？それをどういう顔触れにする？　どうやって選ぶ？　たぶん、国際的なクルーにしなくちゃならんだろうが、アメリカ人を何人のせる？

ロシア人は何人にする？　ほかの国の人間も選ぶべきかな？　あの椅子に五人がすわった瞬間、どういう運命が待ち受けてるのかわからんが、とにかく最良の人選をしたいからな」

エリーが餌にとびつかなかったので、キッツはつづけた。「それはそれとして、いちばん肝心なのは、だれが何を作り、何の費用を分担し、全システムの組立てをだれが担当するかだ。この最後の点に関しては思いきった取引きをしてもいいと思うね。アメリカ人クルーの

人数割当てを交換条件にだしても」
「それでも、最良の人選はすべきだろう」
ダベーアが当然のことのように言うと、
「そりゃそうだとも」キッツは言い返した。「しかし、〝最良の人物〟とは、この場合なにを意味する？　科学者かね？　軍事諜報に通じた人物かね？　体力と忍耐力に長じた人物かね？　愛国心に燃えた人物かね？　言っとくが、愛国心、とは決してけがらわしい言葉じゃないんだからな。それと──」クロワッサンにバターを塗りつけてから、ひたとエリーを見すえて、「性の問題もある。性別の、と言ったほうがいいかな。われわれは男性だけを送るのか？　もし男女を混合して組み合わせるとすると、どちらを多くするか、という問題が生じる。椅子は五つしかないんだし、これは奇数だからな。選ばれたクルーは、果して仲良く協調できるかどうか。この計画を現実に推進するとなると、骨の折れる交渉がわんさと待ちかまえていることになる」
「でも、それはどこかピントがずれてるような気がするわ」エリーが言った。「これは、大統領の選挙戦の手柄によって大使の職を買うのとは、わけがちがうんですからね。もっとっと重要なことなのよ。それにあなたは、肉体ばかり頑健で頭はからっぽの人間を送りこむ気？　この世の仕組みなどなに一つ知らず、百メートル競走と、上からの命令にしたがうことだけが得意な、二十代の若者を？　それとも、政治的野心に燃えた男？　この旅の目的は、そういう輩とはまったく無縁なのよ」

「そりゃそうだろうとも」キッツは微笑した。「まあ、われわれの条件をすべて満たす人物を捜すことになるだろうさ」

ダヘーアは目の下に袋のようなたるみが生じていて、ひときわ憔悴しているかに見えたが、そこで休会を宣言した。彼はエリーに、ひそかな笑みを送ってよこした。が、動いたのは唇だけで、白い歯まではのぞかなかった。外にでると、一同をエリゼー宮に運ぶべく、大使館のリムジンが待機していた。

★

「ロシア人を送ったほうがいいわけを説明しようか」ヴェイゲイは言った。「あんたたちアメリカ人が——開拓者や狩人やインディアンの斥候として——国を建設したとき、行手を阻むものはおらんかった。すくなくとも、あんたたちと同程度のテクノロジーを有する敵はな。あんたがたは一気に大西洋岸から太平洋岸まで席巻した。で、しばらくすると、あんた方は、この世に困難なものなどない、と思うようになったのだ。その点、われわれロシア人はちがう。われわれはモンゴル人に征服された。彼らの乗馬に関するテクノロジーは、われわれのそれをはるかに凌駕していたもんでな。だから、東方にむかって領土を拡張したときも、われわれは慎重だった。荒野を横ぎるときは用心の上にも用心を重ねた。だから、あんた方アメリカ人よりはわれわれロシア人のほうが、敵に対する適応力があると思うのだよ。それに、アメリカ人はテクノロジーの先進者であることに慣れている。われわれロシア人は先進テク

ノロジーに追いつくことに慣れている。そう考えてみると、この世のほとんどの国民はロシア人のようなものじゃないかね——もちろん、歴史的に見て、という意味だがね。どうだね、やはりこの任務が必要としているのは、アメリカ人よりはロシア人だろうが」

ヴェイゲイにとっては、エリーと個人的に会うことだけでもかなりの危険を意味する——最近は彼にとっても、キッツがわざわざ警告したように、危険な行為になっていた。アメリカやヨーロッパで学会が催されるときなど、ヴェイゲイは平日にかぎってエリーと一緒にすごすことを許された。そのときですら同僚やKGBのお守り役がついてくることが多かったのである。KGBのお守り役は、ヴェイゲイより英語力が劣るにもかかわらず通訳と称し、ごく浅薄な科学知識しか持ち合わせないにもかかわらず、どこそこのアカデミーの会員とか書記を名のることが多かったが、彼らについてなにか訊かれると、ヴェイゲイは黙って首をふるのがつねだった。が、大体において、彼はお守り役たちをゲームの一部、西欧諸国への旅と引換えに払わねばならぬ代価と考えていたのである。ヴェイゲイが〝お守り役〟と話すときの声音に、同情の色を感じとることが、エリーは一再ならずあった。外国にいって、自分がほとんど知らないジャンルの専門家のふりをするのは、それなりの気苦労が多いにちがいない。ヴェイゲイはそう考えているようだ。が、たぶん、お守り役たち自身も、心の奥底ではヴェイゲイに劣らず自分たちの任務を嫌悪しているのだろう。

エリーとヴェイゲイは、〈シェ・デュー〉のいつもの窓ぎわのテーブルについていた。きょうは、大気にはっきりした寒気が感じられた。冬の前触れだ。長いブルーのスカーフを喉

の防寒具代りに首に巻いた若者が、窓の外の冷凍した牡蠣の容器の前を軽快に歩いてゆく。

ヴェイゲイの――彼にしては珍しく用心深い口調の――話を聞いているうちに、ソ連代表団内部の対立がエリーにも読みとれてきた。〈マシーン〉の製作は、地球の覇権をかけた米ソの五十年来の競合関係にはね返り、アメリカを戦略的に有利な位置に立たせかねない――そうソ連側は懸念しているのだ。データを焼却して電波望遠鏡を破壊したらどうかというバルーダの提案を聞いたときには、ヴェイゲイもショックを受けたという。バルーダがそういう危惧を抱いていることを、ヴェイゲイはまるで知らなかったらしい。これまでソ連は〈メッセージ〉の受信に重要な役割を果し、経度上の広がりにおいていかなる国をもしのぐ範囲をカヴァーしてきた。しかも、唯一の本格的洋上電波望遠鏡をも保有している。次の段階においても当然中心的な役割を果すもの、とヴェイゲイは思っていたという。そのとおりよ、あなた方はこれからもそういう役割を果すべきだわ、とエリーは勇気づけた。

「ねえ、ヴェイゲイ、この地球が自転していることや、そこにたくさんの国があることは、当然、ヴェガの連中も知っていると思うの。例のオリンピックの放送一つ見ても、それはわかったと思うのよ。あれから、いろいろな国がテレビ放送をしているんだから、彼らは絶対にわかったはずよ。だから、もし彼らがこちらの予想通りの高度の知性を持っていて、しかも、この地球のどれか特定の国だけに〈メッセージ〉を送りたいと望んだのだったら、送信を地球の自転に同調させて、目的を達することができたと思うわ。でも、彼らはそうはしなかった。つまり彼らは、〈メッセージ〉がこの地球という惑星上のすべての人に伝わること

を望んでいるのよ。すべての人々の協力で〈マシーン〉が製作されることを望んでいるんだわ。これは、アメリカ一国、もしくはソ連一国のプロジェクトであってはならないのよ。それは、わたしたちの……交信相手の願いに反することなんだわ」

だが自分は、〈マシーン〉の製作やクルーの選抜になんらかの役割を果すことになるのかどうか、いまはなんとも言えない、とエリーは語った。彼女はあす、アメリカに帰国する予定だった。過去数週間に受信された最新のデータに目を通すためである。〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉の討論はかなりの長丁場になる様相を呈しており、いまのところ閉幕の期日も決定してない。ヴェイゲイのほうは、もうすこし滞在するよう同僚から要請されていた。ソ連代表団は目下、つい最近到着したばかりの外務大臣に率いられているのである。

「一連の事態が悪い結末を迎えるのではないかと、わたしは心配なのだ」ヴェイゲイは言った。「不幸な結果をもたらす要因はいくらでもある。技術的な失敗、政治的な失敗、人間的な失敗。それに、それらすべてを克服したとしても、そう、〈マシーン〉が原因の戦争を回避し、地球を木端微塵にせずにそれを完璧に作りあげたとしても、わたしはまだ不安なのだよ」

「どうして？　いったい、なにをおっしゃりたいの、ヴェイゲイ？」

「起り得る最良のことは、われわれがせいぜい愚弄されるくらいで終ることだな」

「でも、だれがいったいわたしたちを愚弄するというの？」

CamScannerでスキャン

「わからんかね、エリー？」ヴェイゲイの首筋の血管が、青く浮きあがった。「あんたにしてそれが見通せんとは驚きだな。いいかね、地球は……ゲットーのようなものだ。そう、ゲットーなんだ。全人類は、この地球というゲットーに閉じこめられている。このゲットーを出ると、はるか彼方に大都会があって、その大通りは馬車や、毛皮を着ていい香水の匂いを漂わせる美しい女たちでいっぱいだ、という話を、われわれは漠然と耳にしている。が、それらの都会はあまりに遠く、われわれ、地球というゲットーに住む人間はあまりに貧しい。いちばんの金持ちですら、そこまではいけんのだ。いずれにしろ、その大都会の連中はこちらを好いてない、ということをわれわれは知っている。だからこそ、われわれは、この貧しい寒村にとり残されてるのだからな。

そこへある日、招待状が届けられる。あの中国代表の西が言ったように、だ。実に優雅な、洒脱な行為だな。われわれのもとには、飾り文字で書かれた招待状と、からの馬車が届けられる。われわれは五人の村人を選出しろと言われる。そうすれば、馬車が彼らを――そう、どこにつれていくのだろう？――ワルシャワか、モスクワか、パリにつれてゆくという可能性だってある。むろん、われわれのなかにはゆきたがる者もでてくる。どんな世にも、その種の招待状にたぶらかされる者、それをこの貧しい村から脱出する手段と見なす人間はいるものさ。

そして、目ざす目的地に着いたらどうなるか？　大侯爵が晩餐会にでも招いてくれると思うかね？　われわれの不潔な小屋における日常生活について、アカデミー総裁が興味津々た

る問を投げかけるのかな？　それとも、ロシア正教会が、他の宗教に関する有意義な講義でもしてくれるというのかね？

とんでもない、エリー。われわれはただその大都会の威容に瞠目し、先方は口元を両手で蔽いながらわれわれを嘲笑するにちがいないのだ。彼らは物見高い見物人に、われわれを見せてまわるだろう。われわれが未開の存在であればあるほど、彼らは気を良くして安心するだろう。

これは、一種の割当て制とは考えられんかな。数世紀ごとに、われわれの中から五人が選ばれて、ヴェガで一週間すごす。田舎者に恵みを施し、彼らの上位の人間がだれかを、とくと知らしめよう、というわけさ」

CamScannerでスキャン